NYONIN TAISHŪ

女人藝術

NO.2 1930



婦女界連載 長編小説

嫉める淀君

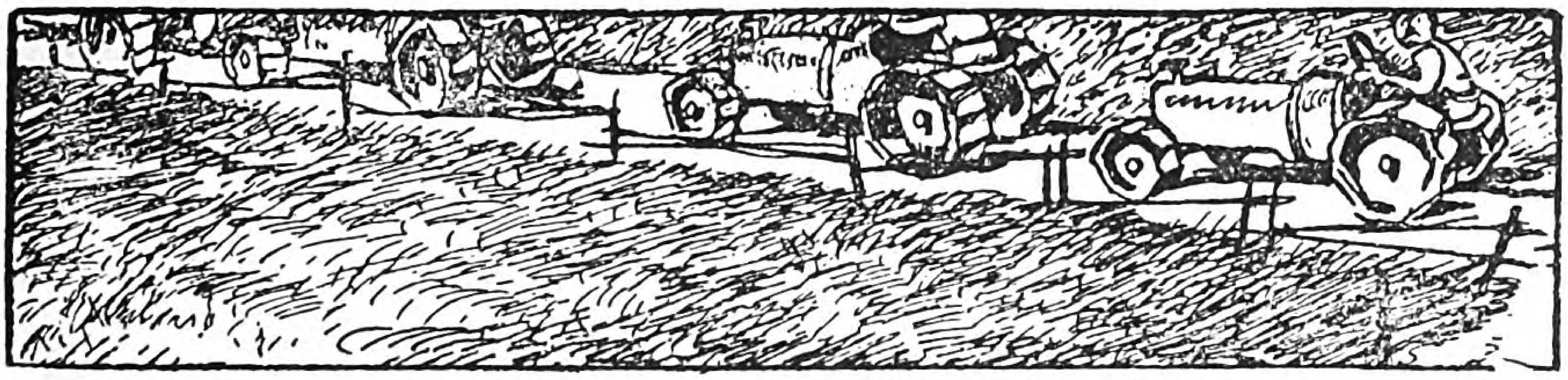
三上於菟吉氏原作

巌谷三一氏脚色

四幕十二場

新橋演舞場 二月狂言

松竹（帝劇女優）特別興行

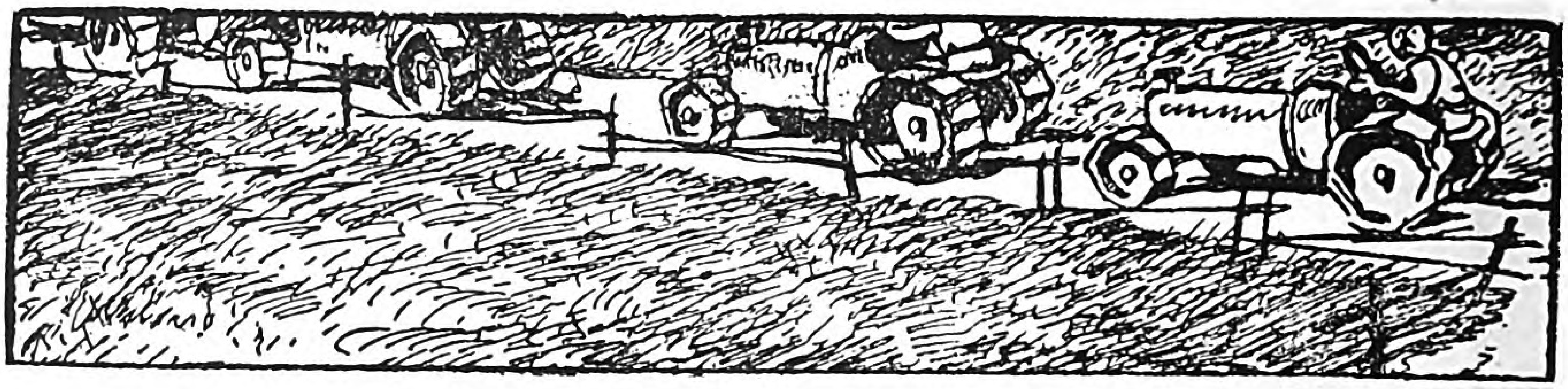


女人藝術第三巻二月號目次

—禁轉載—

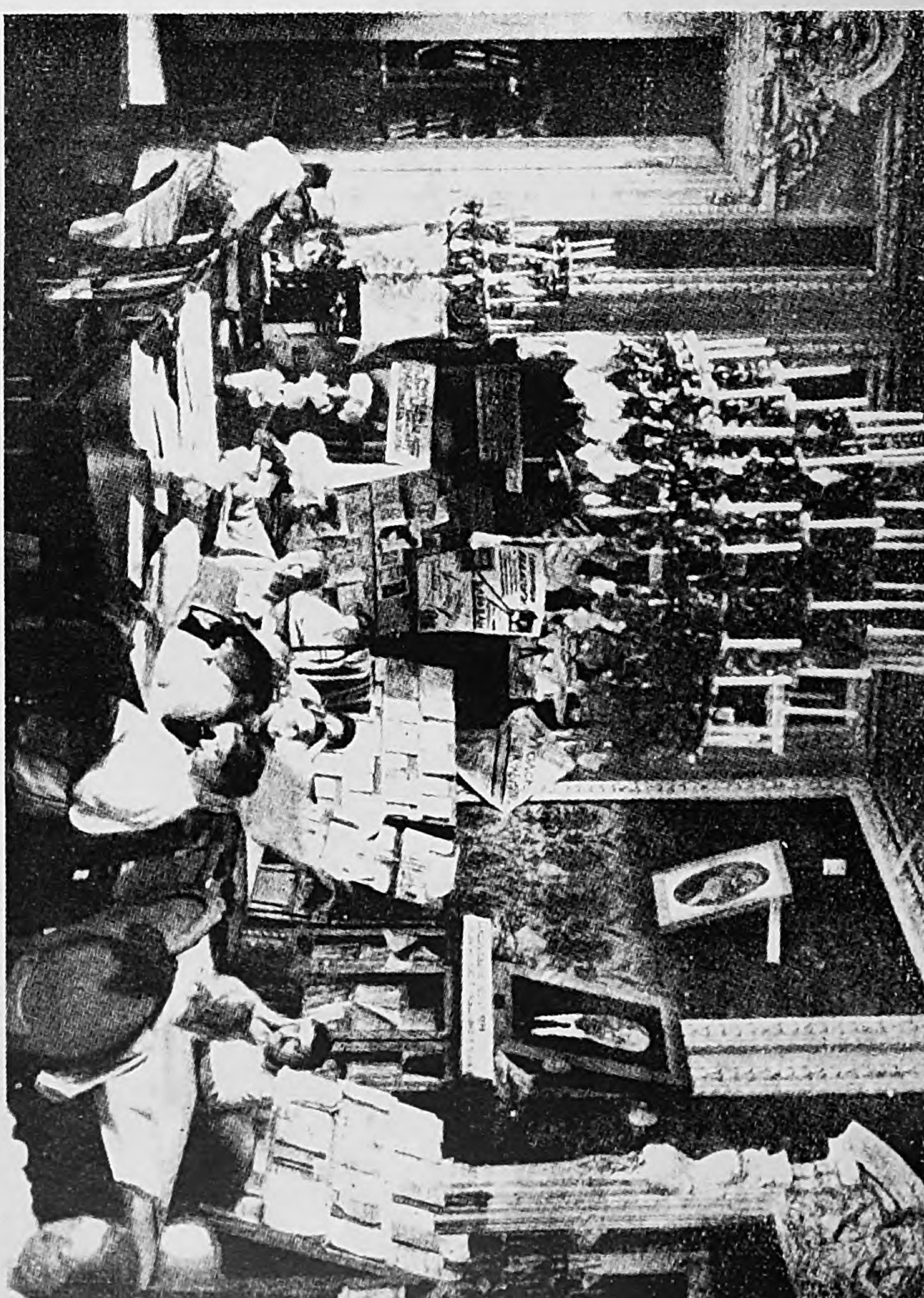
爐辺雜話

應接室

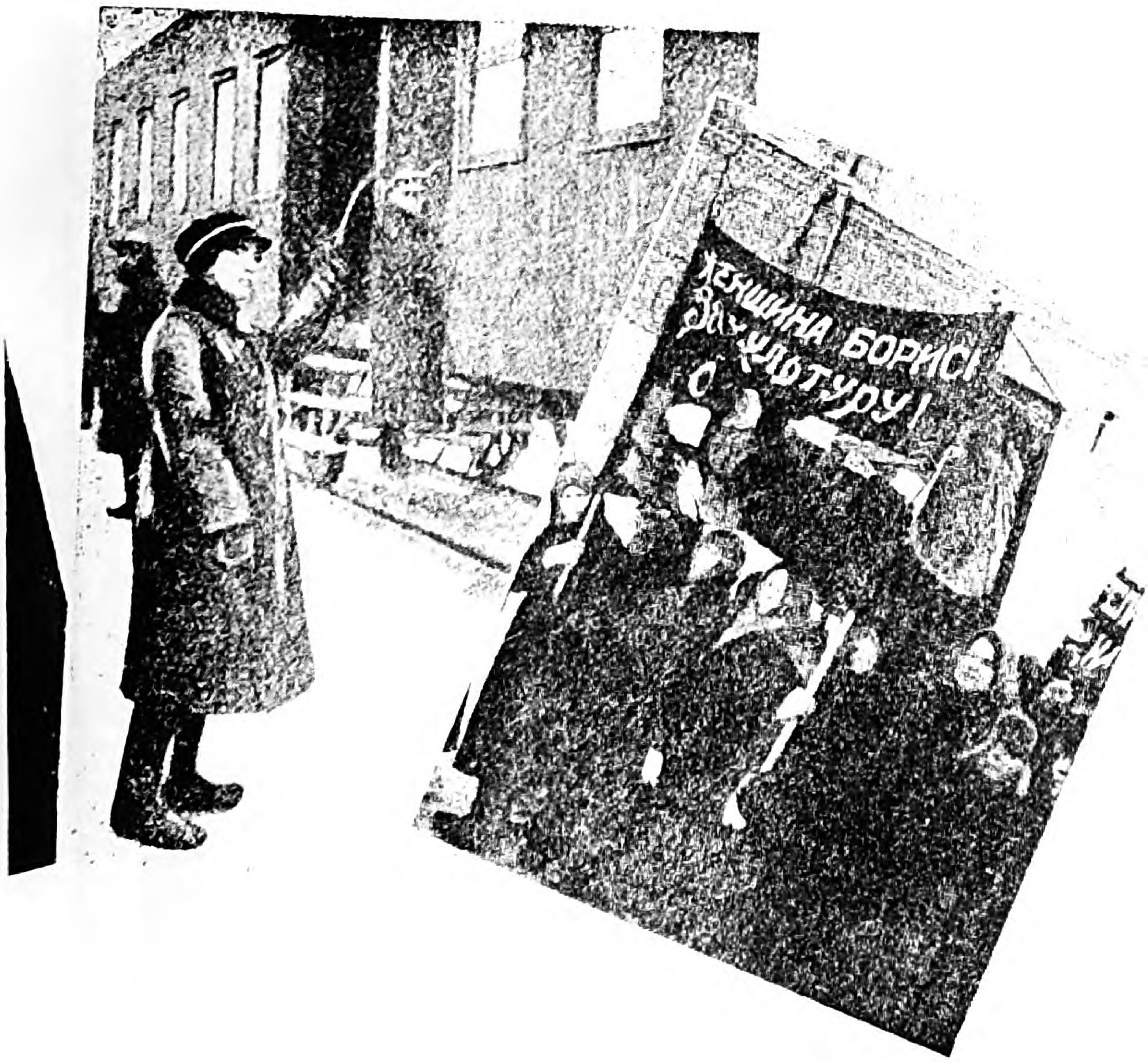


女人大衆


美味しいものは美味しい
實質こそ雄辯である
品質日本一
ヤマサ醤油
5—1—1



美しい教育労働倶楽部 ―― ソビエット・ロシヤ


ЖЕНЩИНА





活躍するソビエート・ロシアの
職業婦人のさま〴〵



―大阪女人聯盟員諸氏―

山本勝治著

員章を打つ

四六版　定價五拾錢
百五十頁　送料四錢

文藝戰線叢書
第一篇

同志山本勝治は自殺した！

何の爲に？それは同志山本勝治だけが知つてゐることだ。しかしながら、此の小說集の中には、その一端が書かれてある………

同志山本勝治は、新聞配達であつた。彼は又、ボクシングの先生だつた。沖仲士であり又、熱心なる農民運動家であり、同時に、アクなきドンヨクなる資本家を憎めるところの一人の革命作家であつたのだ。

同志山本が自殺した日、一九二九年三月十七日は、彼の屬する新聞勞働組合と、岩月監理所（東京朝日新聞）との爭議の丁度三日目であつた。

彼の血に染つた組合旗は勝利の唱にゆれた。そして御身の血によつて書かれた小說は「文戰叢書」第一篇として本になつた。我々は此の一卷を、日本の無產階級にさゝげる。そして、同志山本勝治の生きてる心臟と共に進んで貰はう！

内容・員章を打つ。十姉妹。荒療治。異母弟の贈物。毀れた義足。

東京市外高圓寺五五三
振替東京五九三八七
文藝戰線社發行

田中清一氏著

詩集 馬糞と星

四六版二百餘頁
用紙上質
装幀着色三色三拾度刷
定價壹圓

最新刊
發賣

その詩句は簡明清楚、日常眼前に介在して而かも凡人の情感に觸れ得ざる、消えゆく物を捕へ來つて生命を與ふ。著者の筆緻と感情の動きはその短章のうちに躍動して、讀者の胸に新らしき力を以つて迫るものあるは既に周知の事實——その新著の出づる度詩壇にセンセイションを起せる氏は今、最近の作を蒐めて二百餘頁の一巻を上梓せんとす。田中氏の詩を愛する士の嬉びは大いならむ。著者の詩集「馬糞と星」に期待を以つて俟つ。

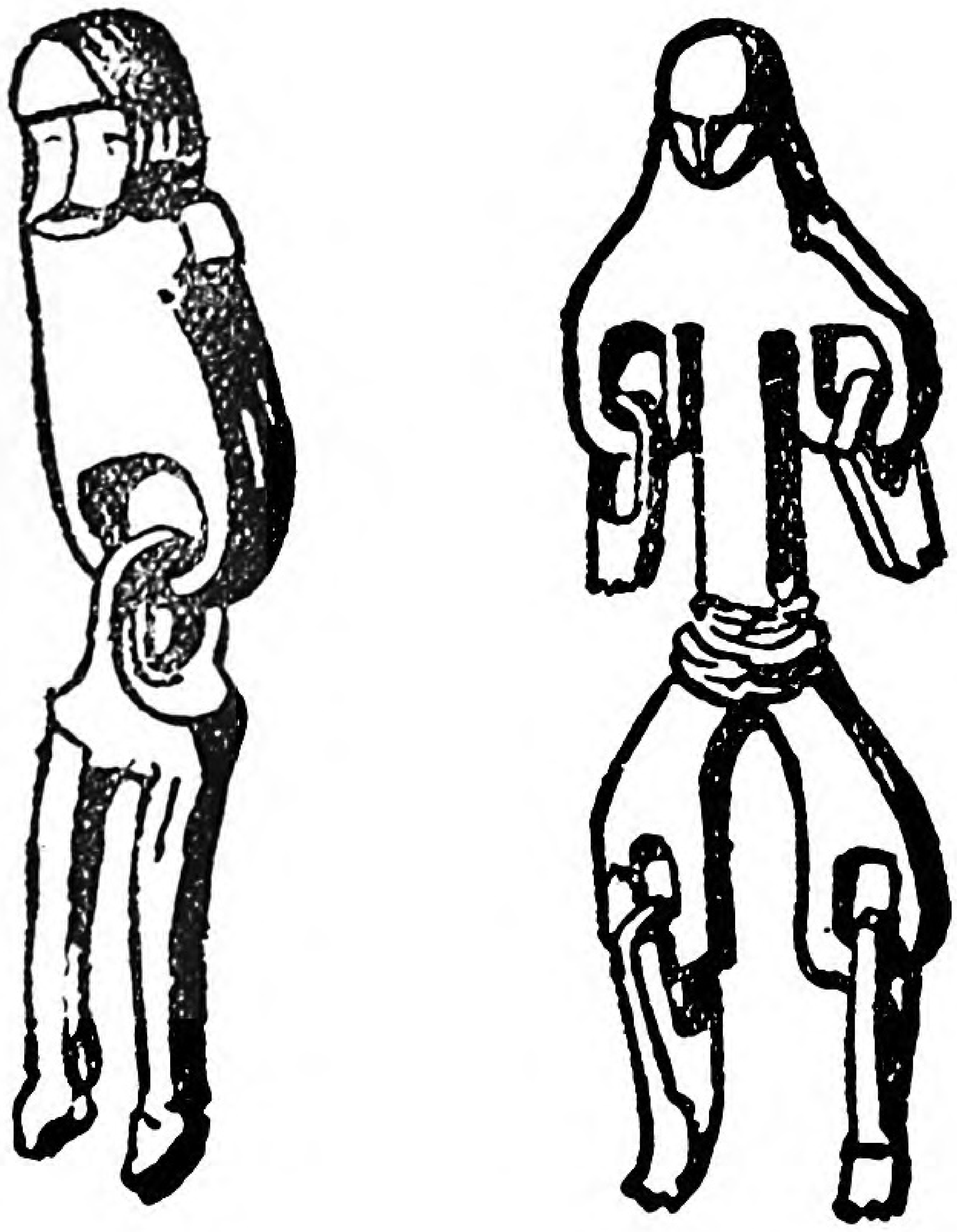
發行所　東京市日本橋區通三丁目　振替東京一六一七番　春陽堂

MARIONNETTE

編輯刊行の言葉

南江二郎

戯曲は人形に據つて演ぜられ、成巧するほどのものでなければ駄目だ。（ゲエテ）さうだ！　最も靈的な神性動物なる吾人の心像的人形は、詩のない文學を拒否する。故に單なる人形の研究、人形座の設立が吾人の宿願ではない。要はこの靈的な神性動物を吾人の詩の創造のうちに生かしきる事だ。この詩の近代的擴張は他のあらゆる詩の姉妹藝術を、をのづから融合統一せしめるであらう。本誌が單なる世の人形芝居研究雜誌でないと同時に、重要な研究目錄として、近代劇を檢討するは勿論の事、舞踊、假面劇、色彩音樂、舞臺美術等の研究を附加するのも、總てはこの最後の目的へ向つての第一歩に過ぎない。



南江二郎一人の執筆豫約だけでも………
諸研究、創作の發表は勿論の事、飜譯乃至紹介として、アナトオル・フラシスを敬服せしめたシャル・マニャンの「歐州人形劇史」クレエグの諸論文、クレエグが禮讃したコリヤの「パンチとジユデー」ヂヨルヂ・サン・アサア・シモンズ、テオフイル・ゴーチエ等の人形記、伊太利のゴーチエの稱あるヨリツクの「世界人形劇史」マンドルンの「人形芝居とギニヨール」、ケムブリツヂ大學リヂエー教授の「非歐州人の演劇及舞踊」ビツシエル教授の「東洋人形起原考」コロンビア大學マシユウス教授の演劇論、現代各國新人形座の研究、等々………、あまりに多く、とても第一期だけでは發表不可能ですが。本誌一冊の內容に就ては創刊普通號目次を御覽下さい

天災以外は絶体に廢刊せず・中途廢刊の節は會費全額（殘額にあらず）拂戻す

★特殊演劇研究美術雜誌★

MARIONETTE

詩と近代劇を同一化せよ！「マリオネツト」はその第一聲として、人形劇の研究を中心に、特殊舞踊、假面劇、色彩音樂、詩劇等の研究をなす。本誌に我第一流作家の執筆を乞ふは勿論、世界各國の權威ある研究と共に、稀覯の挿畫をも多數挿入するものにして、内容の新鮮特殊近代的なる點、世界稀有のものである。

創刊號執筆者

坪内逍遥　高野辰之　馬場孤蝶　山田耕作　野口米次郎
長田秀雄　小寺融吉　秋田雨雀　仲木貞一　石割松太郎
有嶋生馬　小出楢重　藤堂獻三　佐藤一英　結城孫三郎
木谷蓬吟　小澤愛圀　遠山靜雄　永田龍雄　南江二郎
竹久夢二　土田杏村　相馬御風

飜譯評論―人形と詩人（クレエグ）東洋諸國人形考（リヂエー）
全隨筆（シモンズ、クロデル、ゴーチエ、フランス、其他多數、
以上は此廣告作成迄に御承諾得しもののみ。編輯刊行責任者南江二郎

會員は申込振替拂込と同時に御一報下さい・必ず正規の受取書を差上ます

體裁　四六倍版。本文用紙、特製手漉耳附局紙人形圖紋章すかし彫入。挿畫數葉。二四頁以上
第一期刊行　昭和五年二月・四月・六月・九月・十一月の五回。會員以外の一册價八拾錢以上
普通會員　本誌の講讀會員にして、右希望者は、第一期本誌全額價參圓を必ず全額前納の事
贊助會員　第一期本誌全額價參圓の外に、特別援助會費貳圓を加へ會費五圓を全額前納の事
本協會はその特別援助に對する薄謝として、實演部結城新人形座の公演に春秋二回招待す。
地方會員、其他都合に依り招待券不要の節は、それに該當する協會刊行の著作本を寄贈す。

未來の詩劇・近代劇創作研究雜誌創刊さる

京都府亀岡町　電話亀岡九番

郷土演劇協會

振替口座大阪一八一九二番

叛く

竹内てるよ詩集

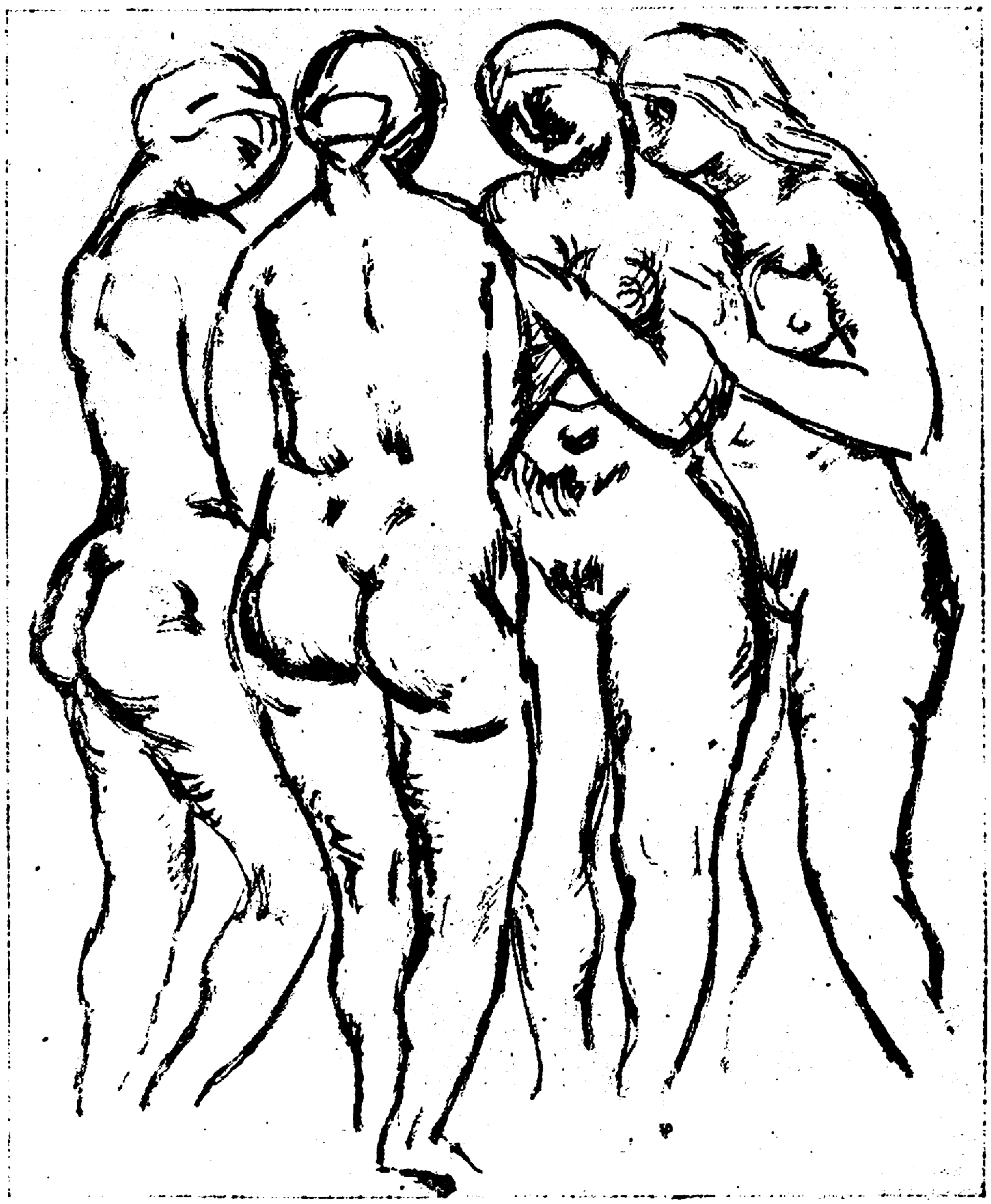
題字高村光太郎氏・四六版八十頁・定價五十錢・送料二錢

申込所　東京府下六郷町高畑六四四　著者宛

增補再版

女人藝術

二月號



新人進出號豫告!!!

——三月特輯——

昨一九二九年陽春、現代新進女流作家の作品の粹をすぐつて「新進小説號」を世に送つたことは讀者の記憶に新たであらう。當時いまだ知られざりし新進が今や文壇の檜舞臺に登場して、各々極めて特色ある業績を示しつゝあるのは、今更誇りかに自ら言ふ必要はあるまい。本誌は萬物新生のこの期節に際して、再び同性文藝のために氣を吐くべく、最も尖鋭にして敏感なる左の作家が心血を注いだ名作を集めて讀者に捧げる　これこそ同時代女性の苦悶と憤怒、慾望と激情、自由と解放、悲哀と歡樂との代辯である。



應接室―世界各國活動婦人の近狀

ソビエート・ロシヤに於ける女性活動

秋田雨雀

一般にソビエート・ロシヤに關する啓蒙的な記述は既にその役割を果してゐる時代だとは思ふが、プロレタリアートの勢力の增大に連れて通俗な性質を帶びた逆宣傳や、デマゴーグが絕へず行はれるので、やはりやゝ啓蒙的な意味で、ソビエートの生活を傳へるといふ事の必要さが殘つてゐる樣に思はれる。

ソビエート・ロシヤの現在をみる上に於て、先づ第一に注意すべきことはソビエートの勞働者農民の實際生活を通じて、ソビエート・ロシヤをみなければならないといふ事である。マキシム・ゴリキーは、ゴリキーとソビエート・ロシヤを離間しようと試みた幾多の中傷的な書簡を斷然しりぞけて「自分自らの眼」によつて、ソビエート・ロシヤの農民及び勞働者の生活によつて、ソビエートの政治及び經濟的活動を知らうとしたのである。私達はソビエートの女性活動を知らうと思ふ場合にも等しく、勞働者及び農民の間に於ける女性の實際活動を通じてなされなければならないと思ふ。かつてカーメネーバ夫人が云つた樣に、わづか十二年前には世界の女性の內で一番遲れた位置に置かれてゐたロシヤの女性が、革命後の十二週年の間に世界女性の最前線に立つてゐる。ソビエートの女性は現在に於てどんな活動をしてゐるであらうか、どんな實際生活を生活してゐるであらうか。

私達は度々語つた事がある樣に、世界のブルヂョア國家では、ソビエートは女性を共有してゐるといふ樣なデマゴーグをとばしてゐた。一九一八年にはレーニンが「人類の法律の始まつて以來の最初の法典」と自負した民法が制定され、その民法によつてソビエート女性は宗教の羈絆から解放され家庭に於ける完全な男女の平等を獲得し、亦、結婚及び離婚の自由を得たのであつた。それ以來ソビエートの政府及び黨は、女性の奴隸的な位置からの解放の爭鬪を十

二年間絶えず努力してきたので、そしてあらゆる組織されたソビエートの女性達はこの運動に參加して來た。之等の努力によつて、ソビエートに於ける女性の社會的家庭的位置が非常に高められ、又家庭及び社會に於ける道德が全く新らしい立場の上に發生しかけてゐるにかゝはらず、古い社會と家庭の片隅にこびりついてゐるものを拂ひのける爲に、進歩的な勞働者及び農民の女性が、今も尙そのそれに對する鬪爭を續けてゐる。

私達は先づ革命後のソビエートの政治がどれ位の程度まで、勞働者及び農民の女性を導引してゐるかといふ事をみなければならぬ。又勞働者及び農民の女性達によつて、どういふ社會活動がなされてゐるかといふ事をみなければならぬ。先づ政治の方面では女性がどれだけ多く、都市及び農村のソビエートに參加してゐるかといふ事を視、次にソビエートの集團主義の主張に從つて、學校、託兒所、公衆食堂、消費組合の事業がどれ丈成功してゐるか。といふ事をみなければならない。



ソビエート・ロシヤに於ては現在教育の基礎的意味を有すると同時に母性保護の目的を持つてゐる學校設備は既に一八三八に達してゐる。又村落の託兒所は比較的新らしい試みではあるが、既に六〇〇〇の數に達してゐる。それからあらゆる倶樂部に於ける教育は裁縫に關する智識と同時に、政治的教育を立派に兼ね與へる樣になつてゐる。又ソビエートの女性の生活を自由にさせるために、工場都市或は工場地帶に於ては大仕掛な料理工場が出來、公衆食堂及び公衆洗濯所が出來てゐる。之等の諸條件が最近僅か五年程の間に急速の發達を遂げた結果として、女性は初めてソビエートの中に導引され得る樣になつたのである。それ等の女性の持つてゐる政治思想及び社會道德の進歩の程度はソビエート自身の持つてゐるイデオロギーに從つて、ブルジョア國家に於ては殆んど想像されない程の加速度的な進歩をとげつゝあるものといはれてゐる。一九二八年の勞働者農民の女性によつて行はれた第二回大會の模樣は、ソビエートの勞働者及び農民の女性達が、機械的でなく又公式主義的でなく、ソビエートの政治に非常な熱情

を以て參加しつゝあるといふ事を示すものである。

現在都市及び村落のソビエートに參加してゐる女性勞働者及び農民の數をあげると、十五萬三千六百に達してゐる。卽ち勞働女性が二割一分で、農民勞働者が一割二分を占めてゐるわけである。更に勞働組合の中に、どれ位の女性達が參加してゐるであらうか、最近の通信（一九二九）によると、勞働組合に參加してゐる勞働者農民の女性の數は、二百八十二萬人に達してゐる。之は全勞働組合の數の二割七分を占めてゐる事を示してゐる。之を一九二三年の四分にくらべると驚くべき進歩と云はなければならない。工場勞働に從事してゐる女性の數はどれ位であらうか、之も最近の報告では七七・一〇〇〇人に達してゐる。之だけの女性が現在ソビエートの新生產に參加してゐるわけである。



女性の教育に關しては、最近その六十年祭を祝はれた、レーニン夫人クルプスカヤ女史の功績に負ふ事が多大であつた。一般にも知られてゐる樣にソビエートの教育法は、現在行はれてゐる人類の教育の中で、最も進歩したものだと云はれてゐるが、その中の「統一勞働學校」の施設及び完成はクルプスカヤ女史の努力によるものだと、ルナチヤルスキー氏が語つてゐた。この統一勞働學校は普通教育と勞働教育とを調和させたものであつて、その調和はソビエートの集團主義的社會思想によつてなされてゐるものである。そして又教育と勞働の要素の調和は、先驅少年團の教育から大學迄一貫してゐるものと云つて、大して誤のないものである。之等の教育機能の中に入つてゐる女性の活動は、又めざましいものといはなければならない。空想的な思想や或はルンペン・プロレタリア風の思想に毒されてゐない、すべてのソビエートの女性は、この教育大系の讃美者であり又參加者である。

次に消費組合の數をみると、現在勞働者及び農民の女性は既に三百萬の參加者を得てゐる。

ソビエートの黨に參加してゐる女性の率は六年前にたては僅かに八分にすぎなかつたものが、今日ではもはや一割三分に達してゐる。又黨に參加しない人々の中にも勞働者農民の女性が勞農通信員として非常に目覺ましい活動をしてゐる。勞農通信員は說明する迄もなく、ソビエート內部と外部とに於けるプロレタリア女性の解放運動に關して、衞生の問題に關して、組織の問題に關して、道德の問題に

闘して生々とした通信を續けてゆく、重大な使命を帶びてゐる人々である。

ソビエートへの旅行者にとつて最も興味ある事は、ソビエートの確立といふ事である。例へば風俗、習慣、言語を全く異にして、長い傳統の下に養はれて來た多くの女性達が、マルクス・レーニズムのイデオロギーのもとに、科學的な社會機構の創造のために團結しはじめてゐるといふ事である。殊に東方民族の解放は特別な興味を私達に與へる。長い間ヴエールの下に男性の奴隷たる事を示して來た東方女性の中に、新らしい女性が生れて來て、そしてその人達がソビエートの社會機構に喜んで參加し、自分達のかぶつてゐるヴエールをかなぐり捨てゝ、新らしい太陽の下で新らしい活動を開始しつつある樣は、私達の胸を強く打つものである。革命十週年祭にルイコフ氏が、東方女性の教育の發達を擧げたのは、當然な事といはなければならない。今ソビエートに於ける東方女性は五萬人程ソビエート會員となつてゐる。そして一萬人の代表者が、東方女性の解放或は「無學撲滅運動」のために働いてゐる。

私は自分の經驗を語るならば、カフカズ旅行中にこの樣な東方民族の最も進歩的な女性の一人に逢つた記憶を忘れる事が出來ない。私達が或都市の婦人倶樂部を訪ねた時に、私達を熱心に案內し、私達にその地方の施設を說明してくれた一人の女性は、實に一九一七年の革命後に新らしく發生した勞働新女性の模範的な一人であつた。ベルジウムの代表者がこの女性に、その地方に於ける賣笑婦の數を示して異れ、と云つた時この女性は非常に怒つて、ソビエートに於ては「賣笑婦」といふ職業は絕體にありません、と云ひ切つたのは私達に新らしい感動を與へたものであつた。後で聞くとこの女性は、實に革命前までは賣笑婦の一人であつたのだそうである。ソビエートに對するデマゴーグの中にいつでも引合に出されるのは賣笑婦の問題であるが、ソビエートでは賣笑婦の救濟運動のために、どれ丈の施設どれだけの努力が拂はれてゐるかといふ事を知つてゐる人々にとつては、之等のデマゴーグは全く無力なものである。しかもこの賣笑婦的殘存物は實に帝政時代の最も憎むべき遺產であるからである。ソビエート・ロシヤでは、この賣笑婦の救濟のために政治家、社會學者、教育者があらゆる努力を以てその淸算に從事してゐる。それよりも目覺しいものは、之等の賣笑婦的殘存物の救濟に當つてゐる人々が、ソビエートの女性自身であるといふ事を、私達は深く注意しなければならない。私はソビエートの旅行中に、女性によつてなされてゐるいろ〳〵な會合に出席する機會を持つたが、ソビエートの女性たちは、ブルジョア國家に於て壓迫され、しひたげられてゐる女性達との結合を心から願つてゐるけれども、それ等の女性の多くのものは、かへつてブルジョア國家の教育的、軍事的導引に參加して、世界のプロレタリアートの解放運動の增大をさまたげる樣な位置におかれてゐる事を悲しんでゐた。

ソビエートの女性は、女性の眞の解放の時こそ人類の完全な解放の行はれる日だと信じてゐる。

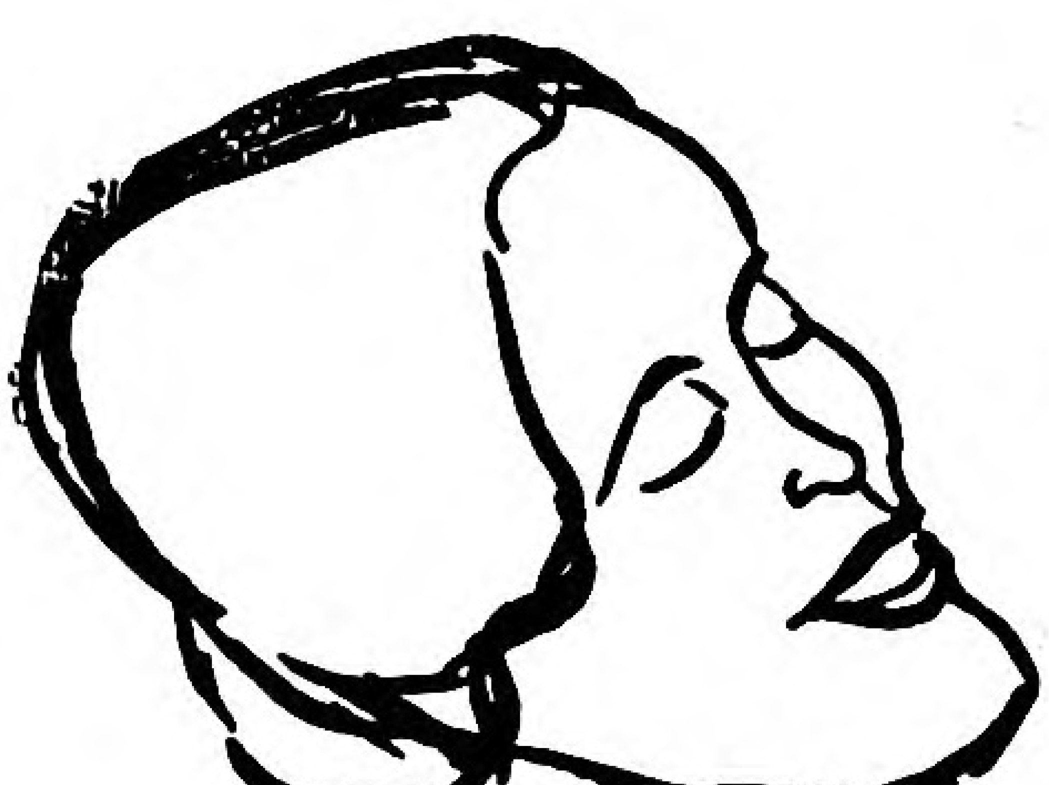

尾崎


戸田


谷崎

新居

戸川






時

爐邊雜話

新居格
谷崎精二
三上於菟吉
松本惠子
戸田豐子
尾崎翠

戸川靜子
八木秋子
熱田優子
小池みどり
素川絹子
長谷川時雨


三上


松木

三上　女人藝術なんだから女の方が澤山やつて下さい。

時雨　きのふある老紳士が私にむかつて若い女が多勢で、氣骨が折れやしないかつて云ふんです。私が一番折れません、て云つたら其人がへエつてびつくりして、どうして折れないんですつて云ひましたが、それは今までの女と云ふ者は、食べたい物でも欲しい物でも、決して云ひませんでした。どんなに食べたくつても、お辭儀をしてゐて食べやうと云ふやうな人が無かつた、それが實にやりきれない、小じれつたくてたまらないんです。處が今の人は欲しい物は欲しい……寧ろお腹が空かない時でも、欲しい物はもつと食べると云ふ風に、氣持が明くて朗かだと思ふんです。昔の禮式から見たらデリカでないと云はれるかも知れませんが、兎に角朗らかだと云ふことはお認めになるだらうと思ひますが……

新居　認めます。

八木　新居さん、一九三〇年の女性は羞みを棄てなければいけないのでせう?

新居　えゝ、羞みなんて……いつか「含羞」なんて云ふ彫刻の題材があつたが、あんなのはもう古い藝術の對象で、今は反對で宜いと云ふ考を持つて居る。女には限らん男でも違つた意味の羞みは持つてゐる。僕自身がさう云ふ羞みは棄てなければならぬと思つてゐるので。夕べも或會の歸りに〇〇さんと一緒になつて是からダンスに行きませうと云ふので、行かうと云ふことになつて文化學院を出た男の人三人と、女の生徒も三四人引張つて行つた。途中で見失つてしまつて、踊りに行つたのは一人だけだつたが、君やり給へ――と云ふと、やりませう……ずーつと行つちやう。處が僕なんかだと、假りに踊れても、どうも一寸工合が惡い。行かうかなと思つてもやつぱり行けないけれども、實に早い、直線的なんだ、そんな事なんかでも、僕自身いけない事だと思ふが、どうもまだ殘つてゐる。僕の失敗は羞みがある爲に失敗したと思ふ。

谷崎　羞みがあつて、冒險意識があるから…

新居　それで相殺する、非常に殘念に思ふ。簡單な服裝の問題なんかでも、例へば僕が支那服を着て銀座を歩いても、ちつとも構はない。構はないとは思つてもどうも氣持の工合が惡い。さう云ふ理由は無いと思ふが批判するより、何か社會的の因襲や、觀方が壓迫するんだ、僕等を……そんなものなんぞに捉へられて何が出來るかと斯う思ふ。僕はラッサーレが戀愛で死にましたね。あゝ云ふ人は、死ぬやうな人だから革命家になれたんだと思ふ、僕等はさう云ふ失敗もしない代りに革命家にもなれない。藝術上の表現でもみんなさうです、僕等はぢれつたい位大膽になれない。ところが今の若い女性達でもなか〱キビ〱云ひますしね。それに又子供も昔とは違ひますね。いつか展覽會に行つてゐて、山野千枝子さんの小さい子供が、僕の小さい子供を捉へて、新居さん處のモチどこに居る?つて聞いてるんだ（一同大笑ひ）モチ後ろにゐたけれども、どうも弱つた、負けちやうよ。

三上　モチ連が含羞を突然棄てゝも困るよ。若い人達は棄てゝも宜いが……

新居　棄てるも何も、持つて居ないよ。

三上　僕等は含羞は持つてゐる、別な含羞……どうとはつきり云へないけれども、

新居　自分には感情性があると云ふことが、含羞になるかも知れない。

時雨　それに新居さんの若い時代が、さう云ふ時代でなかつたのも殘念なのでせうが、一つは年のせいもあるんぢやないでせうか何だか自分の年柄として出られないと云ふやうな……

新居　年柄もあるし、僕の境遇が餘りに早婚であり過ぎたから。それと又斯う云ふ事にもなつて居る。僕だとか、麻生久の時代は素人の女性に非常に惡かつた。玄人が……其次に赤松克麿時代になると、玄人なんぞ

汚ない。素人が非常に歡ばれて來た。そこで變つて、後の大學生は又違つた處がある僕等はさう云ふ時代の人間ですから、羞みが多いですよ。

三上　信州の溫泉場の流し…番頭つて云ふのが驚いてる。大抵の女性と云ふ者は、裸體になつて溫泉に入つて來る時に、體を多少隱すやうにするが、其人だけはさう云ふ感じがちつとも無い。非常に可愛い若い女の人だつたさうだが、それで貴族とか、もつと身分の高い人だと思つてゐたと云ふんだ。昔から壓迫のない階級に生れた者は含羞なんか無いから。

新居　高い身分の人は平氣だ。

三上　含羞と云ふものは、持つてゐる物を隱す、若くは恥る觀念だらうから…

谷崎　含羞を失くなす事になつたらたまらないね。

新居　情緒が過剩に有すぎるんだ。

谷崎　含羞と同時に情緒を失くなしたら不利益になつちまふ…

新居　センチメントが無くなつて、センチメンタリズムが豐富となる。

八木　谷崎さんの仰有る不利益と云ふのは？

谷崎　つまり男性が興味がなくなるだらうと思ふ。

三上　だけど君、男性が惚れたら含羞がなくとも、情緒を見出すだらう…？

谷崎　途中で考へるかも知れないね。あまり情緒が無いと…

新居　美德が違つたものに引かれる時代が…

谷崎　別の情緒が出來るかも知れないが、本質的の意味の情緒と云ふものは…非情緒的で、含羞も何もなくては…

八木　支那で革命運動の起た時分に、上海で、婦人の裸の行進をやる計畫があつたんださうですね。止められたさうですけれど

新居　僕は實は見て來た。本當にさう云ふ事があつたんだがね。止められなければ本當にやるつもりだつたんだらう。

三上　立派な肉體が揃ふなら面白いが、さうでなければ滑稽だらう。それだからそこに反省がなくちや困る。無批判な…

谷崎　しよつちう毎日、今後永遠に裸體だと

三上　尙ほ惡い。

新居　併しレデーの前で言ひにくいが、ハルピンで裸踊りを見た。それを見ても何でもありませんね。處が又もう少し違つた情景を見た、そいつは一寸困るな。どうも困るから是は止しませう。（哄笑）併し肉體とか裸體とか云ふ事でなく、それと同じやうに直線的にはつきりしても宜いやうな事はありますね。

戶川　谷崎さんなんか、踊りをなさるのに含羞か或は一種の見榮で…

谷崎　含羞です、やつてる人澤山あるんですが、僕の含羞だけで…は誰方か敎へて頂ければやつても宜い…

新居　（婦人達を見ながら）あなた方やるでせう？

戶川　女はそんなに覺えないでも踊ります。

時雨　よく私先には思つたんですが、ダンスは相手がいる汚ならしい…さう云ふと大變男の方に對して失禮ですが、變な人なんかと踊るのでは汚ならしくつて、到底興味が無いだらうと思つたのですが、ふと感じた事に、日本の舞踊でも大變良い氣持で、昔の一さし舞ふと云ふ氣持ですね、あれと同じでダンスでも朗かな氣持であれば、相手の顏色とか、形なんぞ考へてずに、踊ると云ふ事が先に立つて來るんだらうと思つて、前の考が間違つて居たと思ひました。

新居　それから斯う云ひますよ。男の人でね女の人と斯うやる事が（踊る時の恰好をして）なか〳〵氣まりが惡い。其次には何ともなくなる。さう云ふ場合に變な氣持を……氣まりが惡いやうに思ふのが、やつぱり惡いんで、そこに何かあると云ふことになるね。古い考へ方だが…

三上　含羞問題だが、人間が反省心と恐怖心を全部取ると云ふ事も難かしいに違ひない

が、反省心も恐怖心も含羞も無い生活と云ふものは來ないと思ふな。新居君の言葉は宜く分るが、無含羞の世界と云ふものは來ない。

新居　それは無論さうだけれども、さうでない方が多過ぎるから…極端にものを言はなくちや…

三上　かなり君、先になつて來やしないか、我々モヂが考へてる間に世界が進んで…

新居　我々がさうだから、さう思つてるかも知れないが若い者は、君等が云つてる事はもうやつてるかも知れない。

三上　恐怖心や反省心の無い生活なんて、見るもうとましくつて、僕なんか眼を蔽て深山に入る。今の狀態ぢや、含羞性も大分殘つてるから辛抱するが…

谷崎　僕は恐怖心と云ふものは非常にあるね

三上　纏つた恐怖ぢやないが何か自分から來る、妙なチク／＼やつて來るものがある。

谷崎　それは元來男の方があるだらう。

新居　そんな事は無い、男は女より意氣地がない、反省が無いから…男の方が反省心がない。

尾崎　女の方は案外反省せずに實行なさりはしないか知ら？酒の上とか、特殊の場合は別ですが…

松本　若し男の方が女より餘計反省すると仰しやれば…

谷崎　若しでない、確にさうです。

松本　確にさうなら、實行が伴はないぢやないですか。つまり實際の上に於ての行動が反省的にならないで、心の方が餘計になさるやうに、お考へになるですか？

谷崎　いや、さうでない、反省した上に實行すると思ふ。

新居　今の若い人から云はしむれば、考へると云ふ事は病氣で、古いさうだ。だからして反省したりするのは古いのかも知れない。

谷崎　けれどもハムレット型は永久に滅びないと思ふ。ハムレット型は使へない時代だけれども…

松本　それは永久無くならない事はないが、其の時代の呼吸をするかどうか分らない。過去の時代だけに其型が殘る…ですから違ふ意味の含羞が、新しい人の心に入つてるんぢやないでせうか。男の方に口を利くと云ふことを、古い女性は大變羞恥心を持つて、なか／＼口が利けなかつた時代がございます。さうすると今の人達は平氣で口を利きます。女が知らない男の方に口を利くのがいやだと思つても、それを我慢して話する。さう云ふ時の氣持は、却つて形は變つても、結局羞恥の心ではないかと思ひます。默つてちや可笑しいから、我慢して話してしまふ…

谷崎　それは羞恥ぢやないでせう。今までの社交的含羞と違ふ…

新居　僕はどうも社會的にも…實際ネクタイなんぞつけたくないね。無しで歩いてやらうと思ふが、どうもいけないのは、自分ぢや何とも無いと思つても、要するに電車なんかに乘つてジロ／＼見られたり何かする——今の持つ社會のもの丶觀方を、感情が押止めて、それに對抗して行くだけの勇氣が無い。

谷崎　それはしても宜いだらう。ネクタイをしない爲にジロ／＼見られて不愉快と云ふなら…

新居　併し僕は自分の生活に、自分が合理と信ずる事は、斷乎としてどん／＼進めて行かなければならぬと思ふ。

三上　音樂だつて調和を亂した音樂は…

谷崎　ハンカチだつて、口位拭く爲めだつたのが、裝飾になつてしまつた。

八木　今の社會運動してゐる女の人は、含羞と云ふものはかなり無視…

三上　運動の時はどうだか知らないが、個人的にはやつぱり持つでせう。調和を個人的生活で壞す事は難かしい。調和をみださない外形的には含羞を持つかも知れないが

新居　非常に努力を要するね、僕は上海のホ

テルでダンスがあつた時、背廣を着てヒヨッと行つた。すると皆なタキシードを着て行つてる。女は綺麗な着物を着てやつてるで僕は何か早く歸りたい氣がする。ちつとも構はないとは思つても、もう少し我々がこいつは良いと思つた事をやつてみたい場合に、何でもない事がやつぱり左右する。併し今の女の人達は朗かになりましたね。

時雨 非常に朗らかな氣持で、女同士でさへ話宜いから男の方はきつと話宜いに違ひないと思ひますね。ですけれども、割合に今夜のやうな時に、何か御仰有ないのは變ですね。普段はなか／＼勇氣凛然なんだけれど

新居 外國の文學者が來た時に踊り位やつても好い。

谷崎 加能作次郎と相抱いてダンスした…

新居 それも好いがね――。職業婦人なんか必然的に含羞を持つてゐられないね。切符を切りますとか何とか云はなくちやならないんだから、必然的にどうしたつて職業的に…僕は新聞記者をしてゐたが、含羞記者だつたから、文士や何かに感想を聞くのが、どうもなか／＼やれない。新聞記者としては不適當だつた。そんな事を考へないでどん／＼やつて行かなければいけぬ。それは、職業がそれを必然的にさせる…

谷崎 職業婦人は含羞してゐられない。いつか僕が圓太郎に乘つて東京驛に行つた時、小川町で急にストップしたんで、車掌がまつ倒さまに落こつた。死にはしないかと思つて、みんな總立ちになつちまつた。泥まみれになつて實に氣の毒だつたが、泣顔一ッしない。僕等なら恥しくつてたまらない帽子は落こちる、カバンから金が皆出てしまふ始末だが、泣顔一ッ見せない、僕は偉いと思つた。僕等ならオイ／＼泣いちやうね。恥しくなつて…（笑聲）

新居 君の泣顔が見たいな。

素川 それは意味の置所が違ふ。羞恥そのものは割合に本能的なもので、いつになつても失くならないが、社會的の狀勢によつて其の現れ方が隨分違つて來るんぢやないでせうか。羞恥そのものが全然失くなるものぢやないでせう？非常に違つては來ても…

谷崎 失くなると云つてやしない…

松本 それを私、さつきから抗議してるんです。

素川 谷崎さんの仰しやる、女の車掌が引つくり返つても泣かなかつたのは、さう云ふ處で現れるんぢやなくて、もつとほかの處で持つ…

谷崎 一例として言つたんです。偉いと思つたゞけだ。

三上 僕は蔭でやる事なら、惡い事は平氣だが、人の見てる前では善い事でも恥しい。かなり出來ない。却つて惡い事は出來るけれども…

尾崎 さつきの圓タク孃ですが、轉げても泣かないと云ふのは、一種の含羞の、もう一段奥の含羞があるのぢやないですか。

三上 谷崎君なんか含羞家の極だね。僕は含羞を愛してゐる、無くなつたら困ると思つて。

新居 僕は社會から、非含羞家のやうに思はれてる。

三上 お喋りつて奴は含羞家だね。仕方がないから喋つてしまふ。

谷崎 それはさうだね。

尾崎 それが今云つたもう一歩奥の含羞と云ふ事の、現れになりはしないかと思ふんです。恥しいから喋べつちやう。通り一ぺんの含羞でない…

三上 いや、通り一ぺんの奴…もう一ッ反省すれば、其儘默るが、仕方がないからやつつけちやうと云ふやうな…

新居 どうですね？今の若い女の人達はどう云ふ、例へば…ジヤーナリズムの題みたいだが、一九三〇年とか三一年とか云ふやうな時代の女の連中は、どう云ふ風に、大體なつて行くべきだと思つていらつしやるんです！是は反問します。

小池　私みたいな若いものは社會的に大きい偉い人の前では兎角、縮まなければならない氣にさせられるのが逆も嫌だと思ふ。誰の前でも勇敢にやりたい。

犀崎　含羞の問題に付てゞすか！

八木　生活的イデオロギイの？

新居　どつちでも宜い、生活でも…少くともァ、あるべきだと云ふ所があるべきですよ。今持つてゐる奴の中から、何か斷裁して切取りたい。其上に何か付加へねばならぬと云ふやうな要素ですね、朗らかだつていろ〳〵朗らかの種類があると思ひますよ、それは唯非常に聰明で、知識的になつて來てね、そこから來る、爽かさ朗らかさと云ふものと、唯餘りいろ〳〵な事を知らないが、無邪氣な朗らかさ僕等はさう云ふ場合にですね。あるべき朗らかさは、やつぱり知識的、理性が冴えて來た、それで朗らかになつて來たと云ふことを採りたいですがね。今の若い女の子なんぞ、知識的にさうでなく、時代とか何とかゝら、唯朗らかであると云ふ子が澤山あるでせう――

松本　それは子供だからでせう。それが先生位のおとなになれば…

新居　二十前後…

時雨　今はかなり、斷層といつてよいか間が空き過てる。宜く進んでゐる人と、餘り何にも知らな過る人があつて、もつと一般のレベルを上げて行かなければいけない。それには前に立つて進んで行く方が、自分だけの事でなしに…

新居　此間、日本全國美人投票の、僕が審査員になつて行つた譯だ。岡田三郎助とか、朝倉文夫とか來て居た、電通の合評會の時に、さう云ふ人達が、女の美つてのは、觀音樣…氣高い、崇高な、あゝ云ふものだと云ふ。美は一定不變のものにして、理想型を描いてる。でそれは違ひませう――僕は云つた。第一今の美は非常に動的であつて欲しい。顏だけの問題でない。はつきり此處では云へないけれども、兎に角將來の美は、智的聰明さが加はらなくちや、本當の美ぢやない。其時藝者とかいろ〳〵の寫眞があつたが私は素人の方を採ると云ふことを云つたんです。

時雨　今仰しやる動的の、智的聰明の其極が靜美に、極く崇高なものになつて來るんぢやないのですか。ですから觀音樣と云ふと下手な表現で非常に古くさくきこえますが觀音樣其ものゝ形でなく、其中に含んでゐる信仰や、智だとか、救ひの一番何ぢやないでせうか、最後のものを指したのぢやないでせうか。

新居　ハフゼンスタインなどの、美術と社會學の本を讀むと、同じマドンナでも澤山集めてゐる。時代時代に違つて繪が書いてある。やつぱり違ふですね。社會と關聯して

三上　最高の美なんてものは無い。絶對の美なんてものはあり得ない。

谷崎　觀音樣と云ふ事は、やつぱり智的聰明さを現してゐるんぢやないかね。

時雨　さうです、觀音樣と云ふものは慈愛…

三上　さうぢやないよ。造詣美術から來る、奈良に有るあの觀音の顏とかなんとか…

時雨　觀音樣と云ふものは、慈悲、聰明、智慧、圓滿、慈愛、總てをこめたものと云ふ意味で、そこへ持つて來て、綺麗な顏と云ふことを…

三上　併しそれはアカデミックな人達が、さうして考へる…

時雨　けれども、顏だけをいふのなら、吉祥天とか、マリア觀音とか、誰々何々と云ふやうにいはれるでせう。

三上　現代と殆ど關聯しない批判だ。

熱田　もつと人間らしい美ね。

三上　併し智的と云ふヤツは、生れながら本質的にある才智、非常に了解力、理解力、感受力の強い人もある。さうでない限り、元來時間と教養を要するもので、是は難かしい。

新居　教育が無くても叡智と云ふものは、元

來持つてゐる人はある。
三上　メーテルリンクなどさう云ふ事を云ふが、僕は信じない。
谷　信じられないと云ふのは、實例にブッからないから……
三上　ブッかつた人があつたら出して貰ひたい（笑聲）教育や敎養……カルチュアと云つては言葉が悪いが、敎養の力で增して行く。後天的な事はかなり出來るよ。
谷崎　それは出來る。
三上　だから利巧な女なら、先天的にメーテルリンクが考へたやうな……さう云ふ考へは、辛いもんぢやない。甘いものだ。
新歸　假りにメーテルリンクでも何でも、利巧、叡智だと云ふ。今僕等が智的と云ふのは科學性を意味する。科學性を意味する智性と云ふものは、叡智と云ふものと、一寸違ふと思ふ。
三上　それは尙ほ後天的なものぢやないか。
八木　科學性だか何だか知らないが、明朗性は本質的な自由から來ると思ひます。若し其の自由に、聰明さが加はつたら、迚も好い世界が來る。女性の本當の自由と云ふものは、其人自身からでなければ、何にも出來ない……
三上　聰明でなければ、自由は無い事ですが
新居　聰明でなくちや、本當の自由の要求も起らなければ……
三上　聰明が先で、自由が後ぢやないか。
八木　社會がさうだつて、さうでなくつたつて、自分を本當に自由にしてしまふ。
新居　本當の意味で、是が自由と云ふ風なものを理解するには、知性がなくちや出來ない。隨分自由と云ふものが、はき違つて行つてます。何が自由だと云へば主觀的な問題になつて來る。さうなると非常に抽象的になる。
時雨　自由は確にはき違へられてる時があります。
三上　我々私生活的に、大抵はき違つた自由だ。
新居　一面自由と云ふのは、一種の拘束……
熱田　勿論さうです。
新居　自分の自由の爲に、決して他人の自由を損なつちやいけないから、非常に拘束性がある。
八木　絶對に自由はありませんね。今の社會には……私思ふのは、觀念的にイデオロギイの上に於て、自分で自分の自由を拘束してやしないかと思ふ。
新居　拘束してゐるかも知れませんが、それ以上に他人の自由を、考へなさ過ぎると思ふ。
時雨　それは確にさうね。他人の自由を考へないと云ふことはありますね。
新居　是はまア自由の例には當らんけれども今の文士が、今日はどうも書けない。頭が悪いと云つてブラブラしてゐて、彼奴の處に行つてみやうと出かける。自分は書けないから宜いが、向ふは非常に脂がのつて、發酵しつゝあるかも知れないと思ふ。さうすると其の場合、こつちは頭が悪いから宜いが、向ふをブッ壞す事は非常に悪い。だから僕は餘り個人訪問もしないが、理想としては、何時々々が面會日であると云ふことをちやんと決めて置くと、お互が樂だ。
三上　一日の中でも或時間を……僕はね、是は女流作家諸君、文學者なんて者は、特別に夜でなければ書けんとか、朝でなければ書けんとか云ふが、そんな迷信は打破してやつぱり工場の笛がポーッと鳴つたら書くとか、其間に書けない奴は特別並に扱ふ必要はない。下手な者は下手なり、上手は上手なりで、いつでも書ける。それから文學は特別技術だとか、思想家は特別性格だとか、いろ／＼何だか迷信が餘り多過ぎる。
新居　文章など、朝でも夜でも閑さへあれば書けなければ、噓なんだ。
三上　殊に日本の文壇ほど大層らしいのはない。夜でなければ書けない、朝でなければ書けないなんて、勿體振つた奴がある。そ

んなのは原稿を買はない同盟を、雑誌社が組織したら宜いと思ふ。さうすると、君が今云つたやうに、お互に文壇人なんか妨害し合ふ必要がなくなる。人が來たら嬉しいから會つて、さうして歸つてから書けば宜い、片つ方の人は、愛情があつて行くんだからそれで宜い。新居君が始終來てくれると宜いからね。

松本　さうでなければ倶樂部をお拵へになると宜い、さう云ふものがあると……

新居　それは、僕は、君が歡んでくれると云ふことが分つても、僕として遠慮がある。

三上　一寸待つてくれ給へと云つて、書いてしまへば宜い。

新居　それが、さうやつて正直に云つてくれたら宜いが、明朗性であれば宜いが、忙しいが、まア宜いよ上り給へと云つて、何か殘つてる文士もある。

三上　仕事をするのはいやだから……怠け商賣だからね。今までの人は……

新居　例として間違つたかも知れないが、自分の自由を主張する爲に、他人の自由を、そこに冒したくないと云ふ、たま〳〵例にとつて妙な事になつた。

三上　此の機會に云ふが、文壇人と云ふものは、新しい人にも殘つて居ると思ふが、文學を書いた方が、煙草を卷くより好い。大家さんが家賃を催促するより、文學を書いてゐた方が偉いとか、どうも社會に直接觸れずに、蔭で仕事する人に限つて、自惚れて、騒いでる。見苦しいと思ふ。

新居　夜遲く歸つて來る時なんか、一時や二時に電車通りを直して、巧くやつてる爲に車も引くり返らないで濟む、あれだけの仕事に匹敵する今の小說家なんかどこにあるそれより以下のものかも知れない。

三上　勞働しながら小說書いてる人がある。勞働の方が本當に考へれば、非常に良くて小說など好きで書いてるだけで結構だと思ふ。文學なんてくだらん遊戲みたい……

新居　此間も、戸川貞雄が、新居君みたいに雜文ばかり書いてる人が、大學に行つてたつて……といつたが、僕は大學なんか何とも思つてない。今の文士には特に創作家とかね、特に何家と云ふ——何だつて同じだと思ふ僕は——雜文も何も無い。

三上　勿論何も無いね。

新居　けれども今の文學の世界でも、チヨン切らなくちやならない、いろ〳〵なものが隨分あると思ふ。

谷崎　事實に於てもう少し特殊的でなくなつて行くよ。

三上　失つても宜いね。

新居　兎に角豆腐屋の豆腐の方が、我々の文章より宜い。

三上　文學者なんて者は、かなり職業の中で誇大妄想だね、自分に關して、若くは自分達の職業に對してつまらぬプライドだよ。シエクスピアが印度と同じだと云ふのは、所有慾から云つたゞけで、所有してゐない國のイギリス人の所有慾だね。

新居　形容詞だらう。本當は印度の方が宜い

三上　同じ職業に從事してゐると、さう云ふ事を云ひたがるのだ。ベートーベンのシンフオニーと、シエクスピアが無かつたら、世の中がどんなに淋しいだらう——淋しくないよ無くても……

谷崎　シエクスピア一人は何でもないが、文學全體を代表してるんだらう。シエクスピア一人の問題ぢやない。要するに形容詞である譯だね。

三上　天才文士と云ふのは形容なんかぢや無い、もつと崇めるよ。僕達だつて崇めるやうな氣持がある時があるから。僕なんか其點で全然迷つて來てる。今の通りに食はしてくれる人があれば文學なんか明日でも止す

谷崎　文學以外に君を食はしてくれるものは無いよ。

三上　だから、援會を組織してゐる。會員が出來たら引退しやう……

新居　僕の願ひとしては、非常に良い讀者に

なりたい・・・

三上　怠け者には人のプリントした物を讀むのが樂しみだゞ文學は讀む程面白い事はない、僕は圓本を出來るだけ讀みたいと思つてる。いつか讀みたいと思つてゐた物が飜譯で讀め　り、平生は嫌つてゐた物が好きになつたり・・・

新居　僕は文學靑年と云ふ時代はちつとも無かつた。さうして最初は官吏にならうかと思つたり、大學教授にならうと思つたりして、法科をやつた譯だが、それがそのちの新聞社を首斬られ、こつちを首斬られしてどうにも斯うにも仕方がなくなつて、筆で食ふより仕方がなくなつて、やつてるけれども、もと〳〵そんな氣持ぢやないから、ちつとも何とも思はない。

三上　僕は實は圖書館がやりたくつて、圖書館學の講義を、君の方の大學に聽きに行つたが迚も分らない。難かしいから止したが今俺の知つてる者が、田舍の圖書館で圖書館長になつてる。本をいぢつてるのは、閑人の仕事には宜いね、直接の社會には何にも關係ない。又直接關係する事なく・・・

新居　僕等ばかり喋べるな——女同士で激論するのも面白い。

三上　さつきの自由の問題、あれをやりなさい。

八木　私の云ふ自由問題は、行動の自由なんですが、新しいイデオロギイなんかを、把握して居る人と云ふのは、把握したイデオロギイに、隨分束縛されてゐると思ふ、其爲に自分の考へ方を枉げたり、行動を卑怯にしたりすると云ふやうな事を、隨分考へるやうです。

熱田　理論や何かを非常に信じ過ぎちやふ結果、實際と伴はなくても何でも、どうしてもそこに行かなければならぬと云ふやうな偏狹な・・・

三上　併し其の人達は、本當に自分達の持つてゐる、感じて居るものが、本當に發展した曉には、自分達の自由が來ると、我慢してゐるかも知れん。さう云ふ我慢は尊いぢやないですか。

新居　本當の自由を得る爲に、或る時機には不自由を忍ばなければならぬと云ふことは僕は考へるね。

三上　それが尊いと思ふ。

新居　今我々は社會制度の下に非常に不自由な目に會つてゐる。

八木　社會が不自由だから、餘計に自分の自由を求める事になるでせう。

新居　あなたの出題とは非常に離れるけれども、イデオロギイの上に何するには、一種の熱情みたいなものがあるね。

八木　熱情もですが、自分で斯うやりたいと云ふ事を、非常に抑へて・・・

新居　それは日本人に多いです。例へばロシアなんぞで例のマルクス主義學者の？　がイスパニヤ政府に向つて、俺はマルキストだけれども、君等はマルクス主義ぢやなと云ふことを斷乎として云ふんですよ。日本なんぞはさう云ふ事を云ふ人が、案外少いぢやないかと云ふ氣がする。何かしら非常に模倣性が多いですね、日本人には・・・

八木　私は、一九三〇年はもう少し獨創的なものが湧いて來るんぢやないかと思ふ。

新居　僕はアナーキストなんだが、マルクスとか、クロポトキンとか何とか云ふのは嫌ひなんだ。ロシアの連中が、日本人の潔癖性に驚いてゐる。それは或る學校があつた。日本人がそこで先生をしてゐた。日本から行つてるマルクス主義の諸君が、不鮮明なボルシエビキの先生を追出せつて云ふんだ。するとロシアの先生達は、宜いぢやないか、ア、いふ考へ方もあつたつて宜いぢやないかと云ふ事だつた。で投票したらロシアの考へ方が勝つたんだ。けれどもア、云ふボルシエビキ的な考へ方が困ると云つたのは、日本から行つて向ふの生徒になつてる連中に却つてね——。さう云ふ人は同じ日本人だけれども、先生側は否決はされ

たが、兎に角さう云ふ動議が提出されたと云ふことがいやになつて、辭したと云ふ人がある。あゝ云ふ事はこま固いよ。

八木　日本人にはリベラリズムがあまりあり得ないではないですか。

新居　何しろこま固い。僕がハルピンで聞いたんだが、奉天の開戰の時……古い話だが……あの時に兒玉將軍が參謀に居て、其の時分はシベリア線が單線だつたさうだが、どうも自分の計算よりも、兵隊がどん〳〵殖えるんだね。分らないだらう。それは單線だから、何臺かの汽車に兵隊を積んでスッと持つて來て兵隊を置いて、又汽車を歸して又積んで來るものと計算してゐた。處がそれにしてはどうも數が多い。ロシアの奴はスーッと置いて來て棄てゝ、後からどん〳〵來る。それがどうしても考へつかなかつたんだ。兒玉將軍がそれを考へついた時には、靑くなつたさうだね。つまり日本人にはさう云ふ處がある。

三上　併し日本人でもいろ〳〵ある。僕なんか困つてるが、大杉君など昔から知つてるアナーキズムの本も讀んださ。最近四五年になつて、日本の譯のコンミユニズムの本も讀むさ、リベラリズムの物は勿論僕達の文學傳統で何してゐるが、どの世の中が來ても、一寸困ると思ふね。さうして僕は宜傳文學者として、御用文學者として理想的にやれると思ふ。是はどつちが天下を取つても、僕なんぞは地方民族敎化運動に、極く向いたものを書きますよ。併し考へるとお前はこつちを信じろ、出來なければ首を締めちやうと云はれたら、締められるほかない。

新居　ニヒリスト……

三上　人間の幸福なんてものは、どつちへ行つても個人的幸福は無い。民衆的幸福なんてものも一寸考へられない。さうしたらやつぱりニヒリストの旗を掲げて行くよりほかない。さう云ふのは、不自由人の骨頂だね。

新居　日本のマルクス主義者は、或種の物を非常に信じ過ぎる。例へば支那等の農民運動の本が出てゐる。あれは廣東なんだ。支配統計の無い國だから、廣東は進んで居るバルガーなんかを主として、そこの者全體がさうであるやうに見るんですね。今度の大會でバルガーの立場が惡くなつて來た。さうなつて來ると……

戸田　バルガーの統計だけは正しいと云ふ事は聞いてゐました。

新居　それは正しいが、或る部分正しいそれで全體は推せない。僕が支那に行つて困つた事はね。お前は非帝國主義者だ。非侵略主義者だから君は宜い——堀口久萬一、アゝ云ふ侵略主義者ぢや困る　堀口氏をやつつけて、僕をやつつけない。

谷崎　さう云ふのはどう云ふ人が云ふの？公の人か？

新居　支那の兵隊にやつつけられた。イデオロギイ以外に民族的のコンガラカリが實にあるんですね。日本に居れば、我々案外安泰だからイデオロギーだけ考へる。向ふに行くとイデオロギイだけ考へて居れん。

谷崎　イデオロギー即生活だからね。

新居　日本に居れば非常に樂だ。向ふはあぶないから……

三上　殺されるから……

新居　ビラを撒いてもすぐ殺される、日本ぢやビラを撒いてすぐ殺されないから……

三上　僕が行つた時に、北京の或る新聞記者が云つたが、ロシアが支那に手を着けた事は非常に失敗で、寧ろ困難でも印度の方に廻したら、支那人の知識と云ふものをもう少しロシア人が信じたゞらう。處があの、茫漠たる中に居る知識など有る奴は無い。

新居　女の方達、エロテイシズムを排擊しますか？僕信じてますね。

尾崎　信じません。

新居　さう云ふ處を聞かうぢやないか。

尾崎　頭の中で考へるエロテイシズムは、非

常に文學を新しくする。實行する云々といふことは、兎も角として作品を通して見たエロテイシズム、殊に最近のホーゼ表現派、あれなど何かの端々に使はれる。此間築地の殘留組の「森林」あれにズロースを半ダースばかり干す。あれなんか現實として見たら、隨分いやな世界だらうと思ひますが、一ツの枠に嵌めて、作品とか、演劇として見たら、非常に今までの文學に清新な風を吹入れるやうな氣がしました。

新習　現實ではいや、觀念的には宜いと云ふんですか?

尾崎　少くも私の今の感覺にとつてはさうなんです。現實と離れた、枠に嵌めたエロテイシズム……

新居　マルクスの方でも、無政府主義でもイデオロギイの方から云つて、エロテイシズムがあつてはいけないんですか?

八木　有つて宜いでせう。エロテイシズムなんて、イズムなんて言葉なんかくつ附けないで、もう少しそれこそ廣い……

川上　ロシアのエロテイシズムなんて、非常に不自由な時に燦爛と起つてるではないですか。アリストテレス――彼のエロテイシズムは、一種の反抗主義みたいに……

尾崎　あれは一ツの問題文藝であつて、藝術から歸納された結果の作品と云ふことは、云へないぢやないでせうか。

新居　現代の女性が、新しいエロテイシズムとして、具體的に云つて、

物習　現實の世界に於てゞすか?

新居　現實世界に於て、あなた自身の問題でなくても、一般の觀察でも宜い。恐らく女の方の見るのと、現代の僕等が斯うであるだらうと思ふのと、非常に違ふだらうと思ふ。

谷崎　聞かして下さい。非常に職業的に參考になる。

三上　エロテイックと云ふのは、非常に獨特なものぢやないですか?

新居　斯う云ふ風景がある、斯う云ふポーズがある、是がエロテイックだ…と云ふやうな…

三上　經驗を語るほか無いね。

尾崎　現實の男性なんかつて者より、映畫を通して感じます。それを一ツの幕に寫した處で…

新居　映畫で結構ですが、映畫の事でいつも僕エロテイックだと思つてゐるのがある。あなた方が、例へば斯う云ふものを見たがあれは新しいエロテイックだと云ふやうな、一ツの例位聞かして頂ければ結構です

尾崎　私には好い役者の部分的な、クレザート、ビルハック、ジョン・ギルバートなどの男性的で、而もしなやかな部分的には、感情がガッチリした所があると云ふやうな感じですね。

新居　女の人がね。バンクロフトなど好きな人がある。バンクロフトが好きだと云ふ其の場合に、あの人に附隨して、好きだと云ふエロテイックがありますか?

尾崎　役者は生きた男性だと云ふやうなことは、全然考へない。幕に寫つた男性だけ感じて、頭の中でエロテイックを感じる事があります。

谷崎　人間を離れてエロテイックは無いでせう。歸納してみればやつぱり現實の男性を思はせる譯でせう。

尾崎　私にとつては別です。どこまでも幕に寫つた…

三上　菊五郎の扮した腰元彌生に惚れたつて…伊藤金次郎が書いてゐたが、エロテイシズムは同じなんでせう。

尾崎　どこまでも現實と離して、幕の上だけの世界で考へます。

谷崎　そこに何か感じる譯でせう?

尾崎　私のエロテイシズムと云ふのは、一種心臟を突かれると云ふ意味に使つて居ます

三上　感覺的ではないですか?僕なんか感覺的です。

尾崎　全然頭の中を通して、而も枠に入つた

世界を通して來ます。

谷崎 枠に入つた世界でも差支ない譯ですが何か感覺的なものでせうか、觀念であつたら一寸變だが……

三上 兎に角あゝ云ふ風なものは、いろ〳〵難かしくエロテイシズムであるとか、ないとか云ふのは、認識の世界でなくて、唯打つて來るそれが肺腑に響くやうなものだ。でなかつたら隨分面倒臭い感じ方で、さう云ふ感じ方は、全然棄てゝ進んだ方が幸福だと思ふ。そんなに難かしくなくても、世の中は——

新居 つまり現代に於ては、智的でもエロデイックは表現されると思ふ。

尾崎 新居さんの仰しやる今後のエロテイシズムと云ふものは、頭を通して感情で正面にブッかつて行くと云ふ。頭で考へて……

三上 考へる閑はない。そんなエロテイシズムの世界なんて無い。

谷崎 エロテイシズムの觀念であつて、個々の現れは考へるものぢやない。

新居 僕はエロテイシズムと云ふことは好きだが、扨て考へると難かしいものだ。

松本 活動寫眞の人氣俳優など、バンクロフトなんか、始終スクリーンで髪を被つて……あゝ云ふのは全然變つてるエロテインズムが對象になつてゐますね。例へばもとは無暗に綺麗な眼や、輪廓の綺麗な、一體に綺麗なのが好きで、それからだん〳〵だん〳〵今度はもつと體全體が、大きく男性的なのが好くなつたり、又コールマンなどが一寸斯う髭があつたりしませう。髭が魅力を持つたり、人氣を呼んだり、舞臺の髭が宜かつたり、一寸違ふ所で人氣を……

尾崎 さうですね。映畫の世界と云ふものは或る一寸とした物が心を惹く……

三上 だからさ、今言つた問題外の觀念や、認識の世界でない、もつと素早く打つ光線とか、熱線とか云ふやうなものです。エロテイシズムの世界なんて——

新居 紫外線みたいなものか——(笑聲)

三上 兎に角文學で云へば、エロテイシズムの無い文學なんてものは、古往今徠僕などお目にかゝらない。

新居 文學にも云へるが、現代の實生活に於てどつか好きな人は、エロテイックがある

三上 觀音様でも感じる。

新居 感じの好いと云ふ言葉は、どつかエロテイックがある、これは單に性的と云ふ意味でないエロテイックなんだけれども……

三上 新居君、諸婦人を前に置いて、エロテイックの問題を出すやうになつては、お互に老ひたね。

谷崎 是は問題外だが、斯う云ふ話があつた或る婦人が斯う云ふ話をした、假りにA氏として置かう。A氏とは非常に懇意でありますが、併し決して戀愛關係でない事を、皆様方に申上げます。斯う云つた。さうすると男の方の友人が、そも〳〵男性と女性の間の交際にだね。妙味と云ふものは、友人であるかの如く、又戀人であるかの如く譯の分らぬさう云ふ所が宜い。それを懇意でありますが、戀愛は無いのでありますと云ふのが、いかんと云つた。そんなもんだ

三上 僕なんかも全然其の議論贊成だね。どこか好いたらしい所がなければ、男同士だつていやだらう。是はエロテイックぢやないけれど……

谷崎 まアエロテイックだよ。

三上 感覺的の問題でね。

新居 「女人藝術」は國際的に動くんですか?支那の女の文士達の原稿なぞ、まだ受けませんか?アメリカとか、フランスなんかと……フランス語で斯うパッと大袈裟にやつちやう。

三上 内地だけで澤山でせう……(笑ふ)

新居 餘り宣傳演説をしてはいけないかね。辯士中止!(一同大笑)Xて云ふのが今千葉にゐるだらう。上海文士の……是はどうも向ふでコムミニストと云ふので憎まれて、今歸るとあぶないんだ。

八木　上海邊りの婦人はどうでせう？　動きなんか見ていらつしやいませんでしたか？

新居　どうも女の友達は出來ない質なんでね

戸川　出來ないのは可笑しい、今のお孃さん達、二十前位の方最も進んでますけれど、お孃さんてよりもモガと云はれる人は、年とつた方のお友達を非常に欲しがつてる……

谷崎　少し紹介して下さい。

新居　いつかユーカリへ行つたら、そこの女給のはつえさんと云ふのが、僕のこと、あの人新居さん？　あらまア新居さん、本當に新居さん……（一同大笑ひ）

三上　お孃さんと盛んに出歩いたら宜い。

谷崎　家庭の教育法はどんなになつてる？僕は參考の爲に聞くが、絶對自由ですか？

新居　兎に角獨立人だからね。

谷崎　僕は非常に嚴格だ。

戸川　此頃の小さい人は、お父さんやお母さんに對してお友達の感じを持つてるやうですが、さうなつた方が宜いかしらん……

谷崎　僕は若い時分には非常に親爺を偉いと思つてゐたが、後には非常に輕蔑した。

新居　僕なんか子供に何か云はふものなら、何だ親爺の禿頭――と來る。

三上　僕は女親とは親子だつたが、親爺とは友達だつた。親爺つて奴は好いもんだぜ、僕は子を持つてゐないから分らないが君達も子供の目から見たら、良い親爺だつて、間違なく好かれて居るよ。

新居　僕を許してだね、「父は善人である、屢々過失を犯すに非ざれば――」過失と云ふのはどう云ふ事か僕には分らぬ。

谷崎　僕の親爺なんか、過失が無かつたから親しめなかつた。

八木　新居さん、お孃さんは、お書きになる物、批評なさいますか？

新居　彼女の生活は二階だからよく知らないどうも工合が惡いよ。どうも子供が年の割に大き過るから工合が惡い。下の子供は子供らしいが、上の二人は一寸困る。

熱田　子供の立場になつてみると、親に云はれた事でも、自分で感じない事は放つときます。云ふ事なんか聞かうとは思はない。

谷崎　僕は云ふ事をよく聞いた。今なら聞けないが……非常に善良だつた。

新居　年少にして孝行で、老いて不孝か……

三上　僕は年少にして勤勉で、老ひて道樂か

新居　どうしても僕等ばかり喋るな……ダグラスの活動のやうに、ジャズ的にワッとやらうぢやありませんか。

熱田　初めて會つたやうな男の方に對して、お友達のやうに話する事が、男の方でも嬉しがつてるし……

戸川　谷崎さんの、其の笑方いけない。

谷崎　笑ひは取消します。

寒川　劍劇は性的魅力だつて云ふ人がある。

尾崎　役者にもよるでせう。お好みに合ふやうな人がゐますからね。

寒川　人から聞いた話で、私は餘り見た事が無いんですけれど……

八木　新居さんなんか、隨分ゴシップは飛んでも、其實戀愛なんかしてらつしやらないのでせう。

新居　僕は戀愛の性能が無い、人造人間でも出來ればするかも知れん。資格が無い……

尾崎　人造人間で戀愛すると云ふのは、さつき私の申上げた意味のエロテイックと云ふものが、成立はしませんか？枠の中の世界

三上　近頃の若い人はドストエフスキーのものなんか、讀むのをいやがるさうですね。面倒臭いつて……

尾崎　若い人がドストエフスキーを讀まないと云ふ事を不思議にお思ひになりますか？

三上　驚かされますね。勿體ない人だと思ひます。

尾崎　私には讀めません。

三上　どんなものでも、人が眞面目になつて書いたものは……

松本　自分の思つた本を讀み、それから遊んで行くのには、幾ら考へても二十四時間では足りません。何かしら減らさなければ：

三上　自分が考へるより、偉い人が書いたのを讀んだ方が、面白いぢやないですか。僕等考へる暇は無い。

時雨　何からでも好いものは有るもんですね

松本　そんなに何か敎へられちまつたら、うるさくつて仕方がない。昔の人は讀者を生徒みたいにして、歴史や美術やいろ〳〵の事を、一生懸命敎へやうとして居る。こつちは樂しみの爲に讀んでるのに…

八木　まるで知識を持たない無產階級の人達は、直線的な、線の太い感じがするでせう。さうなると科學性だとか聰明さを加へるとなると、非常に健康だと云ふ…裏長屋やプロレタリアの連中はどうなるんです？

新居　非常に結構ですよ。唯末の問題でね。

八木　階級意識がどうの斯うのつてんぢやないですよ。階級鬪爭とか何とか云ふ、あゝ云ふ風に堅苦しく諦めてしまふのいやなんです。戸田さん、戀愛論を一ツどうぞ…

戸田　はい。(沈默)

時雨　戸田さん、「淸算」と云ふのをお讀みになつて、どうお感じになつたんですか？

戸田　「改造」に出てゐるんで、明石鐵也さんの小說…

八木　左翼の鬪士の人が、自分の愛人がいつまで經つてもプチ・ブルの域を脫しない、其女は戀愛から入つたんですが、男に非常に愛着を以つて引かれる。それが自然にありふれた結婚生活の…自分を奉仕すると云ふ所謂妻としての存在になつた。それがどうしても主人公には氣に入らない。どうかして自分と同じイデオロギイを持つて、鬪爭の中に入つて行かせやうとして、骨折るが、どうしても巧く行かないそれで最後に…結末の所が非常に變なんです。自分と大學で同窓だつた人の妻君が工場內の指導者になつてゐる宜い鬪士で、其の工場の女工さん達の信頼を得て居る。で最後に鬪士の人の友人が忠告して、細君を捨てゝ、工場で女工の信頼を受けてゐるその女を獲得しろと云ふ——よし、つて云ふ。

新居　さう云ふ工合に女を獲得しろなんと云ふことは、云へる事かねえ、女を獲得するなんと云ふと、男性と女性との間の、何か他の場合なら宜いが…

時雨　戸田さんはそれをどう考へるの？

戸田　分らないんです。さう云ふ戀愛が果して良いか惡いか…

八木　女の人は其男と別れたくなくて、必死になつて愛して居る、女は姙娠してるらしい、男はそれを××さして、其女を捨てゝしまつて、向ふを獲得しやうとする。

新居　其の場合女は男を愛して居る。男は女がプチブルの理想を持つた人だから愛着は無いんですね。

八木　有るんです、…

新居　戸田さんはどうなつて欲しいんです。

戸田　「淸算」と云ふのは彼の戀愛が問題なんです。…獲得したかどうかと云ふことを、書いてあると面白いと思ふんです。果して女の人が獲得されたかどうかと云ふことが。

時雨　獲得しろの、されやうのと云ふこと、女は初めから知つてゐるの？

八木　知つてゐるんです。

時雨　さうでせうね、目茶苦茶に女を獲得するなんて、亂暴だと思つた…

三上　知つて獲得する、惡いね。

時雨　獲得といふことばは女としていやね。

新居　其の場合、其男の人は、其の女工に愛を感じてゐるんですか？

戸田　さうぢやないんです。工場側なんかよく女工なんかに對して、男工をあれしたりするでせう。さう云ふ意味で、此方の方から運動の爲に、其女を獲得しやうとする。

戸川　道具に使ふ譯ですね。

松本　女の人格を無くしてゐる。

三上　作家は、そこを考へるんではないでせう。

戸田　さうです、それがはつきり描かれてゐます。

新居　斯うでせう、簡潔に云へば……プチブル性の女が其男を愛してゐる、男も女を愛してゐる。が、自分のイデオロギイの方から云つて、プチブル性の奴を除けて、運動の爲に其の女工の處へ逃げやうと云ふ譯でせう。處が其のプチブル性の女と一緒に居居る爲に其の運動が阻碍されるんですか？

戸田　さうです。

新居　さう云ふ場合に、それと一緒にならなければ、運動が出來ないやうな人間なら、なつたつて運動出來やしない。それが從つて來なければ、仕方がないから知らん顔をして……

時雨　そんなに愛してゐる男の爲に、プチブル性が棄てられないで、それにばかり執着してゐるのは可笑しい。愛してゐれば男の方に向つて行くべきでせう。

戸田　なか〳〵それが出來ない。

熱田　永い間のやつぱり……生活の習慣で、初めつから從つて來たんだから、急に棄てきれない。

三上　棄てきれないね。百人中の九十九人だね。

時雨　棄てきれないまでも、棄てやうとするのが女だわ。

尾崎　棄てやうとする事は出來る。女が其の努力してる所が書いてあつたでせう。

戸田　背バスの車掌か何かになつた方がいゝつて……でも男は工場へやらうとするが、工場さへも行かないで歸つて來る。つまりプチブルの妻なんです。それに付て感じたのは、あの人の……明石さんの考へ方が、大衆を離れて、インテリ臭いと思つて……

新居　小說だからさうなるけれども、實際問題なら、勇敢に鬪士になつてゐるんですよ。

戸田　其中に斯う云ふ事が入つて居るんですモスリンの、城東の平井工場と云ふのが、組合同盟のものですね。大抵それは協議會に出て、此の十二月までに獲得したいと云ふ方針なんです。で、いろ〳〵働きかける爲に、いろ〳〵な苦心をするんですね。さうして最後に奧さんを獲得して協議會に：

三上　昔からさう云ふテーマは澤山ある。ウマの合はない夫婦が、ウマの合ふ夫婦を拵へたいので……それにイデオロギイが入つて居るだけで。獲得なんて言葉でなく、昔の人は器用に云つたので……ありますよ。

新居　獲得は拙いや。ウィッドホーゲンの「理性を持つ男」か。あれも鬪士が貴婦人とラブに落て、ずつとそれに引かれて行つて、さうして終ひに其女が鬪士に引かれる。さう云ふ事が書いてある。

三上　今の實際問題としてあるだらう。

新居　アメリカにヘッデスと云ふ作家が居てそれの書いたミンターンと云ふのは、何の事か分らなかつたが、ダニエル、ミンターンと云ふのが鬪士の名だ、それが勞働運動の指導者で、それがブルジョアの女と、結婚のイズムと戀愛の爲に、非常に惑ふ事を書いてあるさうだ。僕は讀んでないが――だからさう云ふ風な事が隨分ある。さう云ふ物ばかり集めて批評しても宜いと思ふ。

戸田　實際にはあつても宜いと思ひますが、議論づけて「淸算」とかするにはインテリ臭い、さう云ふ事が一般大衆には大變反感を持つて考られると思ふ。

新居　日本ではまださう云ふ問題より、もつと先へ手短にどん〳〵行かなければならぬ仕事が多過るからね。だからそんな事は淸算まで思到らん。ロシアでもレーニンが、戀愛かそんな處ぢやないと云つたやうに、それはまア少し先の話だからね。今の實情から云ふと、或は淸算なんて云ふと實際問題からは、反感を投げかけるかも知れない

谷崎　イデオロギイの入つた三角關係……

戸田　最後の結末を、女を獲得した事が書いてあると面白いですが……獲得した爲にどうかと云ふことが書いてあると面白い。協議會の爲に成功したかどうかつて事を……實際には書けない事ですけれどもね。

新居　女を獲得と書いてあるんですか。それは可笑しいね。

戸田　女の立場から侮辱されたやうで、反感を持ちます。男の人が大變卑しいやうな氣がするんです。

新居　それはプロレタリアイデオロギイが入つてゐないよ。

谷崎　今月の婦人公論に書いてる、貴司山治の小説の一回がさう云ふんだ。ブルジョア婦人を棄てゝ……

新居　今のプロレタリア、インテリゲンチャが取扱ふ問は、そこらの處だよ。それから先へはプロレタリアさ、婦人公論も池谷位ぢや……社會主義の婦人を入れなくちやいかんと云ふ所に行つて……

三上　ロシアの新しい女の世界が始まつて來て、踵の平べつたい靴をはいた奴が、高い踵の靴をはいて歩き方を習つて居るといふが、當然踵の高い靴をはいた方が綺麗なら、高い靴をはくからね。

新居　それは重大な問題があるよ、さう云ふことにも組織の上の事を、作のテーマにして宜いと思ふ。今の作家がまだ……例へば此等の疑獄事件、あんなのはプロレタリアがよく調査して、やらなくちや嘘だ。宜いテーマ……

三上　分らないし書けない。調べやうが無いからね。どうも賄賂を取つた奴は、百萬とつた奴は五百萬とつたに決つてるから、いろ〳〵やつたら面白いに違ひないね。併し賄賂の問題でも、僕等自分で考へるが、僕なんかでも取りかねない。そこに座つて、其の組織の中に居れば

新居　ルーズだから……

三上　其の組織の中に居る奴は、必ず同じやうな事をするよ。

新居　組織の中に機能だからね。いやでもおゝでもカラクリに卷込まれてしまふ。官員になつて居れば、必ず取るね。

三上　取らなければましよくに合はない。隣りの奴が取つて……

松本　取る人達は賄賂と意識して取つてるんでせうか。さう云ふ意味で詮じつめて、斯う云ふ問題になれば、賄賂と云ふ二ッの文字にかためて、正然として私達に分りますけれども……

三上　無論意識してゞすよ。あの人達みんな法律家でせう。

松本　意識無しに、ウカ〳〵悪い空氣を吸ふやうに……ウカ〳〵吸つてしまふんぢやないでせうか。

三上　やつぱり組織が變らなければ……

新居　痲痺しちやつて、當り前になつてしまふ。みんな法科大學卒業者だから、法律だつて一通り知つてるから……小川の爺いでも……

三上　法律の知識はあるし、外國語は讀めるし支那の詩文だつて讀めるし、作る。我々より利巧に決まつてる。

戸川　賄賂とは思つてるでせうか。痲痺してしまつて賄賂と意識しない……

三上　寧ろ黨の爲だと思つてる。十分の一位出して、後を取つても黨の爲めだなんて

時雨　あゝちよつと――黨と云ふと、此處の皆さんは無產黨の事を考へるが、政友會や民政黨の事。

三上　新しい組織に移らうとする人達は、盛んにブルジョアを脅して金を取つたり、少くとも賄賂位は取つても差支ない。

谷崎　とる方が當り前だ、皆やつてゐる。

三上　もつと公に、内輪爭を止して、大同團結して、脅やかして金取つたら宜いぢやないか――

新居　取るたつて、仲間割が生ずるから……政黨と云ふものは、無產政黨でも、既成政黨でも金が要る。だからイギリスの勞働黨が成立したのは、アメリカから金が出たと云ふ噂がある位だ。兎に角、決して黨員の月掛だけぢや出來やしない。

三上　本部の家賃だつて、擧がりやしないからね。

新居　今の女性諸君は、建築に興味持つて居るですか？新しい家庭生活の、色々の建築で成立つた、新しい住方、僕は板垣？あの人達の新興藝術、あの行方が好きなんです。あまり建築なんぞ、興味ありませんか？

時雨　建築つてものは‥‥皆女の人は割合に自分自身の住居には持つて居ります。自分の住居を良くしやう、改良しやうと云ふので、小さな圖面の一ッや二ッ引かない人は無いでせう。

新居　作家としてね。例へば僕自身のトットキの考へ方で云つてるが、教會には教會感情と云ふのと教會の理智と云ふべきものがあると思ふ。ゴルシエー派の建築‥‥ストリート、ガールが歩いてる。藤森流に書いてゐて、何が彼女をさうしたかと云ふやうな心理は書くけれども、其代りに背景が必要な場合になつて來ると、やつぱりゴルシエーの建築がどう云ふものであるかと云ふさう云ふ知識も非常に必要な場合になつて來た。

時雨　現在此の戸田さんが書く物が其の傾向があるんです。物を積立てゝ行く層の根本から決めて行かうと云ふやうな‥‥

新居　處が此間、東京市の復興建築、あすこに都市美協會と云ふ、東京市の協會がある専門家ばかり集つて‥‥實は此間僕はしくじつたが、建築家や何か専門家ばかりの中で、僕に講演しろと云ふから、よし來た、引受けた、建築學者を前に置いて講演をやつちやつた。其前にあすこを見たんだが、街路の縦斷面なんぞ面白い。

時雨　それは小説家ばかりでなく、戯曲などの構成と云ふものは、非常にさう云ふ所から來てますね。

新居　例へばですね、郊外に赤色の屋根の家があるとする。其向ふに緑の森がある。僕等が假りに郊外の景色を畫く時に、赤い屋根、緑の森と云ふことを、すぐそれが引出せる位の準備が必要だ。

尾崎　さう云ふ事は感じますね、ものを書く上に‥‥

新居　例へばどつかの建築が、地上何百尺に聳えて‥‥なんて書いたら可笑しい、そんな事は建築條令に無い。所が外國作家のさう云ふものは、もう少し緻密だね。

三上　キャッ等、日本より好嫌ひが激しい、寶石のやうなものでも‥‥本の裝釘なんか細かに書いてる。知らなければ書けないが──日本の今のプロレタリア作家とか、或は其他の人でも一寸閑が無い。だからさつき女に明るさとか、理智的なものが、自由さでも、入る事を勸めても、一種それを理智を磨いて行つたり、富まして行つたりする閑がない。

素川　良い社會が來なければ‥‥

三上　良い社會もすぐには來ない。

戸田　女の明るさ、子供らしさを、今までの小説家が美しく書いてゐました。あゝ云ふ風なこと‥‥

新居　それと同じ事だ。子供に對して、今の教育家や何か、子供を良い者、エンゼルの落し子として思つてゐるが、子供と云ふ奴、悪い奴だと思ふ。僕等のしてゐると同じ事をしてゐる。そいつは中に入つてゐて、出てゐないだけで、子供のやうに無邪氣だとか云ふが、あれはもう少し、子供て者を科學的に改訂しなければならぬと思ふ。

三上　子を持つてゐる作家はさうかも知れぬが、僕は自分で持つてゐないから、無邪氣なんて思はんぜ。

時雨　無邪氣には違ひないでせう、慾張りする、物を取らうとする。それをすつかり現す處が無邪氣ではないの？悪いとか、隠さなくちやならないとか云ふ、心を持つてゐないでと私は思ふ、

三上　小川平吉と同じものを持つてゐるよ。見つかつちや大變だと思つて、蔭でやるのは同じだ。

新居　子供と云ふ者に對して、マンネリズム解釋の仕方が良過ぎると思ふ。

松本　あの人達の云ふ子供つてのは、寐てる時の子供・・・

新居　寐てる時は我々だつて無邪氣だ。（大笑ひ）

時雨　それでも良心と云ふものを育てゝしまつた、何も彼も、良し惡しをはつきり知つて、今の道德も分つてる大きい人とは、又違ふでせう？

新居　あなたの云はれる無邪氣と云ふものは認める。が理想化され過ぎる・・・

戸田　例へば私の云ふのは、奥さんらしくない奥さんとか、大人でも子供らしい女・・・小說家はさう云ふのを興味を以て美しく書いてゐました。外國の作家は書きます。奥さんで奥さんらしくない・・・

谷崎　けれども僕はさう云ふものに興味を持たない。大人で子供らしかつたら片輪でせう。一種の形容詞には出て來ますけれども

時雨　私もそんな事はないと思ひます。

谷崎　えゝ、さう云ふものはないと思ひます僕等は一寸困りますね。特殊の場合あるかも知れないが・・・

戸田　例へばトルストイの「戰爭と平和」に出て來る伯爵夫人・・・一種の大變子供らしい夫人・・・

時雨　日本の有名な作家、近松など、憎らしい位女を惡く書いてゐます。お染はお染のいやな處、お光はお光のいやな所・・・娘であつても人間を書いてゐる。作者は決しておべつかはつかつてない。同情をそゝるやうに綺麗な扮飾するのは役者なんです。

谷崎　大部分はさう・・・

時雨　女によくすると受ける。各々の役者が自分の役に同情するといふより、人目をひかうとして一ッのマンネリズムに入つてしまふ。作者はわざとさういふ型の人間を求めないかぎり書かない。

戸田　谷崎潤一郎さんなど、さうではなかつたが、新しい横光さんなど、あゝ云ふ人の書く人は、大人でも子供らしい女の人達・・・

時雨　ピジヤマを着てラ、ラなんて踊るつていふやうなの？

新居　實際問題として、年寄りで大變若い女房を持つて變に、子供らしい事が好きだつて云ふのは、それは別問題でせう。

谷崎　さう云ふ意味なら僕だつて好きかも知れないね。

三上　そこはさつきの、新居君の理智問題みたいなもので、一概に理智とは云へず、經驗や知識やいろ〳〵の物があつて、一くせある女は、細君になんぞ書いてあるのを讀んでも宜いね。

時雨　旦那だつて、朝から晩まで帳場に座つてねめ廻してるのは、典型的な旦那かも知れないが、そんなのはたまらない。

三上　工場へ行つてても、家へ歸つて來たらヴィオリンでもオルガンでも彈いたら宜い。

時雨　それとは違ふでせう。

新居　新聞記者に聞いた話だが、會社に行つて、六時なら六時に歸るとする。さうすると六時十分になる。十分遲れてどうも濟みません。代々木で以て・・・途中で友達に會つて斯う云ふ譯だと云ふ。一日日曜には、何をしてゐるかと云ふと、戸を締めて、一枚だけ明けてる、兩方に・・・細君は頰杖ついて足をピン〳〵やつてゐ。向合つて先生が斯うやつて歌を唄つて、足をピン〳〵やつてる。斯う云ふ良い亭主も、他に行かないかも知れないが、一寸困る。

三上　困るだらうと思ふが分らぬね。個人々々の問題だから・・・小說なんてものは、テーマの問題よりも、どこまで書いてあるかの問題だね。

谷崎　さうだね。

三上　小說なんて所謂見やうだ。どんな物を持つて來ても同じもので、女の家庭生活でもさうだらう。

時雨　今のやうな家庭を、尾崎さんどう考へます？

三上　誰も好きなもんか。

尾崎　實際に持つて來ると、絶對に何とも云へません。好みが確立してゐません。之を小說として、作品としてゞしたら……

三上　座談が巧くて、いろ〳〵智識があつて女を喜ばせる實があつて、それで早く歸つたら……何にも出來ないで、唯斯うやつてゐたら、退屈で叶はない。

新居　さう云ふ事をして、喜ばせる男なら歸つて來やしない。僕等は、歸つて來いとも云やしないが、時間に狂ひを生ずるのは饒舌だね。

谷崎　まアさうだね、酒か饒舌か、どつちかだ。

三上　酒を飲んだり喋つたりして、時間や日が經つてる苦しい修業が好きな人と、嫌ひな人と二種類ある。女にだつてある。修業したい人もあらう、したくない人もあらう。

新居　人間だから、宜い加減の所で見をつける。

三上　巧く行けば、岸田みたいにボカリと……モダニズムつてのも、僕達考へるのと、諸君が考へてるのと、違ふだらうね。一刻々々違つて行く。モダニズムと云ふ定義は何だらう。

谷崎　十九世紀時分出來た言葉だが、其の時分とは大變違ふだらう。

松本　定義はないでせう。刻々と變つて行くから、作れないことになりませう。

三上　モダニズムつて、多少マルクス的であつて……

谷崎　今ではさうなつた。要するに感覺的であると云ふことなんだらう。

新居　一體若い誰がモダンの人だね。

戸田　新居さんがモダンだと思ひます。

新居　いやア僕はスタートを切る方でない。旗振りだ。フレー、フレーの方だ。

谷崎　フレ〳〵モダンだね。併しまかり間違つたら、仕合ひもしかねない、オールドボーイス……

八木　新居さん、モダーンガール隨分知つてらつしやるんでせう。

新居　交際しない。

戸田　新居さんのいつもお書きになる。あれなんか迚もモダン……

新居　あれは想像ですよ。

谷崎　全然想像ではないだらう？

新居　それはさうだ。

谷崎　それはさうだなんて云ふ所を見ると、何かある。僕は女性尊重家で、理論的に絶對に尊敬してゐる、讃美をこそ受けるが、抗議を受ける事はない。

三上　一寸君の方は迷尊家だね。

新居　盲從だねつまり……從でもないが、從の感じも有る。

三上　僕達ばかりよく喋つたから、是から女性諸君の討論會を開かうよ。僕等は傍聽して野次をとばす。誰か議長になつて、議題を出したら宜い。

新居　（座布團を前の方に直して女性諸君に勧めながら）　さア八木さん、どうぞこちらへ……（速記者に）　是は是非書いて下さい。

（一同大笑ひ）

うめーるものーーわーれら

セカーイノハーハワーレラ

私達の行進曲の歌期詞に一箇所變つた所がありますからちよつとお知らせ致します。

「セカイノハーーハワーレラ」と云ふのが「セカーイノハーハワーレラ」となつたわけです。

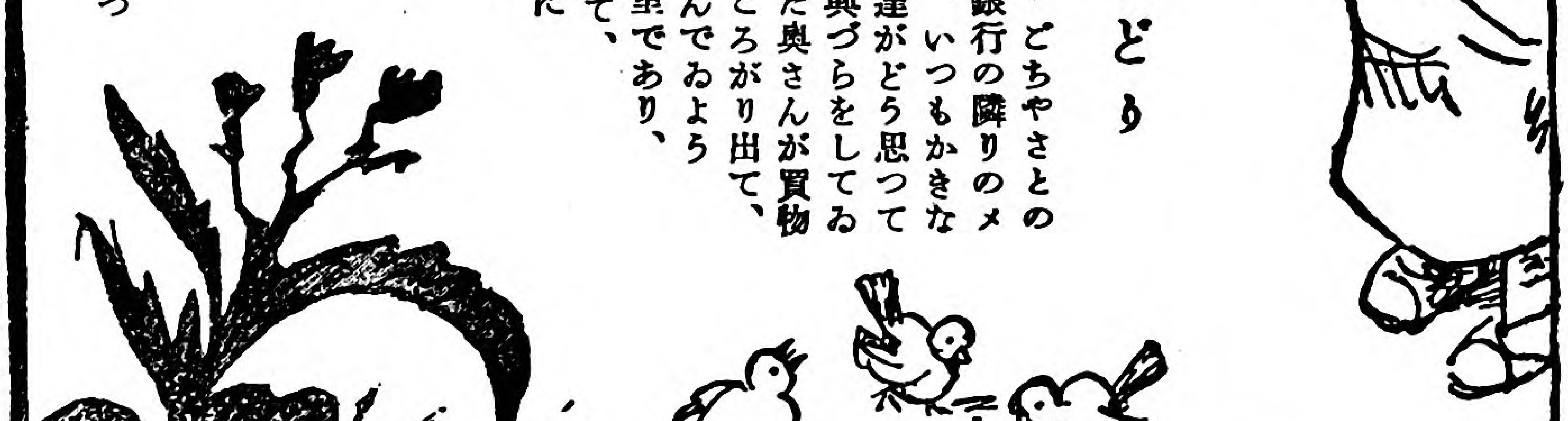


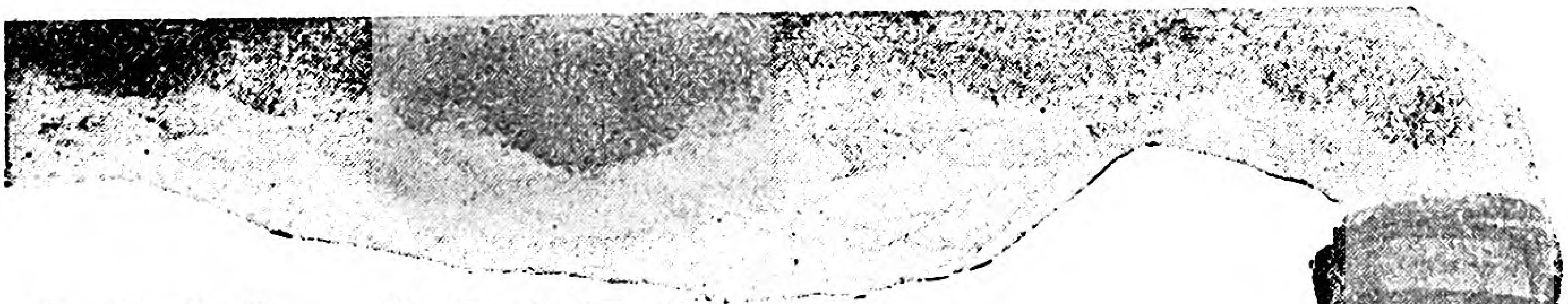


ジンタ

小池みどり

指さし横丁を出はづれて一歩新宿のめまぐるしい、人と車ともの音とさけびとどちゃどちやさとの通りの中にふみこむ時、今日も又なつてゐるなといつもかんじるなつかしさだ。安田銀行の隣りのメリヤス雜貨やの店の二階の片角に、雨の日も風の日も、朗らかな日にも憂欝な日にも、いつもかきならされさてゐるヴイオリンだ、トランペットだ、太鼓だ、笛だ。その音は通りを歩く人達がどう思つてゐようと平氣だ。驛の待合室から戀人を待ちあぐんで出て來た娘さんが悲しそうな不興づらをしてゐようとも、すぐ向ひの交番で運轉手がおまわりに油をしぼられてゐようとも、すました奥さんが買物包をおとして、そこからリンゴの赤いのが泥んこの地面ぢやないアスファルトの上にころがり出て、ひろふには少しはづかしいし、きたないし、捨てるには惜しいし、しやくだしとなやんでゐようとも、太鼓もトランペットもヴイオリンも、背やみせまればであり、ここは御國の何百里であり、空にさへづる鳥のこゑ峯より落つる瀧の音である。私は大好きだ。私は新宿の雜然として、身動きのとれない樣な、不統一が好きだ。電車のひゞき、自動車のうなり聲、氣狂の樣にどこでもかしこでもならべてある客ひきの色彩と音響、私は皆な好きだ。そしてその中でもメリヤスやのジンタが一番すきだ。それは私を日に一度、必ず嬉しくしてくれるから。おひるすぎ女人藝術社に行こうと出てくる毎日を一歩新宿通りに踏み出す時、ジヤガジヤガなつてゐるあのジンタは私に幼ない小學校の頃、秋の運動會にいよいよ番がきて出る時のあの身うちをはしるひきしまつた、ほこりかな興奮を思ひ出させる。紅白にゆはへられたはしらで作られた門から、樂隊のなるのを待つて、ドンプカドンプカそれに合はせて運動場の中に出てゆくきもち、今私が新宿通りに一歩ふみ出す時あのジンタが必ず私をそのほゝゑましい思ひにみちびく。私はそこで胸をはつて、足なみをあはせるようにおいちに、おいちにと新宿驛の中に入つて行くのだ。





ルンペンの唄

林芙美子

佗しさはいつか流れぬ
いいい
繩のれん道化姿なり
今日も雨
いい
けものだよ
俺は何も知らぬ路傍の小石
呑めよ唄へよ濁り酒
夜なり
夜更なり
轟々耳をふさぐ警笛（サイレン）も何のその



泥の中の訴へ

北山雅子

俺がは土の中から生れ
泥水をかぶつて育つたからには
田舎者に相違はねえだ。
何もかくす譯でもねえ
俺は解んねえから知らねえと云ふだ。
「先づ働け」女子青年團の團長さア
集り時話したけが
俺が家で遊んでる者ア獨りもねえだ。
ねえだにこの生活（クラシ）アなじよな譯だべ。

ベルトは小指で切り落せ
理くつもへちまもあるものか
氣に入らぬもの
何でもかんでも叩き落せ！
あゝ夜更け雨空
鼻汁ものどにはいれば
しがない味覺

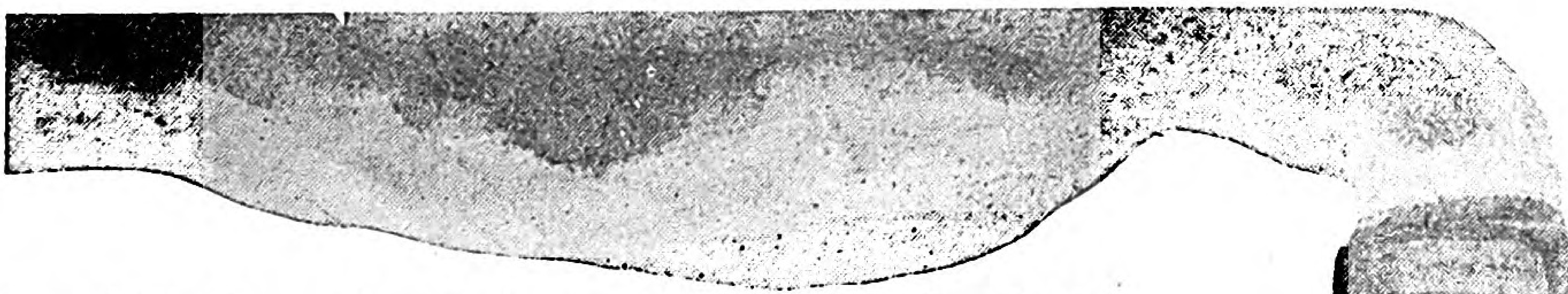
呆然と冬の小唄は流れゆけど
ペタ靴
泥靴
穴アキ靴
一カンで買つた！
ワツハ　ワツハ
みんな盲目靴

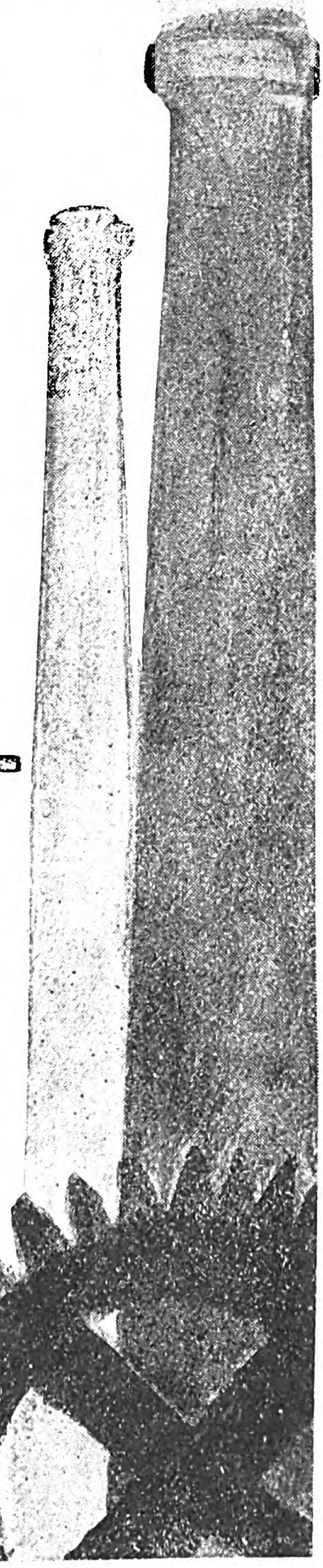
冬の酒場の腰板に
俺の女房はよい女

俺は解んねえだ。
おゝ神樣
だが俺は知らねえだ。

「あの、お星さアみんな銀貨だらえがべに」
うつけな戯言と笑ふでねえ
眞實俺アさう思ふだ。
あの山の木、一本でせに
他人樣の物、寶物。
錢こがなけりや、指さゝれもしねえだ。
おゝ神樣。
だがなじよにもならねえだ。

仕事は戸口で待つてるし
苦勞は鼻先から離れッこねえ。
俺が逃げたら追ッかけて來るべと、
俺がは豆滓のやうだで
搾つても涙も出ねえが、





酔ひどれの海
酒場はユラリユラリ
秋刀魚も鰯も鮭も八ツ目鰻も
悲しき城の兵士なり。

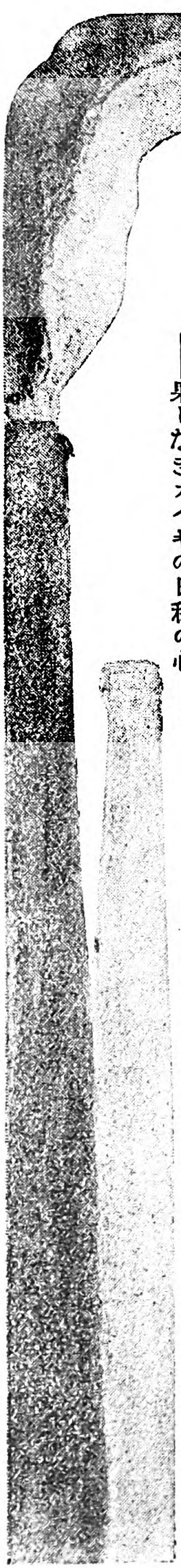
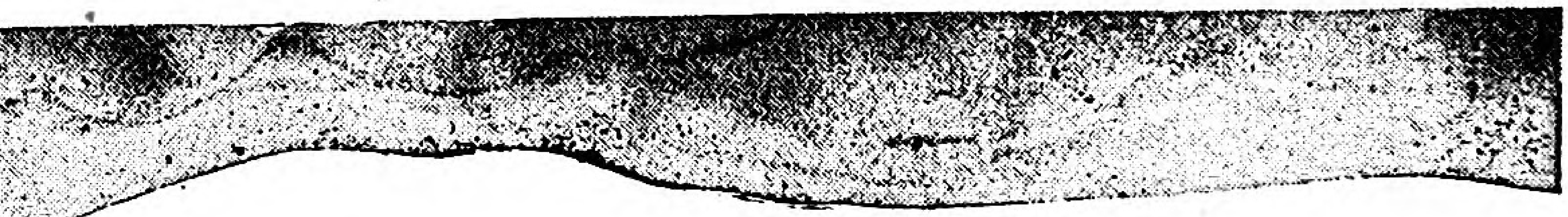
出てはあぶないぞ!
文明の殺人機
あゝ俺の女房に子供よ
お父つあんお母さん
古郷の山河
なつかしい住家よ!

亮々、果なき思ひ出は
ひがん花
い、ハイ又來ませう——
眞紅な花よ

豚子のやうに、藥ン中でくら
してるが
おゝ神様、佛様
俺がも生きてる、生きてるだ。

憤怒は甦る

私は見た。
一九二九・十一・五日の新聞。
意外な特權に有頂天になつた
ヂャーナリスト等の狂つたペンのあと。
デマにみちみちた
世にもユーモラスな探偵小說。
"赤賊××黨葬らる"
"外國摸倣性と教育改善の要"
"教師と學生を融合させたい"

燃へる花よ

何とかならねえか此野郎
春は春
夏は夏
秋は秋ゆえ
青天井も何のその
冬はリンリン寒い故
何でも太い奴を燃してやらう

オーイ皆出て來いかたつむり
お天陽樣だよ
酒場のお母アー
ギラギラお天陽樣だよ
お天陽樣だよ
お天陽樣だと云ふのによッ!

酒瓶は十二盡きたり、1929.10.29.
——果しなきカイギの日私の心——

憂國の士等がうそぶく
およそ眞險な感想?

だが、それは
消えかゝつた火に注ぐ油だとは、
キリスト樣でも氣がつくまい。

見たか? あなた達も
商品市場へ持出された名前と寫眞
おゝ、この中に
あなた達の、親が兄弟が居ないとは
誰が斷言出來やう。

奪はれた眼を還せ。肩をかへせ。
手を足を、心臓を還せ
健やかな自由をかへせ。



社會時評

永島暢子

東京市電のストライキ

濱口民政黨内閣が、行き詰れる金融資本主義の打開の一策として行ふ金解禁に備へる爲の一つの表はれであつた、官吏俸給一割減は見事に失敗した。それの撤回は、年俸千二百圓以上の諸君にとつてはまづ安心な事であつたが、高級官吏には手を焼いたとて、おとなしく引つこんでゐる支配階級ではない。最近頃に數を増した勞働爭議は何を物語るか、大量的解雇、失業者の増大化、工場閉鎖、賃銀値下等におびやかされる勞働者の生活は、この緊縮政策の反映でなくてなんであるか。充分に熟したる腫物の膿は、最も破れ易い所から流れ出る。十二月六日、突如と行つた東京市電のストライキも、その膿の流れを防がうとする疼痛に他ならない。

公共事業の名にかくれて、常に營利會社の如き政策を爲し來れる東京市電氣局は、收入豫算の見込み違ひや、電車經營の不備等から財政難に陷り、その切り拔け策を、電車賃の値上げで胡麻化さうとした。けれど、一般の狀勢は値上げ反對に向ふと知るや、その負擔を從業員の肩に轉化し、所謂早い電車による勞働の强化を行ひ、更には賞與二割減、昇給無期延期の攻勢に出たのであつた。けれど東京交通勞働組合を組織してゐる電車並に自動者從業員は、斷乎として之をはねつけたのである。即ち從業員は、市當局の態度が自分達に不利と知るや、即刻に罷業に入り、自動車從業員の全部と、十五車庫のうち五電車々庫の乘務員は全部休業し、その他各線も怠業に入つた。

交通機關は市民の足であり動力である。それ故交通從業員のストライキは、他產業に於けるが如く、資本家對勞働者の關係のみでなく、そこに市民といふ第三者が介在するが爲に、一層の複雜と困難とが橫はり、常に不利なる立場におかれてゐる。今回の爭議にしても、市電當局のとつた無暴な態度、即ち賞與は旣に十月中旬確定せる事なるにも拘らず年末に押し迫つて突然に減額しやうとした事や昇給延期は事實上の賃銀値下げなのを、高壓的にそれを決行しやう

とした事はおき、多くの罵言は從業員に向つて振りかけられた。

從業員側に振りかけられた批難の要點は、一、市電當局の回答を待たず、罷業を決行した事は、初めより喧嘩をふきかけんとした樣なものである。二、公共的公通機關の停止は、直ちに市民の生活を脅かすものである故に、罷業に先だち、市民の諒解を求むる事を要する。三、突然の爭議は、市民に挑戰したると同樣である等の事にあるのだが、つまりは、市民自身が直接的にその渦中にまき込まれるからの批難にすぎない。

事實、この罷業は不當なものであつたかどうか？

一體日本の支配權力は、勞働者の唯一の武器たるストライキに對して、少なくも自由主義の立場をとり、用意の時期を與へるだらうか。それは木によつて實を求むるよりも難い事だ。例を他に求むるまでもなく、此前の大爭議、大正九年四月の市電のストライキを回想して見よ。この時五日間に亘る大爭議は決して突然に起つたものではなかつた。前年十一月、八時間勤務制、日給賃銀制その他の要求を提出しやうとした事が、早くも市電當局に嗅ぎ出され、幹部十九名の解雇と岡警視總監の高壓的調停、並に從業員自身のあまりにお人好しな、官憲當局を信じ過た事にある事を記憶せねばならぬ。岡警視總監は「年末に際し、市民の不安を慮り」要求條項の一部妥協と、主要條項は、翌年市會にかけて決する事を約して、爭議を未然に打ちきらせたのであつた。しかし市當局は、この從業員の謙讓な態度に對して何を以て報いたであらうか。市會は從業員の勞働條件に對して審議しないのみか、やがて組合を認めざるの態度に出て來たのであつた。かゝる事から從業員の奮起となり、罷業決行となつたのであるが、事重大と見るや、當局は早急に警視廳と合議して刑事を八方に派して、組合の對策を探知せしめ、從業員中に在鄕軍人がゐるからとの名目の下に、憲兵隊を出動せしめる等の手段をとつたではなかつたか。しかも最も強硬の態度をとつて、支配權力に一歩もゆづらなかつた巣鴨車庫の從業員五百數十名を解雇して爭議の切りくづしに努め、幹部の解雇收監、その他の檢束者おびたゞしくこの決末を告げた時には、馘首者三百餘名、起訴者三十六名の多きに達した。

かくも多大な犧牲者を出し、しかも充分に要求を貫徹なし得なかつた從業員の敗北は何にあつたか。一にも二にも、從業員が對策を行ふに機敏でなかつた事、組合の結束が強固でなかつた事、市民と對立的立場をとつた事を敎へる事が出來るであらう。

かゝる苦き經驗と、ます〱高壓的に出て來つゝある官憲當局の方針を知る從業員にとつて、こののるかそるかの爭議をベン〱と事前に公表し、ゆる〱と對策をたてゝゐられるだらうか。さうでなくてさへ市電當局は今回も亦、早くも戰鬪的幹部十名の解雇を行ひ、何百名でも馘首すると揚言し、官憲と力を合せては、從業員の檢束、爭議團の解散などを以て、組合の戰鬪力をにぶらせ、日和見幹部と共同しては、爭議の切りくづしに奔走したではないか。若し東京交通勞働組合が、一齊にブルヂョア新聞の罵るが如き態度をさけ爭議に對する市民への徹底をはかり、協調的交渉をしてゐたならば一般の同情はあつたかも知れないが、また再び、前年の爭議の慘敗を繰り返してゐたであらう事は、火を見るよりも瞭かな事であらう然るを妥協的折衷的のものにしろ、丸山警視總監をして、賞與一割減、昇給一期停止、爭議中日給一日、給與、解雇者即時復職の調停案を提出せしめたのも、言はゞ、今回の戰術と組合の狀勢が、かく

然らしめたものだといふ事が出來やう。

けれど、要求より一歩下つての解決は、組合の敗北である事はいふまでもない。舊現實同盟の幹部諸氏が、市民に對してどうの、市の財政がどうのと盛んにカケ引きしてゐた時に、勇敢なる婦人車掌諸君はなんと言つてゐたか？「賞與とはなんだ！　當然私達が日給に加算してもらうべき金だ、それを今になつて二割引きとか、進給停止とか？　これがドロボーでなく詐僞でなくなんだ！　賞與規定も進給規定も私達の先輩の血みどろな戰ひによつて、やつと獲得したのだ。それを今更むざ〳〵とられてたまるか。私達は死んだつて最後の一人になつたつてこんなものは絕對反對だ！　裏切者は徹底的にやつつけろ」

この火の出る樣な意志と決意とあつてこそ、罷業の威力は充分に發揮出來るのである。しかも婦人車掌諸君の言ふ如く、現在從業員の得てゐる勞働條件は、易々と當局が規定したものではなく、幾多の犧牲と、血の鬪爭によつて戰ひとつた所のものである。かゝる歷史を踏みにじつて、支配權力に屈服する事は、勞働者の最も恥づべき屈辱であると共に、最も忌むべき裏切的行爲である。

或はいふ人があらう今回の解決は、組合員にとつては決して不利のものではないと。それはさうかも知れない。その爲に、寬電氣局長の辭職問題が起り、罷業破りに對して金一封の慰問となり、且それの獎勵の爲の「のし餅」配りあり、いかに當局が、この爭議に負けた事を口惜しがつてゐるかゞわかるが、妥協案に屈服せしめた事は、やはり組合內部の不統一と、幹部諸氏の腰の弱かつた事を辯護する口實にはならないのだ。

だが、今度の市電爭議を批判するに際して私共の更に考へねばならぬ事は、市民自身の階級的性質である。爭議勃發に及んで、市當局は、まづ市民に申譯ないを繰り返して、市民の反感を煽り立て、言論機關は、交通勞働組合に限つて分裂した方が市民の利益(時事)などゝほざいて、從業員の行動を難じ、裏切り幹部は徹と市民の反感を恐れた。かくの如く、すべてが、市電從業員諸君と市民とがさも別の階級に對立するが如き幻想を振りまいて、爭議ぶつつぶしにかゝつたが、果して市電從業員と市民とが、利害相反する階級であらうか。この市電爭議の眞最中に、同じく市の勤勞者である敎員は何を嘆いてゐたか。

「敎員にも賞與二割減、昇給延期の通牒が通達された。學校長は法制上之を突き返す權能もなく、更に一般敎員は、これを知る便宜すらない。市長は、從業員に對しては、この事をはかつたさうだが、敎員には命令だ。だが敎員と從業員とその苦痛は等しい。從業員は卒直に勇敢にそれを表示したが、敎員は忍從するらしい。何かと言へば、敎育者〳〵とおつかぶせるくせに、こんな時には、またすぐこの無抵抗を利用する。」(七日、東京朝日鐵箒欄)

電車を唯一の交通機關とし、ラッシュ・アワーを演出する人達とても、この嘆ける敎員の如くやはり被傭者であり、勞働者である。從つて搾取さるゝ階級であり、資本家に命の綱を握られてゐる人達である。失業。賃銀低下勞働强化等の不安におびやかされてゐる事は、ちつとも從業員諸君と變らないのであるし、その個人の力のいかにも微弱である事も、團結してのみ資本家と對抗し得る事も亦、市電從業員諸君とちつとも變らないのだ。この爭議に利害を同じうする市從業員組合、市電協同會の參加したのも當然であるし、この參加が、支配權力に對して、多少の脅威となつたのも肯かれる事で

ある。若しこの爭議に參加し得るだけの階級意識と組織とを持つならば、曾ての如く市吏員が、自ら五分の俸給値下を申し出る事も、教員が、當局の暴令なる態度に對して、徒に嗟嘆のみしてゐなくともよい筈である。

爭議は個々に行はれる限りに於ては、決して完全にその威力を發揮し得るものではない。その產業別に組織されたる勞働者が、一齊の歩調をとり、勞働者の共通の利益を高く揭げて、ジエネラル・ストライキを斷行するに及んで初めて百パーセントの効果が得られるのだ。そこには、市民と勞働者の利害の對立もなく、否むしろ、市民と勞働者の利害は完全に一致し、たゞそこに資本家階級並にその代辯者たる國家權力對、勞働者階級との對立及び熾烈なる闘爭が見られるのみである。

なんとまあ國情の相違！

日本は道德的な國なさうである。軍人は、國民の龜鑑であるし、教育家は民衆の師表であるさうな。政府も口を開けば精神の作興であり、綱紀の肅正である。寺小屋が小學校に變つた當初より、口喧ましく言はれたこれ等の言葉が、また今更らしく言はれても、民衆は耳タコで、さほどにも感ぜぬばかりか、その笑止さを笑ふであらう。何故ならさうした大々的宣傳の下から、所謂天下の師表であり龜鑑である軍人が教育者が、爲政者が、また成功者(?)としての實業家が何をして來たか？ 古くは言はず、今年になつて發表された大疑獄事件だけでも和歌山遊廓事件、賣勳疑獄、鐵道疑獄、朝鮮總督府をめぐる醜怪事件等、指を屈するに遑のない程だ。曾て司法大臣や鐵道大臣をした小川平吉は、鳥渡貧乏人には見當もつかない程の二百餘萬圓を收賄して獄につながれ、總督府を利權屋の取引場に開放し、自分もたんまりと懷にした山梨半造も起訴と決定し、小橋文相は、やはり收賄沙汰で身を引くの餘儀なきに至つた。

叩けば塵の出るのは決して古畳ばかりではない。しかし有り難い事には、彼等支配階級は、その古畳を叩く鞭を握つてゐる。叩くも叩かぬも勝手次第だ。といふのは、即ち犯罪者を出すも出さぬも政府當局の心一つといふ事になるので、その簡單な例は、床次や小橋若槻等が、收賄の事實が判然としたり、多額の收賄を申し込んだりしても何かと理屈をつけては、有耶無耶に葬つてゐるのでも解る。殊に利害を同じくする支配階級の內部では、直接の利害には目角をたてゝも、事が大きくなれば、そこは武士は相見互、火事はとかく飛火が恐ろしいので、いゝ加減の所で切り上げておかうといふもの

最近不景氣の深刻化から强盜が猛威をふるひ、その爲にかいやが上にも警察署の氣が荒く、單なる擧動不振のかどを以て引致しては白狀を迫つて、打つ蹴るなぐるの暴狀を敢てなし、いよ／＼人權蹂躙の聲も高い。しかし小盜は罰せられて大盜は横行するとか、階級社會の表象語そのまゝの現社會制度下に於ては、やがて小川平吉にしろ、山梨半造にしろいづれは證據不充分とか、微罪で免がつき、罪を着る者は、その下つ端の人たちであらう。上を敬ふのは、禮儀正しい日本の風俗なさうだが、それは法律にも反映して位なき民衆をのみいぢめつけるのも亦、良風美俗とでもいふのかもしれない。

所が十月十三日の時事新報にこんな記事がのつてゐる。

「露國漁業の疑獄事件（モスコー聯合通信）裏海漁業利權に關する露國政府は、官吏その他百二十九名に係る贈收賄瀆職事件を、二ヶ月以前よりアストラカン地方裁判所に於て審理中の所愈々判決の言

ひ渡しがあつた。事件は贈收賄不正事件の結果、露國々營事業に一千萬ループルに達する損害を及ぼしたといふのであるが、判決により、官吏及民間漁業家各七名死刑、被告十三名懲役十年以下を言ひ渡され、他は無罪放免になつた」

この制度は日本にあつたなら、今をときめく爲政者、高位高官の役人達、大實業家の御連中の首のピラミットが築かれるといふものだ。尤も明治初年頃、折柄ブルジョア新興階級が擡頭し、封建制度に對する革命の氣横溢する頃には、「初位以上の位を以てゐる官吏は二百五十兩、位なき者ならば三百兩以上を收賄すれば、絞」即ち死刑の法令があつたさうだが、もう六年頃には、終身徵役といふ事になつたさうだ。しかしかゝる意氣を以たブルヂョア階級も、資本主義の爛熟するにつれてかゝる法令はかへつて鐵則となり、治安警察法とかその他民衆を搾取の道具とする法令には、いよ〳〵重罰を加へても、自身の利權を增すに不當なものは、知らぬうちに變へてゐる。

成程これでは、新興階級としてのプロレタリアートが、階級意識を把持して闘爭に進む事は、彼等の支配的地位を危くさせるものだから、言論出版結社の自由を禁じ、團結櫂罷業權の自由を奪ひ、治安維持法などを制定して、革命的運動の强壓に狂奔するのも無理はない。勞働者農民が力を得て、プロレタリヤ獨裁の國を樹立し、個人の利益をむさぼる爲に、民衆の利益を放擲する事件に對して、かゝる嚴罰主義をとられては、命が三つあつても足りないといふものだ。

かくも新興プロレタリアートの國と、沒落に瀕せるブルヂョアの國と、なんとまあ甚しい相違であらう?!

勞働組合法案は何を意味するか

多年懸案になつてゐた「勞働組合法案」はいよ〳〵現内閣によつて提出さるゝ運びとなり、既に法制局の手にうつつたさうである。最初この法案が問題になつた時より、無產階級は元より、資本家の反對ごう〳〵たるものがあつた。昭和二年の若槻內閣案に於ては、それは寧ろ「組合取締法案」なりとの理由から、ブルヂョア自由主義者の間にも批難があり、八方ふさがりの關係から、一應引つこめられはしたが、無產運動のより熾烈化と、革命的勞働組合の、國際的色彩の濃厚となるに及んで、その勞働組合の性質を、單に勞働條件の維持改善に止めておき、勞働大衆の尖鋭化を强壓する必要から、一部の反對を押し切つても、この法案を實現せしむる事を決行したのである。

實に十二月十二日、發表された所の「勞働組合法案」の全文を見るに、自然發生的なる勞働者の集團は認めては居るが、徹頭徹尾取り締り以外の何物でもない。例へば、勞働組合を設立したらば、直ちに屆け出よとか、規約はかく〳〵しろとか。かういふ組合でなければいかぬとか、まるで政府が、組合でも作るやうに、事細かに干涉し、他は全部取締り規定である。第十五、第十六條の如く、勞働組合の規約法令に違反し、或は公益を害したる時は、行政官廳はこれを取り消し、又は變更する事を得たい條項から更に、第十七條の勞働組合の行爲安寧秩序を亂る時には、主務大臣は、勞働組合の解散を命ずる事を得るに至つては、遂にこの法案の本體を暴露した。しかも雇傭者側の多少不利な場合、即ち勞働組合員なるが故に、解雇する事が出來ないと、少しばかり勞働者の肩を持つと見せても、それ

に違反した時の懲罰規定を設けず、完全に骨拔きにしてゐるが、反對に、組合が、この法案の規定に違反したる時は、どんな懲罰を以て臨まれるか。前の如き解散の上に更に、設立された勞働組合の屆出を怠つた時、解散したる勞働組合の報告を怠り、或は虚僞の屆出をした時、第十六條の命令に從はない時、本法が施行されてから一ヶ月以内に屆け出をせぬ時は、五十圓以下の科料に處せられる事になつてゐる。勿論組合としての活動は表面全然不可能である。法人組織の組合とても、それに準ずる事はいふまでもない。

それなら何故かゝる勞働組合強壓の取り締り法案に、産業資本家の集りである工業クラブの連中は反對するのであらうか。卽ち彼等は、「現在我が國の勞働組合は、多くは階級鬪爭的勞働組合であり、之を法律的に認むる時は、將來ます／＼階級鬪爭を激成する恐れがある」といふのである。けれどこれに對して政府は「決して階級鬪爭を激成せしめない樣に作つた」と慰撫してゐるが、この答は誠に政府は正直である。この組合法案の何處をさがしたら「勞働者の利益」になる箇條があるだらうか。それなのに社會民衆黨の鈴木文治氏等は、日本勞働總同盟その他五團體より成る「勞働立法促進委員會」の決議を齎しわざ／＼内相を訪問して左の希望を述べた。一、組合の構成員を勞働者のみに限らず、俸給勞働者をも含める事、二、勞働組合權を蹂躙したる雇主に對し、一ヶ月以上の懲役乃至は禁錮若しくは十圓以上の罰金を科する規定を設ける事、三、勞働爭議の際、裏切者監視者に對し、警察犯處罰例第二條第三十一號の規定を適用してゐるが、平穩且合法的に行ひたる時は、處罰しない事、四勞働協約に關する規定を設けてないが、これは獨立法としてこの組合法案と同時に出す事、五、勞働組合の監督權を行政官廳又は主務大臣に附與してゐるが、總て違法行爲の裁定は、裁判手續に依らしむる事、等を希望し、この法案の施行を認容してゐる。

果して「勞働立法促進委員會」のいふが如き五項を挿入し又は改めたならば、勞働者のための法案と轉化するであらうか、その幻影は曉の夢に望みをかけるよりもはかない事だ。現在に於てさへ、彈壓に彈壓を重ねて、半非合法運動を餘儀なくされてゐる革命的勞働組合は、これが實施の場合には、一層法律のワナにかゝり、直ちに解散乃至はより暴壓に遭遇せねばならないであらう。何故といつて、それは現在の勞働者が、如何なる狀態におかれてゐるかといふ事を考へれば解る事だ。勞働者は暴虐究りなき金融寡頭政治の下におかれ、産業の合理化、産業豫備軍の增大化によつて常に失業の不安にさらされ、日常の生活は正に死線の上をさ迷ふてゐる狀態である。しかも互に抗爭する爲の言論結社の自由はなく、團結權、罷業權は幾重にも法網によつて縛ばられてゐる。これ等の諸法令に抗爭し、勞働者の利益を確保するには、必然的に個々の資本家に對抗する所の自然發生的なる經濟的鬪爭のみには、抗爭し得るものでなく、政治鬪爭にまで發展せざるを得ないのである。それを何ぞやこの組合法案は、勞働組合を經濟鬪爭の中にのみちゞこめ、且それも御用組合式の修養團程度に押し込めやうとしてゐるではないか。これを承認する事は、實に勞働者の利益を裏切り資本家と妥協する社會民主々義者であつて、決して勞働者の味方ではない。勞働者は、かゝる僞瞞的勞働組合法案に決定的に抗爭し、言論集會出版結社の自由、團結權、罷業權の獲得、治維法の撤廢、その他無産運動を彈壓する一切の諸法令撤廢に向つて、邁進すべきであると確信する。

（二九・二・二六）



文藝時評

八木秋子

可い、悪いといふ。何によつてその價値が決められるのか？
新らしい、古いといふ。その規準はどこにあるのだらうか？
法律であらうか？　道徳であらうか？
または單なる主觀であらうか？
いはゆる社會的價値標準であらうか？
一つの思想的イデオロギーによるものだらうか？

飢えるものが、生きたいために盜みをする。または法律に無智なるものが知らずしてこれに觸れるとする。あるひは社會的信念のために鬪ふものの行爲が、當然法を犯すことになる。これ等の事實に對して、國家の作つた法律は例外なく假赦なき刑を以て酬ゆる。凡ての人はそれ等について正しいと受け入れるであらうか。

社會制度に反抗するもの、家族制度を破壞する女、情熱に從つて自らの道を歩まんとする人達、これ等はいふまでもなく、日常のいかなる些末事にいたるまで、現存する道徳律からは反撥され、非難され、束縛を受けつゝある。

私達は現在の支配階級によつて作られた制度、概念、價値の一切を××し、反抗するものである。

文藝批評家について

批評家が藝術作品を評して、いいとか、悪いとか、新らしいとか、舊いとかいふ。私は新年號の三四の雜誌（改造、中央公論、新潮、その他）に載つた代表的な創作を一とほり見た。そして、プロレタリア批評家の批評をも讀んでみた。まづ、現在の文藝界を支配し指導してゐる批評について見やう。

昨年はプロレタリア文藝批評家は殊に華々しい論爭によつて活躍した。形式主義と內容主義、プロレタリア文藝の大衆化、プロレタリア・リアリズム、あるひは、藝術批評の規準について社會的價値と藝術的價値の二元論か一元論かの問題、等、々、々。それ等はまだ私達の記憶に新らしい論爭であるが、あたかも大問題かのやうな

かけごゑをもつて戰はれた幾つかの論爭も結局、華々しいかけ聲ばかりでいづれが眞とも見窮めもつかないうちに、龍頭蛇尾の形に終つて、藝術批評の論爭が、いかに大衆自身にとつて緣のとほい詰らないものであるかを感ぜしめるに役立つものでしかなかつた。がこの間に、プロレタリア批評家は漸次現文藝におけるヘゲモニーを獲得しつゝあつた。すべての藝術は悉くマルキシズムの理論の規準のもとに價値を決定さるべきである、といつたやうに。いふまでもなく藝術がその本質において反撥するところの支配、統制、劃一などが集團の力によつて行はれるところ、文藝の自由性は極度に束縛され、失はれつゝあつた。

批評家が個々の作品について部分的に可いとか、惡いとかいふことは勝手である。しかし、それがどれだけ一般の興味を呼び起させることであらうか。同じイズムに立ちながら、仲間ほめの八百長的批評、對立する黨派作家に對する攻撃の、見えすいた露骨な黨派的偏見、技巧上の末梢的論評、根本にふれたものといつては、一つもなかつた。そのことが、私達に可笑しさを感ぜしめずにはをかなかつた。いはゆる文藝至上主義を淸算したと自負する彼等が、現在いかに文藝中心主義であり、プロレタリア陶醉者であり、ジヤアナリストであるかと。

藝術批評ほどむづかしく、またその理論上の問題は有閑智識階級と文藝愛好家以外には大して必要のないものだと思つてゐる。要するに優れた作品は批評家や理論家をまつまでもなく、いつの時代にだつて作者の人間から生れるものであるから。批評家が結束して活動するのは、文化批評でもなく、藝術のための批評でもなく、文藝を指導して彼等の政治的目的の下に統制せんとする運動にしかすぎないことは、誰でも知つてゐる。

プロレタリア藝術批評家であるほどの人なら、その規準は、作家がいかなる意慾と熱意をもつて、現在の制度組織や、概念を否定し反逆し、鬪はんとするかの眞實性を見窮めることに重點をおいてゐる筈であらう。

新年號の作品について

その大部分を占めてゐるプロレタリア作品が、技巧上に、いかに進歩したかについては實際、感ぜしめられた點が尠くなかつた。そして、各作家が著しく明るい樂天家であると思つた。正直にいつてあれだけの量と內容の中に汲みとられたものは、公式と摸倣の中から擧げられてゐる賑かな叫喚であつて、作家自身の腹の底から吐き出された熱意、反抗、鬪ひ、未來への呼びかけではなかつたと思ふ。讀むものはその賑さによつて時代といふ漠然とした潮騷を感じながら、インテリゲンチヤ的プロレタリアの裝はれた感情や、作者自身の徒らなる昂奮を見のがさなかつたに ちがひない。それよりも、心に觸れてくる全身的な力を感じたであらうか。

勿論、比較して注目さるべき作、藤森成吉氏の「蜂起」や葉山嘉樹氏の「誰が殺したか？」等を擧げることが出來る。前のは忠實に文獻によつた力量あるものであり、後のは、僞らぬ人としての眞情がむしろ甘へすぎるほど溢れてゐた。一々の作について擧げることはしないが、大部分をなしてゐる鬪士生活のほとんど一律に同じ型、そして諷刺小說が脫線して却つて勞働者を輕蔑し、カリカチュアライズした大衆的作品、帝國主義資本主義の機構を大きなスケールに描き出して、しかも曝露的作品になつてゐないもの等、々、々。

そこには現實から遊離した觀念的プロレタリア生活相の氾濫、足早に素通りしてゆくプロレタリア感情の行進曲、怒號と跳躍のうらに潜む、現在性への妥協と肯定。

文藝への希望

素人の私はあまりに僭越な文字を用ひすぎたであらうか。しかし、極く謙遜な意味で、私は作者その人の僞らぬ言葉がききたかつたのだ。公式によらず、附燒刄でなく、素直な聲がきゝたかつたのだ。インテリゲンチヤ的要素があつてもそれで可い、人情も氣弱さも自然であり、支配的慾望もそのまゝ投げ出せば愛すべきではないか。たゞ、一切の清算されざる要素を無理に蔽ひ、自分を歪め、文藝にみづからの階級的鬪爭意欲を托して安住してゐるらしい樂天性、ナンセンスに合流してゆくメカニズムとモダン性を、何とかして合理づけやうとする態度が嫌なのだ。

かつて藝術の職業化を排撃したプロレタリア作家等は、今やジヤアナリズムの主流にのり出さうとして、すでにその危險性を內に藏してゐる。小細工をすてた、もつとおほらかな、自由な、銳く人にせまる作品は出ないものか、私はそれを一九三〇年に期待してゐるものである。



在巴里　長谷川　春子

秋のサロンは、今年はとりわけ詰らぬものでした。あのまゝではむしろ權威が失せお上りの見物所になつてしまひはせぬかと思ふほどです。畫商の方がずつとしつかりした良いものを貯はへてゐます。

さて、勉强してたらとうとうガルリー、ザックといふ小さいけれど格の好い店で個展を開いてゐます。六日から廿日まで。佛蘭西人藝術家に日本の繪の具の新らしい試みと共に興味ふかく迎へられ、急にこの二三日でウキルドラック、アンドレサルモン、彫刻家のデスピオーウ、批評家のヴルナウ、アルセス・アルラサンドル、エミル・ゴンドロワイエ、變つた女のマリア・ラニなどゝ口を利くやうになりました。そのかわり繪かきは糧のための畫へより、餓へても仕事の發表だと思つて額ぶちにお金を費してしまひました。ところが評判とは正比例に畫は二つしか賣れません。さすがにこのところ不安で暗い氣持です。お金のはいらぬのはまあ仕方がないとして、その畫廊で個展の出來ますことは實に好運だと存じます。



組織政策と婦人組織の限度

(米) テレザ・ウォルフソン

山川菊榮
佐東まき子 共譯

各組合の組織政策と、婦人勞働者の間に於ける組織の範圍とに關する次の比較は、明確な政策を持つてゐる組合の場合には、それのない組合の場合よりも組織された婦人の數が多いといふことを示してゐる。

年齡十歲以上の女子九千六百五十一人を、半熟練工及び人夫として使用してゐる皮革品工業に於て、合同皮革勞働者組合は、一九二〇年度の組合員を二千九百人と稱してゐた。ところが一九二四年には、この組合の婦人組合員は五十人ばかりに減少してしまつた。ウイルミントン、デラウェア、フィラデルフィア、カムデン、ニュー・ジャーシー等に於ては、これらの婦人勞働者は殆んどキッド皮の光澤出しの職場に集中されてゐた。そして彼等のうち、かなりの部分は、戰時中締切工場契約の結果として組織されたのであるが、一九二一年の不況のために、組合はそれだけの組合員を維持することが不可能となつた。執行委員會に參加した唯一人の婦人は、この地方での唯一の婦人組織者であつた。組合の財政は、組合員減少の結果として甚だしい窮乏に陷り、それ以來新しい組織運動を企てることが出來なくなつてしまつた。一九二四年にカンサス市の本部から發せられた廻狀は、新しい組合員の募集を促して來た。それには、各支部の組合員が二つの委員會に分れ、それらの委員は、組合員でない者を、家庭又は工場に訪問して組合加入を勸說するやうにと云つてよこした。廻狀は『難物の訪問を根氣よく續けよ。申込を得るまでは放置するな』といふ訴へで結んであつた。しかしこの廻狀はつひに何等の組織運動をも築き上げることができなかつた。

皮革小間物勞働者組合及び旅客用具勞働組合でも、これと同樣な婦人組合員減少の事實があつた。この組合では、組合員の大半が外國生れの者であつた。が、これらいづれの組合に於ても、婦人勞働者を組織するに當り、何等の特殊な政策も發展させられず、また一度組織された後に、それを維持してゆく政策も立てられなかつた。

ピアノ、オルガン勞働者組合及び大工、指物師合同組合は、半熟練及び不熟練工の婦人勞働者三萬二千二百六十五人を雇傭する產業

に對して統制權をもつてゐた。大工、指物師合同組合は、木材及び家具工業の方面では婦人は不熟練工だといふので、その組合へ加入することを拒んでゐた。ピアノ、オルガン勞働者組合では一九二四年中、組合に加入して來る婦人勞働者の數が次第に增加してゐることを認めてゐた。是等の組合の規約は、その職業に從つた徒弟期間三年以上、年齡十八歲以上といふ制限とを要求してゐる。然るに十歲から十五歲までの少女が一千四百二十六人使用されてゐるのである。この勞働者組合は、その產業に從事する婦人勞働者が增加するのに對して、何らかの特殊の努力を試みることはしてゐない。また組合內部の婦人達に對しても、彼等を組合の活動に參加させるように激勵するやうな試みは少しも行はれてゐないのである。

一萬七千五百八十六人の使用女工中十五歲以上の者が一萬一千八十九人を占める粘土、硝子、石材產業に於ては、五つの組合が統制權を持つてゐる。硝子瓶製造工組合は一九二四年に二百五十人の婦人組合員のあることを發表した。『大戰中、我々は殆んど全部の婦人勞働者を獲得したが、彼等は我々の最善の努力にも係らず、何等の利益をも齎らさなかつた。そして次第に組合から落伍してしまつた』と或る組合の役員の手紙には記されてゐる。この產業は機械による工程の範圍が擴張し、婦人勞働者が激增するといふ事實に當面した。然るに組合はその組織政策や戰術を、婦人の流入に適合するように改めるといふことは全然しなかつた。婦人を組合の中に保持してゆくための『最善の努力』とは、各支部の會合に男子の組織員を送り、且つ婦人に對して『何とかやつて行け』と奬めることにすぎなかつた。アメリカフリント硝子勞働組合は、一九二四年に、女子熟練工の組合員三十名を有すると云つてゐた。全國陶器職人合同組合は、その職業に女工の增加しつゝあることを認めて、彼等を組織する上に確乎たる努力を行うた。即ち婦人に自分達の事務の管理し方を學ばせるために、一つの婦人支部が設けられた。時々婦人組織者が使用されて、婦人の間に特別な組織運動が起された。一九二〇年に、組合は組織された婦人陶器工一千五百名と報じ、一九二四年には婦人組合員約五百名と發表した。

煉瓦、粘土勞働者合同組合は、その悲觀的な書狀の中に、婦人組合員の減失を次のように說明してゐる。『數年前我々は磁器勞働者の二つの支部を組織した。その一つには三百名、今一つには一千二百名の婦人がはいつてゐた。我々は二名の婦人組織者を使用した。そして一年間の鬪爭と、二萬ドルの費用をかけた後、失敗してしまつた! それ以來、我々は婦人を組織しようとは試みない。だから我々の組合には一人の婦人組合員もゐない。』これらの婦人は熟練工として認められ、組織せられたのであつたが、多難なストライキの後に、組合から失はれたのである。それ以來彼等を再組織しようとする努力は一切行はれなかつた。

一九二〇年の國勢調査によれば、鐵及び鋼鐵產業では半熟練工と不熟練工と併せて七萬二千二百十八人の婦人勞働者を使用してゐる。これらの產業において統制權を持つてゐる三つの組合は、婦人を組織しようと試みた。鐵、鋼鐵、ブリキ職工國際合同組合は、大戰中、婦人勞働者がブリキ業に雇はれてゐるのを見て、彼等を謂ゆるブリキ支部に組織した。婦人の大部分は外國生れで、同じ仕事に從事する男子に比べれば廉い時間制賃銀を拂はれてゐた。彼等を引つゞき組織しておくことの困難は、組合の幹部等が、この產業は婦人に適しないもので、彼等は單に一時的な戰時勞働者として現はれ

たものに過ぎぬといふ感じを抱いてゐたゝめに、一層甚しくされた。

國際鑄造工組合は、組合が締切工場契約をしてゐる或る大きなストーブ會社の、エナメル部の不熟練作業に從つてゐる女工十五人が組合に屬してゐることを發表した。

同じくこれらの產業を監督する國際機械工組合は婦人を組織し、且つ組織した後これを組合に引きとめておくことについて、代表的な組合の經驗を得た。大戰中、機械工組合には約一萬五千人の婦人組合員があつた。政府との締切工場契約を基礎としてこの組合の協約は成立して居たので、婦人の間に積極的な組織運動を行ふ必要がなかつた。是等の婦人の大部分は、軍需品工場に傭はれ、特殊な工程に從事してゐた。大戰後、仕事の打切と共に婦人はこの產業から離れ、同時に組合からも脫落してしまつた。そしてその後もこの產業に殘つてゐた婦人を組合に引留めておかうといふ努力は少しも行はれなかつた。一九二四年には、ブルックリンの婦人支部に組織されてゐる婦人機械工が約百人近くあつた。約五年前に千五百人あつた婦人組合員は、これだけしか殘らなかつたのである。

不熟練女工に對する熟練工の氣分は、國際機械工組合の役員との會見の中に洩らされてゐる。『本當の婦人機械工といふものは殆んどない。機械工といふものは生れつきであつて、仕立て上げられるものではない。機械工たるものは機械に對する感情を持たなくてはならないのだが、婦人にはそれがない。然るに婦人勞働者は專門家の仕事—熟練した機械工すらしたことのない任務にさへ入り込まうとしてゐる。』現今では專門的な工程は機械生產の必須の部分を占めて居り、且つ婦人勞働者は專門的な勞働者の仕事を分擔してゐるといふ事實は、組合の組織政策に何らの影響をも與へなかつたように見受けられる。

パン及び菓子製造工組合、釀造工組合、肉裁斷、屠殺勞働者合同組合の三組合は、十五歲以上の婦人約五萬九千五百七十三名を使用する食料品產業に對して統制權を持つてゐる。一九二〇年にはこれらの婦人の中で五・六パーセントは組織されてゐた。が、一九二四年には組織された婦人の總數が一千人を超えなかつた。パン及び菓子製造工組合は、獨立の婦人支部に組織された婦人組合員約四百名と稱した。このパン燒業の經驗は、技術生產から專門化した生產への過渡期にある、他の產業の場合を代表してゐる。

燒きたての菓子やパンの魅惑的な香をたゞよはせる、街の角の名代の獨逸流の製パン所は、パンが『人手を觸れずに』生產される大きな製パン所に壓倒されようとしてゐる。製パン工組合は、最近にこの產業にはいり込んで來た少女工達を組織しようとして失敗した。組合はがつかりして、今日では婦人を組織する仕事は、餘りに高價すぎると考へてゐる。組合の歷史は菓子工場に働く少女組織の努力をもつて點綴されてゐる。こゝでもまた彼等は失敗したのである。製菓工場に働く娘達はまだ年が若くて、過重な勞働に服し、組合の通牒にも、組織の方法にも反應を與へはしない。

現今では製パン工組合は、親方職人が排除されてゆくことに順應するために精力を費してゐる。以前には親方職人はこの產業の樞軸を占めてゐた。が事務所にゐる者が製造の秘訣を握り、あとの仕事は不熟練工が操縱する機械ですますといふ製造工程の變更は、親方職人の地位を變化させて、組合の力を弱めた。

釀造、製粉、穀類及び非アルコール性飲料勞働者合同組合は、一

九二四年、男工と同じ支部に組織された婦人組合員の數を四百名といつてゐた。この産業における婦人の數は漸次に增加してゐるが、組合は未組織の婦人に對して何等の政策をも講じてゐない。

肉裁斷業者屠殺業者合同組合の顚末は前項に記した。一九二〇年には約五千二百人もゐた婦人組合員が今日ではほんの一握り程しかゐない。失はれた組合員を再び獲得しようとする、强度の組織を目がけた實行的な企てはその後一向行はれてゐない。

約七萬三百九十五人の婦人を雇傭する金屬産業に於ては、ダイヤモンド工組合、電氣工組合、寶石工組合、金屬板工、金屬磨工合同組合等が統制權を持つてゐる。一九二四年には、ダイアモンド工組合には熟練工たる婦人組合員が約六名ゐたと見られてゐた。組合はこの特定の職業に從事する婦人の數は減少しつゝあると報じ、これがために、何等の組織政策も發展させられなかつた。

合同金屬板工組合は、臺所道具製造に從事する不熟練女工の組合員百名を有するといつてゐた。これらの婦人は男工と同じ支部に組織され、男子より安い會費で國際組合に加入してゐる。この組合も亦この産業に從事する婦人の數が減少しつゝあることを報じて、組織政策を缺く辯明としてゐる。

金屬磨工組合は、一九二四年に、僅かに二十三人の婦人組合員を有することを公けにした。その婦人達は全部ニューイングランドの同一工場に屬し、同一支部に組織されてゐた。然しこの場合にもまた組合は、その産業における婦人の數の減少を報じた。勿論戰時中には多數の婦人が金屬磨きに雇はれてゐた。戰時勞働局は、同等の仕事に對しては同額の賃銀を婦人に支拂ふこと、但し彼等の體力に比して過重な仕事を與へてはならぬことを規定した。この終りの一句が組合協定の際に、婦人勞働者と男子勞働者との賃銀率の相違を生ぜしめる基礎となつた。全體として、この組合はその職業に從ふ少數の婦人勞働者のことはかまひつけなかつた。一九二〇年には、この職業に凡そ一千九百人の婦人が從事してゐたが、その數は次第に減少し來てゐると云はれてゐる。

A・F・Lの金屬部の書記は、戰時中、この産業に多數の婦人が入り込んで來たことを言明したが、金屬部はこれに對して何らの組織政策をも講じなかつた。それは國際勞働組合に一任せられた仕事であつた。

金屬磨工組合書記長は、婦人局に送つた手紙の中にかう述べてゐる。『肺結核を生じ易いこの職業の産業的危險こそは、組合が婦人を能ふ限りこの危險な産業に從事させまいとした一つの理由である。けれども製造家がどうしても婦人を雇傭しようといふ時には、我々はこの抗議を固執するのではない。たゞ彼等が同量の仕事をなしとげた場合には、男工と同率の賃銀を受取ることを要求するのみである。』

電氣工業には約二十萬九千五百十五人の婦人が雇はれてゐる。國際電氣工組合は一九二〇年に婦人組合員數一萬二千名と發表した。この數には電話部に組織されてゐる電話從業員も含まれてゐる。これらの婦人のうち約六百名は、電氣工場に於て熟練又は半熟練業に從つてゐる勞働者である。彼等は、職場及び工場勞働者の爲のB種の支部として知られてゐる特別支部に組織されてゐる。戰時中、婦人は、政府の契約協定の下に組合に加入して來た。その組織を續けるために國際組合及び地方組合によつて若干の金が用ひられたが、最近數年間に半熟練工の組織のために費される努力は無益だと考へ

られるようになつた。組合の書記は、或會見談の中にかう述べた。もし彼等が加入したいとなら、我々は喜んで彼等を迎へよう。しかし我々の方で自分の仕事を打捨てゝまで彼等を組織するつもりはない

電氣工組合電話部は、國際組合の內部に投票權と地位とを獲得するための地方從業員組合の鬪爭の後、一九一八年に組織された。一九一三年から一九一八年にかけて約百ほどの電話從業員の支部が電氣工組合によつて公認された。電話從業員のための獨立した部門を設けようとの改正案が採決された時、電話從業員の支部はこれを以て、國際組合が、一方ではなほ彼等に對して、組合の規約に服從することを要求しつゝ、他方では組合から除け者にして、大會及び一般投票に參加する權利を剝奪しようとする企てであると看取した。

電話從業員は特殊な條件の下にある。第一に彼等は若い。(一九二〇年の國勢調査によれば、十五歲以下の者が二千九百十名ある。)又彼等は一時的である。(實際彼等のうち二年以上その仕事に止る者は五〇パーセントにすぎない。)彼等の賃銀は低廉であり、その作業は神經を惱ませ、疲勞せしめる。しかし一方、仕事は清潔で、上品で高尙なものといふ評判をとつてゐる。アメリカ電話電信會社の政策は、自宅に居る、アメリカ人で、相當な家の娘達を選ぶことである。この產業は公益事業であり、娘達の組織は、頑强に、不斷に、會社の妨害をうけて居る。

一九二一年電話部の大會で、最も重要な懸案として、組織についての計畫が略述された。そして地域的組織案が採用された。合衆國ベル電話會社の八つの地域的區分と、カナダの二つの地區の地方評議會が任命された。組織者が各管區每に選定され、各縣の代表者から成る地方評議會がその地方の總務機關となるのであつた。組織の仕事は、未組織の新しい地方に、組織細胞を持つた地方と同じように、行はれることゝなつた。

ニューイングランドの電話從業員は、一九一九年には非常によく組織されて居たが、一九二一年の困難な罷業の結果、組合員が全部黑表に載せられたのみならず、電話會社側の、一層決定的な反組合政策を齎らした。組合は今日、支部のニューイングランド地方に組織員を一人だけ置いてゐる。組合員の大多數は中西部及び西部に集中されてゐる。

電話從業員組織の顚末は實に勇敢なものである。僅少の金を以て、國際電氣工組合からも、地方組合からすらも殆んど協力を得ることなしに、最も賢明な組織計劃を展開し、それを立派に仕遂げてゐた矢先、大罷業と不況とが仕事を頓挫せしめたのである。紙及びパルプ產業に於いては、一九二〇年に約三萬九千五百六十九名の婦人が傭はれてゐた。國際パルプ、紙、亞硫酸工場勞働組合は一九二四年に、半熟練作業に從事する婦人組合員約五百名を算へた。この組合の規約は、『種々の支部に於ける婦人組合員の狀態改善』の必要について特に言及してゐる。國際製紙勞働組合も又約五百の婦人組合員を算へた。これら兩組合は共に不況時代に組合員と勢力とを失つた。これらの組合は不況以前には、積極的な組織政策を持つたにもかゝはらず、今日では婦人の間の特殊な組織の仕事について殆んど何もされてゐない。北部アメリカ合同壁紙工組合は特殊の規約上の條項がないので、婦人組合員の加入を許さない。

運輸の方面では國勢調査で、婦人水夫、市街鐵道從業員、聯畜馭者(註)自動車運轉手等のあることが報せられてはゐるが、その數が

少いために組合は組織するために努力してゐない。

商業電信從業員組合と鐵道電信業組合は、一萬六千八百六十人の婦人電信從業員を雇傭する分野に統制權をもつてゐる。商業電信從業員組合は一九二四年に三百九十人の婦人組合員を、鐵道電信業組合は二千人を算へた。タイプライターと同じ原理で運用される自動電信機の使用と同時に、婦人電信工の數は商業電信の方面で二倍に增加したが、組合としては何等の組織政策も講じなかつた。この職業に於てはタイピスト、速記者などの場合と同じ組織上の困難—年の若さ、働き場所の孤立的なこと等—があると看做されてゐる。

市街及び電氣鐵道從業員合同聯盟は、全ての市街及び電氣鐵道從業員の上に統制權をもつてゐる。その中には三千二名の婦人が居り、うち二千二百六十一名は出札及び停車場係りであるが組合で組織したのは一千名である。この比較的高度の組織率は、この組合が市街鐵道會社と協定を結んでゐるので、全從業員が自動的に組合に加入するといふ事實によるものである。例へばシカゴでは、市街鐵道組合の支部は、そこに傭はれてゐるすべての出札係は組合に加入せねばならぬといふ協定を會社側と結んでゐる。支部の書記の談によれば、出札係の仕事は、その婦人達が數年間も移動しないので、外來者には殆んど入り込む余地がないといふことである。そしても し缺員があれば、組合員もしくは會社事務員の親戚か友達かゞ仕事を得てしまふ。出札人の男女賃銀の相違は組合協定により約四ドルである。この開きは女出札人は夜間交代に出ないといふ所から生じてゐる。

大戰中婦人が男子に代つて運轉手として傭はれた時、組合は激しくこれに反對し、彼等の組合加入を拒み、デトロイドではこれがためにストライキまで行はれた程であつた。今日この產業における婦人勞働者の仕事は出札係、車體洗滌及び掃除婦に限られてゐる。ある特定の技術からの婦人を追ひのけようとするこの積極的な排除的方針よりほかに、組合は婦人の間の組合組織に對して何らの特別な政策をも持つてゐない。但しシカゴでは既婚婦人を出札係に雇傭することに反對して、會社側の立場を支持してまでゐるが。

商業の方面では事務員の間にも、販賣店の賣子の間にも實際に何等の組織もない。賣子、販賣店事務員、賣子監督、宣傳係りとして使用されてゐる五十五萬六千六百七十一人の婦人中、一萬二千六百六十二人は十五歲以下の娘であるが、そのうち二萬人は小賣店事務員組合に組織されゐるといはれてゐる。組合自身も中央集權的によく組織されては居らず、組織政策は主として支部の個人中心になつてゐる。

建築業に雇はれてゐる婦人は少數なので、多方面の組合は自然、何等の組織政策をも發達させずにゐる。

以上に述べたどの組合に於ても、組織されてゐる婦人の率が、その產業に雇傭されてゐる婦人の數に比して、極めて少いといふことを今一度强調しておかなくてはならない。又これらの組合の大部分に於て、不熟練婦人勞働者にまで及ぶような組織政策が事實上とられてゐなかつたことも特記せらるべきである。

次に我々は他の方面卽ち、婦人の組織率がかなり高い產業の方を見よう。

組織された婦人の最も大きな集團は、裁縫業に見出される。

被服業では男工の七六・六パーセント、女工の四六パーセントが組織されて居ると見積られてゐる。男女兩方の組織された實數は略

と同じで、男工十七萬七千一百人、女工十六萬九千四百人である。しかし被服業は女工の優勢な産業で、男工二十三萬一千三百四十九名に對し、女工は三十六萬八千五百八名使用されてゐる。しかもこの産業においてさへも組織された女工の割合は、男工のそれよりも少いように見受けられるのである。

ニューヨーク、シカゴ、クリーブランド、バルチモーア等重要な被服市場を考慮に入れるならば、男工に對する女工の組織率は今少し有利に比較されるかも知れぬ。といふのは、その比較の數字には、地方的消費のための小都市の被服工場に雇はれてゐる婦人をも含むからである。

國際婦人服勞働組合は、一九二四年に、男子組合員四萬六千四百三十五名、婦人組合員三萬四千百二十五名を算した。調査せられた七萬三千の組合員中、五二・五パーセントが男工で、三八・七パーセントが女工であつた。この産業は多くニューヨーク市に集中されてゐる。組合員の大多數は外國人で、六三・八パーセントは外國生れのユダヤ人、一九・三パーセントは同じく外國生れのイタリー人で二・九パーセントが内地生れである。組合員の三分二は二十一歳から四十一歳である。

これらの婦人の間における組織の問題は、他の産業の場合と困難を等しくしてゐる。組合は實際的な、不屈不撓な組織政策と理想主義との特殊な結合によつて、これほど多くの割合で婦人を組織することに成功したのであつた。この産業は特に大多數が婦人であつたために、組合の役員は婦人を永久的、繼續的に組織してゆくことの重要さを認めたのである。婦人組織者、外國語の出來る組織員、社會的活動、組織運動、大衆的集會等の方法が組織を目的として發展せしめられた。組合運動についての宣傳が、失敗や困難にも怯まずに、年が年中絶えず、すべての勞働者の中に行はれた。この組合で用ゐられた方法や戰術に關しての更に詳しい叙述は、次の章に讓ることとする。この點については、この組合の成功は、明確な、不撓の組織政策によつたものであることに注目するのが重要である。合同被服工組合は一九二〇年に女子六萬六千一百名、男子一萬一千一百名の組合員を算へた。一九二四年には全組合員がかれこれ十二萬五千名に近く、その中四二パーセントが婦人であつた。その組合では明確な組織政策がとられてゐた—即ち婦人組織員や、まづ第一に婦人の間の組織の仕事を進めるために設けられた婦人局等。

布帽、縁無帽、婦人帽勞働者組合、北部アメリカ製帽工組合は約八萬二千四百二人の女工を使用する産業に統制權を有してゐる。製帽工組合は一九二〇年に約二千名。一九二四年には約一千四百七十六名の婦人を算へた。布帽、縁無帽製造人組合は婦人組合員約二千名と發展した。製帽工組合は婦人組合員を獨立の支部に組織する政策をとつた。製帽工組合の規約は婦人の使用せらるべき職業を特記してゐる。『婦人には婦人の頭飾りを一切作らせること。全部麥藁製の一切の婦人帽の藁の加工、縫方、針金卷、縁取り、裏附け、針金枠の調製、フランス流の縁飾り、その他手縫全部。』

（一九二〇年規約）

國際手袋製造工組合は約一萬六千七百七十三名の婦人を使用する産業に統制權を有してゐる。約五百人の組合員を擁する組合の、三分二は婦人である。この團體は今日では特別の組織政策を持つてゐないが、數年前にはこの方面に婦人組織者を持ち、執拗な組織運動を續けた。産業の不振と、最近數年間のいくつかの重大な罷業とは

組合の力を弱めた。現在、この組合は婦人組合員者幹部となつてゐる。

合同被服工組合は、一九二〇年に三萬一千名、一九二四年に約二萬九千五百六十名の婦人組合員を有し、その勞働者全體の間に鞏固な組織運動を續けてゐる。その組合員の六〇パーセントは婦人であり、且つこの產業にはいつて來る婦人の數は增加してゐると見られるので、組合は婦人に對する特別の組織政策を採用した。

下職裁縫師組合は一九二四年、親方裁縫師の助手として使用されてゐる婦人二千三十五名と組合員とすることを主張した。この職業には全部で約三萬一千八百二十八名の婦人が從事してゐる。組合の統制下にある洗濯工、染色工に關する數字は判明しない。組合の一役員と會つた時の話によれば、この組合は親方裁縫師一萬二千名に對し、二千名の割合以上には婦人の加入を許さないので、何等積極的な組織上の政策をも持たないことが知れた。これらの婦人は常に助手又は徒弟としてのみ加入を許され、決して親方裁縫師としては許されてゐない。そして婦人組織者は折々地方組合には使用されるが、全國的組織の中では、未だ嘗て用ゐられたことがない。婦人の助手が親方裁縫師となることの可能如何につき、質問をうけた組合の役員は、この仕事は婦人にはむつかし過ぎること、又組合の規約によつて禁止されてゐる上からも、婦人は親方裁縫師としては加入出來ないといふことを言明した。

國際毛皮工組合は一九二四年に三千名の婦人組合員を有することを發表した。婦人は熟練、不熟練孰れの仕事にも從事し、獨立した支部にも、男子と一緒の支部にも組織されてゐる。女工のために特別の組織政策があつたわけではないが、男子と同じ基礎の上に婦人組合員を維持してゆかうとする、確乎たる努力が行はれたのであつた。

次に婦人の最も多く組織されてゐる製造工業は印刷及び出版業で、こゝには約七萬八百五十五名の婦人が雇はれてゐる。國際製本工組合は一九二四年に婦人組合員五千五百名と發表した。（一九二〇年には三千四百名であつた）多數の婦人組織者が使用され、獨立の婦人支部に組織され、大部分の仕事は婦人自身の手で行はれた。これがこの組合の婦人組織に關する鞏固な政策であつた。各支部に於ける婦人の役員及び書記は特殊の組織運動を持つてゐる。

國際印刷工組合は女工總數二千名――熟練、不熟練作業の双方と通じて――の中、組合員二〇パーセントと發表した。一九二〇年の國勢調査によればこの產業に一萬一千三百六名の婦人が使用されてゐることが知れる。『勞働騎士』（ナイツ・オブ・レーボア）（一八六九年米國に組織せられた勞働者權利擁護會）の時代には、印刷工は、婦人がこの產業にはいつてくることに反對して戰つた。婦人は『鼠』（ラッツ）と呼ばれ、鼠（ラッツ）に荒される當の印刷工場にとつては『罷業破り』と同じほどに惡いものにされてゐた。（『鼠』とは同一工場で組合規定の賃銀率以下で働く勞働者の異名）。然し今日では印刷工組合は婦人の組織に關し明確な政策を持つてゐる。尤も長い徒弟期間を要するために不熟練工がゐなくなつてゐるのでもあるが。寫眞版工組合には丁度二人の婦人組合員がある。印刷工組合には約千名の婦人組合員がある。

約四十七萬五千四百六十六名の女工を擁する紡織產業に於ては、一九二〇年に約一一・五パーセント卽ち約五萬四千名が組織されてゐた。一九二四年になつて聯合紡織工組合は婦人組合員約二萬と發表した。一九二〇年に約一萬五千の婦人を有してゐた合同紡織工組合は、その後完全に解體してしまつた。地方に分散してゐる獨立し

た地方組合に組織されてゐる婦人の數を知ることは困難である。聯合紡織工組合は、數名の婦人組織者を使用してゐるが、その政策は積極的とはいひ難い。

葉卷及び煙草工業に於ては九萬七千八百二十二名の婦人が使用されて居り、そのうち三千六百六十九名は十五歲以下である。葉卷工組合は一九二〇年に、婦人組合員六千七百名と發表した。一九二四年には二千名近くの婦人組合員を有し、內千三百名は男子と同じ支部の中に組織されてゐた。そして約七百名近くが獨立した婦人支部の中に組織されてゐた。葉卷の製造は、機械生産によつて決定的に分業化した工業過程の一例である。そして、過去十年間にこの工業は壓倒的な婦人使用工業となつて來た。元來高度に熟練した技術工組合として組織されたこの組合は、機械と婦人の使用とに對して戰つた。最初の組合の規約は、組合員を『白人男子』に限定してゐた。數年後に至り、『白人』といふ制限が除去されて、黑人勞働者も組合加入を認められたが、婦人の加入が認められたのは、それよりなほ幾年か後のことであつた。

この產業に增加して來る婦人を組織するためには、どんな眞實の組織政策も立てられなかつた。組合內には活動的な婦人組織者も少なかつた。組合員外の者として使用するには規約上の制限があり、組合の男子組織者は婦人の問題には無關心であるか、又は他の問題で手が一ぱいであつた。

煙草工組合は一九二四年に婦人組合員一萬一千四百名と發表した。一九二〇年には六千五百人あつたが、組合は何等特殊の組織政策をも講じないのみか、未だ曾て婦人組織者をも使用したことがない。

理髪師、髪結、美爪術師としては約三萬三千二百四十六名の婦人が使用されてゐる。理髪師組合は今年に至るまで婦人を組合員として加入せしめなかつた。しかし多くの大都市に於ては、美爪術師、結髪師、美容院內の勞働者等が小さい鬪爭的な獨立組合を作つてゐる。

箒及び刷子製造工業には二千七百八十名の婦人が使用されてゐるが、その中箒、彫製造工組合の組合員となつてゐるものが十五名あるこの產業は大部分監獄の職場へ移されたので、組合に組織するといふ點では、全然骨拔きになつてゐる。

七萬二千六百七十五名の婦人を使用してゐる洗濯業では、その中一五歲以下の者が二千百九十九名で、組合に加入してゐる者が一九二四年には五千名あつた。（一九二〇年には六千二百名。）これらは熟練業にも不熟練業にも使用されてゐる。組合は特別の政策をもつてはゐないが、役員達はこの產業における婦人の優勢には氣付いてゐるらしい。彼等はこの問題を理解し、限られた財源と組合の力とで、それに當らうと企ててゐる。

約三千三百十八名の婦人を使用する產業に基礎を持つ家具工組合は、二千名近くの熟練及び不熟練女工を組合員として發表した。彼等は婦人役員をもつ獨立の婦人支部に組織されてゐる。明確な、積極的な婦人組織政策が、比較的若いこの組合によつて發展せしめられてゐる。

百一萬六千四百九十八名の婦人が使用されてゐる自由業の方面では、一九二〇年に婦人の組織率總計一・五パーセントと發表された。俳優公正聯盟は一九二四年の組合員を四千名と發表した。（一九二〇年には三千九百名であつた。）アメリカ音樂家聯盟は一九二四年に

婦人會員約二千名と發表した。(一九二〇年には千名。) アメリカ教員聯盟は一九二四年の婦人會員約五千二百名と發表した。(一九二〇年には二千五百名。)

これらの組合では、アメリカ教員聯盟を除けば、何等の組織政策も發展させなかつた。それは、これらの自由業に屬する婦人に對して、何等かの特別な努力をすることは一寸不似合であり、且つ『不道德』にも見えるからである。俳優公正聯盟は締切契約によつてその會員を組織する。

約一百九十三萬五千五百十名の婦人を包含する家事及び個人的使用人の方では、一九二四年にホテル及び料理店使用人組合が婦人組合員約四千名と發表した。(一九二〇年には五千四百名。)洗濯工組合は一九二四年に婦人組合員五千名と稱した。洗濯工組合は多くの特殊な組織運動を記したがこれら孰れの組合に於ても婦人のための組織政策といふものは發展せられなかつた。洗濯業に於ける男工の組織率は一〇パーセントを出でない。しかしこの產業內に多數を占める婦人の組織率は一パーセントにも足りないのである。

事務的職業に於ては殆ど百五十萬人近くの婦人が使用されてゐるが、簿記及び速記者組合は僅かに數百の婦人を組合員としてゐるに過ぎない。全國郵便局員組合は三千名、鐵道汽船事務員組合は一萬人を、中央政府使用者全國聯盟は約九千の婦人を包含するといつてゐる。婦人の間に最もよく組織が行き渡つてゐるのは謂ゆる公共事業にあるといふ事が判明するであらう。これらの產業における組織は、大戰中政府の協定規約の助けをかりて公布されたものである。

一九二四年中、合衆國で組合に組織されてゐる婦人の總數は、約二十五萬と註せられた。

註、二頭以上の家畜に引かせる車の馭車の事

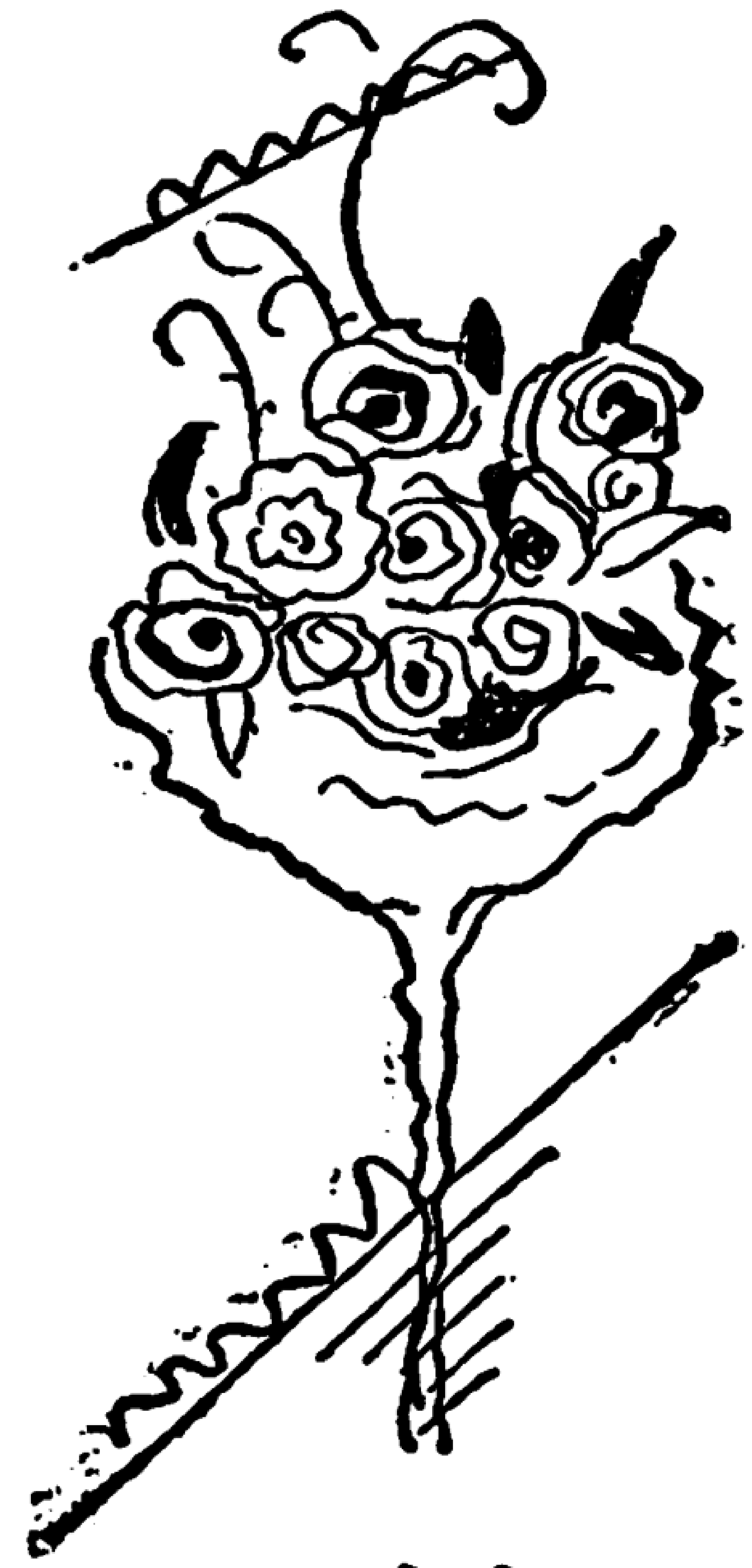
(訂正、前號一〇四頁十二行目『宗教的』一〇六頁十二行目『宗教的』は何れも『事務的』の誤)

北海道釧路にて

望月百合子

社長さんも皆さまもお元氣でゐらつしやいますか、あんまり御無沙汰いたしましたのであの二階の空氣を一寸吸ひたくなりました。だから歸りましたらすぐ飛んでゆこうと思つて居ります。素子さんのおすましやさんも、ゆう子さんの林檎の白い新鮮な肌を思はせる柔らかいお顏も、みり子さんの青春にはち切れさうなお顏も、八木さんの深刻なお顏もみたくなりました。でもここからでは千歲村からとんでゆく樣なわけにはまゐりません。上野から釧路まで二日、ほんとに幾山川や海を越えて來て、そこからは何里行つても一軒の家も、一人の人間の姿も見ない全くの原野を、トロ馬車にゆられて、一直線に十何マイルか走り、そこからまた西洋物のシネマでよくみる、干草を積むやうな百姓馬車に荷物と一所に乘つて、三里程白樺と楡の原始林の中に分け入つた、ほんとうにお隣りへ二里三里といふ果てに來てしまつたのですもの、每日熊笹を分けて森を步きまわつたり、牛の子や馬の子を見たりして日を暮してゐます。馬に乘つて落つこちたりもします。自分自身が熊の子にでもなつた樣な氣がして氣も自由で伸びくくした生活ですけれど、皆さんがなつかしく思はれて仕方がありません、

每日もやがかゝつて森は大變きれいです。きつつきがコツコツコツ木の幹をつゝいてゐる音がとてものどかです。月も星も空もここまでくるとまるで別の世界のものの樣にきれいです。今年は珍らしく暖かくてまだ積る程の雪も降らず、今日でも春の樣なのどけさです。歲末のあはたゞしさもここまでは押し寄せてまゐりません。斯かも十日もたたねば見られないのですから、殆んど讀む興味もなく至極のんきです。空をみながら皆樣のお忙しさをお偲びして、早く私も歸らなければと思ひます。



婦人運動と婦人問題

佐野京子

一、婦人運動の起源

婦人問題及び婦人運動の起源に就いて見るとき我々は、こゝで再びマルクスの言葉『人間の生活上の諸關係と共に、其の社會的諸關係と共に、其の社會的生活と共に、其の思想、觀念、及び見解、一言にすれば其自覺も亦變化する。』といふ事を理解せねばならぬ。

一七六〇年から一八三〇年に亘る期間は、大產業革命の期間と云はれてゐる。一七六〇年に、イギリスに於てはじまり、十八世紀の末葉に最高頂に達し、一八三〇年頃に終りを告げた大產業革命は、從來の封建的生產方法を——一人の親方のもとに二三人の職人や徒弟が働いた手工業的生產——資本家的生產方法によつて驅逐した。卽ち、百人乃至數百人の勞働者を一つの大工場に集めた分業による、生產が非常に發達したのである。

この資本家的生產方法は十八世紀の中葉頃より生產の技術的基礎に變動をはじめ、舊來の道具に代つて、機械が輸入され、織物業、紡績業の機械の發明から續いて一七八五年にはワットの完全なる蒸汽機關の發明等、イギリスに於ては、絕えまなき機械の新發明によつて益々生產は集中し、小手工業的生產は沒落しつゝあつた。小手工業の沒落は、不可避的に、プロレタリアートの大衆を絕えず增加した。斯くして、十八世紀の末葉より十九世紀の初頭において、新たなる勞働階級、卽ち人口の著しい部分を占め、現代のあらゆる社會問題を規定し、それに明確なる痕跡を殘したところの勞働階級が、現はれて來たのである。

他方、フランス革命は——すべての人間に自由と平等とを宣言したところの——一七八九年にはじまり、一七九三年にはその頂點に達した。

フランス革命は、當時フランスの新興ブルジョアジーが當面しつゝあつた問題、卽ち『フランスから封建制度のあらゆる殘存物を一掃すること、自由なる政治的狀態——その下では、×××××妨げられることなく繼續し、そして小所有者が他人を正當に搾取することにより相當な所得を得ることを妨げられないところの、自由なる政治的狀態——を創り出すこと。』(註一)を解決せんとしたプチ・ブルヂョア民主々義者の勝利に期したが、彼等は、封建諸侯及び××に對する鬪爭において、一般民の、大衆の力を得るために、××的宣傳に訴へねばならなかつた。『戰爭は××

へ、平和は茅屋へ』、『自由、平等、友愛』といふスローガンは一般民衆の頭上に投げ與へられたのであつた。

フランス革命のかゝる力强い影響と、イギリスにおける大産業革命による經濟的關係の基本的變化、その結果による勞働者階級の××運動の發生等は、必然に現存するすべての被抑壓被搾取民衆の上に新たなる鬪爭の力を與へたのである。

このことは、また多かれ、少なかれ全ヨーロッパ諸國に影響を與へたのである。

「最初の婦人問題及び婦人運動は、十九世紀のかゝる歷史的背景をなした二つの大きな、基本的事實の下に先づその端を發した、女權擴張の叫びであつた。

「歷史以前より女性に對する男性の支配以來、人間の全歷史を通じ、壓制屈從の地位に甘んじ僅かに家庭内の雜役に從事せしめられて來た婦人が、幾千年來の因習、支配者的偏見に向つて鬪爭の第一歩を踏み出した。卽ち、封建社會より資本主義社會への變革の過程に於て、婦人の上にも新たなる見解の、自覺の變化を見るに至つたのである。」

「フランスに於て、フランス革命の第一線に立つてその序幕を切り落したものは『我等にパンと自由を與へよ！』と叫んでヴェルサイユ王宮に押し寄せた、『メリクール』が指導した平民の婦人の一團であつたといふ更に、當時フランスに於て、『ローズ・ラコンム』『グーゼ』等の婦人は、婦人團體を組織し、婦人の政治的自由の要求の運動を起したのである。一七九三年フランス革命の頂點に於て國民議會が發表した人權宣言は、全く婦人を無視してゐた。『グーゼ』等其他同志婦人は、それに對抗して『婦人の權利宣言』を發して極力婦人の權利を主張した。またイギリスに於ても、婦人解放運動の先驅者と云はれた『メリー・ウオルストンクラフト』が、旣に一七九二年に、所謂女權運動の寶典と目された『女權擁護論』を世に現はした。

「その說くところは、『一人の婦人は第一に人間であつて然して其の次に女性なのである。萬人の注意が性の一點に注意されてゐるかぎり、婦人と男子——それに婦人は性的に結合されてゐる——とは、相共に墮落劣下するばかりである。』と。

婦人から一切の人爲的制限を取り去り、自由に、其の天賦の才智德能を發揮せしめんために、男女の敎育、職業の機會均等を要求するといふにある。

更に、一八六九年に至り、『ジョン・スチューワード・ミル』は、『婦人の服從』なる一書を著はして大いに女權運動の味方をなした。『ミル』の說くところは、『男女兩性間に介在する社會的關係を決定する原則、卽ち、法律上、婦人が男子に服從せねばならぬと謂ふことは、旣に誤つた原則であつて、人類の進化に非常な障碍を來たすものである。されば、此の問題は、兩性が完全なる平等を得る事によつて、代償されるのであつて男子に權力と特權とを賦與し、婦人からあらゆる能力を剝奪してはならないのである。』と。また『ミル』は一八五一年に『婦人參政權』なる一論文を、夫人『ジョン・テイラ』と共に公にして婦人にも參政權を與へ、直接政治に參與せしめることを主張した。『ミル』の見解は、彼の社會觀を一貫してゐる見解、——社會正義、人道といふ抽象的な原則を家庭の基礎の上におくことによつて、男女の自由、獨立、平等を實現し、男女同權の新社會を樹立すべしといふのである。

かくて英國に於ては、一八一九年に婦人參政權獲得運動の最初の幕を切り落して以來、女權運動は、その中心を參政權獲得におき、所謂婦人問題——フェミニズムの問題は、婦人の政治的自由の要求に對する問題を中心として、今日まで殆んど一世紀の間、その鬪爭を繼續するに至つた。

アメリカ合衆國に於ても、一八四〇年、ロンドンで開かれた奴隸廢止大會に參加した三

名の婦人が、婦人なるが故に參加を拒絶せられた、その理由とするところは婦人に參政權がないといふ一事であつた。このことに直接の端を發し、婦人參政權獲得の運動が積極的に起されるに至つたのである。

所謂婦人問題に對する文献としては、其の他、一八九八年『チヤーロット・ペルギンス・ギルマン』が著はした『婦人と經濟』、一九一一年『オリイブ・ジユライネル』による『婦人と勞働』等がある。その主張するところは、等しく婦人の男子に隷屬し壓迫せらるゝ原因は、婦人に經濟的獨立なく、性的寄生々活を爲せるためで、男女の權利の平等を要求するには、先づ婦人は經濟的に獨立をせねばならぬといふにある。しかうして、その經濟的獨立とは、男女職業の機會均等を主張するにある。

更に、我々は十九世紀の末葉より二十世紀の初頭に至つて、新たに、女權運動に對立して起つた所謂母權運動の發生を見る。『エレン・ケイ』の説がこれである。

母權運動――母權主義は、婦人の使命は母として子を產み、育てることにありと主張する。母權主義は、所謂女權主義が『男子と平等』との利權を要求するの余り、男女各々異りたる機能と職分とを無視し、女子の母としての義務を忌避せんとする事を嘆じ、女權主義を極力排撃したのである。

勿論母權主義も男女間の人間的特權の廢止を主張して、法律上の權利と人たる自由の完全なる平等を確定すべきことを説く。しかし、女子の機能は母性にあり、女子が出產と育兒を一層完全なる方法で果すことは人類の最高の目的のために必要である。女子が、男子と同樣に家庭外の職業に、社會的生產に從事することには反對してゐるのである。

『エレン・ケイ』の說くところは、妻の自由、夫との平等を主張する。したがつて、妻は夫から獨立であること、母たることの職業に不適當なる一切の勞働に使傭されてはならぬこと、……といふにある。そして、それ等の實現のために社會は、婦人の出產期に男子の經濟的援助に賴らなくとも、その生活費と嬰兒の教育費の一半を扶助する必要がある。かくすることによつて社會は婦人をして、母性の天職を安んじて果たさす義務がある……といふのである。

要するに初期に於ける婦人解放への要求は、女權の擴張運動として自然發生的なブルジョア運動であつた。婦人の要求としての闘爭は、その隷屬的、抑壓的生活に對する、對男子への原始的な反抗運動よりはじまり、進んで、婦人の政治的自由の要求を以つて全體とした、解放運動である。さきに述べたる如く、これらは、まさに、英國產業革命の最高頂に、またフランス革命の頂點に達せんとする影響の下に起り、英國が新たなる生產關係の下に、資本主義となりつゝあつた、その過渡時代にあつて、舊封建制度に對してブルジョアジーが當面しつゝあつた要求――私有生產が妨げらるゝことなく繼續し發展する自由なる政治狀態の創造――かゝる社會關係及び思想的影響の下に發展したのであつた。

女權運動の思想の根本が、ブルジョアデモクラシーの圏內より一步も出づることなく、從つて女權運動の主張は、既にその發生と共に婦人の終局的解放のためには多くの矛盾を內包しつゝ發展したといふのも、また必然であらう。

以上述べたる如く、所謂婦人問題及び婦人運動を大別して主流を女權運動と母權運動の二つに區別することができる。

女權運動は――經濟的獨立の要求、卽ち職業の男女機會均等といひ、參政權の要求といひ、また教育の機會均等といひ、これらはすべて等しく婦人が、社會的に、政治的に、經濟的に男子とブルジョア的な平等の權利を自由を獲得せんとしたものである。かゝる自由、平等の獲得を以つて、婦人の人間としての終局的な解放を所期したのである。

女權運動は、封建制度の殘存に對する、新興階級の闘爭――舊生產關係の下に於ける『總ての封建的、主從的牧歌的な諸關係の破壞』と共に『封建的領主の支配下に抑壓されて來た』階級が、封建的領主から自治制と參政權とを獲得した――の過程に於ける必然的な產物であつた。

女權運動は婦人の封建制度に對する闘爭である。こゝでは、ブルジョアデモクラシーの完全なる勝利を以つて自らの勝利とする。

故に、女權運動は、ブルジョアデモクラシーの獲得を目標とするものである。女權運動は一つのブルジョア運動である。

女權運動も一定の歴史的段階に於ては、――ブルジョアデモクラシーが、歴史的に見れば、ブルジョア××の過程に於て不可避的に一つの進步的任務を果したる如く、――また、婦人の解放運動史上に、一の進步的役割をなしたものである。

しかし、吾々は、女權運動を以て、婦人の全的解放のための絕對的なものと見ない。

女權運動は、婦人の解放の一つの前提條件を提起したに過ぎない。眞に、婦人の全的解放をなすものは、ブルジョアジーではあり得ないから。

エンゲルスは云ふ。

『彼(男子)は家族の中に於てはブルジョアであり、妻はプロレタリアを代表する。然し產業的世界に於ては、資本家階級のすべての法律的特權が除かれて、兩階級の完全な法律上の同權が確立された後に、はじめてプロレタリアを壓へるところの、經濟的壓迫の特制が、その完全なる尖鋭さにおいて現はれるのである。民主々義的共和國は、階級對立を揚棄するものではなくて、それは反對にこの對立が、最後まで戰はるべき地盤をはじめて提供するものである。そして、同じくまた、近代の家族に於ける男子の女子に對する支配の特性、並に兩者の社會的地位を眞實に平等にするところの必然性及び方法も、兩者が法律上完全に同權となつたときに、はじめて白日の光に照らされるであらう。女子解放の第一の前提條件は、女性全體が公共的產業へ復歸するにあること、そのためには、社會の經濟的單位として、單一家族の性質が除去されねばならぬことが明かになる。』(註二)

母權運動は、女權運動の反撥として發生したと見ることが出來る。恰も女權運動が、初期に於て、原始的な、自然發生的な、單なる男子への反撥としての形態を示せる如く。

母權運動は、その主張に於て、女權運動の一部の主張を有して、男女に於ける法律上・その他の平等を高調し、母親に對する社會の義務を主張する等、一見進步的な、合理的な點を有するかに見える。だが、婦人を母としての職能に限り、社會的生產への婦人の參加に反對する點、單に女權運動の外形を以つて規定し、女權運動の本質を見極め、これを發展せしむることなく、まさに、婦人の解放運動に對して反動的役割をなすものといへる。

卽ち、母權主義は、男女關係の封建社會より資本主義社會への××にともなつて、內包する幾多の矛盾を、發展の過程に於て把握し、解決することなく、美しき言葉を以て婦人を、封建的舊形態の中に引きもどさんとする、反動的にして、また空想的なものである。從つて母權運動は、實現の基礎を有たず、何等發展する可能性を有さなかつたといふことができる。

かくて、所謂婦人運動は、封建社會より、資本主義社會への××の過程に於て、婦人の解放運動の初期にあつて、一つの××的役割をなしたものであるが、今や資本主義社會の發達と、それに伴ふ生活關係とは、女子の解放運動をも亦、さらに新たなる社會關係の上に新たなる中心勢力によつて、より確乎たる基礎の上に置き代へるに至つたのである。卽ち資本主義生產關係の發展に從つて發生したる、勞働婦人及び一般無產婦人が、被搾取階

級の婦人として婦人解放運動の中心勢力をなすに至つたのである。

註一、リアザノフ「マルクス・エンゲルス傳」

註二、エンゲルス「家族私有財産及び國家の起原」

各國に於ける無産婦人運動

「サヴエート共和國聯邦」極端なるツアーの專制治下にあつた革命前のロシアに於ては、婦人は極度の封建的搾取の下におかれ、一切の市民的政治的自由を有しなかつた。劣惡な勞働條件の下におかれた勞働婦人は不徹底な農奴解放の結果、中世的遺制によつて苦痛を味ふ農民婦人と共に二重の抑壓に苦しんだのである。

ブルジョアデモクラシーの過程を踏まなかつたロシアに於ては、その所産たるブルヂョア婦人運動も必然に發展せず、婦人運動は、專制支配に抗する——あらゆる被搾取者に依る——革命運動の渦中に投げ込まれた。ロシア革命史を血に彩る婦人革命家の多くは、テロリストとして現はれてゐる。これこそ婦人に對する抑壓の激しきを語る一例である。

あらゆる革命的蜂起の先端を切るものは常に婦人である。かの三月革命は一九一七年三月八日の勞働婦人のデモンストレーションが導火線となつたことは、衆知の事實である。四月一日には『勞働婦人は、憲法議會に對する選擧權を要求する。』と云ふ標語の下に大デモンストレーションを行ひ、これに續いてあらゆる層の被搾取婦人の示威への參加が各所に增大した。十一月七日ボルシエヴイキ黨がケレンスキー政府を倒してサヴエート政府を樹立するや、『ヨーロッパの最も遲れた國々の一つであるサヴエート政府は、二年の間に婦人の解放「强い」性と婦人との對等のために、全世界の最も進步した啓蒙的な「民主々義」のありとあらゆる共和國が百三十年の中になし遂げた以上の多くの事をなした。』(レーニン)こゝに全世界で壓迫された性(女性)に對する平等が初めて實現されたのである。

サヴエート政府は、婦人に法律上の完全な同等の權利——滿十八歲以上の男女に選擧權被選擧權——を與へ、婦人の爲に立法上斷然たる改革を遂行し、婦人に從屬的な地位を與へる一切の法律を除去した。

また、サヴエート權力は、家庭婦人を家庭奴隷の地位から解放した。

ロシア×××は、サヴエートの婦人に對する働きかけに就て『勞働婦人大衆を××主義精神によつて敎育し、×××に引きつけることによつて、コミンテルンの强力な防衞者に敎育するにある。』となし、婦人をあらゆる形態の、サヴエート建設鬪爭に捲き込むべく、特別な機關、婦人部を設けた。

更にサヴエートは、婦人及び未成年勞働者に對しては、特別保護の新勞働法を設けた。

一、婦人及び十八才以下の未成年勞働者の激しい勞働、不健康な勞働、坑內勞働の禁止。

二、婦人に對するあらゆる職業の開放。

三、婦人及び未成年者の夜業禁止。

四、七時間勞働(搾乳中の母親六時間)(七時間勞働は、ロシア××十週年記念にサヴエートが全露勞働者に對する贈物である)

五、產前產后各八週間の公休と賃銀全額支給。

六、國立無料產院、產兒院の設立。

七、分娩、育兒の費用國家負擔。

八、婦人を家庭奴隷より解放する施設=公共炊事所、洗濯所、修繕所、乳兒ホーム、托兒所等々。

××後十年、この間あらゆる建設機關中への婦人の參加活動は、著るしきものがある。××當時に於ける、全露婦人文盲者は、女子人口の七割五分を占め、男子文盲者の約三倍の率を示してゐたのである。

婦人に對する政治教育、困難なる文盲退治は、婦人部と青年×××との協力に依つて行はれ、各都市、村落の婦人を「讀み書きを敎ふる」敎育サークルに組織した。この困難な

仕事は、次第に多大な効果を治めつゝある。一九二六年に於て、三萬六千の勞農婦人をこのサークルに參加せしめてゐる。またサヴエートト、勞働組合、消費組合其の他のあらゆる建設機關中の頭部への參加も增大した。

今日、サヴエート共和國に於て、特に婦人のために刊行して居る定期出版のみにても、大體左の如きものを擧げることが出來る。

一、「婦人××主義者」勞農婦人に對する活動の指導機關雜誌。×××C・Cより發行。發行部數二萬五千。」

二、「婦人勞働者」勞働婦人大衆のために。發行部數七萬八千。」

三、「農民婦人」發行部數四萬五千。」

四、「婦人農業勞働者 農業と森林勞働者の結合機關として。發行部數二萬六千。」

この外に、モスコーより發行される「婦人代表者」發行部數四萬五千。

この他十四の婦人新聞、發行總部數三十五萬。

勞農婦人通信五千。其他「婦人代表者會議」發行の『壁』新聞等。

婦人×××員は 次の 如き增加を示してゐる。

一九二五	七六、四九四人
一九二六	一二八、八一七人
一九二七	一五九、八六二人

まことに『ロシア××は婦人の積極的參加なくしては、成就し得ない。』…自らの參加によつて、完全に解放せられたるサヴエート聯邦婦人は、更に、全世界に於ける資本主義を排除して、國際プロレタリア婦人を解放するために、×××の指導と統制下に、帝國主義列强のサヴエートに對する包圍攻擊を防衞しつゝある。

「資本主義諸國に於ける無產婦人運動」今日の國際政治情勢の特徵は、サヴエート聯邦と、資本主義諸國の對立の激化である。サヴエートの社會主義的建設の益〻大なる成功と、支那國民××の發展を中心に、殖民地民族の反抗の激成、各國プロレタリア大衆の×××、地方、歐洲大戰の結果、一時、經濟的安定を得るに至つたヨーロッパ資本主義は、國際帝國主義の內訌を益々强めつゝある。

世界帝國主義の獨占的地位を有してゐた老大國イギリスは、一方アメリカ合衆國との資本の競爭と、他方、東方殖民地運動の激化に極度に脅かされ、その當然の歸結として、反動的帝國主義諸勢力の指導者として、イタリーに於けるフアシズム獨裁と相俟つてサヴエート聯邦の包圍攻擊を行ひ來つたのである。

かゝる國際情勢の下には資本主義各國のプロレタリアートの、益々激しき搾取と抑壓とは、最も遲れたプロレタリア婦人をも階級鬪爭裡にまき込んでゐる。あらゆる資本の攻勢に對して資本主義國下のプロレタリア婦人の反抗は、世界××の波とともに急激に發展しつゝある。

「イギリス」一九一八年、三十歲以上の婦人に選擧權を與へたイギリスブルジョアジーは、保守黨の政府によつて、女子の年齡を二十五歲に引き下げると同時に、男子の年齡を二十五歲に引き上げてしまつた。卽ち、一方に於て婦人をブルジョア政黨(保守黨)に抱き込み反動の支柱となさんとし、他方では靑年勞働者大衆の選擧權を奪ふことによつて勞働者農民を僞瞞、抑壓したのである。

强固な、產業プロレタリアートと、勞働運動の最も良く發展したイギリスに於ては、婦人勞働者の組織は、極めて良好であつて、勞働組合內の××的組織たる「少數派」の運動と、婦人×××員との活動に依つて、勞働組合、協同組合ギルド等、種々のプロレタリア組織の代表者を集めて、かの鑛夫ストライキの時に第一回代表者會議を開いた。この會議は、ストライキに婦人を組織するために「行動大會」を形作つた。

鑛夫ストライキは「闇の金曜日」を以つて終結したが、この「行動大會」は國際婦人デーと

して殘されてゐる。この結果、婦人勞働者は男子と堅く協同し、勞働婦人の組織を益〻發展せしめてゐる。

階級鬪爭犧牲者救援運動は、×××の指導の下に行はれ、勞働婦人の組織の一形態として發展しつゝある。

出版物は『勞働者週刊』に婦人勞働者のページを置き、工場婦人の通信を載せ現在では、月刊婦人新聞『婦人勞働者』を發行してゐる。

右翼指導者によつては、勞働黨婦人部より『勞働婦人』を發行してゐるが、何等勞働婦人に××的貢献をなすものではない。

「ドイツ」ドイツに於ける無黨派婦人組織としてドイツ赤色婦人同盟(R・W・G・L)は特種なものである。

赤色婦人同盟は「赤色戰士同盟」の婦人部が分離して一九二五年十一月二十九日組織された。分離の主要なる理由としては、『勿論男女は同一の鬪爭組織に依つて結合されねばならぬと云ふ原則の上に立つて居たが、かゝる組織は物質的(肉體的)條件の故に、婦人のより廣汎なる大衆の組織を不可能とする。より廣汎なる婦人大衆を廣汎に黨外團體として組織するためには分離すべきである』となした。その結果は、×××が自ら八年間に組織したる二萬の婦人に對し、僅か六ケ月間に九千の婦人(中、無黨派婦人七十パーセント、婦人××主義者三十パーセント)を包含した。

同盟はかゝる婦人大衆を階級鬪爭に動員し×××の黨外組織として强力になりつゝある。また、ドイツに於ては、三千人のブルジヨア婦人を組織する反動團體「クキン・ルイズ同盟」があるが、赤色婦人同盟は、かゝる反動團體の影響下にある勞働婦人を奪取すべく鬪つてゐる。

「フランス」婦人に對する××主義者の影響は未だ非常に弱い。廣汎なる婦人大衆の組織として、「婦人勞働者の友の會」「モロッコ戰爭に對する鬪爭の寡婦と母親の委員會」等に婦人を動員し良き結果を得た。パリに於ける「婦人代表者大會」には、五五六人の工場婦人代表者が參加し、フランス×××は、勞働者、農民のブロック中に、婦人勞働者を加へて鬪ふべく努力してゐる。

××的勞働組合の統制下にある「プロレタリア統一委員會」は、無黨派婦人の間に浸透せしむる爲に極めて良い職野となつてゐる。

農婦の間に於ける活動は極めて顯著で、農村は宗教的影響の多いにも係らず、×××によつて召集される會合には、農民婦人代表者の參加率が著るしく增大してゐる。

「婦人勞働者の反グループ」の宣傳機關として「婦人勞働者」新聞が發行され發行部數九千、一九二六年メーデーの國際婦人週間には一萬二千から五千を配布した。これは、特に婦人大衆の宣傳と敎育機關としての內容を持つてゐる。

×××機關紙「リューマニテー」に婦人欄を設け、黨の地方支部に於ける婦人鬪士の活動、婦人の日常問題等を常に扱つてゐる。

「イタリー」勞働階級に對して强權を以つて望むファシスト政府は、勞働者農民抑壓法、勞働大憲章の宣布、反動的青少年處女團の組織等々を以つて、その安定を謀り、勞働者は、ファシスト勞働組合に强制的に加入せしめられ、勞働組合の一切の煽動を禁じた。苛酷なる勞働條件――イタリー婦人勞働者の生活は、最も劣惡な日本に於ける婦人勞働者の狀態と、まさに近いものがある――は、ミラノの百名の工場婦人のストライキに、始めてこの法規を破らしめ、この結果、全イタリー勞働者に非常なる刺戟を與へ、劣惡なる勞働條件と相俟つて、反ファシストの雰圍氣を釀し、勞働婦人のファシズム對抗組織が進み來つた。賃銀低下に對する鬪爭と、組合防衞の目的の下に、各工場の男子勞働者と煽動委員會を組織し、勞働婦人がこの委員會の代表として活動してゐる。

×××婦人部は男子と密接に協力して、ファシスト勞働組合下の婦人を奪ひ返すべく、活動し、婦人代表者會議は廣汎なる婦人大衆を組織しつゝあり、ファシズムに對する鬪爭に婦人をまき込みつゝある。

農村婦人の間に於ける活動に就いて特に記すべきは、最近、農民インタナショナルに加盟したる「農民防衛同盟」の農民婦人に對する活動である。この團體は、フランス農村と同じく　宗教的勢力と戰つて、成功を收めてゐる。

イタリー×××機關紙「ユニタ」に婦人欄を設け、非合法機關雜誌「ペリタ」は屢々、婦人特別號を出してゐる。

この他の歐洲諸國勞働婦人は、いづれも、尖銳化せるブルジョアジーとの對立に反抗して立ち、國際プロレタリアートとの團結の下に血みどろの鬪爭に從事してゐる。

「**アメリカ**」アメリカ資本主義は八百五十萬の婦人勞働者を賃銀勞働にひき込んでゐる。中、勞働組合に組織された數二十萬。他は、多く反動と社會民主々義者の影響下にあるので、×××は勞働婦人の組合組織に全力を集中してゐる。

無黨派婦人組織の一形態として、ニューイングランド(ボストン)母親同盟がある。一九一六年アメリカ、ブルジョアジーが、勞働婦人を自己の陣列に引付ける爲、クラブ其他に組織し僞瞞政策を行つた。同年、直ちにこれに對抗して「母親同盟を組織し、三年後に、×××の指導下に、婦人を階級鬪爭にまき込む戰鬪的機關となつた。同盟は未だ全國的ではないが、或は、ストライキに參加して、勞働者の妻、勞働婦人大衆に、×××支持の必要を知らしめ、或はブルジョアジーの反動下にある勞働婦人を、奪取すべく精力的に鬪つた、眞實な革命的同盟として、×××の分派活動をなし、地方に於てことに成功を收めてゐる。

「**支那**」支那××は今、停滯の狀態を示してゐる、がそれは××の衰退を示すものではない。ブルジョア民主的××の達成——支那の統一、國際帝國主義の桎梏からの解放への緖につき始めた支那プロレタリアートは、今、勞働者農民の××の爲の鬪爭に向つて、更に新な準備をなしつゝある。

東洋的因習下に長く眠り込ませられてゐた支那婦人が、民族解放鬪爭に參加したのは極めて最近であつた。而し、反革命前は、×××の國民解放と、勞働者農民解放とを一致せしめたる鬪爭裡に、一萬餘の勞農婦人大衆がその先頭に立ち、上海の、北京の、或は廣東××の英雄的意圖に、反革命と勇敢に鬪爭した。

支那×××は、婦人組織の形態として、勞働婦人及び一般的な婦人への働きかけと、無黨派大衆組織を有してゐる。

支那に於ける女學生の鬪爭への參加は特筆すべきものがある。あらゆる大示威運動に若干の女學生が參加し、彼女等は、非常に××的になり、キリスト敎的な女學校は、殆ど戰鬪的婦人の統制の許に置かれた。

今、支那は白色テラーの跳梁に委せられ、若干の婦人××主義者は、蔣介石、馮玉祥等の手に依つて、××せしめられた。然し、共產黨の、新なる再興の準備は、三重の鎖に惱む勞農婦人大衆の憤起を漸次見つゝある。

其他、各殖民地に於けるプロレタリアートの反抗鬪爭は、インド、インド・ネシア、インド支那、朝鮮、臺灣等のあらゆる被壓迫婦人の反抗鬪爭への發展を見つゝある。

附記—本記の大部分は、一九二五の××主義婦人世界大會の報告書によつた從つて、極く最近に於ける各國プロレタリア婦人運動は、更に著しい發展をなしてゐることをお斷りしておきます。

我國に於ける婦人解放運動

明治維新の革命は、十八世紀の中葉より歐

洲各國に浸透した世界資本主義の歷史的運動の一環として必然的な、不可避な力を以てわが國に打ちよせて來たブルジョア××である。遲れてゞはあるが、世界の資本主義の潮流に合流せんとしたわがブルジョアジーも、その發展のために、新たなる明治政府の權力の下に、凡ゆる政治上、社會上の急激な變革をもたらした。この明治の××は、またわが國の婦人の封建的奴隷制にも一擊を與へたのである。

しかし、明治維新はヨーロッパのブルジョア××に比して特異な性質を有してゐたといふことを見逃してはならぬ。『ブルジョアジーが獨自の階級として自己獨特の鬪爭をすることが出來なかつたことや、地主勢力が我が資本主義を培ふことは明治維新を不徹底なブルジョア××たらしめた事、等、――明治維新の特性は、わが資本主義が發展の途上に於て、進歩的な役割を充分に果すことなく、漸くブルジョアデモクラシー獲得の端緒に於て既に、反動的抑壓へと轉化せしめたのであつた。

『明治七年頃からは明治政府は薩長勢力の藩閥的政府と化し、民選院設立運動その他の民主々義運動に對し、猛烈な壓迫を加ふるに至つた。』（註一）

わが資本主義の、かゝる發展過程は、必然に婦人の上にも、その社會上、政治上に何等ブルジョア的自由、平等をすら與へることなく、むしろ婦人の封建的殘存の强い地盤を利用することによつて、その上にブルジョア的搾取を課し、二重の抑壓を加へるに至つたのである。わが國の婦人の社會上、政治上、更に經濟上の地位が先進資本主義諸外國に見ることの出來ない低い狀態におかれてゐるのもこゝに基因してゐる。

從つてわが國に於ける所謂ブルジョア婦人運動は――わが國のブルジョアデモクラシーの運動それ自體、ブルジョアジーの指導の下に强力に鬪爭し得なかつた故に――歐米に見る如く强力に發展する餘地を有たなかつた。

明治前半、わがブルジョアジーがなほ進歩的にして、地主的勢力としての藩閥政府に對して猛然と鬪爭をしてゐた時代――『それは自由民權運動と云ふ政治鬪爭の形を取つて明治七八年頃より二十年頃までの歷史を飾つてゐる』（註二）――に於て、所謂自由民權運動の中に、或は治安警察法改正運動（婦人の政黨加入の自由、結社權）に女子の敎育の普及等に、少數先覺婦人の目覺しい活動を見た。この時代には、『學問、藝術、文學、哲學等のイデオロギーの領域に於てもブルジョアジーの代表は、また頗る進歩的特質を有してゐた。當時、福澤諭吉の著した『日本婦人論』なる一書は、所謂『女大學』式の敎育の中にひたつてゐたわが國の婦人に對し急進的なイデオロギーを與へたものとして代表的なものである。

だが『日本婦人論』は、――福澤諭吉の進歩主義の性質が政治的には、單なる啓蒙主義であり、非大衆的性質のものであつた――婦人の權利の獲得のためには、婦人に啓蒙的な意義を與へたのみで非大衆的であり、非行動的であり、抽象論であつた。

當時未だ婦人大衆は、自らの解放のために何等物質的條件を有してゐなかつた。自由民權運動の影響下に活躍した少數先覺婦人の間の政治的運動も、次第に反動化した我がブルジョアジーの特性の必然的歸結として、ブルジョアジーによる爾余のブル、デモの運動と等しく、それ以上大衆的行動へと發展すべき客觀的條件を奪はれていつたのである。

明治四十四年に到つて、はじめて『靑鞜社』一派の婦人によつて女權擴張の叫びがあげられた。即ち我が國の婦人が、自らの力によつて婦人の權利を要求して起ち上つた、最初の婦人の反抗運動である。

わが國の資本主義は、四十年の間に急速な發展をした。社會的生産の進歩は、一方に工場に働く夥しき數の婦人勞働者を産出し、一

方に於て知識的職業婦人を生産した。婦人の男子からの經濟的獨立、婦人の間に於ける教育の浸透、婦人の社會的生産行程への參加等は、婦人に封建的隷屬からの自覺と自らの權利を要求せしめる客觀的條件を與へた。

まさに、かゝる物質的條件の下に、『青鞜社』一派の女權の叫びは擧げられたのである。この運動の中心勢力をなしたものは、知識的ブルジョア及び小ブルジョア婦人であり、而して小ブルジョアを基礎とする解放運動が一般的に政治的たる以前にまづ、觀念的に、特に文藝的表現を有つ如く、『青鞜社』の運動もまた、文藝運動として多く觀念的に男女の平等を要求した運動であつた。女權運動としては、端緒的な自然發生的なものであるが、わが婦人が自らの解放のために――封建的抑壓に對する挑戰として――婦人解放運動の最初の種子をまいた劃期的な、××的な運動であつた。

『青鞜社』運動がまいた種は、十年の準備期を經て政治的運動へと發展した。大正八年政治的要求を強くかゝげて生れ出た『新婦人協會』は『青鞜社』運動のより具體的、より積極的、より實踐的な鬪爭へと發展した女權運動である。歐洲戰爭によつて却つて飛躍的な發展を遂げたわが資本主義は、從來地主勢力の下に妥協し來つた政權を、自らを指導勢力とする優位に轉換せんとしつゝあつた。かゝる時期の政治的現象として民主々義的運動の一時的繁榮をなさしめた。『新婦人協會』の政治的運動も、この繁榮期の一現象として一時的隆勢を得るに至つた。その最高頂――大正十一年には治警第五條の修正案が一部貴衆兩院を通過して日本婦人が初めて『政談演說に會同し、又發起人たり得る』自由を獲得した。だが其れ以後は、次第に凋落に向つた一般ブルデモの運動と共に女權運動も全く衰微するに至つた。

『新婦人協會』の運動より今日に到るまで、ブルジョア的婦人解放運動は、幾多の政治的團體を組織し、現在もなほ運動の存續を見る。だが吾々は、今日これらの運動を中心として强力な大衆的行動を見ることは出來ない。組織力に於ては微弱なものである。なほ、この種の運動が大衆的行動へと發展すべき物質的な何等の條件をも具備しないのである。

即ち、歐洲大戰をモメントとして、おくれてゝはあるが國際資本主義の一環として國際的舞臺に登り來つたわが資本主義は、その最高段階であり、自ら死滅しゆく時代としての帝國主義的支配を維持し、自らの體內に醱酵し來たれる勞働階級の大衆的反抗を鎭壓する爲には、凡ゆる反動物を利用せざるを得なくなつた。

『今日、ブルジョアジーは自己の指導權確立のために地主と妥協してゐるのではない。彼等はその帝國主義的支配を維持し、勞働階級の大衆的反抗を鎭壓するために、あらゆる反動物を利用せざるを得ぬ。今日帝國主義ブルジョアジーが地主と政治的同盟を結んでゐる根本理由は勞働者農民の大衆的反抗を鎭壓する爲なのだ。』『今日ブルジョアジーと地主とが政權を握つてゐる。それに對立する反抗勢力として勞働者及び農民の政治的同盟がある。この二つの同盟の對抗が現日本の最も根本的な政治的契機である。』(註二)

日本に於ける現下の政治的、經濟的情勢に對して、ブルジョアジーと地主の政治的同盟に對抗して封建的勢力と鬪爭し得るものは、最早やプロレタリアート以外にはない。わが國に於ける政治的自由の獲得は、先進歐米資本主義國に見るの如く、ブルジョアジーの指導に依つてはなし得ない。唯一プロレタリアートを指導力とする勞働者と農民の政治的同盟軍の上にのみ課せられてゐるのである。

かくて、帝國主義的反動的なわがブルジョアジーは、婦人に對してもブルジョア的自由をすら與へるに由なく、否！　むしろ愈々婦人の封建的殘存を利用することによつて、一

の半奴隷的集團として、自らを最後の沒落より維持せんがための反動の社會的地盤としつゝある。これら婦人大衆のブルジョアジー反動への誘引は、今や積極的、組織的計畫的に行はれてゐる。その大なる組織力を示せば、『全國女子青年團（正會員二十七萬九千）、愛國婦人會（百四十萬の多數會員と約二百萬圓餘の基金を擁してゐる）、日本赤十字社（社員二百四十二萬）、全國數萬の小學女教員を組織したる小學女教員會、全國少年團（七十一萬人のうちに數十萬の女子を含む）、其の他勤儉奬勵婦人團、愛國貯金奬勵會、修養團婦人部、希望社、及婦人諸雜誌に或は意識的に、或は無意識的に獲得され、誘引されてゐる數百萬の婦人大衆』（註四）等がある。

今日、わが國の婦人より封建的遺制をはぎ取り、完全なる解放に導く力を有つものは、プロレタリアートより他にはない。わが戰鬪的プロレタリアートは、わが全被抑壓、被搾取大衆を解放するために、巨大なる力と使命を荷つて歷史的舞臺に現はれ來つた。

わが國の婦人の解放運動も、新たなる要素——現代に於て最も抑壓され、搾取されてゐる——婦人勞働者によつてのみ、大衆的行動たり得、鬪爭力たり得る。また眞の解決に向ひ得るのである。

（註）一、二、三、「日本歴史」佐野學
「無産者政治必携」一九二八年版

わが國無產婦人運動の展開

わが國の資本主義は、ヨーロッパの資本主義諸國が數世紀間に發展せしめたものを、わずか數十年間でなしとげた。この特殊的發展は、わが勞働者大衆をして一般的に諸外國の勞働者に比し、極度の非人間的生活に餘儀なくせしめてゐる。——わが賃勞働者が如何に半奴隷的な資本の恣な搾取の下に低廉な勞賃に甘じて來たか？ 特に、婦人勞働者の增加と、その×使、搾取狀態——婦人勞働者がわが資本主義の發展になした役割は重大なものである。

例へば、わが國の重要產業の一、わが國全輸出額の七割以上を占めてゐる染織工業には、婦人勞働者が九十パーセント搾取されてゐる。賃錢は平均一日一圓以下、勞働時間は一日十時間以上十二三時間、女工寄宿舍制による極惡なる搾取手段は、彼女等よりすべての自由を剝奪してゐる。

昭和二年刊行商工大臣官房統計課の大正十四年工場統計表に依れば、日本內地に於ける工場勞働者數は一、八〇八、三八一人にして、婦人勞働者は男子勞働者を凌ぐ九九五、八二五人、全工場勞働者の五割三分を占めてゐる。そのうち八割は紡績工場に屬してゐる。

特に、大戰後に於けるわが資本の著しき產業合理化の過程に於て、婦人の生產行程への進入は、成人勞働者を猛烈に驅逐して、幼年の勞働者と共に婦人勞働者を益々增大した。

	勞働者指數 總數	男	女	勞働者百人ニ付婦人	
明治四十二年				六一・六	農商務省調
大正 三年				五九・五	
同 五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	五六・三	社會局調
同 八年	一三七	一四九	一三五	五五・四	
同 十年	一三三	一三〇	一三七	五七・一	
同 十二年	一二八	一二一	一三三	五八・二	
同 十三年	一三五	一三二	一三八	五七・五	

產業合理化過程に行はれる男子成人勞働者に代る婦人勞働者の增大は『競爭を強め、全プロレタリアートの勞働條件を益々劣惡ならしめる。この危險によつてプロレタリアートの陣營內に新たにプチブルジョア的氣分——それは婦人を生產場裡より驅逐し、彼等を無理やりに家庭に戻らせせやうとする傾向をとる。』（註一）

更に、昭和二年の金融恐慌をモメントとして、强力的、意識的に進められてゐる徹底的産業合理化は、小中資本の集中による冗員淘汰、工場閉鎖、操業短縮、時間延長、賃銀値下――從つてプロレタリアートの陣列內に漫性的な失業者による産業豫備軍の擴大等、婦人勞働者の上にも最大の影響を與へた。かの金融恐慌は、婦人勞働者の八割を占めてゐる紡績工業に最大の影響を與へることによつて、數萬の婦人勞働者を失業軍の中に送り出した。

今や資本主義の世界的合理化の過程に合流しつゝあるわが資本主義が、かくてこそ初めて、『近年の世界企業家の統一的スローガンの下に『優良勞働者に道を拓け――社會的賃銀（同一勞働に對する同一賃銀）廢止――生産高に應じた賃銀實行――熟練工と不熟練工、男子と女子との賃銀の開きを增大せよ！』と。然り！ かゝる彼等の政策こそ『婦人をより强烈に追及することである。婦人と男子勞働者との競爭を激成して兩者の統一戰線を破らんとするものであり、未啓蒙の熟練工男工を欺瞞し獲得して』（註二）プロレタリアートの陣營を攪亂せんとする意圖である。

扨、『産業の高度の發展、トラスト化された資本、國家權力との異常に緊密な結合、最大の官吏群、大土地所有並びに産業資本』――この帝國主義的わが資本主義の經濟的並びに政治的情勢に對立して、わがプロレタリアートの陣列は、極めて『公然たる「不釣合」を認め』ざるを得ぬ。即ち、五百萬の工業勞働者中組織されたるもの僅かに三十萬にして、諸組織の根强い分裂は、資本に對して、力弱く對立してゐる。

そのうち、全勞働者の五割三分を有する婦人勞働者の組織力の薄弱は、わが全プロレタリアートの鬪爭に一の障碍をなしてゐる。大正十四年十月『産業勞働調査所』の調査によれば、婦人勞働者の全組織數はからうじて九千餘人（その後增大を見ない）を數ふるに過ぎぬ。

婦人勞働者への働きかけは、勞働組合運動の發生によつてなされた。歐洲大戰によるわが資本主義の異常な發展期に於て、――『日本の工業の好景氣は、若き日本のプロレタリアートに對し、當時或る程度の生活並びに勞働條件の向上を得させる可能性を與へた』――『正にその當時、近代的プロレタリアートの主腦部は芽生えたのであり、またその當時、最初の近代的な型の勞働組合が成立した』（註三）――大正元年には友愛會、後の日本勞働總同盟が創立され、大正七八年に至つて急速な發展を遂げた。

大正八年に友愛會は千名以上の婦人勞働者を組織し、大正九年七月にはわが國最初の婦人勞働者を中心としたストライキ、友愛會に組織された中堅の婦人勞働者によつて、富士紡押上工場に於て爭議を勃發した。當工場に於ては、既に二千名の婦人勞働者の組織を有し、爭議は、有力な婦人幹部十數名の馘首に端を發した。全組合員は『團結權擁護』のスローガンの下に鬪つたのである。だが、官憲の强力な彈壓と、寄宿舍制度による女工の寄宿舍への籠城、外部との遮斷、加ふるに不充分なる鬪爭の經驗は爭議を全く慘敗に終らしめた。

この爭議の慘敗と、他方に於て大正九年の夏頃より見舞つた恐慌とは、（わがプロレタリアートの全鬪爭を不振ならしめた所の）婦人勞働者の間に於ける活動を殆んど中絶に導き、友愛會に於ける婦人勞働者の組織をも壞滅せしむるに至つた。

大正十二年頃に至り、再び組合內に於ける婦人勞働者の問題が問題とされるに至つた。總同盟は再び多くの婦人を組織した。從つて婦人勞働者の特殊性に應じて、特別な組織的活動、婦人部設置に關する問題を提起した。大正十三年總同盟關東同盟は特に婦人勞働者の啓蒙的活動として機關紙に婦人版を發行した。

他方、わがプロレタリア運動は、大正十二年頃より、勞働者運動に最も危險な害惡を與へるところの日和見主義を發生した。大正十三年の秋より十四年に亘つて總同盟は戰鬪的勞働者と日和見主義者との對立を激化しつゝ遂に大正十三年の關東同盟大會は、戰鬪的勞働者の排撃によつて分裂を來たした。新たに戰鬪的勞働者によつて關東地方評議會を創立し、婦人部を設置した。次いで大正十四年の全國的な分裂と、日本勞働組合評議會の創立、このあわたゞしい過程に於て、また婦人勞働者の問題はつねに戰鬪的勞働者によつて重要性を持つに至つた。

日本勞働組合評議會は、同年先づ全國的婦人部協議會を開催し婦人部の具體的な方針を決定した。この決定に基いて次の如き婦人勞働者の有つ特殊な行動綱領を掲げた『婦人部テーゼ』が發表された。

イ、婦人勞働者の六時間勞働の確立

ロ、婦人勞働者の夜業、礦業、及び有害なる作業の廢止。

ハ、寄宿舍制度の撤廢並に現存寄宿舍の勞働組合による管理。

ニ、强制貯金制度の廢止。

ホ、性による賃銀差別の撤廢。

ヘ、産前産後各八週間の休養、及び其の期間の賃銀全額支拂。

ト、乳兒を有する婦人勞働者には三時間每に三十分以上の授乳時間を與へること。

以上による婦人の特性に基き、テーゼは、『之を組織し教育する特殊の任務のために、一專門部としての婦人部を組合の中及びそれ以下の各指導機關の中に設ける事』を强調した。間もなく、本部は組織部の下に婦人部を設置し、また、各地方評議會にも婦人部を置くことになつた。

翌大正十五年の評議會第三回大會は再び、婦人勞働者への働きかけのために、中央委員會提出の新たなる方針を中心に、組合婦人部の設置可否に關する多くの問題を提出した。約一ヶ年の討論を經て、昭和二年の第四回大會に至つて漸く一應統一され、組合内に婦人部(專門部としての)の特殊機關を設置することを必要とした。

分裂後の右翼總同盟、及び第二回の分裂によつて創立した中間的組合同盟内に組織されてゐる婦人勞働者は、今日、多かれ、少かれ、改良主義的、社會民主々義幹部の政策の下に、ブルジョアジーとの取引きの餌に提供され鬪爭を抑壓されてゐる。これらの婦人への働きかけもまた左翼に課せられた問題だ。

大正七八年の勞働運動の勃興期に於て、インテリゲンチャのプロレタリア運動への參加と共に知識的婦人の間にもプロレタリア運動へ積極的に參加する現象を見た。かゝる婦人は未だ多く思想的運動の圏内にとどまり、大正七年これらの社會主義的インテリゲンチャ婦人に依つて組織されたグループ赤瀾會の運動は最も代表的なものである。赤瀾會の如き極めて簡單又茫漠たる綱領の下に創立されたのである。

『私達は、私達の兄弟姉妹を窮乏と無智と隷屬とに沈淪せしめたる一切の壓制に對して、斷乎として宣戰を布告するものであります。』

その活動は、社會主義思想の研究宣傳にとどまり、講演會、メーデーへの參加等勇敢的な行動を示したが、勞働婦人との關係に於ての活動は充分明確なる認識を有ち得なかつた。殆んど大衆より切り離されたる形に於て、少數社會主義婦人のグループとして終つた。やがて一般的プロレタリア運動の沈滯と共に衰微に向ひ、赤瀾會は大正十一年には解散するに至つた。その中に組織された婦人の一部は勞働婦人の中へ行き、彼女等の間に於ける執拗なる組織的、活動を行つた。他の一部の婦人は、なほ社會主義研究會のグループの範圍内に留り、後、政治研究會の創立と共に、その婦人部に結成された。

更に、學生運動の擡頭、學生の社會主義運動への參加とともに、女子學生間にも次第に反抗運動が發生し來つた。然し、これらも組織的、大衆的行動にまで發展することなく、僅かに『社會主義の研究――マルキシズムの研究』を中心とする少數有志婦人の討論、研究機關的グループを出でなかつたと云ふことができるであらう。

最近に於ては、農村に於ける婦人の反抗運動が擡頭し來つた。

農村に於ては、農民に關する一切の問題が卽ち、たゞちに農民婦人の問題として、婦人の利害に關係してゐる。而して今日、農村婦人の上に殘存せる封建的制度は、最大の重壓を極めてゐる。都會の工場の寄宿舍に押し込められてゐる婦人勞働者の大部分が、農村の窮乏化に堪へかね、封建的重壓より逃れ來つた少女であるといふ。この一事を以てしても貧農婦人の現狀を知るに充分であらう。

農民婦人への働きかけは、大正十一年日本農民組合の創立に依つて始められ、農民組合内に多くの婦人を組織した。對地主との鬪爭に於て、つねに婦人は第一線に起つて鬪つてゐる。大正十四年の岡山藤田農園の爭議に於ける農民婦人の勇敢的な鬪爭はその一例である。

更に、極めて最近に於ては、反動的な官製婦人會に對する鬪爭、官製女子青年團の自主化、或は、農村に於ける托兒所の設置、消費組合へ一般農村婦人の組織、參政權の要求等、更に××的な鬪爭にまで農民婦人の積極的な參加を見るに至つた。

一九二六年の中頃より、一九二七年の終りに亘つてわがプロレタリア婦人運動は、勞働組合評議會の第四回大會に於ける「組合婦人部設置」に關する問題、左翼關東婦人同盟の創立、つゞいて右翼、中間派による婦人同盟の組織、進んで左翼婦人同盟の解體等々、あわたゞしいヂグザグの道を進んで來た。この間、またわがプロレタリア婦人運動は、多くの基本的な、組織的な誤謬をおかしたのであつた。加ふるに一九二八年の三・一五事件以來、引きつゞき支配階級のわがプロレタリア運動に加へ來つた未曾有の彈壓は、婦人の解放への鬪爭により多くの痛手と困難とをもたらしたのである。しかし、わが左翼の常に有つ階級的立場の嚴守は、その困難なヂグザグの道を實踐的鬪爭のうちに一歩一歩正しい方向へ――わがプロレタリア婦人の諸要求のために勇敢に鬪ひ來りつゝある。

工場婦人の間に於ける活動――殊に工場婦人の大部分を占める纖維產業に從事する婦人(八十萬餘)は全く未組織のまゝに殘されてゐると云つてもよい。これらの婦人の階級鬪爭への參加は、わが全プロレタリア階級の解放に決定的な意義を有つものであり、またわが婦人の解放の鍵を握るものである。

工場婦人を、工場内に於ける日常經濟鬪爭に動員し、組織することこれを基礎勢力として家庭内のプロレタリア婦人、農村婦人あらゆる日常經濟、政治鬪爭に動員し、組織することは當面の重用な問題である――かくてこそ、『これらの鬪爭に訓練づけられた婦人は夫や子供のためにも、工場のストライキの示威運動に、參加し、子供のためにも戰爭反對運動の先頭に立つ必然を持つ』に至る。

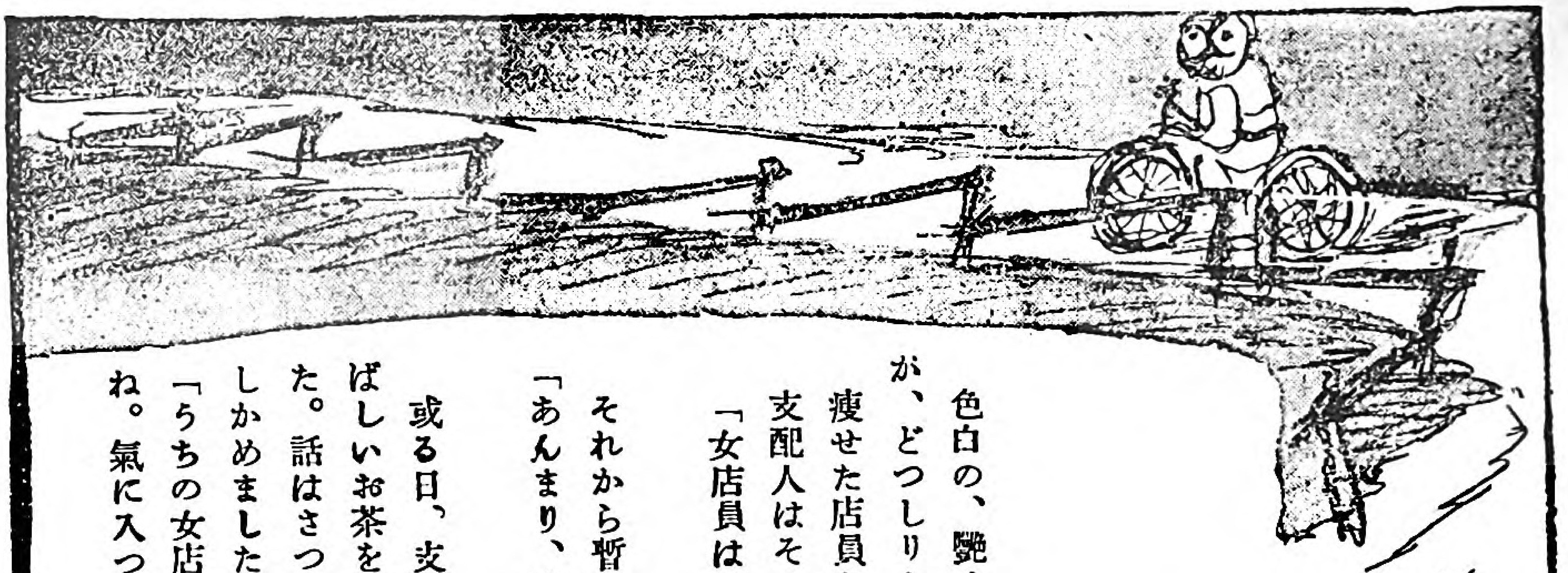
勞働組合、農民組合に組織されたる勞働婦人大衆は、かくしてこの『大衆組織の鬪爭の發展の中に、××的鬪爭の訓練を受け』自らの解放のための鬪爭の第一線に起ち得るに至るのである。

わがプロレタリア婦人運動の活潑なる發展のために、今や重なる彈壓の雨の下に、勞働組合内に於て、農民組合内に於て、より積極的に未組織勞働婦人の間に於て、特にその活動の必要を迫られてゐる。

註一、「國際勞働組合運動當面の任務」ロゾブスキー。

註二、「政治批判」第七號。

註三、「極東に於ける勞働組合運動の諸問題



支配人の言葉

窪川いね子

色白の、艶々した額に縦じはをよせて、支配人は店内を見廻りました。手を後ろに組んだ着物の袖が、どつしりと、くすんで光つてゐました。

痩せた店員たちが、多くの客の間をねづみのやうに動いてゐました。

支配人はそのあとで女店員監督を呼んで、言ひました。

「女店員は、も少し身なりをとゝのへて貰いたい、店の體面に關るから。」

それから暫く後のことです。彼は、女店員が少し綺麗にし過ぎると言ひ出しました。

「あんまり、店員が綺麗にしてゐると、商品が汚なく見えていけない。」

或る日、支配人は重役室で庶務課長と雑談をしてゐました。彼は、給仕の運んで來た香ばしいお茶をすゝり、ソフアに身を反らして、煙草ケースから煙草を一本とり出しました。話はさつきからの續きでした。彼は、自分の話をわざと滑稽化すやうに大仰に眉をしかめました。しかしその眼には、仲間同士の親しい好色な笑ひが浮んでゐました。

「うちの女店員では誰が一番美人だらうね。どうも、うちの女達には美しいのがゐないね。氣に入つたのは一人もゐないぢやないか。」





重のおっ母さん

小野田慶子

一

お淺はいつもより一時間程早く目をさました。一晩中、ウト〱とよく寢つかれなかつた事が想ひ出された。

枕元の障子が、未だゆふべの夢の樣に薄白かつた。

――今日は重のやられた日だ――

布團の中に首を突込んで、平べつたい胸元にやせた四肢をかい寄せた時、お淺の頰に涙が流れた。

泣いてなぞ居ていゝものか――布團の中でえびの樣に縮こまり乍ら、お淺はつぶやいた。頭からすつぽりと被つてゐた布團を押しのけお淺は枕の下に手をやつて、一通の手紙をとり出した。

夜明の風の冷たい暗い室內に起き上つてお淺はソッと電氣のスヰッチをひねつた。

隣りに寢てゐた勝枝が、目をつぶつた儘、眉の間に深い皺を刻んで、くるりと寢返りを打つた。

お淺は枕に卷きつけてあつた日本手拭で、電燈のカサを被ひ、部屋の半分丈を明るくし樣として、いろ〱に苦心をして見たが、うまくゆかなかつたので、あきらめて床の上に坐つた。

丸行燈の樣な、薄明りが疊に落ちて、月蝕の樣に、お淺と勝枝の布團が、丸い輪廓をかげつてゐる。お淺は坐つた儘、布團の上に被せてあつた着物を肩にし、その光の下に、首を突き出して、背を丸めた。

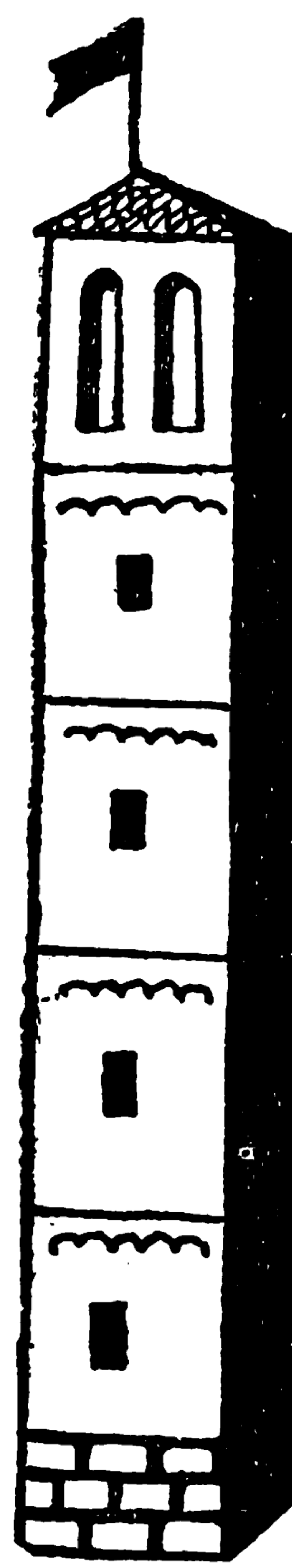
手紙は、監獄にゐる嫁のお由からである。

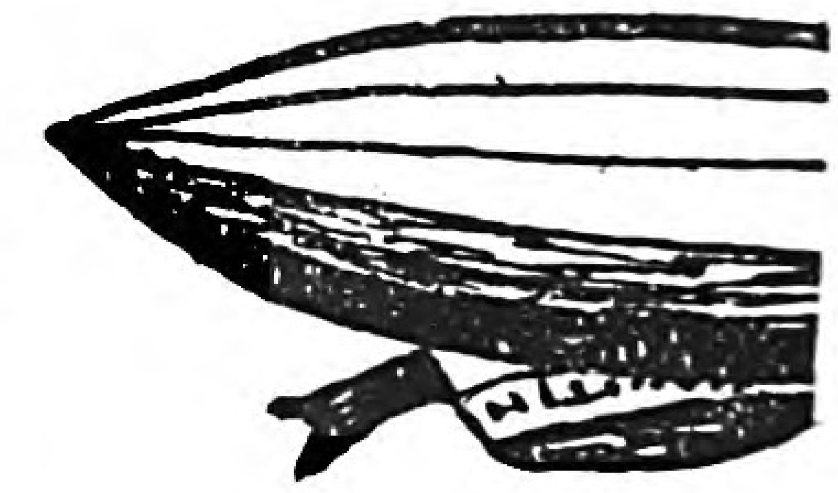
――重の日のために、お母さんにこの手紙を書きます――

そんな風な前書で、お由の手紙は書いてあつた。

「お母さんにとつて、重の初めての命日はどんなに悲しいでせう。それを想ふと、重のして來た、未だお母さんのよく知らない、いろ〱の事を話してあげたいと思ひます。こうして、じいつと三疊の部屋に坐つてゐる事が、大變辛く思はれます。が、それは實際に出來ない事です。出來ない事を考へて、くよ〱するに當らないと思ひます。それは馬鹿な事です。

お母さん！





重は決して自分の命日を、お母さんに泣いて貰ひたくないでせう。重の生きてゐた頃の事から推せば、重がお母さんに何を望むかは、餘りにも判然としてゐます。

お母さん！

命日には泣かないで、外の勞働者と一緒になつて、重の日を記念して下さい。お母さんが泣いても泣いても泣き切れない事は、全國の勞働者農民が、よく知つて吳れてゐます。

お母さん！

悲しかつたら、その悲しみを憎しみの炎に燃して下さい。泣きたかつたら、お腹の底から叫んで下さい。

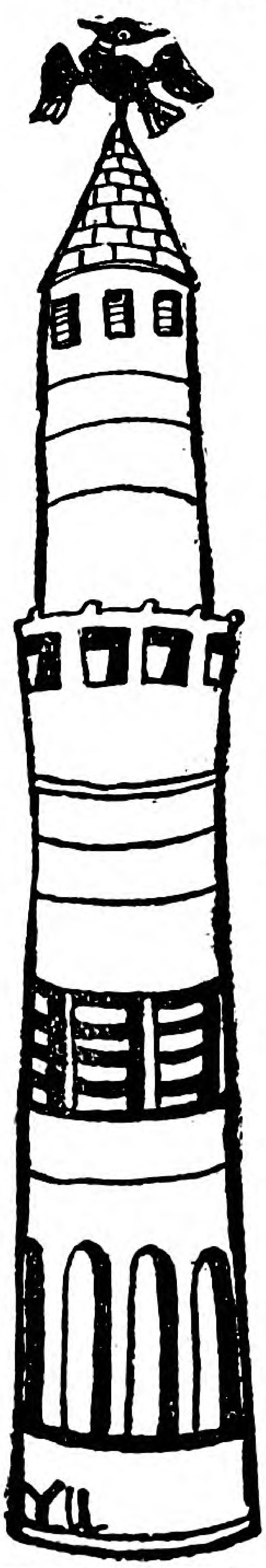
――あいつらを×さねば駄目だ！と、ねえ、記念日の集會には、出來る丈諸方をかけめぐつて、お母さんが戰ひの眞つ先に立つて下さい。

お母さん！

若しも記念日の報告が、私がお願ひした樣に、此の牢屋の中には入つて來たら、それこそ私は泪を流して喜ぶでせう。私はお母さんに向つて、默つて手を合はせるかも知れませんでせう。

お母さん！

重の日には、私は決して〳〵泣きませんよ。私はいつもの樣に、一日中、此の部屋に一人ぼつちで、行動の自由を奪はれてゐるでせう。でも、私は本當は一人ぼつちではありません。



雲の樣な、又は、潮の樣な勞働者農民が、私を取りまいてゐて吳れます。そして、その勞働者農民の、素晴しい英雄的な行動に全てを任せて、僅か三疊のこの部屋で、一人でデモンストレーションを行ふでせう。尙、私は、この日、重の全生涯の××的行動を想ひ起して、御馳走の少ない監獄の新しい血にします。その他に、どんなに思ひがけない事が突發するか、それは判りません。

でも私は――監獄なればこそ――その思ひがけない事を、何故か信じ樣としてゐます。でも此處からは、どんな素晴らしい事が捲き起らうと、御知らせする事は出來ません。

お母さん！

本當に元氣で、重の日を紀念して下さい。

では、いゝたよりを待つてゐますよ！

もう何度も讀み返した手紙であつた。

何度よみ返して見ても、お淺はお由の自分に望む氣持が、高すぎて、お由の云ふ通りの氣持には到底屆かないものを感じて來た。

だが、お淺は、お由が、決して自分に無理な注文をしてゐるのだとは思へなかつた。お由の云ふ事は、どこまでも正しくて、立派だと思つたが、お由の望む氣持迄に自分の心を構へる事に骨が折れた。

お由の望む樣な圖太い氣性は、もう此の年では駄目ではないか知ら

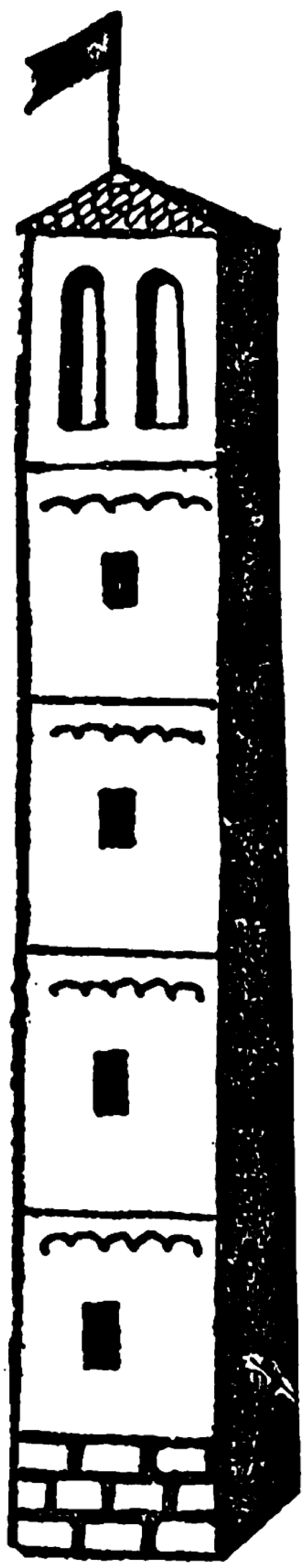


とも思つたりした。
そんな時には、これからの老い先が、しみじみ心細く考へ込まれもした。だが、今のお淺は初めつから、お由の手紙に飛びついて行つた。
やられた重も監獄にゐるお由も、お淺の側近くに感じられるのだつた。お淺は、今日本所の、ある工場の、救援會の集合に、約束のあつた事を想ひ出した。
――そうだ、重をやられた悲しみは、突きつめれば、あいつらに對する憎しみになるのだ。此の母親の氣持を、あらひざらひ、話しさへすればいゝのだ――
お淺は今日の集合が成功し相に想へた。興奮した集會の模様を想像すると、胸がドキ〳〵はずんだ。フト、重の笑顏を想ひ浮べた。

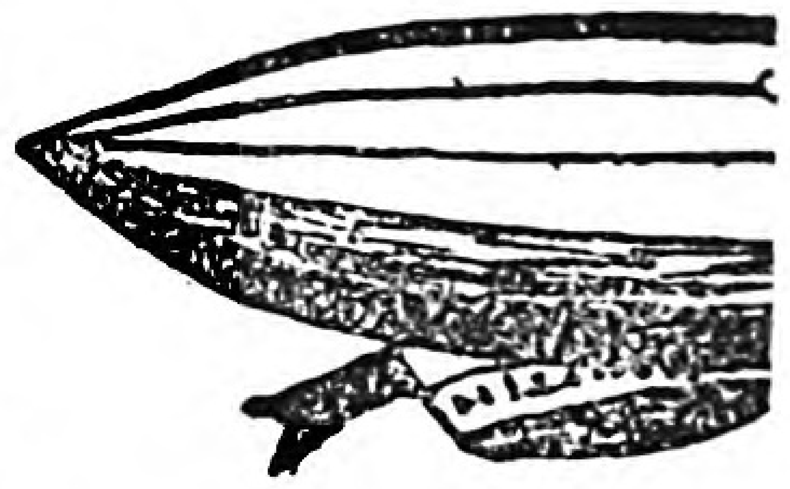
小窓をあけると、空には、ゆふべ土砂降りの雨雲が雲脚を見せて北の方にかけてゐた。
その切れ目切れ目に、明け切るのを待つて、眞つ青に澄み渡らうとする空が、じつと落ついて動かなかつた。
お淺は、聞きおぼへの、勞働歌でも歌ひ出したい様な氣持で、朝の仕度を初めた。

二

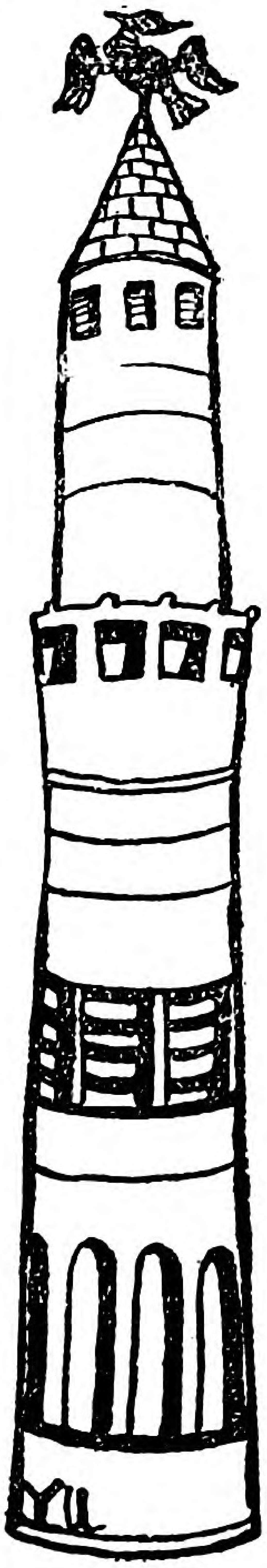
朝の食卓につく時、勝枝がひよいと目を止めたのは、お淺が先刻から一生懸命に造つた、部屋の隅の祭壇の寫眞の前に、花が活けられて、白い素焼の皿に温かい御飯が供へてある事だつた。
――いつの間にこんなものを買ひ揃へておいたのだらう――
そんな事を思ひ乍ら、妙にしみじみした氣持に誘はれかけて、箸を動かしてゐる時だつた。
――やあ、立派なものが出來ましたねえ、畠山が、突然お淺に向つて云つた。
――あんな風に、佛様見たいに飾り立てるの、餘りよくないのね。
いくらか後悔めいたその言葉の端にも似ず、お淺はいかにも滿足氣だつた。
オヤ〳〵と、勝枝は、當てが違つた様な、不意を喰つたが、ホッとした氣持に救はれた。
畠山夫婦も、勝枝も、お淺も、いつもよりよくしやべつた。そして、めいめいが、お淺の心にふれてゆく事をおそれて、話題に苦心してゐる様に見へた。



お淺が勝枝の家に寢泊りする様になつたのは、去年の暮もさし迫つての頃で、その頃は未だ勝枝の夫の昌吉が居て、職業の方の齒科醫も相當にはやつた。
或る日、夜おそく外出先から歸つて來た昌吉が、火鉢の側に坐り乍ら、仕立物を一ぱいに散らしてゐる勝枝に、組合がぶつつぶされ



た事から、組合にゐたお淺が行き場所がなくて困つてゐるのだと云ふことを話して聞かした。
常日頃、夫の昌吉から、お淺の話を聞かされ、往き來もし、何か事のあつた時には、──これはお母さんに、お母さんも一緒に──と、云ふ風にして來た仲だつた！、昌吉の話振りから──是非家に引きとりたい──と云ふ様な、言葉の裏がさつしられたので、その時勝枝は、──私の家でよかつたら、──と自分の方から進んでお淺の世話を引きうけたのであつた。しかし、何と云つても、その頃の勝枝は、お淺に對して、理智の方が先に働いた。
氣の毒な人だから──この氣持を自分に押しつけて、義務を果たすと云つた様な、テキパキさで、お淺に對する氣が配られた。
それが、四・一六で、昌吉が收監されて、自分の生活と、自分の意志を、一人で支へなければならなくなつた時、勝枝は初めて、お淺のあの細い身內の中に、異常な強いものがかくされてゐる事に驚いた。
その當座、勝枝はよくお淺に叱られもした。
──そんな事でどうするの──、お淺にこう云はれる度に、勝枝にはお淺の魂が、ぴんと應へた。
勝枝は、自分の生活の身近くに、言葉や敎へではなしに、異常な困難に打ちたへて行く、しかも五十歳を越した老婆の不思議な存在に目を見はつた。夫の昌吉がゐなくなつて、すぐに財政的危機が、勝枝の前に



來た。
一ヶ月の警察の留置から、市ヶ谷に昌吉が送られると、勝枝は、家の問題を持つてすぐに面會に行つた。
いろ〱協議し、同じく醫者仲間の同志の世話で、昌吉の後任者として、就職口に困つてゐた畠山夫婦を探し出す事が出來た。が、暫く職業を中止した事や、夫の收監や、何やかやで、畠山が來て以來、收入の方はちつとも思はしくなかつた。
藥の買入れの心配から臺所一切迄、月末のやりくりは、勝枝の手で工面された。その頃から、勝枝は、畠山にも內密で、獄中の昌吉と相談して、小石川の昌吉の叔父の家に財政の援助を乞ひに行く事が月末の習慣になつてゐたが、それも度重なるにつれて、叔父の嫌味も多くなつていつた。此の頃では、夫の收監も、商賣のはやらないのも、全て、叔父はそれをお淺を置いておくせいにした。お淺にさへどこかに行つて貰へば、昌吉の留守中、定つた援助を月々してもいゝ。でなければ一切お斷りします──と云ふのが先月末の、叔父のあいさつであつた。仰山な親族會議の決議でもあると聞かされた時、勝枝は腹も立つたが、それの動かせないものである事も知つた。
一層の事、家を疊んで、お淺と間借りでもし、どこかの病院に看護婦でも務めようかとも思つたりしたが、親族の猛烈な反對はともかく、一度昌吉にも相談して見なければ定められないと、ためらつ



てゐるのであつた。救援會の方では、この話を聞き込んで、お淺の生活のために方法を講じてゐると云ふ事でもあつたが、お淺と離れてすむ事に勝枝自身は自信が持てないのであつた。

が此の話は、一切お淺には聞かせてなかつた。

三

救援會では、——七日が國際的紀念日だから、お母さんもやつぱり七日を追悼したらいゝでせう——と云つた。

が、それにしても、——一體時間は何時頃なのだらう——もつといろ／＼の詳しい事が知りたい。——あゝだらうか、こうだらうか——朝の片付けをすましてビール箱を、白いシーツで被つた、祭壇の、重の寫眞の前に坐ると、いろ／＼の事がお淺には思ひめぐらされた。勝枝が來て、お淺の側にぺつたりと坐り、肩と云ふよりは、むしろ背中の眞中に手を添へて、小さい聲で聞いた。

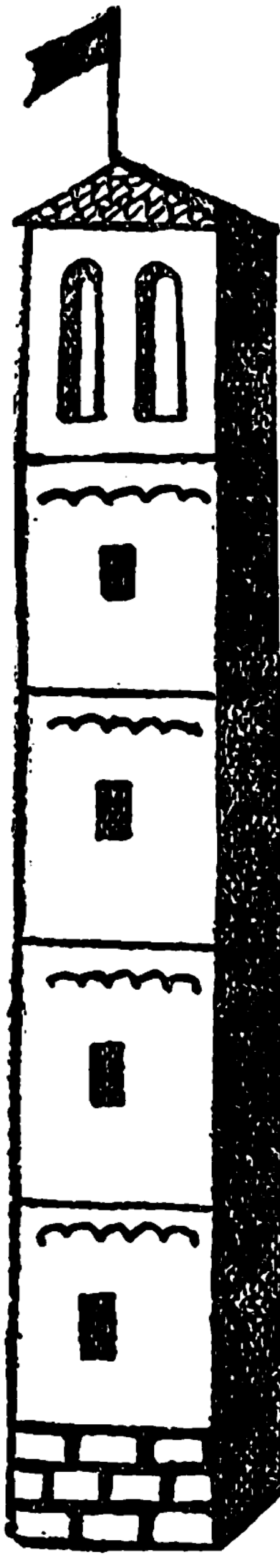
——お母さん、今日のあれ何時？

——五つも六つもあるんだけど、一等人數の多い工場の集會に出なさいつて、昨日、安井さんが來て云つたの：：で、二時からのと五時からのと、そこが早くすんだら、も一つつれて行く所があるんだつて

——で、今日、吉田さんでも迎へに來るの？

——いゝえ、今日は此處の家に來るの危いつからつて、××橋の停留所で逢ふの？

——私も一緒じやあいけない？



——そう？　勝枝さんも行く？

——えゝ

——だけど一緒に外に出るの目立つわね、私今日一旦北さん所迄、由ちやんの差入れの仕立物を持つて行つて來るの、そしてそこから、停留所にまわる事になつてゐるの、

——そう、でも私、時間迄には何とかして行くわ、

——今日、家、張つてるか知ら、

——判らないわね、

——私が外に出たら捉まるか知ら、

——何にもしないお母さんを、捉へ樣もないじやあないの、

——でも、わからないわ、

——そう云へば、やりかねないわね、

お淺も勝枝も顏を見合して意味もなく笑つた。財布を調べて、お淺が立ち上つた。

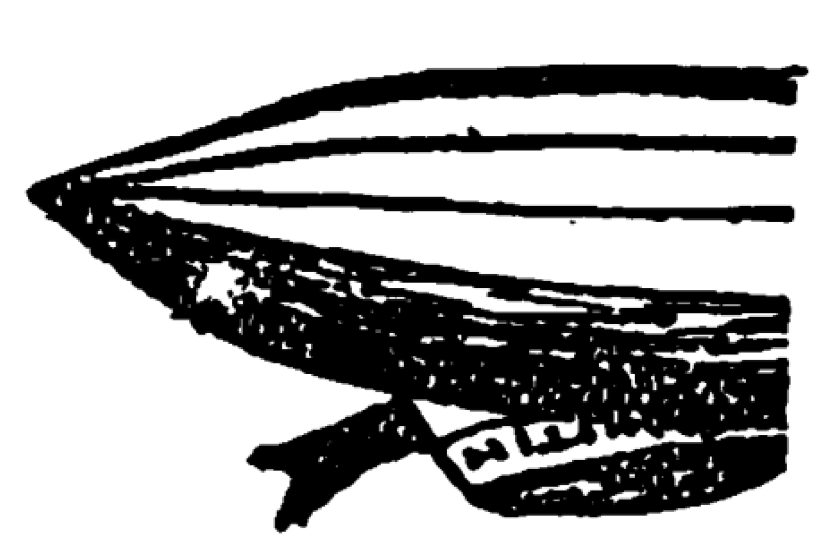
——私、買ひ物かた／″＼、ちよいとそこいら見て來よう。

——そう、大丈夫、

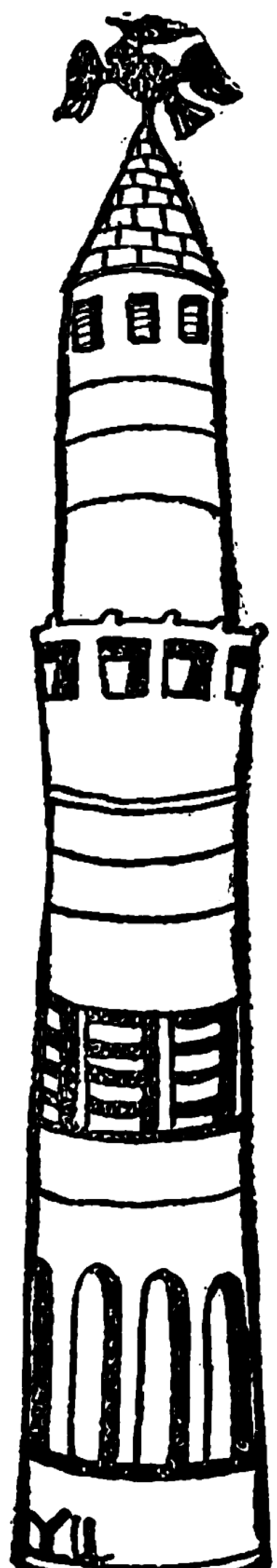
——大丈夫よ。

ガラ／＼と格子を明けて出るお淺の後から、勝枝も、玄關の外に首を突き出して、あたりを見廻した。

——まだ、大丈夫らしいわね、



肩をひよいとすぼめて、振り返つたお淺に、
勝枝も、首を縮めてうなづいて見せた。
お淺は、重の好きだつた豆大福を、近所の餅
屋迄、一走りして來るつもりで、右の方の小店
の並んだ街に折れた。
一町ばかり歩いて、四ツ角の呉服店の、飾窓
に目をやつた時、お淺は、見覺へのある、いや
な人影を見つけた。ハツト思つて立ちすくんだが、洋服を着た二本
の足が、こつちに動き出したのを見て、往來の右側に片寄つて歩き
出した。
秋風に、呉服屋ののれんが、大きなぬひとり文字を、滅茶苦茶に
見せて、ハタ〱とゆれてゐる。
お淺は、畜生！　と齒を喰ひしばつた。
度胸を定めて、腕を押へられた時の言葉を用意しながら、向ふか
ら來る男と目を合はさない樣に、電燈器具屋、絲屋、文房具やと、
小つぽけな飾り窓一ぱいに擴がつた、店の品物に目をやり乍ら、お
淺は、ゆつくりと歩いた。
段々近づいて來る男の腰から下を、右側の店をのぞき込み乍ら、
左の目がそれを受けとつてゐた。
煙草屋の前に來た時、男の足の方向が、急に斜に、お淺の方に近
よつて來るのを感じた。
お淺は、本能的にタバコヤの中には入つて
ゐつた。
突嗟の間に
——ハギの五匁入を下さい



と註文した時だつた。
——よう……どこに行つて來た？
あく迄圖々しく、無遠慮に、お淺の側にすれ〱により乍ら、後
から來た男が、おひかぶさつて云つた。
毛穴のすく程の惡感と侮蔑がお淺の身内を走つた。とぼけた樣に
上膊を出して振り返つたお淺の言葉は、ゆつくりと落ちついてゐた。
——私、どこにも行きやしない、そこ迄買ひ物に出掛た所なの。
金と引換へに煙草をうけとると、お淺は急ぎ足に煙草屋を出た。
男のついて來るのが、判然と感じられた。
——卑怯者！
お淺は、思ひ切り侮辱して、ぺちや〱にやつつけてやりたい衝
動にかられた。
が、お淺は、根生のいやしいこいつらを相手に、きたない言葉を
くり返す事が、先刻からの、何とも云へぬ快さを、一どきにどつと
ぶつこわし相で、堅く押し默つた。
——何と云ふいやな奴！
重の面影を描き出す度に、和やかにすみ切つていつた先刻からの
氣持は、後に續く黑い人影のために、歩一歩、消されていつた。
餅やに入らうとして立ち止つた時、後の男が追いついて云つた。
——おっ母さん！　今日はどうしても、しばらく來て貰はなくち

やあ——、

——フン、おっ母さんだつて——

いやなものをせぐり上げる様に、鼻でせゝら笑つて、お淺はきつとなつて云つた。

——止しとくれよ、おっ母さんなんて——

——私しや、何にも、あんた達におっ母さんと云はれる程、つくしてはゐないよ、

男は、ニヤ〲と笑つて、ずる相に口をゆがめた。

——そんなことあどうだつていゝよ、なにもそう云ひたくはねえんだから、……とにかく、今すぐ×迄來て貰はう、

少し面倒だと思つたので、お淺は餅屋にはは入らずに、きびすを返して、家の方に歩みかけた。

——そつちぢやあない、こつちだよ、×は、

——そんな事はちやんと知つてます。だけど、何だつて私が××に引つぱられる事があるのです。私は家へ歸るのです。あんたも知つてるでせう? 今日は亰の命日です、

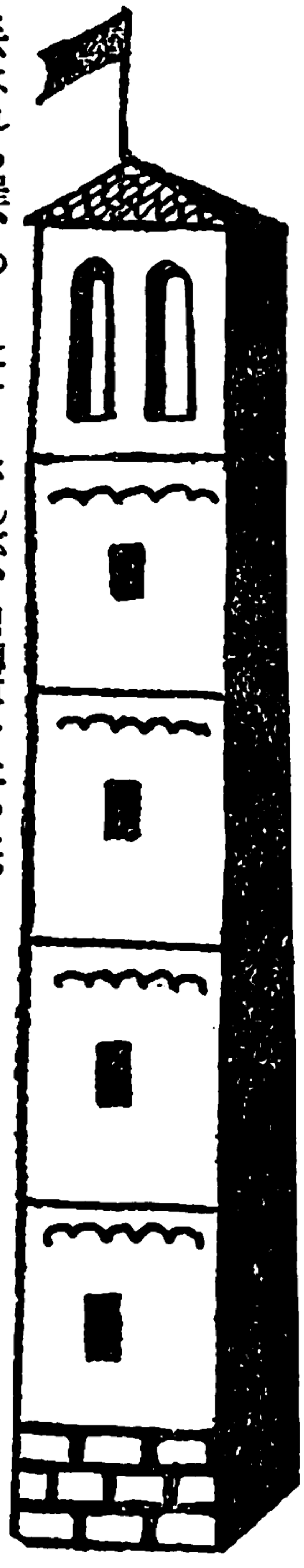
——困るなあ

甘く出れば突け上る。いつだつて奥の手は出せるよ。いやと云へば、引きずつてでも行く。猛虎の様に獰猛さを半ば露骨に、男はぬつくとお淺の前に立ち塞がつた。

——そう、剛情を張るなら、こつちでもやり様がある——

道を通つてゐた子供連れのおかみさんが、子供に指さして何か云つて振り返り、酒屋の小僧さんが、自轉車を止めた。





面の皮を引きむしつて遣度い。呶鳴り度い言葉をぐつと胸に押へて——よろしい、行きませう。

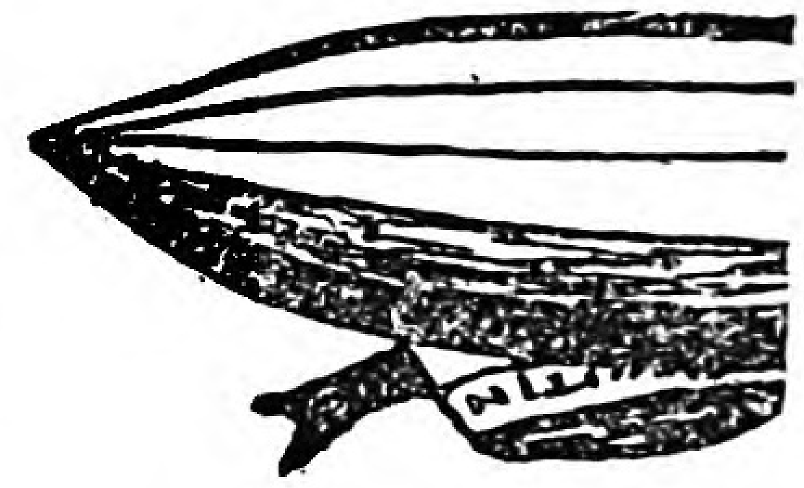
お淺は前に立つて、スタ〲と歩き初めた。

お淺には、今日の集合をすつぽかさねばならない破目になつた事が一番に考へられた。どうにも殘念でならなかつた。その他に、重のこと、お由のこと、勝枝のこと、次から次へと、×××××××戰つてゐる、多くの顏が浮んで來た。

警察に來て、お淺は初めて、今日の檢束が、集合出席を喰ひ止める、豫備檢束であることを知つた。一等最初に、引つ張つて來た松野が、——今朝どこの集合に行つたかと云ふことを、しつこく聞いた。その次に引つ張り出された時は×××の吉松が同じ樣な取り調べで、お淺の腰骨を、五つ六つ、靴で×つた。日もとつぷり暮れて盥つ辛いおカラで、警察の辨當をすまし、二時間も經つた頃、お淺は、三度目の呼び出しを喰つた。

看守宿直室、小使室、司法主任の室と、狹い暗い廊下を、すり切れた留置場の草履で歩くお淺の右脚は、いくら口惜しいと思つてこらへても、びつこを引きずつた。

高等の部屋には、吉松を初め、署の高等係が、ズラリと顏を並べてゐた。



×されたつて死に切れない憤懣と反抗が、お淺のか細い身體に、執念の樣に、からみついて來た。

吉松は、眞中の椅子に、大股にふんぞり返つて、は入つて來たお淺に、

――そこに、かけろ――

とも云はなかつた。

お淺は、感情を失つた木乃伊の樣に、堅くなつて、顏色一つ動かさなかつた。じいつと、お淺を見据へてゐた吉松が、突然、吐き出す樣に、云つた。

――もういゝから歸してやる。手古ずらせやがるくそ婆だ！

お淺の口の邊りの筋肉が、ピリ〳〵とふるへた。制へつけてゐた感情が爆發して、全身の血潮がたぎつた。お淺はかあッとなつて、兩端の袂を引つ摑んでどなつた。

――くそ婆とは何です。…氣狂ひ婆と云ふなら、わたしは笑つてきゝ流しませう。重を×され、お由を監獄にとられて、五十の婆が狂人にでもなるのは、當り前です。狂人にさした奴は一體誰なんですッ！

松野のかけてゐた椅子が後にひつくり返り、大きな手で、お淺の白髮頭が、わし摑みにされた。

それから先の事は、お淺は餘りよく憶へてゐない。松野の身體にしがみつき乍ら、聲のつゞく限り、どなり續けた事を憶へてゐる。

氣がついた時には、小使室に、布團を柏にしてねかされてゐた。

誰も枕元にゐないのを幸ひに、全身板に縛りつけられてゐる樣な痛さをこらへ乍ら、裏の通用門を探し出して、表に飛び出した。

夢中で急いで、餅屋の前迄來た時、お淺は、大切な落し物をした時の樣な淋しさにおそはれた。

――豆大福は、買へなかつた。集會にも出られなかつた。だが私はこの老いぼれはせい一ぱいの力で――戰つたんだ。

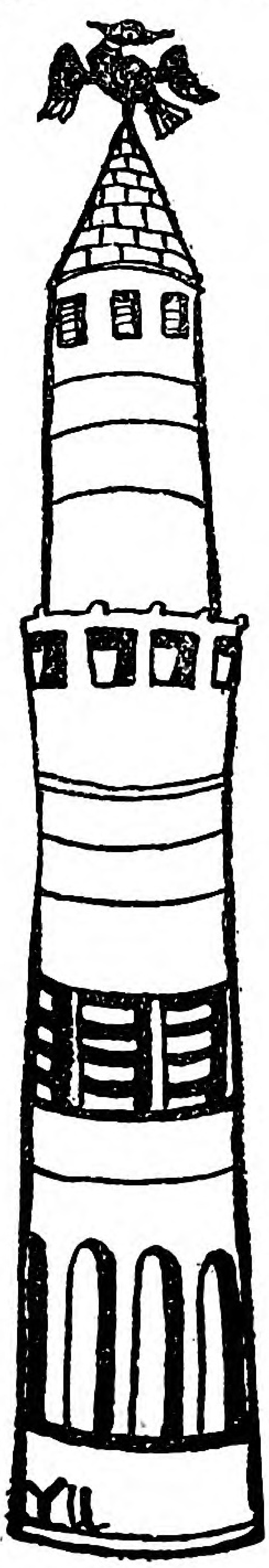
もう、どこの店も戸閉りをして、店の明りを消してゐた。

お淺は、今日初めて、重の母親として自分の中にもつながつてゐる、不思議な力を感じた。

――明日は、お由に面會に行かう、

お淺は、薄明りの夜道を、石ころをけとばして滅茶苦茶に急いだ。

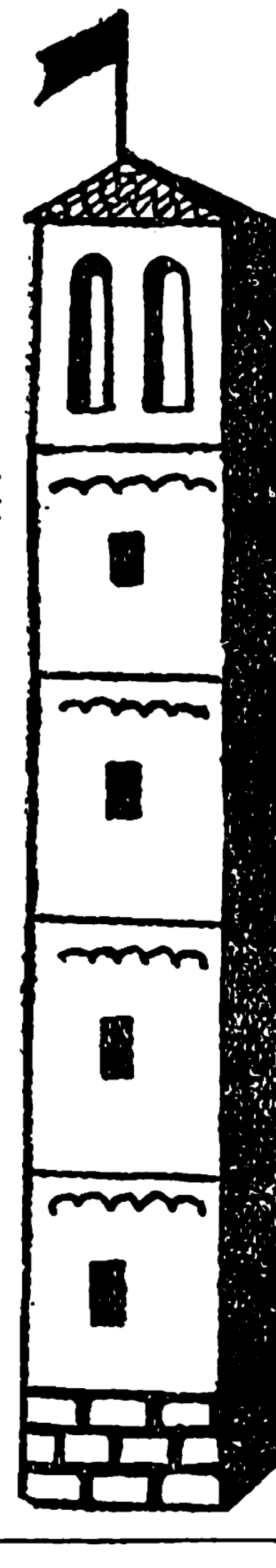
× × × × ×



ビルマ雑記

岡山恒子

一



火のやうな太陽は路上の血痰を消毒するかはりに、癩病患者の肉を一日も早く腐らせやうとしてゐる。

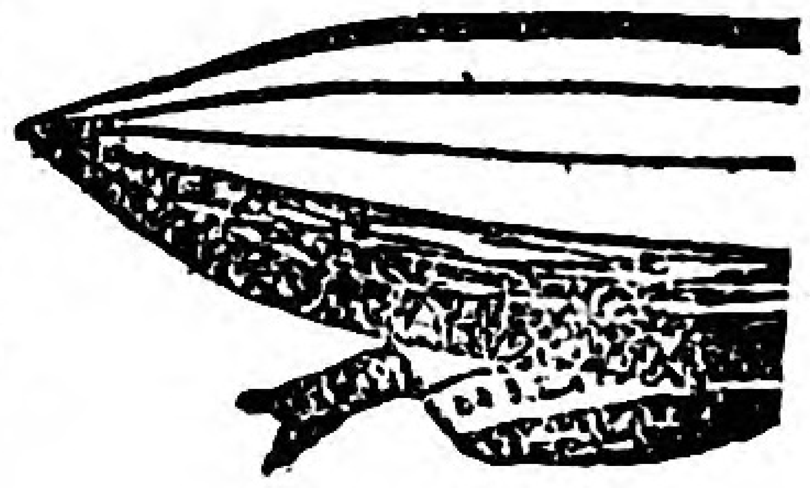
　五十萬の人民を火の太陽の下で見下してヌッと聳えてゐる金色の金塔。中に安置された數千の佛像、林立する無數の小塔の反映に土人のクリーの脊中の汗光り――

　マアテエン（Ma Then と書き甚い年寄以外の女にビルマでは頭文字の樣にMaを使ふ。）は六階のフラットに彼女自身で生活してゐる。百三十の螺旋形の階段の頂きに彼女の住居がある。現代人は高い所を好む。だから崇高な高山や聳立するビルヂングがいかに現代人に魅惑的である事か。それは低い所よりどんなにか空氣が淸淨でもあらうがそれ許りでなく彼女は商賣柄から云ふ雲に近い所に住むのは悪いものではないと思ふのである。それは確に彼女が低い所に住んでゐたなら或は今よりも少し收入が多かつたかも知れない。

　この高い所を訪れる人はその心情も高くなくてはならない。百三十の階段をいとはぬ人はその心臓も強くなくてはいけない。

　匂はしい微風は丈長い椰子の葉を、さら〱と鳴らす。牧歌的な竹笛の顫音は袋の中のコブラ（蛇）迄踊り出させる。――籐椅子にかけてゐる彼女の瞳がぐる〱と、屋上を廻るのはきまつて夜であつた。下から見ると偉觀を持つたビルヂングがそれはたわいもなくひそ〱とバルコン傳ひに、直線を交叉し、囁き合つて、その蒼白い顔を三方に聳えた金塔の五彩の電燈が美しく照り反してゐる。赤いカーテンから夜の月が覗いてゐる事もある。

　彼女は目をじつと瞑るのである。目を瞑るとよけい物がよく見えて來る。シャム人、ビルマ人、支那人、半英人――彼女の血球は互に國民性を主張し合つて甚しく熱い。シャムのカウボーイの群の中にゐるだらう母親。――だがシャムだつて大して歸りたいとは思はない。脊をかむ懷郷の念、さう云ふものは彼女にはあり得ない。今彼女の前にあるものは低い星かと見紛ふ金塔の尖端がある丈けだつた。その尖端にはダイヤモンド、ルビー、眞珠、サファイヤ、ありとあらゆる寳石類が雨曝しになつてゐる。その光りの縞の美しいこ



と何百カラットと云ふ寶石の持つ魅力！

あゝ、勿體ない、彼女はしみ／＼さう思ふのである。それは金色の塔の偉觀や尊大さに打たれる宗徒の心と言葉丈けは全く同じだつたが。そこには、全財産を一つの小さな石に代へたビルマ人さへ數多くあると云ふ。

――どうして貴下はあれを利用しないの？　あそこにはあんなに澤山の貴下達の生活費が轉つてゐるのに。

――ほん氣ですか、あなたは、あの塔の寶石泥棒が、どんな最後を遂げるか知らないのだ。

――貴下は佛敎信者？　塔へ足をかけたものが一人殘らず落ちて死んでしまつたと云ふ傳話を貴下は信じるの？

それは彼女と反英主義のビルマの靑年との話だ。

マアテエンは耳をすました。下のマホメダンの婦人の所の客か、勘定を取りに來るはだしの印度人か、尤も彼女はもの靜かなそのはだしにまで關心を持つ必要はなかつた。何故なら彼女の所へ來る男達は皆靴をはいてゐたから。そして、チーク材の階段を多少音をさしてやつて來たから。



ラングーンの婦人風俗――大體において日本婦人と同じく黄色で、顔は平面的ですが、脊が高くて美しいのが可なりゐます。前に垂れ下つてゐるものはスカーフで、着物は支那服によく似た、しやれたものです。

彼女は彼女の自由職業に就いて少しも、こだはらなかつた。さうしてそれは頗る自由であつた。オフイスアワ――十時A.M.―四時P.M.にこだはる必要は、少しもなかつた。その上休日はふんだんに得られた。丁度此處のバンクホリデーの如く。曰く、キングスバスデー、ニユーイヤー、クリスマス、印度人のお祭り、マホメダンの絶食日、ヤソ敎の安息日、滿月祭、シヤカの生誕、シヤカの入寂、世界平和記念日、ビルマが大英國に屬した日、支那人の舊正月、盆、中秋、等等。

ドアのノックは胸のノックにも通ずる。コツ／＼力強く規律正しいノックだ。マアテエンより先に尻つぽの白く卷き上つた茶色の關東犬（カントン）がグリーンのドアの傍で、しきりに耳をすまし乍らクン／＼鼻を鳴らした。

ハロー！　デイヤー！

――御機嫌はよう御座いますか？　お住居をお變りになつたのじやないかと思つて隨分心配しました。

銀ではないステンレスのお盆にジヲニオカが（勿論黑印）カツトグラスに並々と、冷たく、汗をかいたプレインソーダが、ぶつ／＼

泡立つて運ばれる。カチッ！と景氣のいゝ音がする。ぶら下つた水車のやうな煽風機の四本の手が一本に見える位に活動する。天井の白壁に濃い陽炎のやうな明暗が織り出される。

――ねーデイヤ！　先月の今頃、あなたが仰つしやつた、キスしてしまひたい樣な月が薄紫の雲の間から出てゐる時あなたに御目にかゝつたのでしたつけね？

――じや今夜も上へ參りませうか、

――結構です。サーカスはもう御覽になりました？

――いゝえ。まだ、

――じや、お伴致しませうか、

――でも、私サーカスを見てゐるととても憂欝になつてしまふのよ。

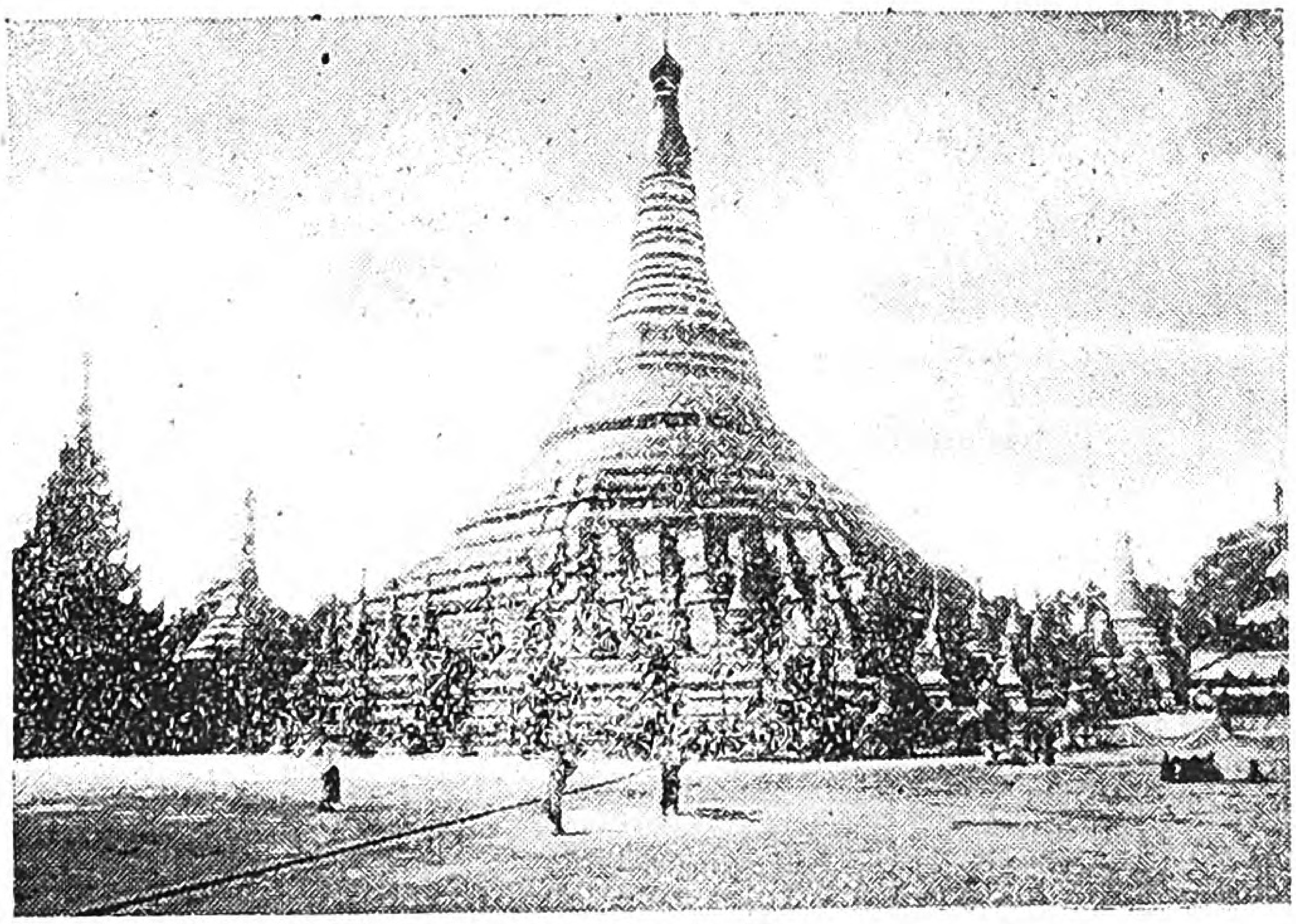
――或は百三十段、お下りになるのがオツクウなんじやありませんか

――オホホホ

――尤も、支那人の子供が一本の竿の上で二重になつてしまふのなんざあまるで一匹の人間が蟹の鋏に單化した樣なものですがね――馬がチヤルストンを踊つたり人間が頭の上の煙草を打つたり、……

――それはさうと、もつと變つた話ないの

――さあー　ウーセンが（ビルマの志士）ハンガーストライキで死にましたねー　それから、この間の三人殺しの支那人の金持が無罪になりましたよ。



ラングーンの金塔の一面――小塔の下の庇の樣なものゝ中には無數の佛像が祀置してゐます。

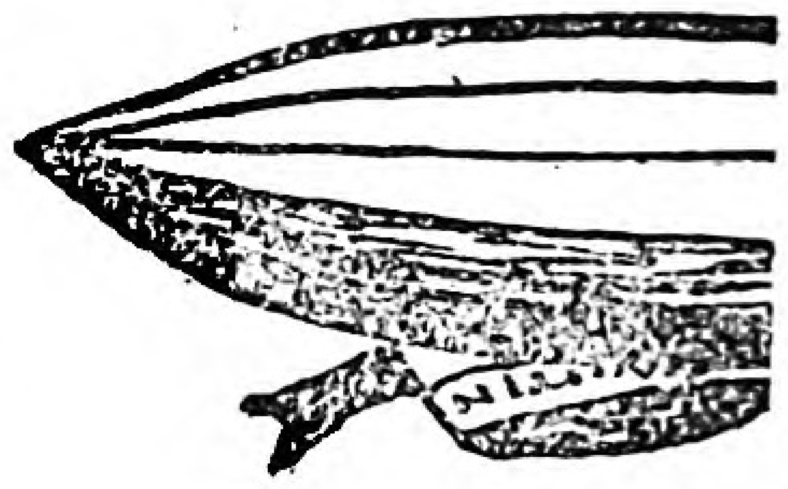
――さうを、あんなに甚い殺され方した女、浮ばれないワね。

――でも、五萬程使つたさうです。一萬六千六百六十六ルピー當りですね、一人の命の價が。尤もいくら割つても割り切れないけど。

三本の菩提樹のふもとに色とりどりのコスモスが咲き亂れてゐるカンナは葉よりも花が多かつた。その他葉先が白く花に變化して行く植物、その周圍に鉢植がそれぞれ趣をこらして靑々と茂つてゐる。一面の芝生傘の樣な二本の門前のマンゴの木、二階建の三方に小さいベランダのある小じんまりしたバンガローにしては庭園が廣過ぎる。それは生活の豐かさを思はして決して土地の過剩を思はせない。

強い光線は肉眼の無力を笑ひ、涙を出させる。南の孤空に純白の綿雲が湧き、その下を數羽の鳶が思ひつきり羽を擴げて舞つてゐる。

――あの方角！



彼女はかすかに呟いて、昨日からすつかり鍵をかけてしまつた三個のトランクを思ひ出した。

　彼女は長い淡桃色に花の油繪を書いたロンギー（女袴に襞をなくしたやうなもので多く草色の絹地を用ひ、ビルマ男女の腰から下に用ふる布）を褄ぐつて下へ降り、今朝から頼んである二臺のニューホードのタクシーに油を入れさせると表と裏に一臺づゝ待たせて、ペンキの香の新らしい電話室へ入つて行つた。

　三千五百八番！　あゝもし〳〵お宅は貴金屬店、ハージー商店？　あ、さう、こちらは、中央病院の院長の家內ですが、一寸ダイヤの指輪を頂きたいと思ひますが至急上等の持つて來て下さいませんか。えゝ、それぢや、じきカーを差し出しますから、どうぞ。――

　百五十番！……中央病院でせう。院長を大至急呼び出して下さいませ。ハロー！院長さんで御座いますか、誠に恐れ入りますがねー宅の主人が商賣の手違ひから一寸氣がふれたやうですから、ほんとうに、困つておりますので、――それに病人がどうしても病院へ行くのをいやがりますから、ほんとうに、すみませんが一寸診察して頂けないでせうか。實はダイヤモンドの商賣に失敗しましてねーもうダイヤの事許り云つておりますので、――じやカーをお迎へに出しますから。どうぞ。

　マアテエンの顏は蒼白く美しく（大抵の女の顏は眼を少し、つり上げた時魅力があつて美しいものだ。）けはしい眉が、下で笑つてゐる目をハツシと受けとめてゐた。

マアキン（Ma Kyin）用意はいゝの？

オーイエス!!

ピンと跳ね返つて來る膝がベッドの二つ並んでゐる室の鍵のかゝつたトランクの下から起きた。

　實行にうつゝたら躊躇しない事！

ともかく前に進む事！

――ねえ姉さん、もう象が鼻を長くして私達を待つてゐてよ。

十哩向ふはシャムの國

シャムは獨立中立國

　さてその結局は、盜人、詐欺、九千ルピー！

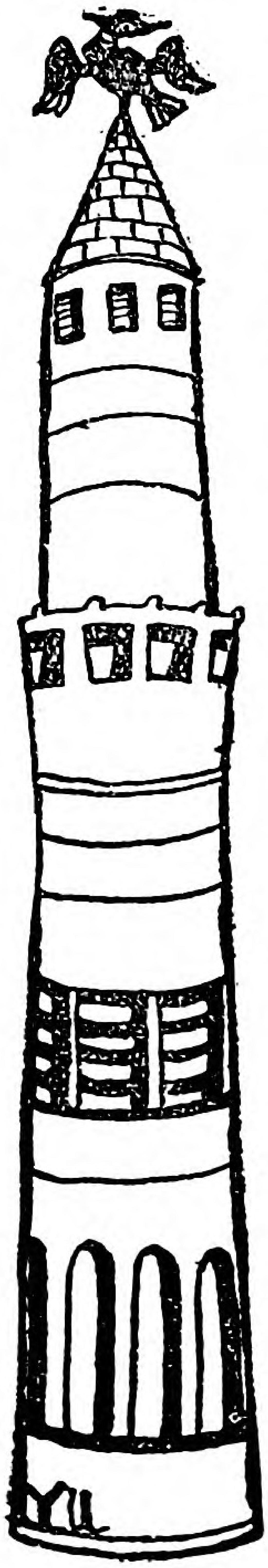
ハージーは赤黒く力み返つて怒つた。目が眞赤に血走つてゐた。異常な力でドクターを毆りにかゝつた。

――拂ふよ、拂ふよ、今直ぐ、……

院長は看護婦に念入れに囁いた。

――精神科の特等室、患者の云ふ事はハイ〳〵ときくんだ。大部ダイヤモンドで失敗して亢奮してるんだ。――

眞劍に反抗する、ハージーは益々狂人扱ひにされ、大勢に手足を縛しめられ、その上四方が、クリーム色の壁で天井に船室のやうな通風窓が一つある中で、全くの精神病患者として鍵をかけられ、三



晩呻吟しなければならなかつた。

九千ルピー！　アー、ダイヤモンド、馬鹿にしてやがる。盗人！泥棒！　畜生！

彼はしまひには、ほんとうの氣狂ひの様に手のつけられないやうに、泣き喚いた。ドン〳〵、大理石の床が空しく反響した。

ハーヂー貴金屬店では、主人がダイヤを持つてふらりと出た儘、歸つて來ないので七人の妾の許へ全部人を走らした。それに二日間かゝつた。が主人は見付からなかつた。家人の胸に重いものが來た隣り村へ行くにも、刀を離さないビルマ人の陰險な黒血がうつゝたハーヂー商店では懸賞付で新聞廣告した。

ハーヂーマホメッドが退院した、（實に退院したのだ。）翌日政府側の一新聞はこの新聞は裁判に持ち上つた以外の事件は餘り書かないのだが、この日は特種の様にこのダイヤモンドの紛失に就いて劇的に報じてゐた。それによると二人の美しい婦人が一月程前、何處からともなく人口十萬程の×町に現れて、早速瀟洒な家を借り、電話まで敷き、上流婦人と交際を初め、その妹らしい若い女は町の金持の令孃や令息と知り合ひになり、テイパーテイー等を開いて、その花の様な姿を惜しげもなく人々の前に曝して、彼らの羨望と讃美を吸集し（その婦人達を見た町の女迄一度は必ずふり返つて立ち止まつたと云ふ。）云々と云ひ、又、當日彼女等を國境まで乘せて行つた運轉手の言によると、二人のシャムの男と二匹の象が彼らを待つてゐたとも云ひ、最後に我が國政府はシャムに向つてこの美しい犯人逮捕を打電したと附記した。――これは犯人に對して、美しいと云ふ形容詞を使つたこの記者に少なからず好意を持つた。

もう一つのタイムスはシャムから手係りなしと云ふ返電があつたと簡單に報じてゐた。

ドクターに對しては多少の非難は免れなかつたが何しろ、犯人なしでは裁判も出來ないからそのまゝになるだらう。何よりも之は英國政府に關係した事件ではないのだから、と或人が云つてゐた。



讀者通信

リオ・デ・ジャネイロ　大石千代子

當地は日本と反對の只今夏に向ひかけて並木の小枝から濃い綠色の葉が潑溂と青空へ跳ね上つて居ります。南國特有の透徹な空氣と光を孕んで、日本とは比較にならない美しさを持つて居ります。人種のるつぼにも似て世界各國の人間が集つて居ります。風景は、世界に比のない特異の秀麗を持つて居ます。發展を祈ります。

若きマドロス

深水澄子

村雨よ出船よ若きマドロスよ小樽の秋はしみじみかなしき

海ぞひの小樽の秋のかなしさよマドロスがうたふ江差追分

秋風は酒場の露西亜の旗を吹きピリカ・メノコの人形を吹く

アカシアの落葉を踏めばかさかさとやさしき音をたつるがあはれ

十字路のたのしき珈琲店(カフエ)よ秋たてば露西亜の布もて出窓をとざす

秋たてばわくら葉よりなほ哀しけれ小樽の海の賣笑婦の群

辻々に玉蜀黍を燒く露店(みせ)の建つがなつかし小樽の秋は

燻製の鮭などを賣る古き家の玻璃戸にそゝぐ小雪はつゆき

燈臺の灯のいろは青秋ふけて雪ちかき夜には星かとも見ゆ

をたる小樽なつかしきかも日本名のルシアンが彈くかのバラライカ



飛べない小鳥

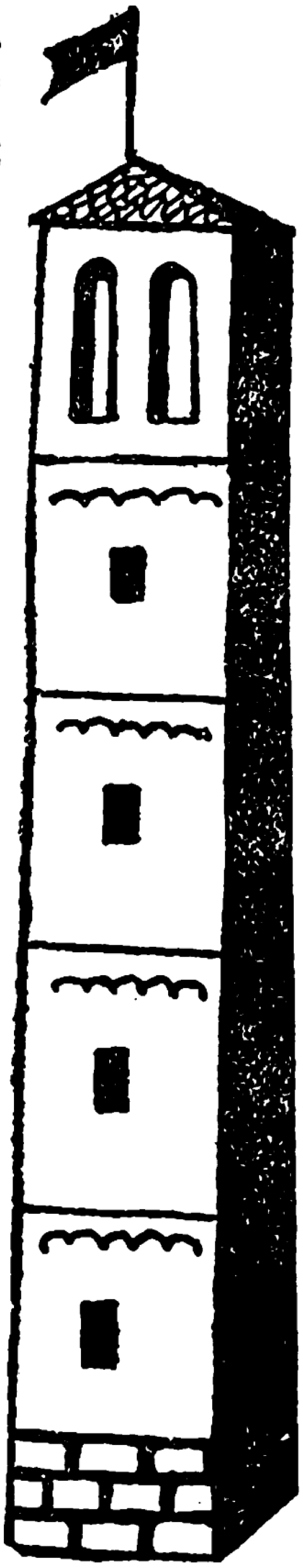
山縣章子

――小鳥の爲に――小鳥が死んだ爲に――いえ！私が殺した爲に――父はあの世へ逝つてしまつたのだ……

父の亡くなつた當時九歳だつた私の小さい胸にはかうした惱みが渦まき〳〵して私をおびえさせ、苦しませたのだつた。そして當分は庭へおりたつ小鳥を見ると、全身がズーンと地中へ引込まれるやうな、何とも言はれない恐ろしさを感じて、思はず家の中へ飛びこむ事が度々だつた。

尋常科二年の年の――長い夏休も、蛙が虫を呑みこむやうにパッ〳〵すぎさつてしまつて、あと四、五日しかないと思つた日のたそがれ時だつた。

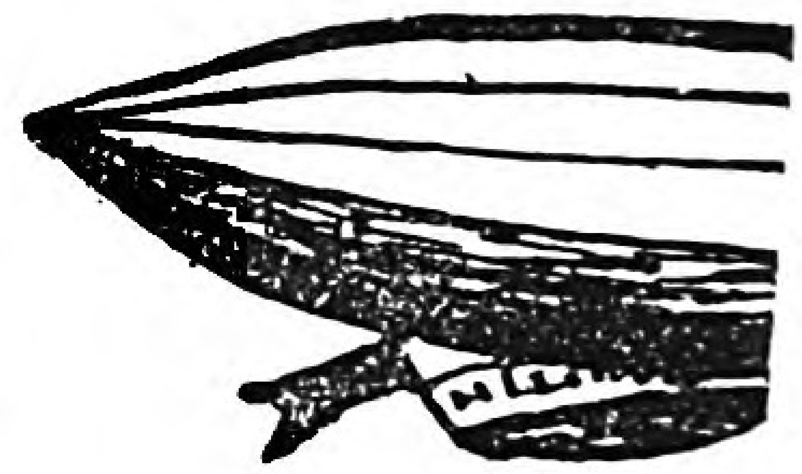
――私の父はその頃胸の病で、床上に呻吟してゐた。丈夫だつた頃にはよく戯言を言つたり私をだきあげたりして喜ばせてくれたが、病床についてからは妙に氣むづかしくなつて、毎朝お早うございますと病室に顔をのぞけても、お早うとも言つてくれなかつた。うるんだ目をじつと私の方へむけるばかりだつた。それが私にはにらむ様に見えるのだつた。その頃にはもう痩せて〳〵顔の相が大分變つて來てゐた。かどばつたつやのない顔にくぼんだ熱ばしつた目がどんよりと生氣なくむけられると一種の凄味にうたれてこはい程だつた。



母は終日父の看病に忙殺されてゐて、私にはおやつをくれる位なことで、私の話す夢の様な話などをゆつくりと私の心になつて聞いてくれるなんて事はちつともなかつた。「ねえお母さん。私ね……」などと母の後をつきまはらうものなら早速「つうちやんのおうちへ行つてお遊びなさい。お母さんはお父さまの御用がありますから……」と遠ざけられてしまふのだつた。

いつもお手玉や、お人形遊びの相手になつてくれるぢいやでさへも、その頃は臺所一切を任せられて目をまはしてゐた。で結局は、家の中では一人ぼつちの私だつた。淋しい氣まぐれにオヤマノタイショウ――オレヒ――トリ――などと歌ふ事さへも絶對に出來なかつた。一寸でも口先から出すとすぐさま

「お父様が御病氣だから靜かになさいね。おなほりあそばしたらいくらでもうたつて聞かせて頂戴」



父母に聞かせるためにうたふのではなく、自分の佗しいやるせない心を慰めやうとしてうたふのだけれど、かうして中止を命ぜられてしまつて、舌の先まで出かかつたのは、唇をかんでのみこまなければならなかつた。

——淋しいつまらないおうちだ事——

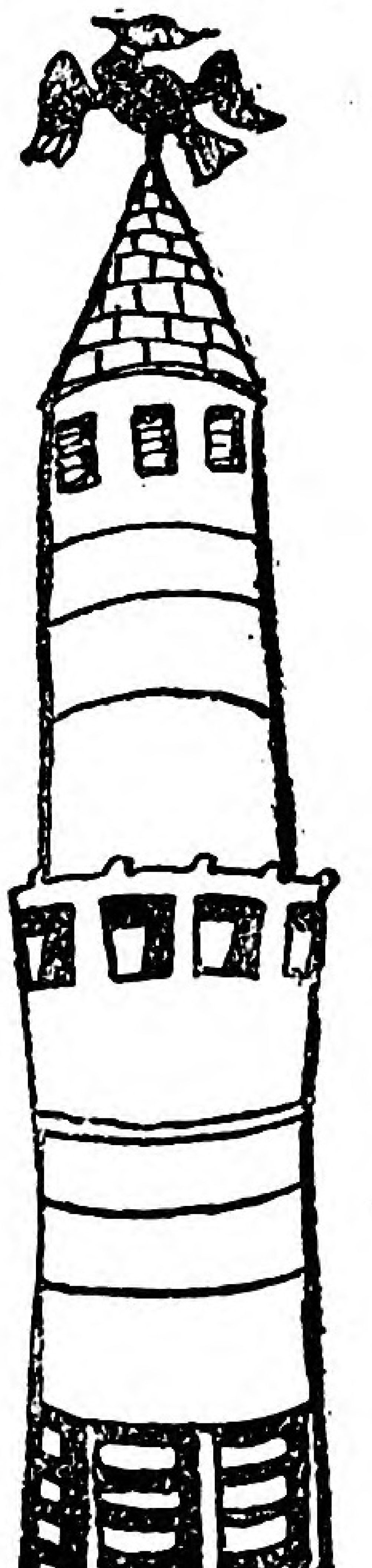
沼の底のやうな、冷い息づまるやうなおうちに、微細な氣をくばつて、飛び立たうとする心をも抑へ、歩くにも音をしのばせ、息すらかすかにするやうにして、一日々々を送る事は、幼い私には牢獄になげこまれたやうに苦痛だつた。したがつて、つめたいおうちに居るよりも、自由に飛びまはり、うたひ、騒ぐ事の出來る外が唯一の境地だつた……

で、その日も私は仲よしのつうちやんと二人で、外に出て自由に遊び耽けつたのであつた。

陽はサヨナラしてしまひ、薪や竹を町へ賣りに出た人達が、ノレンをわけて、極樂酒を一杯のんだのか、口輕く戯言をたゝきながらカラになつた車をカラ〳〵とひいて歸つて來る頃までも、二人は白壁の土藏の下で、まま事に餘念がなかつた。

「お孃さま——」歸りの遲い私を迎ひに來たぢいやの聲にハッと氣がついた私だつた。

ぢいやの後についてうたをうたひつつ歸る私も門前の石段の所まで來るとバッタリうたふのをやめなければならなかつた。丁度其の時だつた。ほの暗いもののひそみはじめた右手の垣側のツツジの根本でガサ〳〵と音がしたかと思つた途端、パッと一羽の小鳥があはてふためいて飛び立つた。あつ！と思つて足をとゞめた瞬間もう小鳥はチイ〳〵と鋭い絶叫を空へ殘してパタ〳〵とあへぎ〳〵地上に横たはつてしまつた。



半ば視力を失つた頃に、あまりにあはてふためいたためか、出つぱつた物置長屋の高い板塀に、嘴をひどい勢でいや！と言ふ程ぶつつけたらしかつた。羽を亂してぐつたりとなつて息づいてゐる軟い塊をぢいやはこは〴〵つかみあげた。小鳥は逃げやうともせずなすがまゝになつてゐた。嘴のつきぎはには紅いものがにじんでゐた。ぢいやは私の掌にそつとのつけてくれた。丁度あつたかい眞綿をのつけた樣だつた。せはしく苦しさうな息づきが掌にはつきりと感じられた。

——その鳥の名が何であるかは知らなかつた。今も知らない。同じ風な小鳥を時々見るけれど强ひてその名を聞く勇氣はない。恰好は目白などよりはまだ小さくて全身黒みがかつた……綿でこしらへた樣なまあるい小鳥だつた。

翌日私は珍らしく外に出なかつた。出なくてもすんだのである。淋しさを消してくれる可愛い小鳥が籠の中にうづくまつてゐたから——

ぢいやにねだつて餌をこしらへてもらつた。そしてあの可愛い嘴

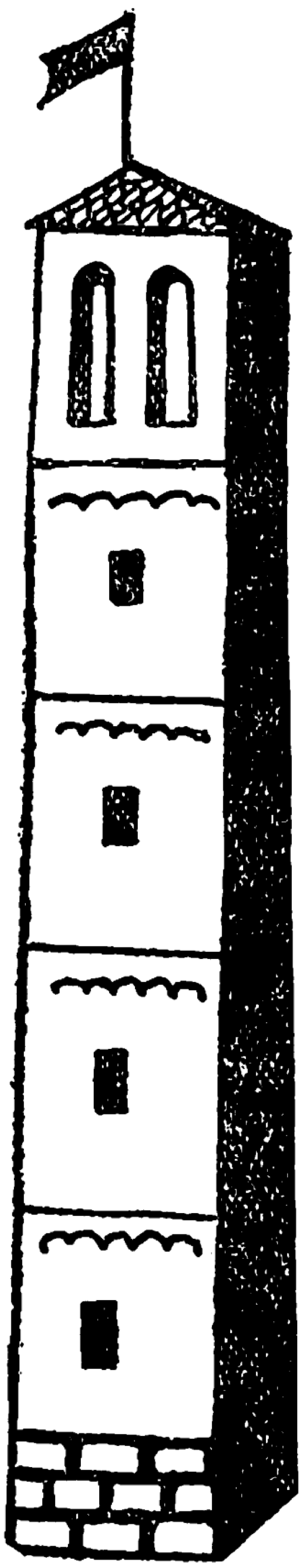
をどんな風にしてたべるのだらうかと、にらめつこする様にみつめてゐた。私は無上にうれしかつた。鳥籠に顔をすりよせて色々な幻想をむさぼつた。おとぎ話にあるやうに、今に私はこの小鳥とお友達になる：：そして手にとまつたり肩にとまつたりして仲よくなる：：小鳥の言葉がわかるやうになつて面白くお話する：：私は夢のやうな事を思ひ續けて夢中になつてゐた。しかし肝心の小鳥はそんな事などは露さとらず、愛されゝば愛される以上におとぎ話にいい氣になつてゐる孃ちやんから遠ざかる苦心に可憐な胸をいためてゐたのであつた。あたへられた餌には見向きもせず籠のすみの方にまんまるくふくれてヒーヒーと今にも消えいる様な聲を出して鳴いてゐた。

ヒーヒーと絞るやうな聲を出すたびに綿毛のやうな羽のさきがこきざみにふるへた。――まだ嘴が痛いのだ。よくなつたら元氣になるだらう。そしたら段々となれてくるにちがひない――

私はさう思ひすましてヒーヒーにはあまり氣をとめてゐなかつた。

「にがしておやんなさい。出たい――出たい――と言つてゐるじやありませんか」

母の目からは、弱々しくふくれてゐる小鳥を籠の中でヒ――ヒ――言はしてるのが慘酷に見えたのであらう。見かねて注意した。然し單純な心で、幼い空想がやがてははれやかな現實となつて自分をとりまいてくれるものと、固く信じ、樂しんでゐた私は、母の言葉などに從ふはずがなかつた。



「出たいのじやないのよ。お口がいたいいたいと言つてゐるのだわ」

小鳥の言葉は私のみがわかると言ふやうな言葉つきで、母の言をパッとはねのけてしまつたのだつた。

「お孃様、逃がしておやりなさいませ」

その日の晝頃に、出入りのぢいやが來たので私は早速手柄顏に鳥籠をもつて來て、ぢいやの前に置いた。と、ぢいやは一目見て、沈んだ語調で私にあたへたその一言に私は自尊心をきづつけられてむつとした。

ぢいやはとても信心家であり、又すばらしい迷信家だつた。

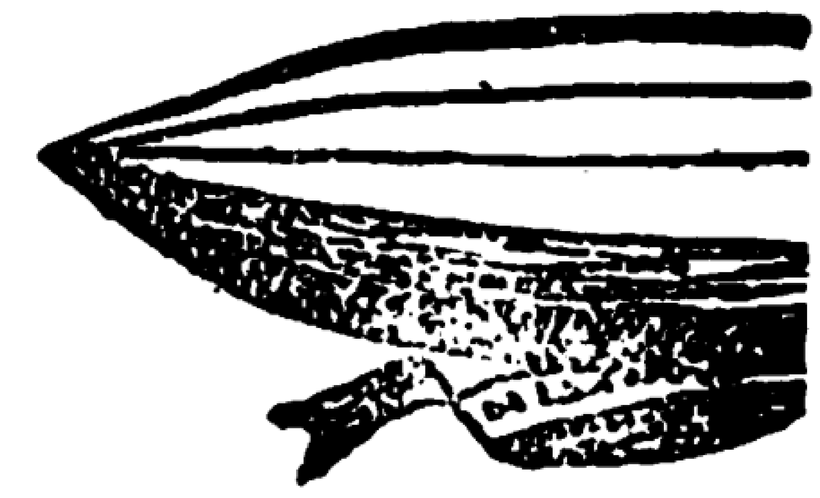
私は鳥籠をかゝえあげると、プーとふくれて白い目でぢいやをにらんで

「ぢいやは、きつとそんな事を言ふだらうと思つた――」とまけおしみにつぶやいた。

「それが平常ならぢいやは何とも言ひませんけれど、今はお父様が御病氣なので：：：」

信心家の迷信家のぢいやの語調は相變らず、おもりをかけたやうにズシンとしてひゞいた。

「お父さまが御病氣ならどうしていけないの?!」



「それが――お孃樣、もしもその小鳥が死んだりしたために、お父樣が……」

キセルをつまぐりながらふしめがちにボッポッと漏らすぢいやの言葉はこゝでぷつつりきれてあとはほつとためいきで補はれた。

ぢいやの言葉には、はつきりとある暗示が閃いてゐたのだつた。私はそれ以上さからふ事が出來なかつた。と言つても「ぢや、逃がすわ」と言つてすぐ其の場で鳥籠の、戸をあける程の從順さと勇氣とは持つてゐなかつた。

勝氣な私は、平面だけはどうしても反對してゐる風を示したかつた。じつと小鳥をみつめてゐた私は、恐しく苦い空氣にとりまかれて堪えがたく、パッと座をけつて立上るとさつさとはなれへ鳥かご諸共ひきあげた。

今まではヒーヒーと鳴いてゐた聲も、痛い〳〵と聞えてゐたのだが、ぢいやの言葉が耳の底にこびりついた私は、はなれで心おちつけて聞くと、ヒーヒーが、雨の日の葬式の時の鐘の餘韻のやうにおもはれはじめた。黑く濡れた瞳は何かを哀願してゐる樣に見えた。小鳥に對する興味が次第にうすらぐと共に異樣な不氣味さにおそはれはじめた。

――小鳥が死んだりしておとうさまが――

私はハッと身振ひした。

――逃がさう！　逃がさう！――

胸がどつ〳〵と大きい音をしてうつてゐるのを覺りつゝ籠の戸を開いた。然し悲しいかな！もう小鳥は自分で外へとび出る程の力を失つてしまつてゐた。私はそつと摑み出した。そして裏畑にもつて行つて、草の繁みに置いてやると、後をも見ずに、狐におつかけられたやうにどん〳〵飛んで歸つた。息ぜはしく、鳴つてゐる胸の動悸を抑へて、ぐつと唾をのみこんだ。

――逃げる事が出來たかしら？――

他の事は何も手につかず、ぼかんと緣に腰かけて、小鳥の事ばかり思つてゐた。行つて見やうかしらと思つては恐怖を覺えて、思ひ止つたが、夕方になつて、どうしても行つて見なければ氣がすまなくなつた。

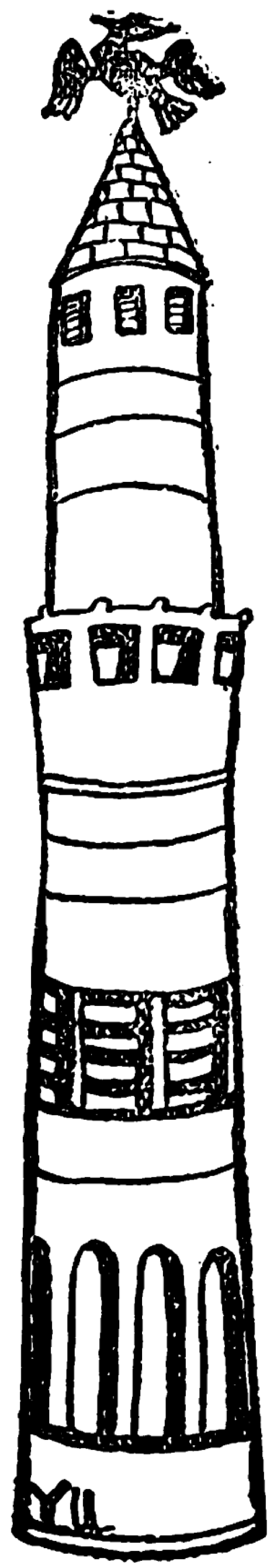
大きい扉を開くやうな心持で一足々々草の繁みに近よつた。ヒーヒーと言ふ聲は、耳をいくらすませても聞えてこなかつたので逃げたのかしらと、稍々心強く又何だか淋しい氣持で草をわけた。

小鳥はやつぱり逃げないで――否逃げる事が出來ないでうづくまつてゐた。目を閉ぢてゐた、時々ぴりつ〳〵と體をふるはせた。もう鳴く力さへなくなつてしまつてゐた。

――死ぬんじやないかしら――

ふと悲しさが掠めてとんだ。

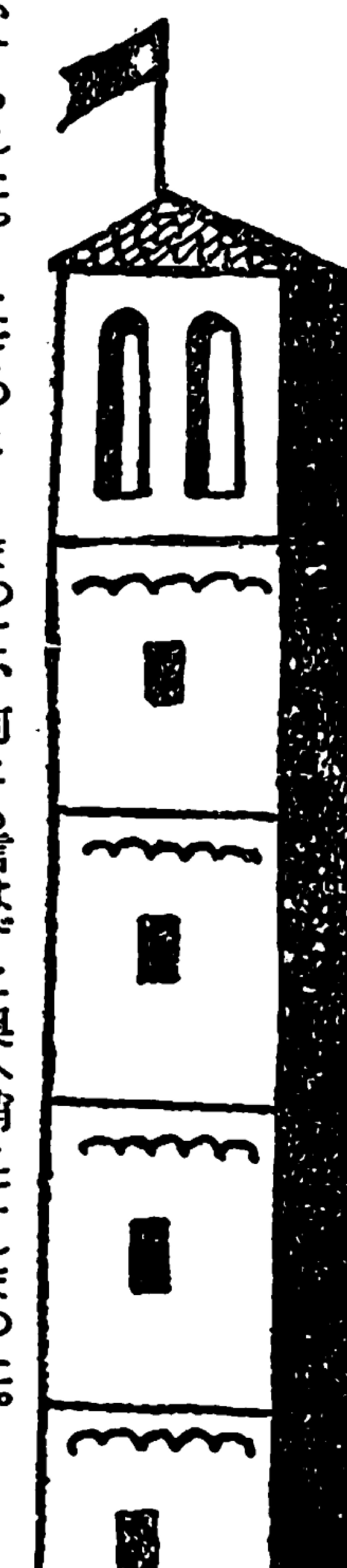
其の夜はどうしてもねつかれなかつた。ぢいやの顏。そして父の



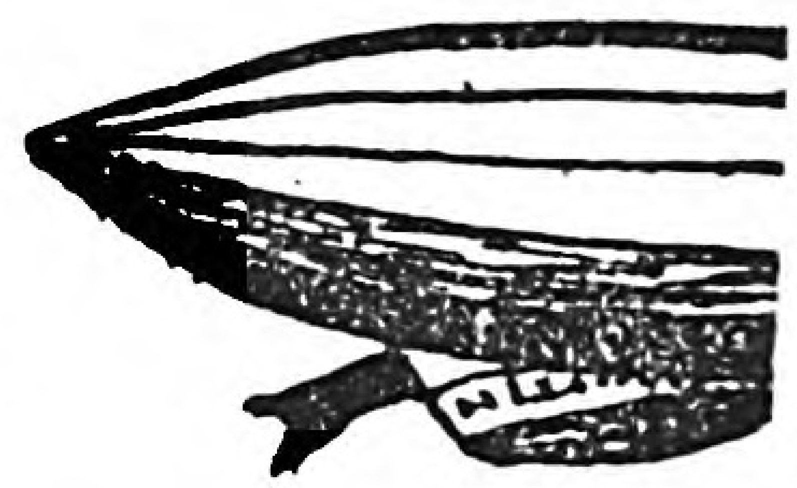
灰色の顔小鳥の目、ヒーヒーの聲。それらがこんぐらかつて熱した頭を往來した。
　翌日私は顔も洗はずに、引きつけられるやうに裏畑へと飛んだ。重大な使命を果すやうな嚴かな氣持で——
　草むらに立つた時私は全身冷水を浴びせかけられたやうにぞつとして、倒れさうになつたのをあやふく側の夏蜜柑の木にさゝえられた。
　小鳥は——あの可憐な小鳥は魂を永遠の彼方へと投げ、冷い骸となつて横たはつてゐたのだつた。羽毛は夜露でよじれて、長くのびてぐつたりとなつてゐる首の毛の間からは氣味の悪い肌が見えてゐた。そして……そして毛の間をわけて、蟻が無數にとりついてゐたではないか……
　あの可愛い小鳥でも死ぬとこんなに醜い無慘な姿になるものか！艶々しい羽毛だと思つてゐた毛が汚れ腐つた綿よりもまだあさましいものに見えた。
　泣かうにも泣かれない程氣が遠くなつてしまつた。



　家の中が妙に落付かず、母の顔色が變だと思ひつつぢいやによそつてもらつて御飯を頰ばつてゐた所へぢいやが唯事ならぬ様子でやつて來た。
「ぢいや、小鳥は死んじやつたわよ！」
　御飯を口へ入れた儘、もぐ／＼と言ふとぢいやはさつと顔色をかへたが、深くうなだれてしまつて、何とも言はずに奥へ消えてしまつた。



　母は私にそれとは言はなかつたけれど、醫者が馳せつけたり、叔母が息をせききつて來たりしたので、お父様がお悪いのだと直感した。そして秘かに不安な心を抱いて、つうちやんが遊びましよと來ても用事があるのよとことはつてしまつた程だつた。
　瓦の上に、石の上に、草木の上に降り注ぐ日光も早や秋だ！と告げてゐるやうに見えはじめて、九月一日の新學期が、長い夏休が幕を閉ぢると共におとづれた。
　元氣な友達の顔を見て、始業式も終り、日でり道をスタ／＼と我が家へ歸つて「たゞいま」と勝手口から顔をのぞけると、ぢいやが飛ぶやうにそばへよつて來た。
「お孃様！奥様がさつきからおまちかねで御ざいます。お早く旦那様の——」
　あとはブツ／＼と何を言つたのかわからない程小聲になつてしまつた。はれぼつたい目をよけいはれぼつたくしてゐた。
「章子！まつてゐた——」病室にはいると久しぶりに——ほんとうに久しぶりに——父は私に言葉をかけてくれた。枕もとに母と叔母とが血の氣のない顔をしてじつと一所をみつめてゐた。
　——唯事ではない！——



不吉な豫感がさつと走つた。

「章子。お父さんはもう駄目なのだよ。遠い所へ——遠い所へお前達から離れて行つてしまふのだよ。早く大きくおなり！そしてよく勉強して、お母さんのおつしやる事をよく聞いて立派な人になるのだよ！」

とぎれ〳〵全身の力を言葉に注いで苦しい息のしたから私を見すえて言つた。言葉の間に息をつくその聲が、あの小鳥のヒーヒーとなく聲に思はれて、私は、小鳥が死んだやうに、父ももうあの世へ逝つてしまふのだと今でもなほ其の時の心持が思ひおこされる程はつきり覺え得たのであつた。

そして父の言葉が終ると同時にわつと其處に泣き伏してしまつた。

「泣くんじやない。お父さんはだん〳〵目が見えなくなる。笑ひ顔を見せておくれ。章子の笑ひ顔が見て死にたい——」

私はなくまいと努力したが、涙は意地惡く拭つても拭つても流れ出して、父の顔をぼんやりとかすめてしまふのだつた。

父はたう〳〵亡くなつてしまつた。私は大きい罪を犯した者のやうに小さくなつてふるへた。馳せつけたぢいやが刑事のやうに恐しかつた。

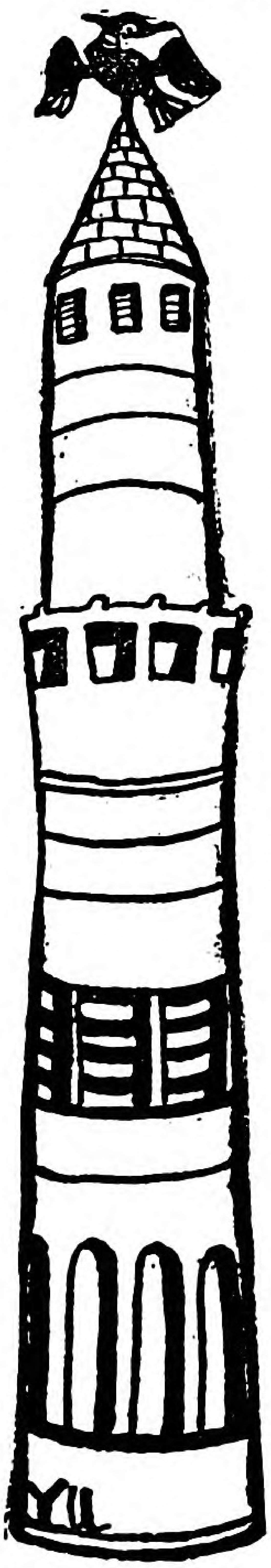
枯木のやうな手をしつかと胸に組み、天上の世界に住む人のやうに尊い父の死顔が目について、悔恨と、恐怖に小さい胸は張り裂けるばかりだつた。もしも其の時ぢいやが、「私の言つた通りにお父さまは——」とでも言つたら私は卒倒したかも知れなかつた。

焔のやうに燃えたつ悔心は泣いても〳〵涙位では消えなかつた。自分の泣き聲までがヒーヒーと響いて胸に喰ひ入つた。泣き顔を見られるのが恥かしくて押入れの中に這入つて思ふ存分泣いた。

「お父さま！お許し下さいませ。お母さまのおつしやつた事をきいて、あの小鳥を逃がしてしまつたら、お父さまはもつと〳〵いえ！いえ！御病氣がおなほりになるのでしたでせうに……章子はいけない子でした。章子のためにお父さまは……」

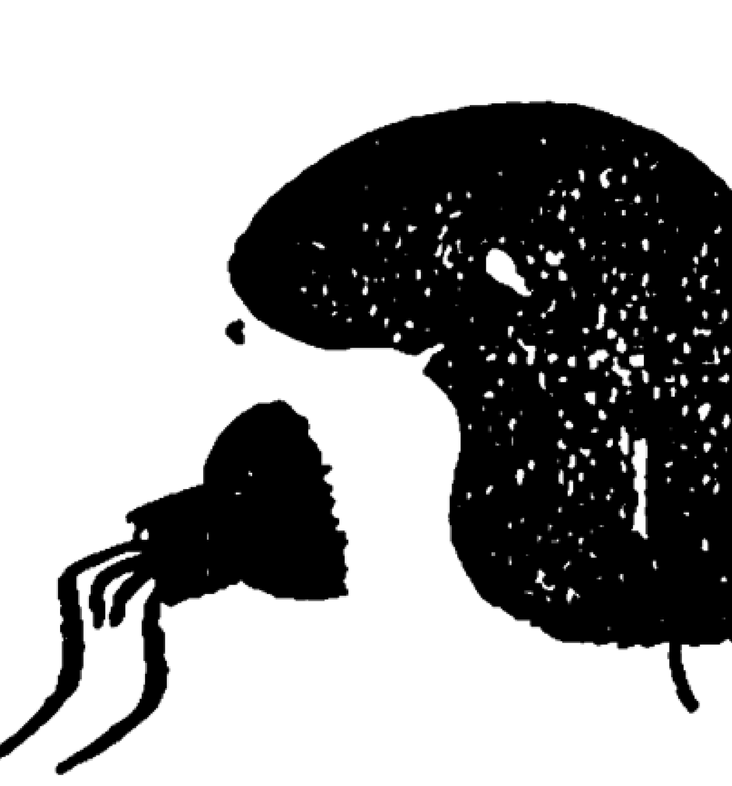
詫事をくり返しくり返し袖がぐつしよりになるまで泣き震へた。母の目がまつかになつてゐるのを見ても、自分で自分をさいなむのだつた。悔みに來た人達が、まだお若いのに、と言ふ度に、私は針をさゝれる樣だつた。

小鳥の死と、父の死、そこには何等の關係もなく、神秘的なものもない。唯自然のなりゆきでさうなつたのだ——と思へばそれまでの事だけれど、私はどうしてもそんなに、あつさりと簡單にかたづけてしまふ事が出來ない。何かの目に見えない糸でつながれてゐるやうに思はれてならない。今でもずつと年よつたけれども相變らず訪づれるぢいやの、何事にも信心と迷信でかたまつた頭で判斷をくだす力が偉大なものに思はれて、ボツ〳〵と落付いて語る言葉に心をうたれて、耳を傾ける私なのである。



續地獄の反逆者

松村喬子



菊岡 雅子

トイチハイチ

片隅に少しばかり咲き亂されてゐるコスモスによつて、秋の季節になつた事を知らせてゐる難波病院の五寮の六番の室からは笑ひ聲がもれてゐた。

「アー、病院流れて警察燒けて、親方コレラで死ねばよい」……

遠くの廊下から聞えてきた病院唄、決して無意識では唄へない文句であつた。

爛れた肉とすさみ切つた魂、頽廢と病毒と醜惡しか知らない脫けがらの人間がウヨ〳〵してゐる所であつた。病室も廊下もその通りくち果てゝゐた。

絶望のどん底に、生命の限りを夜となく晝となく生きんが爲めに、疲れ果てた病者の譫言で長い廊下を自暴自棄に大きな聲で唄つて歩く者もあつた。そこには、希望も熱も見出せない。たまに元氣よくはしやいでゐる者があるとすれば、それはヒステリー強い女の、やけくそのはしやぎ方である。

廊下の手摺に寄りかゝつて庭の營養不良の小さいやせた楓を眺めながら梅之介は一つ大きな吐息をついた。夜も晝もない難波新地の享樂の巷で酒と茶屋と男より外のにない日夜に自分の體だか人の體だかさへ解らない程痲痺した神經も、この病院へ入つて色々の事を見せつけられては、今迄人事として考へてきた事が空おそろしくなつた。

こゝに居る人達にも一度は純な處女の時代もあつたらうに。そしてやつぱり家庭の犠牲で廓へ身を沈めてきたのか知ら？

昨日入院したばかりで室の人達にも親しみの薄かつた梅之介は、松島遊廓と飛田遊廓の柄の惡い娼妓が四五人箱火鉢を圍んで、口から出まかせの事を云つて、興じてゐるのを無意識の中に聞いてゐた。

梅之介は昨日のけんさに、殆ど二年振りで入院してきた。二年前に、まだ店へ出たばかりの時、三日目に入院させられて二年間、無事に入院しなかつたのであつた。

娼妓が客をとつてゐる以上、病院へ入院すると云ふ事は、當然の事であつて、その方が體の爲にも好いのであるが、なぜか昔から入院は親方と同樣に娼妓迄がいやがつてゐた。そして、體が惡いと云ふ事を意識してゐても、檢黴醫の目をごまかして、五日目の檢査にうまく入院をのがれる樣にする者が殆ど全部であつた。中には、守り札を大切に懷に入れたり、お呪をする者さへあつた。入院は辛い、悲しい事と云ふ習慣になつてしまつてゐた。

出ては入り、出ては入院してゐるいち滿は梅之介より二檢査前から入つてゐた。同じ家形で、まだ娼妓になつて半年程しか經たなかつたが、病院での生活の多い爲か、惡くすれてゐた。けれども梅之介は顔なじみの少ない病院で、たつた一人の話相手であつた。

今し方、丁度夕食であるからと云つて、茶碗と箸を持つて食べに行つたのであつた。「チョンが鳴りや廊下バタ〳〵〇〇かきながら、行きなりかぢりつく、櫃の飯」病院唄は、その姿をよく表はしてゐる。

夕食の相圖の拍子木が物悲しく響くと同時に、茶碗と箸を持つて廊下をバタ〳〵走つて行く人の後

姿は、涙なしには見られないものである。

長の入院で差入も見舞もなくなると、病院の御飯がおいしくなると云ふ事も聞かされた。小遣ひに不自由しない者は、食堂の、御飯を、振向もしない。それが亦一つのほこりの様にも思つてゐたから。

「あんな不味いもの食べられるものか―と云ふ事が、――

工場にしても、大ていの場合、食堂が請負で、月に何金と定まつた額が、賄部へ支給されてゐる以上、そこには必ず中間の搾取が行はれてゐる、この病院にしても、請負で、賄の者が請負つて居て月の費用の半分は懐に入れてゐると云ふ。いつも五六百の患者が入院してゐて、三分の一が、食堂へ行かないとしてもそれだけは殘る、まして、潔癖性の者や、小づかひのある者は、その食の不味いのに一度で懲て了ふ程非衛生的な安いものばかりであつたから、大てい、晝の内に、食堂内で、他から販賣される菓子や、罐詰で空腹を滿たして了ふのである。梅之介も、初入院の時、一度食堂へ行つて見ておくだけでも話の種だからと無理に誘はれて行つたのであつたが、きたない食器の中にホンの申わけにお菜が一口程、それも鹽で煮たのかと思はれる色で、鰯の腐つた様なのが盛つてあつたのと、御飯は南京米のボロボロであつたので、一口もつけないで逃げ出して了つた。それでもその時のおかずは御馳走であつたときかされた。それつきり、十日の入院の間、パンとかん詰で暮して了つたのであつた。尤も難波新地だけは、地域的にも病院が近い爲め、朋輩も度々見舞にくるし、難波新地特有の、受持ちの男衆が見舞にやつてきて、公然と許されないが、中で白い御飯が食べられないからと云ふので辨當を持つて來てゐて、面會所の片隅で、かくれる様にして、辨當を食べさせるので、三日に一度、米の飯を食べる事が出來たので、入院中、食堂へ行かなく共、別に體は衰へなかつた。そうして今度も、毎日に一度づゝ、梅之介の許へは、辨當が運ばれてゐた。

重病人の少ない、それでゐて惡い病氣ばかりの患者が居るこの病院では、さして寢てゐなければならない者は別に褥が離れてゐたから踊つたり、跳ねたり、庭で鬼ごつこをして遊んでゐる者ばかりであつた。

いち滿を迎えかた〲、階段を降りて食堂の脇の廊下へ立つてみた。食堂の前の廊下には二番組の食事をする者が二列三列に並んで、先の組の食事の終るのを待つてゐた。七八十人が全部、白いユカタが黒くなつたよれ〱のを着て、齒を入れない櫛卷の頭は油でよごれたまゝで短い手が幾條も頸筋へ落ちかゝつてゐる。伊達卷一つのだらしない格好、一分間もだまつてゐられないで、シヤべりつゞけてゐる。その姿を、一目で好い、彼女等の色男に見せてやり度いと思つた。

先の組が一しきり出て來た。お茶碗に一ぱい御飯を詰め込んで、前かけの下や、袂の中にかくして來る者もあつた。食堂の中では三四人の男の人達が、出おくれた人々をからかひながら、第二の組の入る間を、食べのこりや何かを片づけてゐる。

「姐ちやん、何してんの？」

いち滿は、前かけの下に茶碗と箸をしのばせて出て來た。

「あらもう濟んだの、ずゐ分早いのネー」

「エ、。ほんとうに戰みたいやわろくに御飯を嚙んではゐられへんので、あたし等一杯の御飯でいつも出てきて了ふの。そやから間食が多くなりまんのや、あれみなはれ、御飯を山盛もつて室へ行く人がおますやろう、やつぱり、ユックリ食堂で食べられへんよつてにだつせ、食堂のオッサン達が一寸でも、長く遊び度いもんやで、あんなに早く〱とせき立てゝ、一人でも、後まで殘つてゐたら、キツイ事云やはるの」

怨めしそうに食堂の方をみてゐるいち滿の口からは、腹立しそうな言葉がもれた。

「姐ちやん、こんな處に立つてゐんと、室へ歸りまよナー」

いち滿は梅之介をうながしながら、自分ではもう歩きかけた。
「そうねー、治療場の方から、內科の方へ廻つてみませうよ」
「そうだんナー」
氣の浮かない顏しながら梅之介が、ぐん〳〵歩き出したのでしかたなくくつついてきた。東の側の棟が內科であつた。同じ古い家は、もう二階の屋根がかたむきかけてゐる、二三人顏色の惡い水ぶくれのした樣な女と、皮膚病で、顏から手足一ぱい、吹き出物のした女が歩いてきた。階下の便所の近くにある室で、娼妓の親らしい、田舍者のきたならしいそれでも正直さうなおぢいさんとおばあさんが、隅の方に、二疊程疊が敷いてある處で、小さくちぢかまつて泣いてゐる。その前の寢臺の上には、重態の病人が横たはつてゐた、看護婦が一人付添つてゐる。
夕暮れの寂しさを一しほました。薄暗い室の中は何んとなく物悲しい空氣が一ぱいだ。
「姐ちやん、こんな處で死ぬ人は可哀想やナー」その室の前を通りすぎるとすぐ、いち滿は小聲で云つた。
「私達も早く足を洗つて丈夫な間に廢めませうよ、決して、人事ではないのだからネー」
「エ、あの人は、松島の人やけど、心臟が惡くて入院してゐるのやけど、もう明日まで、もつか持たないかと云ふので、今日、樓主と、親とが呼ばれて、さつき樓主は歸つたのやけど、もうとても駄目らしいのだつせ」
室の廻り角の處へ來てもう一度、梅之介はふりかへつて病人を見た。仰向けにジット横たはつてゐる體からは、呼吸さへ通つてゐるかゐないかわからなかつた。看護婦も只、お役目的に付添つてゐるだけにすぎなかつた。老父母が、只、時々、うつろな目を病人に送るのみであつたが、之とても、何をしてよいか解らぬらしく、二人共悲しげな目をなげかけるのみで、身動き一つしなかつた。
「姐ちやん、こんな處に永くゐたら、へんな氣になるよつてさア行きますよナー、もう暗くなつてきてまんのやで」
梅之介は歩き出した。二人は二階へあがり、一まわりして、廊下を左へ折れた。その一棟は、七ツの治療場になつてゐた。その殆ど全部が、婦人科特有の治療室で、午前と午後の治療の後、誰も居ない、ガランとした室の中には、醫療器と、洗滌器の中に少しばかり殘つたリゾールの溶かした藥が下の方に沈んでゐるばかりであつた。
「姐ちやん、こつちは寂しいから、井戸の祀つてある方から行きますよナー」
いち滿は、横根の手術場の前を通ることをきらつて、人通りの多い電燈のたくさんついて、あかるい方を指して云つた。
「そうね、ぢやそうし樣か」
梅之介は、おとなしく贊成して、その方へ歩いた。そこには、一つの祠が祀られてあつた。小さいけれど立派な社に出來てゐて、いつ誰があげるともなく線香の煙は絕間なく風に送られて、どこともなく消えて行つた。そして、菓子が幾つも供へられてゐた。祠のすぐ脇には、古井戸が堅く蓋をされた上に、七五三繩が張りめぐらされてあつて、古く云ひつたへられた傳說があつた。
松島の一人の娼妓が入院して來た。美しい、おとなしい女であつたので、その當時の醫員が戀してゐた。そして病氣が快くなつても再び廓へかへす事を惜しんで、半年經つても一年經つても全快しないと云つて、廓へはかへさなかつた。樓主からは、嚴しくその女の許へせめてきた。お前の養生のしかたが惡いからだと云つて。そして、何一つ差入れ品をしなかつた、長の入院に誰一人見舞の手紙もよこす者がなく、寂しい悲しい思ひの中に、古井戸の中に身を投げて死んで行つた。
『一つとや人も知つたる大阪の處は難波の病院で―、二つとや、二親は揃つて居りながら、お側で介抱が出來なんだ』……
その歌を殘した、その後、古井戸からは死骸が上らなかつた、そして、何十年經つた今でも、水を掬ふといつも、髮の毛が三筋四筋

づゝまじつてくるとかで、入院してゐる患者は、その井戸をおそれてゐた。それで最近になつて、その女の靈を慰る爲めに、松島の樓主連が集まつて、祠を建立したのであつた、そして、入院中を、その靈にまゐれば退院が早いと云つて、一生懸命に願をかける者さへあつた、中には跣足のまゝ、祠のまわりを百度もグル〳〵廻つて全快の一日も早からん事を祈る者もあつた。

　廊下と庭とでは、夕食後の時間を、鬼ごとをして遊んでゐる者が多く、梅之介といち滿とが柱によりかゝつて話してゐる、すぐ側を四五人で、走り騒いでゐた。

「さ、もうお室へ行きませう、大分暗くなつたわ、」

　二人が二足三足歩きかけた時、いち滿は、梅之介の耳元へ口をよせて、さゝやいた。

「姐やん〳〵、あれ、今、こつちへ歩いてくる大きな人がおつしやろうナ、あの人がトイチだつせ、あの廓つなぎのゆかたの人が、」

「あゝ、あの大きな人?」

「エ、、そうだつせ、その左にゐる人が、あの人のハイチ、だんネ」

卅位の大柄の女が、廓つなぎのゆかたを、廣袖にした丁度男物の湯上りの様な仕立のゆかたに、繻子の黒地に白の一本獨姑の入つた伊達巻を、之も男がしめる帶の様に腰の方へまきつけてゐた。腕まくりして、肩をいからさせて、わざと、男の様な歩き格好をしてやつてくる。その左の方には、それと反對にいかにも女らしく、と云ふよりも女房らしく、髪も同じ梳髪にしてゐても、きれいに、櫛の目が通つてゐた。頸筋から腮へかけて濃くつけた白粉は、ドス黒くなつてゐる。その女と今一人は、只トイチと云ふ者に尊敬の氣持をもち、あこがれてゐる者が、必ず一人や二人はまるで弟子か子分の様に付き纏つてゐる。その種の女であつた。

　――女同志の戀、然も、男にはあきる程數多くの人に接して居り作らまだ、性的にもその女同志で關係を續けて行くと云ふ心理が、不思議に思へてならなかつた。

　梅之介がそんなに不思議さうな顔して見てゐるのにも關はず平氣でむしろ、人に見られてゐることは、自己に滿足してゐる人の誇りであつた。大またに得意な顔で梅之介を尻目にかけて通りすぎた。

「あのハイチは妾で、本妻さんは今入院してゐないので、とても仲がエ、のやワ、」

といち滿は話した。

「そんなに、幾人もあるの?」

「エ、エ、あの男はんは一番かい性もんでよく女が惚れて、まだ澤山あるのやけども、あの人が一番氣に入りで、どこへでもあの女はんを連れて行きやはるのやワ」

とも話した。二人は、だん〳〵遠くなつて行くトイチ達の姿をもう一度、別々の氣持でふり返つて見ながら、五寮の室の方へ歩いた。

「姐やんの室の室長はんナー、あの人は、トイチハイチの仲人はんだんネデ、つまり、トイチハイチの紹介人だんナー、」

「へー、そう、紹介人もあるの?」

　外の事では、すべて姐さんとして、いち滿に敎へてやる方であつたが、病院へ來てはすべてを、敎へられるのであつた。

「晩にはまた、姐ちやんの室へ代る代るトイチがやつてきますよつて私敎へてあげまつさ」

二人が梅之介の室へ歸つた時は、七時のおまわり前で掃除を二三人でやつてゐた。

三十疊も敷いてある古い處々破れた赤ちやけた疊の上に、にぶい電燈の光りが投げられてゐた。片隅にズツト各自の荷物が一列に並んでゐる、新入院患者梅之介の荷物は入口の隅にあつた。メリンスの赤い花模様の、お花に行く時、男衆が持つて歩くネマキ包みの布呂敷で、いかにも淫蕩的なものであつた、食料品は、バスケットに入れてあつて、かん詰類と、梅之介の一番好きな、おかまと雁治郎飴が、きれいな四角の罐に入れてあつた。掃き清められた室の中に入つて、梅之介といち滿は、その入口の處に座つた。梅之介はすぐバスケットを開けて、いち滿にもすゝめながら一つ飴をつまんだ。

「姐ちやん今頃、奴さんや小千代

さんは盛んに、鏡臺の前で白粉をつけてゐるやらうナー」暮れた、夜の世界の色街を想ひ浮べながらいち滿は早く歸り度いと思つた。

箱火鉢を取圍んで、室長のトイチハイチの紹介人とか云ふ松島の三流どころに居る、髮の毛のぬけあがつた、瘦た三十を一つ二つ越した位の山本シゲと云ふ女が主になつて、三州樓の妓や海山樓のおばさん達が、長ギセルで煙草をふかしながら、男の樣な口のきゝ方をしてゐた。

「オイ飛田の東京樓のオヤマ、そんな處で、馬鹿顏して居らんで、こつちへ來い、」

紹介人の山本はそう云つて、押入れの側に、積み切れないでそれでも疊んである、汚いふとんによりかゝつてぼんやりとしてゐる、無能らしい顏付の女に呼びかけた。

「ハー、おーきに」

薄笑ひし乍ら太い聲で返じをしたが體はそのまゝ動かそうとはしなかつた。

人のよさそうな小柄な、三十二三位の海山樓のおばさんも、梅之介達を見ながら云つた。

「一寸南の人、あんた等もこつちへきなはれ、こつちで皆と一緒に話しでもしなはれ、いち滿はんも、ナンヤ、知らん者やなし、こつちへ來て、煙草でも吸ふ樣に云つてあげなはれ」

「どうも有難う御座います」

いち滿は、何か知ら、梅之介に氣がねして、唯笑つてゐた。病院で、ろくな人と仲よくしないから、惡い事ばかり覺えてきて困ると、入院する度に、家形のおかみに叱言云はれてゐるので、梅之介の前では、なるべく、病院での友達には、口をきかない樣にしてゐたのであつた。梅之介は氣を利かして、昨日、入院と定まつて、五花街事務所から、入院患者になつて、各席の娼妓と共に、自動車で送られる時、家形のおかみが、朋輩と共に見送つてきて、見舞の菓子をくれたのを、そのまゝ手をつけてないである包み紙をいち滿に渡して

「之をネ、いち滿さん皆さんに食べてもらつて下さいナ、」

と云つて出した。

「姐ちやん、やらなく共いゝわ、姐ちやんは、御飯食べに行かないのだから、おいときなはれー」、

氣前よく出した包みを、度々の入院で、食物にも、不自由するいち滿は物惜しみした。

「何、かまわないわ、亦、なくなつたら、竹内さんにお小使ひをもらふから、それに食物はこんなにたくさんあるんだもの」

バスケットの中を見せてから、梅之介は、亦、いち滿に進めて、その、栗饅頭や最中の入つた箱包みを心持ち、押やつた。

「そうだつか、ほんなら、あげてきまつせ」箱を手に持つて立ち上つたいち滿は室長の側まで行つて

「樂之助さん姐ちやん、之、うちの梅之介さん姐ちやんから、『皆さんで、食べとくれやす」つて、』

と云つて箱をおいて相手の返じも待たずに元の座へもどつてきた。

「アラ、そう、すまんナー、一寸之ナあー、この南の人がくりやはつたんや、おまわりが濟んだらお茶でも入れて、食べようぜ、皆禮云ひや」

「おほきに」

「おほきに」

と云ふ聲が、幾人かの口から聞えてきた。

「梅之介さんとか云ふ人、どうも濟まんナー、遠慮なしに、もらつときまつせー」

一段と聲を大きくして、室長は禮を云つた。梅之介はあはてゝ少し赤くなりながら、

「アラ、禮なんか云つて頂いては困りますわ、ほんの少しでかへつて口よごしですもの。」

「そんな入口に居らんとこつちへ來なはれ、別に寒くなく共、やつぱし、火鉢のねきがエヽワ」

室長は少しばかり座をあけた、

「エ、有難ふ御座います、また、後程、お仲間に入れて頂きますわ」

そんな話のやりとりをしてゐる時、七時のおまわりのリンが鳴り響いて廊下を走る足音が騷々しく響いて朋輩の室へ遊びに行つてゐた者は歸つて來るし、來てゐた者は自分の室へ歸つて行つた。

やがて、靜かになつて、看護婦

二名と當直の醫員とが室の入口に立つた。そして、二階全部の受持の看護婦が人員點呼をやつて、數を知らせると、醫員と、その晩の當直の看護婦は出て行つた。十分間も、口をつぐんでゐられない連中は、すぐシヤベり出した。一番最後の五寮の調べが終ると、すぐ「お休み」の言葉がかゝつて、それからは、亦、各室から、遊びに來たり、行つたりした。宵つばりの朝寢坊のくせのある人間ばかりであるから、なか〳〵床に付く者はなかつた。一しきり騷いで、それからお夜食をとつてでなければ寢る人はないのであつた。

おまわりが濟んで、それ〴〵、蒲團を敷く者や、お茶を入れる者や思い〳〵の事をしてゐる時、五六人が一緒になつて入つてきた。

「オイ、飯が出來てゐるか？」

先程見かけた、トイチが先になつて、兄弟分のトイチ全部が、晒木綿を卷いた胸をはだけたまゝで、やつてきた。

「ア、今、お菜を煮てゐるのやさかいに、一寸こつち入つてまつてとくんなはれ」

室長の紹介人が返じをしながら、座ぶとんを集めて、火鉢のまはりに並べた。いつの間にか、火鉢の側に集まつてゐた人達は、座をあけて彼女等を招じ入れた。

背の餘り高くない色の淺黒い、眉の濃い女で聲の太い動作も丁度博徒の樣な動作をする敷島と云ふトイチが、愛嬌の好い顏で、

「ヤア、皆さん今晩は——」

と皆の代表で挨拶をした。

「今夜から、二の室へ私が來ましたさかいたのんまつせ」

と敷島は云つて二の室の者の顏をみまわした。

「ア、敷島はんのおなごはんが此の室にゐやるのやワ、あの火鉢の側で煮たきしてゐる人ナー姐ちやん、あの人だつせ」

いち滿は先程、一寸隣の自分の室へ歸つてゐたが、おまはりがすむとすぐ、梅之介の處へきてゐた。外の知らない人と一緒に寢るのを嫌がつて梅之介は無理にいち滿を泊りに來て貰つてゐたので——

敷島の女と云ふのは、煮たきの手をやすめて、入つてきた皆の者に挨拶した。

「皆さんお越しやす、どうもおそくなつて、濟みまへん、今すぐ御飯にいたしますよつて、一寸待つとくれやす」

丁ねいに頭をさげた。そして、一緒についてきた兄弟分の女が、手傳つて、御飯の拵へにかゝつた。

どこから手に入れるのか、彼等は、白い米も用意してゐるし、鍋もあつた。火鉢の炭も一室に、どれ丈けと云ふ分量で朝運ばれた丈けでは、とうてい夜おそく迄の煮炊きは出來なかつたが、新聞紙に多くさんの炭がまだ殘つてゐた。

「さ、どうぞ、出來ましたさかいに食べとくれやす」

まるで一家の主人と主婦、客と主婦、といふ態度で……それも、專制的な主人に、從順な女房、つゝましい、やさしい女房、と云ふ感じの狀態であつた。

梅之介は馬鹿々々しい氣持で、それでゐて好奇の目で眺めてゐた

敷島の女房？、源氏名を田毎と云つて、本名をおことと云つたおことは、甲斐々々しく皆の給仕をした。女房達は皆、男の後に、侍いて御飯のすむのを待つてゐる。

あぐらをかいた、トイチ達は、いろ〳〵と女の噂やら、病院内の噂をして、御飯を食べた。このトイチ達がまだ、トイチとして、これ程に横暴を許されない頃の十二月も迫つた、卅日の夜、風の多い晩の出來事であつた。すべての娼妓は、正月の廓が戀しかつた。病院の汚い室で一歩も外出を許されないで一年に一度の正月を、情ない病院で送ると云ふ事は、その年一年中、運の惡い事だと信じてゐた。三四人の娼妓は淺墓な考へから、押入の布團の中に揮發油を入れて放火を計畫した。若しこの病院が火になつたら、自分の樓へ歸れる、そしたら、廓の中で正月が越される——そう思つて、人々の寢靜まるのを待つてやつた。揮發油はすぐ火に變りふとんに火が付いて、燃え初めた、閉された板戸の間から赤い火が舌を出し初めた頃、同じ並びの室に寢てゐたトイチが、便所へ行く爲め、その室の

前を通りかゝつて、それを見つけた。すぐ室へかけ込んだそのトイチは、勇敢であつた。押入の戸を開けるとすぐ、ふとんを引づり出して二三枚に燃えうつつてゐる火を消しながら、室の者を呼び起こした。靜寂を破つた非常の聲に、驚いて目を覺ました者の中には、慌てゝ逃げ出す者が多かつたけれども、火をつけた者の爲めには不幸にして、ふとん二三枚で消し止められた。當直の醫員や看護婦等が聞きつけた時には、もう騷ぎは靜まりかけてゐる時であつた。

「さすがに、トイチだけあつて、男の樣な落付いた處がある」と云ふので大へん評判がよくなつて、トイチの待遇が急によくなつた、目に餘る行爲も、他の娼妓に對する程の嚴重な咎めはなかつた。

――ハイチなんてなる奴はどんな氣でなるのだらう？ 女房だの妾だのつて、同じ女性であり、然も廓で、さんざんの奴隷になつて抱主や客に虐げられて居りながら、病院へ入院して迄同じ娼妓の入院患者に――

踊りと見合

毎日九時には治療が始まるので、朝七時には起された。朝寢坊の梅之介もしかたなく七時には起きて居た。トイチだけが九時頃迄寢てゐて、ハイチは朝早く起き御飯の用意などをやつてゐる。もう九時にならうとする時、治療を知らせるリンが鳴り響いて、治療場へ集るのである。

田毎は、敷島の枕元へ手をつかへて、小聲に起してゐる。

「アンタ、もうおきやすナー、九時だッせ、ナ、アンタ、もうおそうおまつせ」

幾度も〳〵も、それでも少しは他へ氣兼らしく。小聲で敷島に手をかけて起してゐる敷島は、田毎の心づくしで白い敷布、眞新しいシイツの中に顏を埋めてゐながら

「ウム、ウム」

と返事をしながら起きる氣配はないのである。それでも、田毎は根氣よく起して、やうやくの事で起きた戀しい人を、室の前の廊下にチヤンと洗面器に一ぱい水を汲んで石鹸も歯みがきも用意してある所へ手拭を持つて、後からついて行つて待つてゐるのであつた。

顏を洗ふとすぐ御飯のこしらへてある場所へ座つて田毎に給仕をさせ乍ら朝飯を食べた。敷島はいつも安座をかいてゐた。その科は三人の醫員が午前中かゝつてやうやく治療を濟ませる位で、他の患者よりも一番數が多かつた。處方箋の姓名と病名を讀みあげながら意地惡く見る看護婦は二十前の者ばかりであつたが、多くはすれてゐるので、言葉づかひも娼妓への態度も、始めての者はその、傲慢で侮蔑的であるのに反感を抱かざるを得ないのであつた。看護婦と娼妓、そこにも階級はつくられてある。

治療場から出てきた梅之介といち滿は、五寮の二階へあがつて廊下を歩きながら、向ふからやつてくる人達から、今日はお晝すぎから踊りがあるとの事を聞かされたいち滿は、大へん嬉しがつてゐた。

「姐ちやん面白うおまつせ、飛入勝手で、皆踊りの好きな人は踊りまんのやで、見に行きまよナー、今日はそんなんやら、どこでやんのやらうか？」

後の言葉は獨り言の樣に云つた室へ歸つてみると、踊の仕度で大騷ぎであつた。女をこしらへる爲めの踊りであつて、トイチ達は、お互ひに、みだれをきかす爲めにおやつしをして踊るのである。

室長がいち滿と梅之介が歸つてきたのを見て直いち滿を呼んだ。

「いち滿はん、一寸頼まれてか？」

依頼する時は誰しも下手に出るのが常である、何か用事を云ひ付けるのだらうと思つて、それでも、いちまは心よく返事をしてその人の側へ行つた。

「何んだんの」

「あのナー、外でもないが、今日踊りがあるので、敷島はんが、あの梅之介さんの羽織を借り度いと云ふてんのやが、貸してもらはれへんか、一寸あんたから聞いてみてんか？」

小聲でいち滿に頼んでゐるのが、梅之介の處へもよく聞えた。梅之介の羽織は、立し小濱の紺地

に、白い細い線が斜に雨模樣になつてゐる意氣な羽織であつた。
、姐ちやんに聞いてみまつさ」
いち滿はすぐ梅之介の處へ戻つてきて、それをつたへた。別に貸すのは惜しくなかつたが、どうしても好意の持てないトイチに貸す氣にはなれなかつたけれど、まだいち滿に返じをしない間に、室長と敷島とがやつてきた。
「すまんけど、俺に一寸だけ貸しとくんなはれや、踊りに着るだけやさかいナー」
と敷島は云つた。室長は、
「あんたの羽織の柄が、エライ兄キの氣に入つてるので、是非あれを貸してもらふてくれと、昨日から云ふてんので、貸してあげとくんなはれナー。頼むの頼みまつさ」
二人で來て頼むので梅之介も、同じ室ではあるし、後でうるさいといけないと思つて貸す事にした。敷島は早速その羽織を田毎の許へ持つて行つて、袖をつゝ袖に直さした。單純な餘り物事にこだはらない性質の敷島は、すぐ梅之介と心安くなつた。先程から、度々何かの打合せて出入してゐる他のトイチ達も、その羽織の柄を賞めては歸つた。

もう大ていの用意も出來た頃、五寮の前の庭では、仕度の出來た四五人が、足袋はだしで下りて待つてゐる。男裝のトイチの間に色どりをそえて赤い長襦袢に姐さんかぶりの襷がけが四五人混つてゐた。勢揃は出來て、圓く輪を作つて黑繻子の足袋と白足袋の踊りが始まつた。一人の音頭とりが、聲を張り上げて唄ふとそれに和して踊り出す所作は平凡な盆踊りの樣なものであつたが、見物してゐる者の中からは「あの人はいきな人やナー」「あの男はんは一番男らしい人や」と云ふ聲がもれてきた。飛び入りの數も殖えて踊りが賑やかになつてきた。酣になると踊りながらトイチ達も唄ひ出した。無意識で唄つてゐる唄ではあつたが、第三者として聞く時は、それが樓主を呪ひ悲慘のドン底を語るに充分な唄ばかりである。

◎に寮室の怖い樣では、ヤンチヤが出來ぬ、何の怖かろ、七寮室。：

と云ふ唄の中の七寮室とは、兵隊の中の重營倉の樣にこの病院の中で罪を犯した者を入る所あつた。

踊りが濟んで二三日經つと、必ず、トイチには新しい女が出來た。敷島にも一人女が殖えた。けれども、それは、梅之介の居る室の敷島の女には、かくしてゐた。いち滿はどこからともなくその話を聞いてきて梅之介に話した。

今夜、四寮の室でその女が、敷島と初めて逢ふ事になつてゐるから見に行かうと云つて梅之介を誘ひ出した。

七時のおまわりも濟んでから、敷島と、山本の紹介人が室を出た後、いち滿と梅之介もブラ〱廊下を步きながら、四寮の方へ行つた。四寮の下の室では、敷島の兄キ分の岩田が、火鉢の前で煙草をふかしてゐた。そばには、彼の女が、今し方やつてきた敷島と、も一人のトイチにお茶を入れてゐる。そこへ、紹介人の山本が、肥つた、髮の毛の赤く多すぎる程の毛を大きな束髮に結つてまるで、田舍出の女中のおめ見得と云つた樣子で入つて來た。山本は、羞しそうに下を向いてゐる女を、

「もつとこつちへ來て座れよ」

と云ひながら、自分は火鉢の側へ來て座つた何も云ひ得ないで、只頭だけ下げた女を、一寸敷島はふりかへつてみたが、何も云はずに岩田の方へ向きながら、てれかくしに、岩田の女に冗談等云つてからかつてゐた。

お互ひにそんな場面をうまく取り繕ふ事には慣れてゐた岩田であつたので、白けた樣とする座をとりつくろつて岩田は如才なく、てれてゐる女をもてなしてゐた。

「始めてやよつて、あんたもなんとなく遠慮やろうから今夜は之でお暇して、亦明日からは、こゝえ遊びに、こさして貰ひなはれや」

山本はそう云つて女に座をはづさせた。山本はトイチと同樣病院に入つてゐる間に小づかひを儲けて歸るのである。年とつた、みにくい顏の女は、商品としても餘りに、買手が尠すぎる、客が無いのに人並に金を遣つて行くには、そんな內職をやつて同じ娼妓から取

らなければならないのであつた。
　ハイチになろうとすれば、トイチに五圓以上、仲人に三圓以上、先づ一番先に金を持つて行かなければ、ならないのであつた。そして、ハイチになつた以上には、いつ、どんな時をトイチから金の無心を云はれてもそれ丈けの金を拵しらへて渡さなければその中間で男が色の義理はたゝないのである。女を拵しらへる様に、幾人もの女が出來る、けれども、やつぱり、好きな女は一人しかないと云ふ事であつた。米山と云ふ、立派な體格の落付いた口數の少ない、トイチが居た。彼には、どことなく人を壓する様な處があつた。彼等の仲間で一番の兄キ分であるその人は決して女をこしらへなかつた。只、トイチとしての交際をするだけで、ハイチは一人もゐなかつた、彼にも二年程前迄は、女があつたのであるが、その女が病氣をして死んでからは、もうぷつつりと、女はこしらへなくなつた。彼がまた敷島の室へきて昔の話など出す時必ず死んだハイチののろけを語り出した。
「アイツ丈けは、どうしても忘れられん、もうあんな女はとても見つからんよつて、俺は一生ヤモメで暮さうと思つて決心したのや」
　外の誰よりも一番多く、云ひ寄られるのであるが決して浮氣つぽい噂はなかつた。どちらかと云へばまじめに働く善良な娼妓になつてゐた。
　秋雨のシト〱地上をうつ音は寂しく聞へて、ゆかた一枚の肌へに寒さを感じる夜であつた。何んとなく、病院の暗い電燈の下で本を讀むにふさわしい頃。所在なさに、昔の物語りや懺悔話にもあきた人々は誰が云ひ出したともなく、コツクリさんを迎へる事になつた、丁度、トイチの連中は遊びに出かけて、室に居なかつたのでその中の經驗者らしいのが出かけて行つた。
「この中に戊年の人は居らんやろうナー」
　松島のおばさんが聲を發したが誰も答へる者がなかつた。とまた同じ人は云つた。
「もし戊年の人が居たら、この室を出てゝもらはんとコックリさんは來てくりやはらんよつてに、戊年が一番きらいやすかいナー」
　誰に云ふともなく、それでゐて、全部の人に云ひ渡す様に云つたが、誰も立つ者はなかつた。疊の敷目のTの字の處へ烟管を三本立てゝその上へ盆の様なものをのせた、そして、菓子だの果物を一ばい供へてから、風呂敷をかぶせて迎へてかへる人を待つた。集まつた人達の視線は風呂敷へ吸ひ寄せられて咳一つする者もない時、歸つてきた。おばさんが、何か小聲で云つて一本の烟管の先へ指をつけてゐた、疊へついてゐるきせるの先きが、一寸上つた時、おばさんは人々の面を見渡し乍ら云つた。
「コックリさんは男の方が來てくりやはつたんやと、そして、今夜は早く歸り度いと云ふてゐやはるよつてに皆もそのつもりで、餘りたくさんは尋ねない方がいゝわ」
　それから順をきめて、何日退院出來るか、とか、明日誰が面會に來てくれるか？等と尋ねて、返事はすべて、その烟管の先が上る事に依つて解るのであつた。梅之介は、遠くの方から、奇異の目で眺めてゐたが、餘り皆が、眞劍になつてゐるので、つひ釣込まれて側へ行つてみた、疑ひの解け切れない目で眺めてゐたが、烟管の先が上るのが何んとなく不思議でならなかつた、けれども深く探つてその原因をつき止めるだけの根氣もなく冷たく馬鹿々々しい氣持で見てゐるにすぎなかつた。が一番最後に「是非、一度やつてみなはれ」とおばさんに云はれて、彼女も、馬鹿々々しいとは思ひ乍ら退院の日を尋ねて貰ふ事にした
「○年の女ですが、何日退院出來ますやろうか？　もし答へて下さるのでしたら、このキセルの數でお答へ下さい――」
　おばさんが一生懸命に祈願する様に、こもつた聲で云つた時、烟管の先が、十回も上つた。
「梅之介さん、後十日したら退院だんネ」と後をふりかへり乍ら確信してゐる様な顔付で云つた。

「アラさうですか、大變だわネー後十日も居なくちやならないのでしたら」

　せめて一週間位で歸り度い、長くて十日位で退院し樣、そして今度は、すぐには働くまい、せめて體の全快する迄は養生し樣。等と思つてゐた梅之介が、もう一週間も入院してゐて、後二三日で退院出來るつもりでゐたのに、まだ十日もこの病院に居るのだと云はれて、いやな氣持がした、信じてゐない、只面白半分にやつたまでだと思ひ乍ら、つひ、氣になつてならなかつた。

　信じてゐない梅之介はそれから五日目に退院出來る事になつた、いち滿も其日に退院となつた。

「どうも長々と御世話樣でした。皆樣も一日も早く全快の日を祈つてをります」

之が退院の日の常套の言葉である梅之介も、すべての人の云ふ通りを云つて、皆の前で叩頭をした。

「アノもう退院したの？　大切にしてもう、入院しなはんなや、オイおこと、梅之介さんの荷物を持つて行つてあげろ、玄關までオレも送つて行くよつて」

　敷島はさう云つて田毎をふりかへつた。

「ハイ」

　すぐ立つて、梅之介のバスケットと風呂敷包を梅之介の側へ來て兩手にさげ樣とした。

「イーエ之は私が持ちます、之れ位の物私にだつて持てますから」

　梅之介は荷物を自分の方へ引寄せた。敷島は

「ナニ、どうせ序やすかい、これに持たせなはれ、構へんよつて」

　さう云つて聞かなかつた。

「それではバスケット丈け持つて頂きますわ、この包を私が持ちますから」

　部室の人達にもう一度挨拶を濟ますと、三四人に送られて部屋を出た。

「ホンマに早かつてよかつたナー、南へ歸つても、一度松島へ遊びにきなはれ、松島の樣な柄の惡い處も一度見といてもよかろうがナ、その代り、おれも一度南へ行くよつてにナー」

廊下を歩きながら敷島はいち滿と梅之介の間に挾まつて話して行つた。

　玄關口には、彼女等より先にも退院の人達が二十人程各自の樓からの迎ひを待つてゐた。「それぢや、氣をつけて、もう病院なんかには入らない樣にしなければや、いち滿はんも、體を大切にナー」

　敷島は、面會場の外と内との境目の處で立つてさう云つた。

「どうもすみませんでした、色々と御世話樣でした。皆さんも早く退院して下さい」

　送つてきた人々へ挨拶を濟ますと、いち滿と梅之介は、面會場の片隅に座つて、席からの迎ひの來るのを外の人達と同じ氣持で待つてゐた。廿分程も待つてゐた時、席の受持の男衆が迎ひに來た。

「お待ち遠さま」

　二人退院した事によつて、男衆の收入はそれだけ多くなるのである。

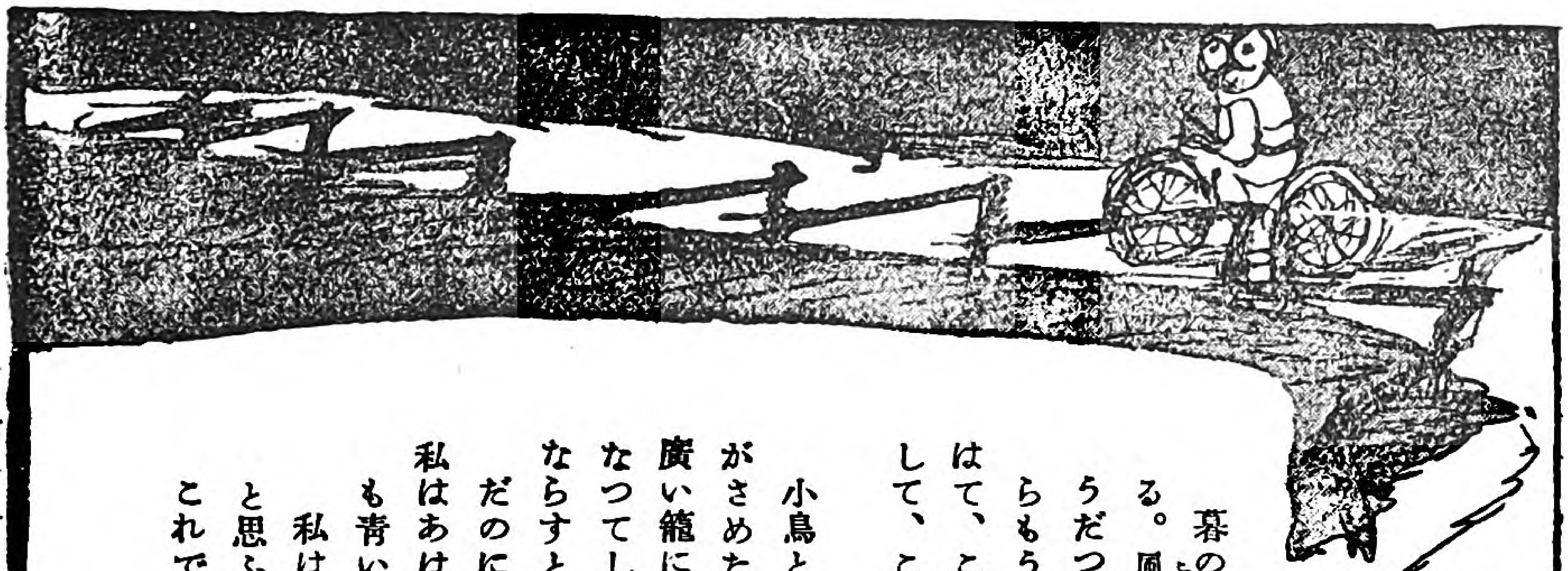
　今夜から、たとへ一圓でも、二圓でも、客からもらつてきてくれるのを當にして、ホクホクしながら、俥に乘せた。

「いち滿はんも早かつたナー、梅之介さんより一檢査先に入院したのだつしやらう、今度は割に早かつた樣だんナー」

　いち滿が二番目に俥に乘る時、そんな事も云つて男衆は三番目の俥に乘つた。

　こわれかけた門と「府立難波病院」と書いてある看板が、黒くなつて、字が判然と讀めない古びた看板を眺めながら、梅之介は一番先の俥に乘つてゐて、俥が走り出すにつれて、難波病院に張り巡らされてゐる、腐れかけたブヨ〳〵の虫喰い板のヘイの中から見える二階の病室に心の中で別れの言葉をつげた。

　然し、病院が見えなくなつてから、フッと亦、行き詰つた樣に思へた。たとへ十二日間でも折角、濟められたのが、再び泥の中に入つて行つて、汚くよごされる事が、なんとなく惜しい樣な氣がしてならなかつた。



小閑

しぐれ

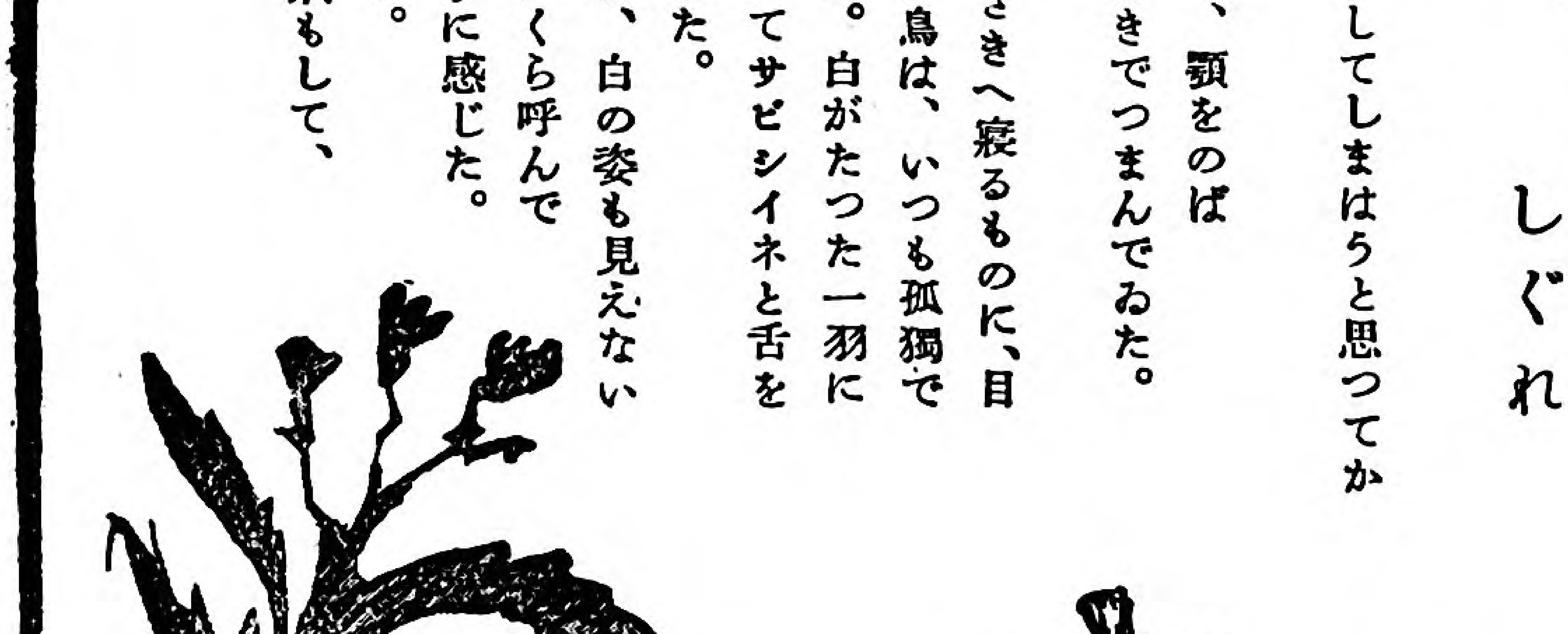
暮の廿五日、寸閑（すんくわん）といふ方があたつてゐる。風呂（ふろ）につかりながらボンヤリ考へて、さうだつた、帷子（かたびら）が夏のまんまだ——夜露にあてて引伸ばしをして乾してしまはうと思つてからもう半年たつてゐる。夏襟の洗はないのも巻いてある。はて、こんなふうだと髭（ひげ）でも生へてやしないかな——さう思つた時に、顎をのばして、ここばかりに一本黒いのが生へる、五リンばかりの髭を爪のさきでつまんでゐた。

小鳥とも、なんと久しく話をしなかつたかと、除夜の鐘の鳴るころさきへ寝るものに、目がさめたら青い菜をやつてくれと頼んだ。私の影つぼしみたいな白い鳥は、いつも孤獨で廣い籠に一羽ゐた。青い鳥は秋の半ごろにまぎれ込んで來たのだつた。白がたつた一羽になつてしまつた去年の春、私にもかなしいことがあつた。白にむかつてサビシイネと舌をならすと、小首（こくび）を傾けて白もおなじやうに、チチチチと言つてくれた。だのに、元旦の陽が鳥小舍にのどかにさしてゐたが、青い菜もない、白の姿も見えない私はあはてて庭へをりた。鳥小舍の金網ごしに隅々を覗きこんで、いくら呼んでも青い鳥ばかりだつた。私はふと、自分が影のない身になつたやうに感じた。

私はばかだ、いつも氣にかけながら悔を殘すことばかりしてゐる。

と思ふと同時に、生きる日の小さな負擔（ふたん）がすこしづつ整理がつく氣もして、これでいいのだ、とさびしくも心は靜かだつた。





時雨脚本集を讀む

――鑑賞と感謝――

生田花世

十何年も前の事である。私は長谷川時雨先生から（當時私はどんなにこの先輩を知つたといふことを喜びとしたらう。その當時その心持を書いたものさへある）『さくらふぶき』といふ美しいすんなりとした装幀の脚本集をいたゞいて、大變にうれしかつた。そしてヒロインの勝子は私の好きな女性であると同時に、私の理想の女性でもあつた。歳月すみやかに流れた。年經て今日『時雨脚本集』を手づからお贈りいたゞいて、こまやかに讀むこと久しくこゝに所感の一滴を書いて著者へ手づからおおくりしたいとおもふ微意に傾倒する。『業火の洗禮』これは『女人藝術』の創刊號からひきつゞき各號にわたつて連載されたもの。女主人公は甘美姫といふ麗人である。その劇の中で、私の心にピンとこたへたのは次の一節である。

甘美姫『いいえ、業火に燒け爛（ただ）れるは表衣（うはかは）ばかりです。どんな火に卷かれても眞心の泉は涸れはしない。切ない、堪へきれない、苦惱（くるしみ）をうければうけるほど、心の眞清水は澄みにすんで迸しります。あなたは知らないのだ、あなたは知らないのだそれが生る力ではありませんか！　あなたには分らない、あなたは人を戀したことがないからだ。この苦しみの中にあたしの貞操（みさを）は輝いてゐる。あたしの生命は光つてゐる』

この甘美姫の性格は『北國藥研谷』の中の『小雪』と共通するもので小雪はいつてゐる。

小雪『（弱る氣をはげまして）いいえおさちどの、わたしも敵の片割れ、仇うちの日にはお前の手にかかりませう。それまでは……』

と云つて常識に生きず一つの理想、信念にむかつて生ききらうとしてゐる、かゝる女性を長谷川氏は必ず御自分の理想、信念として描出され、それにものを云はせてゐるとおもふ。由來、理想家は俗心には理解されないで必ず苦しむ。しかし理想はより多く主觀的であり詩そのものである。レベル以下の人々に理解されようがされまいが顧慮する必要は少しもないのだ。甘美姫の生き方、小雪の生き方、そこに長谷川氏の戀愛道生存問題の熱烈な信念が閃いてゐる。そして長谷川氏自身の生き方にそれが生かされておればこそ、この作にもそれがかうして力づよく出たといへるではないか。常に唯一者の道をふまうとする長谷川氏の氣慨といふものがなみ大抵ではないといふことも亦いへるではないか。だが、戯曲としてこゝではたゞ唯一者の道のみ說かれてゐるのではない。本質的な戯曲家をたゞ一ムキにのみ解釋するならばそれは狹小なるものでしかない。この『時雨脚本集』の中には性格、傾向としての『惡』といふものも書かれてゐなくてはならない。

瓊缶『いいえ、彼女は叱度忍んでくれるよ、あんなにも余を愛したのだから。それに恩人だと敬へば、彼女は却つてへりくだるに相違ない。自分の身が人中へ出られない事を知つてゐようし、今になつても變らない余の眞心を感謝するだらうから』

私たちはこゝに弱い男の惡――たまらないいやな心の動きを見る。善人、惡人、かうきめつけの善惡をとりあつかつてゐるものは今日私達讀者にとつてはあまり面白くない『ミ

イの生れた朝』の中の刑事とか、『犬』の中の長次郎とか、『北國藥研谷』の大助とか、からいふ風な人物、にくまれ役の人物は、戯曲構成上ぜひ仕方のない人物であらうけれど、その惡の魅力は、瓊缶の場合のやうな時がつよくひゞく、これは私の味ひ方だ。

性格は非常にいいのに、末葉的に惡く、卑しくいとはしい男なり女なりを描く技巧は長谷川時雨氏の冴えた手腕をもつてよく味はせてくれる。『氷の雨』の中の玉代なりおとくなり、『晴夜』の中の深作なり、お粂なり、潔なり實に活き〳〵してくる。會話、それは、『氷の雨』『晴夜』この二篇に於いて十分の魅力をもつて人にせまるものがある。つく〴〵凡手ではないとおもふ。

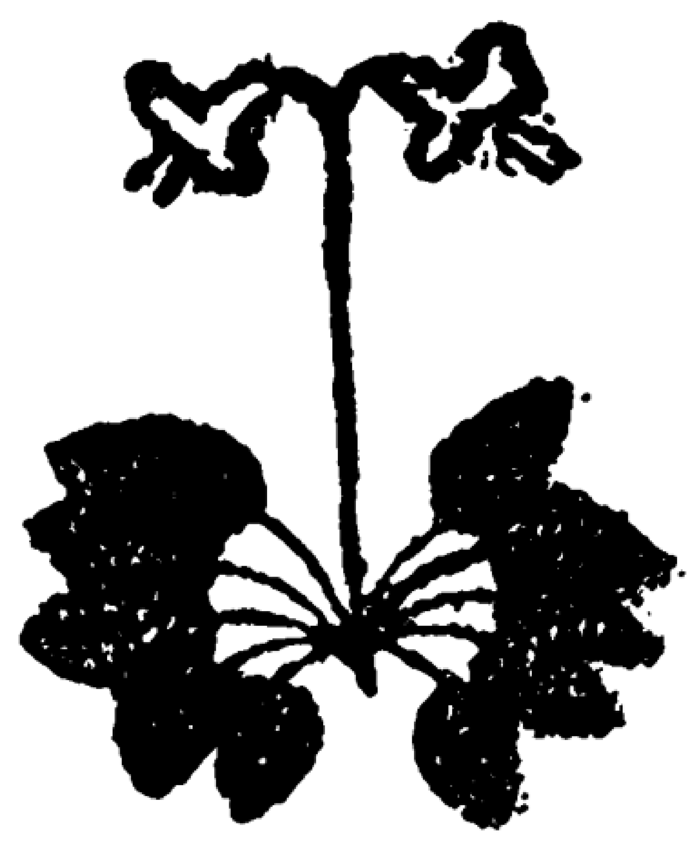
全巻からして大觀的に考へしめられることは長谷川氏の戯曲家としての歩みが、夢幻的なものより、舊歌舞伎のスタイルより、現實的なものへ、新しい劇へ徐々に動いてゐる姿があつて、そこに多大の本質的なる苦勞の見ゆる點があつて心をひく。

『惡口をいつて下さい』とは笑ひながら長谷川氏の私へいはれたことであつたが、私自身もつとすゝまなくては到底立派な惡口はいはれさうもない。私の鈍眼をはづるばかりである。たゞ失禮をもかまはずいへば將來もつと『惡』についてのもつと力づよい表現を、又、喜劇的要素をもつと、何といつてよいか賢すぎる人物ばかり多いので、もつとおほまかで、ユーモラスな、大きな感じのする、バカの利口といふやうな人物を出されてほしいといふやうな待望ばかりだ。

私は『ミイの生れた朝』がすきだつた。小さい輕いものだが、何ともいへず私にはうれしいものだ。『北國藥研谷』は美しい〳〵一味の晴さもこのましく、『篝火の洗禮』とこれとは大きい美しい芝居だとおもへる。將來ぜひ見る機會を與へられてほしいものだ。『犬』は、今の時代の人々へ問題を與へる。そして隨分爽かな效果だらうとおもへる。どういふものか、私は、お高に、この犬を殺させて了ひたい。しかし、そんな氣を觀客におこさすのこそこの戯曲の力づよい、見事なところだらう。とにかく私にこの書中『犬』に劇として一番つよい感銘をうけたこと次には、『ミイの生れた朝』が感じのよかつたこと『月に住む人々』は私には遠どほかつた事を述べた。

戯曲の方のこと、私はさつぱり分らない。めくら蛇に恐れず。だからこれは批評ではない。たゞ私の鑑賞と感謝とのみである。

妄言の罪をふかくおわび申します。



大阪支部設立に就て

緑川靜枝

尨大なる、唯一の經濟都市である、當地に於て、從來、一般藝術運動の組織的發生による諸活動を見なかつたことは、殊に、現情勢から、一種の奇異の念を深めるものである。

この二三年來。多數の若い學生、並びに、インテリゲンツイアの集團によつて、十數種の所謂同人雜誌の發生を見、そのうちの若干は、現に流動過程を經つつあるとはいへ、何れも、社會認識の不足と、自然主義藝術過多症に陷入り、何ら、現行社會の動向の中核に觸れない。茫漠たるユートピヤの盛られた、而して極めて必然性の稀薄な存在に過ぎない

以上、現在發行を續けられてゐる、若干の文藝雜誌は、大別、マルキシズムの時代的幻影を逐ふ四誌、超社會的藝術至上主義の二誌無產者的貴族主義派の一誌の　型に分ちうるものである。殊に、後者の三誌は、いぜんナンセンス、オナニズムの阿片常習者である事

に於て、身持ちならぬ嫌惡と、寂寥さを感じる

ここに、極めて熾烈な意欲にもえる。少數者女人達は、それ等、同人雜誌の中で、女人の參與しうるものゝみに、僅かに、限定された領域中で活動してゐるに過ぎない。

これを見ても大阪に於て、文藝に關心を持つ多くの人々が、一般藝術、理論、作品、檢討發表機關に、如何に現在まで、惠まれていなかつたと云ふことを、容易に察知し得るであらう。

我等は、從來、關心を持つ人々によつて、斯種の藝術運動の擧を、何回か計畫されたにもかかはらず、その都度、失敗に終つたと云ふことを、餘りに、明白に見聞きしてゐる。

では、何故、發生を見ながら、成長するに至らなかつたか。

次に、筆者は、その崩壞の根本原因と見る理由を二三、箇條書にして見よう。

一、地下工事を築き上げぬうちに、上層部の華やかな勞作に走り過ぎたこと。

二、集團の目的及び、性質等が現實社會の同伴者として、併行してゐなかつた事

三、內面的な充實を計らずして、外面的な膨脹と勢力と、一種の見榮による色彩化したこと。

四、相互扶助的な指導精神の不足によること。

五、時代のダイナミックな必然性を持たなかつたこと。

大體、以上にのべた諸要素の、認識不足と把握の稀弱によつて、現在まで、確固たる藝術運動の成長を見なかつた、重な理由とすることが出來よう。

かくして、淸算につぐ淸算の結果、終に、精銳なる、小數者婦人達のみによつて、この度、長谷川時雨氏の主宰するリベラリズム女人藝術運動の、一分野として、關西に於ける「女人藝術」聯盟支部は、多事多難の情勢の下に、その雄々しき發生を見るに至つたのである。

昨年十月十二日に擧行された、盛大なる支部發會式は、關西藝術運動の頁の上に、輝かしき意義を有つものとなるであらう。

設立後、當支部は本部「女人藝術」の意向の反映として、雜誌「女人藝術」を支持し關西に於ける來るべき、一般藝術運動の活動源とならんとしてゐる。

ここに於て我等は、先行者の崩壞と睡眠の過程をのり越へ、恒にダイナミックな步調の下に、進まねばならない。

本支部は、支部員相互の親睦を計り、かねて分散せる女人藝術家の統一、向上を期し、社會問題の討議研究を目的として發生したのである。(具體的な實證はいづれ稿を改めて詳論しよう)

現在は、會員が四十七名、今それを職業別にすると

職業婦人として活動せる者	二十八名
主婦として家庭に在る者	五名
家事見習	六名
學生	八名

以上の中、更に職業婦人を類別すれば、

會社事務員	十二名
銀行事務員	一名
雜誌編輯	三名
教師	三名
店員	三名
タイピスト	四名
ウエトレス	二名

以上、二十八名である。

これによつて見ると、職業婦人が全會員の凡そ、三分の二を占めてゐると同時に、恐らく今後に於ても、常に、右の數字の下に增加してゆくことを思ふ。

幸ひに、讀者大衆の積極的支持と、一般關係者諸氏の深甚な援助を得「女人藝術聯盟」の、所期の目的を達成せしめられんことを切望して止まない。

支部所在地―大阪市港區新池田町一丁目四六　綠川方




時の流れ

古谷文子

美しいけれど無意味な
言葉の羅列はやめよう。
安らかでも目的のない生活は
やめよう。

シャボン玉の様な
はなやかな近代性は
時代の流れに流さう。

あらゆるものが流れてゆく
時の流れの底に
いつも動かない人間の
魂の望みをひろひ上げよう。

雲が流れてゆく、

馬

小林すみ子

あるあさげ
子供達の騒ぐ聲と
鈴の音に縺れる笞(シモト)のひゞきが
私を窓ぎはへと吸寄せた、

反射光線のめまぐるしい交錯の中に
痩せさらぼへた腹を波打たせて
空しく毛の抜けた前足で
地面を叩いてゐる一匹の駄馬――
此のボオラスな水つぽい雪溶けに
この橇で、二噸もあらうといふ



あの奥に限りなく澄んだ
蒼空がいつもある
時が流れてゆく
その底に今まであえぎ苦しんだ
人の群がある。

…………

人の世の黎明(れいめい)が來た
手を組んで、胸をはつて
時の流れの上を歩まう。
目を奪ふ樣に美しいものは
流れてゆく、
流れるがいゝ。流れるがいゝ。
底にある石をひろひ上げよう
それは限りなく重いけれども……

一九二九、十一月、

石炭の山を
何處まで曳摺つて行かうとするのか、
エナーヂェティックな壓制は
寸時も手綱曳く手を休めず
剩へそれを鞭に利用するのだ

お聞き、
轡で傷められた口の周圍を舐めづり乍ら
悲し氣な瞳をふり仰いで
大空に投懸ける無言の言葉を——

「そんなに鞭つ前に
先づ腹一杯たべさして下さい！」

おゝそれは虐げられ苛まれた
駄馬だけの慟哭ではないのだ。

全女性進出行進曲吹込み

暮の空氣で街の中はにえくりかへつてゐる。店頭をとりまく旗は赤、紫、黄、青、緑とあらゆる色彩をまとつて人の眼を眩ましてゐる。興奮しいらだち悲哀をまとつた人達があちこちとうごめいてゐる。一九二九年の終りに近い十二月二十七日の夕方、社長さんをはじめ女人藝術社の一行、長い間の希望がかなつて全女性進出行進曲、女性のうた、をんなの歌を持つ事が出來て、今日それの吹込に行くといふので大はしやぎ大さわぎである。二十八日の午前五時から内幸町の日蓄で、といふのが前から決つてゐた時間で、社長さん一體みんな起きられるのと心配してゐた。ところが二十七日のおひるすぎ社にゆくと、社長さん「あゝよかつた、吹込みが今日午後六時になつたつてさつきおひる頃電話がかゝつてきて、四家さんがだめで河原さんになつたつて、」「へえ！」そこで大變だとばかり、中本さんと深町さんに電報をうつ、時間に遲れると大變と、しよぼしよぼ降り出した雨の中を元氣に社をとび出して、平河町で菊子さんをよんで、日蓄へ着いて「女人藝術ですが吹込みで」出てきた給仕さん頓狂な顔をして「女人藝術ですか、あれは明日の午前九時からですよ」皆な變な顔をして「あら妙ね」社長さん首をひねつて、「ぢや家ののんきな女中さ



朝散太夫の末裔

―日本橋―
10
時雨

朝散太夫とは、支那唐朝の制にて從五品下の雅稱、我國にて從五位下の唐名とある。

太夫とは、支那周代の朝廷及諸侯の、國の官吏の階級の一、卿の下、士の上に位すとある。もつと委しく、傳學らしく書きたてると、支那唐代の官職に依る貴族の階級中、從二品より從五品下までの名目だつた語で、從二品が光祿太夫、正三品が金紫光祿太夫、從三品銀靑光祿太夫、正四品上が正議太夫、正四品下が通儀太夫、從四品上が大中太夫、同下が中太夫、正五品上が中散太夫、下が朝議太夫、從五品上が朝請太夫、下が朝散太夫ナリである。

我國右近衞將監を右近太夫、公卿の子でまだ官位のないのを、いづれ五位に叙せられるからといふので無官の太夫といふ。

こゝまでくるとやつと馴染のある名目になる。無官の太夫なら敦盛といふ美しい平家の若武者で、大概の人が、芝居や淨るりや或は稗史でよく知つてゐる。もつとも朝散太夫淺

ん今日六時から吹込みの稽古をいたしますからお出で下さいつていふのをてつきり今日六時に吹込みますからつてきいたんだらう」そこでみんな木挽町の日響の事務所へ。

墮ちたる天女の人達やコーラスの人達と一緒に、女人藝術の連中一生懸命になつて練習する。獨唱の河原喜久惠さんが歌つてゐる。「とざす雲裂く陽よ、荒れ狂ふ嵐よ」この歌はずるずると美しい？　ときめられてゐる歌い方で歌つては駄目だ。力強くたたきつける様に。お稽古が濟んだのが八時頃、社長さんから、素川さん、優子さん、美智子さん、菊子さん、あたし、社に電話をかけてあはてて飛んできた深町さんをまぜて總計七人、自動車のお迎へをたのんだのに待てど暮らせど來ない。おなかはすくし、雨は降るし、大聲をあげて歌つたあとではあるし、寒いし、物悲しいこと一通りではない。しゆくん、しゆくんと水鼻をすゝりながら香蘭社の瀬戸物も冷やかしあきて表に立つて、あれよきつと、あら違つた。あれよきつと、また違つた、あれこそさうよ、まあ憎らしい人が乘つてる。心をときめかし、瞳を燃やしながら待つ事約三十分。おなかゞ背中にくつついて、あきらめたのかぐうとも鳴らなくなつた時、顔見知りの日響の人から「パンジウヤラウ」と大森で買つてきたといふパンジウをもらふ。菊子さんとあたしが一つづつ、社長さんたち數がないので半分づゝみんなむしやむしや。おなかゞすいてゐるとみえて、社長さんまでと思ふとおかしくて嬉しくなつちやつた。ところが

野内匠頭長矩、即ち「忠臣藏」の塩冶判官高貞もさうである。

その、從五位下朝散太夫の唐名をもつた人が、湯川氏一族、御直參ならずもの仲間の、藤木の先祖の一人。

藤木一門には、それよりもつと偉い人物があつたのかも知れないが、アンポンタンには見上げるやうな高い石碑に、××院殿從五位下前朝散太夫なんとかのなんのなんとかと、とても長く彫みつけてあつた朝散太夫を子供心にすつかり覺えこんでしまつたのだつた。藤木家の寺院は、淺草菊屋橋の畔にあつて、堂々とした、そのくせ閑雅な、廣い庫裏をもち、藪をもち、かなり墓地も手廣かつた。昔はもつと廣大かつたのであらうと思はせたのは、藤木氏一門の、どれも美事な見上げるやうな墓石が、兩側に五十餘基も正然と、間隔をもつて立ちならんでゐたのでもわかる。震災後の市區改正で、いまでは電車の走る區域になつてしまつてゐるかも知れない。

「よくあの墓石を賣らなかつたな。」

と誰かいふと、このお旗本は、杯口を下の膳の上において、痩身の男が、猫のやうに丸めた背中をくねらし、木乃伊みたいに黒い長い顔から、抓みよせた小さな眼を光らせて、

「やつたさ、お前さん。」

まあお聽きといつたふうに、招き猫の手つきをする。

「大いところは目につくから――ヘッ、鰻だと思つてるんだね、小串のところをやつたのでね。性質（石の）のいいやつばかりお好みと來たのさ。さうさ、姐さんおかはりだ、ヘイ宜しゆうつてんで、なんしたんだが、あんまり大きすぎたのはいけないね、眼にたつんで、客の方が二の足でね、なにせ、だいぶお立派な方々でございまして、ヘッて、平伏つ

たつた一つのパンジウが又妙にすいたおなかをつつき出して、ばんごはんをたべないと死んぢやふ――あんまり來ないから圓タクでグリル、銀座へ行つちやはうか、歩いたつて近いわ、いよいよふんがいして、出かけ樣とした時恐縮した運轉手が、ビックの新らしい物淒くいいの、と一緒にやつてきた。ずい分いい車だつたのでおこるのをやめて、そのかわり奇麗に掃除してある車の中へ、泥の一ぱいついた靴をのつけて「ああすいちやつた」ところのおなかをグリル銀座にはこんだ。

二十八日のあさは一生懸命に早くおきて、社へとんできて、水ぶろに入れられて寒くて寒くてと悲觀しながら震へてゐる社長さんに同情して、ねぼうの素川さんが落伍しなければいいがと心配じながら日蓄にゆく、音がしない様にと布のひきこんである厚ぼつたい廊下を、之ならばあたしが歩いても特別に音もしないだらうと安心しながら待合室に入る。珍らしく和服で、それも書生さんの樣な紺絣りの、いやに若々しく可愛らしい山田耕作氏が、ねむいねむいとこぼしながら、ゆふべは二時間しかねないので、此頃は忙しくてほんとにねる隙がないんですよと入つて來られる。と外套をぬぐ間もなく、日蓄スモールオーケストラの人達にゆふべねる時間をへらして作つた伴奏譜の練習をしに下へ降りてゆかれる。河原さんはじめ、合唱の方達も見えたのであたしたちも下の吹き込みをする部室へ行く。五十疊位の、天井の高い部室で床板に煉瓦位の大きさを一ますにして一から順に何

ちまやがるんだから。ありやいけないね、あんまりゴテ〳〵の改名なんぞつけたのは、子孫へ不孝つていふもんだ――なにつてやがる、さんざ香このやうに食つといて――。」

お酒をまた一口のんで長いまばらな黄歯を出して見せて、

「いまぢやこの歯ぢや喰へもしないさ。」

「鰻をおあがり。」

「おほけに。」

熊と京阪言葉のまねをして、箸のさきにつけたこのわたを舌の上にたらす。

中の間の十二疊、藏前の拭き込んだ板の間の方によつて、茶だんすや菓子戸棚や、釣棚のある隅に大きな長火鉢もある。その前の座布團には、祖母か、父か、たまに母が座る。その近くに夜の洋燈も釣りさげられる。夏でもなければ庭にむかつた緣側や、玄關前の庭にむかつた肘かけ窓の方へ寄らず、懇意なものはみんな火鉢の方へ丸くなつた。無論アンポンタンの生れた家のことで、藤木さんは此處へくると、氣さくで皮肉で、小心な正直ものだつた。

彼は氣の弱さと小ささからくる僞惡家だつた。それは若い時は仕樣のない放蕩者でもあつたであらうが、それは時代と環境の罪もあつて、彼ばかりがわるいとは言へない。ヘドツコになつてしまつた江戸兒の末裔は、誰もがさうであるやうに、辛辣な惡口で自家ざんぶをやる。自分自身で自分をメチヤクチヤにこきおろして、どうですといつたふうに聽手の困るのを痛快がる。みぢん見得はないやうでそのくせ見得ばりで、それがせめてもの自棄した修飾である。鼻つぱりの強い意氣地なしなのである。

寄席の高座にのぼる江戸風惡口の話口をきくと、大概みんな自分の顔の棚下しや、出來そくなつた生れつきのこきおろしをやる。それがみんな本氣だと思つたらおめでたすぎ

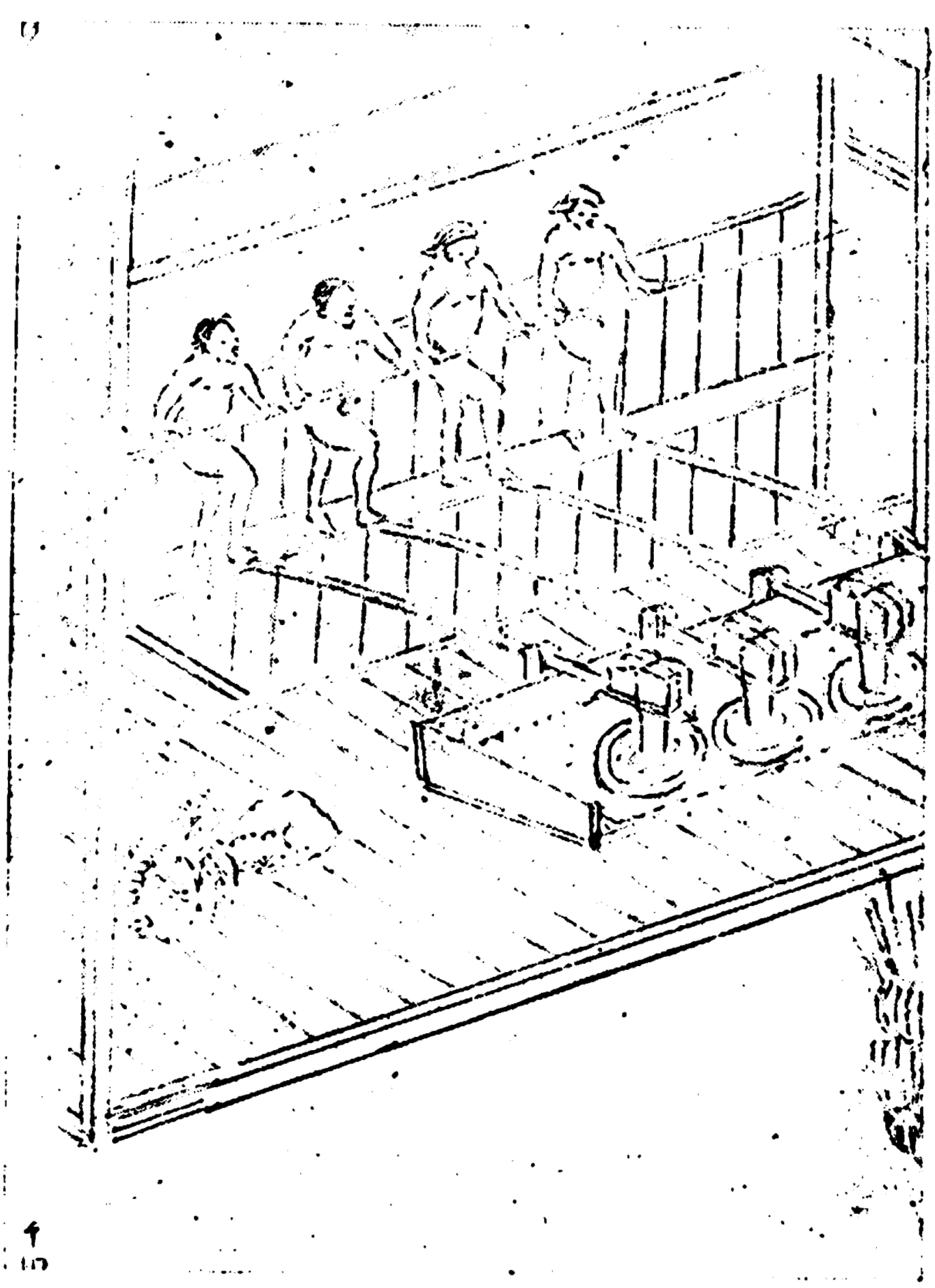
百何十までの番號をかきこんである。中央部に絨氈をしいて右よりの方にグランドピアノがおいてある。澤山の椅子がすみの方に仰むけにつみかさねられてあり、扉は二重かぎになつて、吹込み中は外からあける事は出來なくなつてゐる。扉をあけた正面に病院の薬局の窓口の様な窓があつて、そこから中の機械室にゐる技師がのぞいて聲をかけたり合圖をしたりする。外の部室でお茶をのんでゐたら、中にゐる社長さんや山田氏やオーケストラの人達がげら〳〵笑つてゐる。何かと思つてみに行つたらオーケストラの、大鼓をたゝく人とピアノをひく人が今歌舞伎座でしてゐる墮ちたる天女の中に出てくる、小森氏の老人の眞似と、四谷さんの妖精の長のまねと、照井氏の青年の眞似とをしてゐる。歌をうたいながら、その人達の何ともいへない癖をうまくつかまへて、身振り手まねでやつてみせる姿にみんなおなかゞいたくなる。いつも早起きできちんとしてゐる優子さんが中々來ないので電車にでもひかれたのでないかと心配する。案じられてゐた素川さんの方が、ぬうつと顔を出して、うゝんと例の鼻をならしながら入つて來る。練習がすんでいよいよはじまるといふ頃になつて優子さんが眞赤な顔をして、ねぼうしちやつたので、ととびこむ。そこで一安心。リンが三度なつて、小さいデンキが窓口につくとデデデン、デデデン、デデデンデンデン、最初の序曲が大鼓で切つてをとされる。クラリネツト、トロンボン、トランペツト、ピアノと前奏曲が女性の歌を空中

る、全部が全部みな徹底した市井の聖人だとおもふものもなからう。とおなじで、生活戰の敗者は自己をこきおろして自慰する。そこまで察してやらないものは、厭がらせばつかりいふ人だと鼻つつまみにする。あの時代の藤木さんもそんな風にとられもしたが、家のものたちも彼が小心で正直ものなのは許しきつてゐた。子供は變なところで對手の直情に面してしまうものだから、對手を職業や、その折の境遇で見直したり見違へたりはしない。



にとばしはじめた。コロラチュア・ソプラノの河原さんは、いきほひをこめて歌ひ出す。三分何秒——ひきしまる身内の力をかんじながらききすます。リンがなつて、河原さんがマイクロホンの前からはなれると、薬局の様な窓口があいて、今空中に放つた音が靜かに廻轉する蠟板の上から飛出してきた。デデデン、デデンデンデン、とざす雲裂く陽よ、あれくるふ嵐よ．山とうねる濤よ、立て燃えつゝ行け、もろ腕をさしのべ、我等陽をとりかゝげん、生めるもの我等、はぐくむもの我等、とても不思議な氣持。氣味の悪い氣持。妙な氣持。今出した自分の聲が一遍この世から消えてしまつたのにまたのこ〳〵とひゞきかへしてくる。とんでもなく面白い。之がつまり試驗板で、之で色々となほすところをみつけて又やりなほすわけ。そこで山田氏はトロンボンがすこし淋しいからとピアノの前へむかつてボンボンひきながらみるまにまたにぎやかな、フオルンの出す音を多分に持つた譜にまとめあげる。

藥局の様な窓口から中をのぞいて中に居る技師にどうして音波を集めて、なぞきいてゐると勇敢なる社長さんその窓口の所にあつた臺の上にのつて、よいとこさと中をのぞきこむ。後の方ではなしをしてゐる歌姫達、女人藝術の人達つて勇敢ね、としみじみ感心してゐる。それから合唱を吹きこんで、やれ安心と二階の應接間にもどる。そこでお菓子とお茶をたべて、早く出來るといいなあと日蓄を出た。（みどり）



(故澤石割畫)

それにあたしがアンポンタンで無口だつたといふことが、彼に自分の子供の前より安心させ氣樂に思はせたのかも知れない。

自宅にゐると皮肉やで毒舌で、朝から晩まで女房に口小言をいつてゐる藤木さんも、アンポンタンには馴染深い面白い大人だつた。あたしは玄關の八疊で、角火鉢の大きなのにあたつてゐる彼の顔を、穴のあくほどマジマジと見てゐることがあつた。子供心には、そ

ゆうもあ集

これはことし四十路になるコケな男にて候。さても〳〵年の暮といふものは、よン十ツたび越しても、いつも〳〵金がないと怖いものでござる。ぢやによつて三日三晩考へ上々極々の一策を思ひつき牡牛一頭マンマと盗みだしてござる。なんと美事に肥えた、肉づきのよい牡牛ではござらぬか。愛いやつでござる。この牛を金に代へてよき春を迎へ、久しぶりにたらふく飲み食ひして、あまつた金で借金もかへさうと存ずる。なんとよき計略でござらうが。必ず他人にお洩し下さるな。

——ぢやが、またこの牡牛といふものは、人の心も得知らいで、ゆたり〳〵といたしをる。年の瀬ぢやともふして、人の心もザワザワいたし、世間は湯の沸くやうなあり様でござるに、一向早う歩もうともせぬ、誠にもの憂い奴め、食ばかり太うて、歩ゆみはうどんのやうに長うのろう、ウヂウヂいたしをる。ヤイとつとゝあゆばぬか、人が忙しい眼をむけて、うさんくささうに見をるわいやい。ヤイ歩め、歩め。走せろ、走せろ、はせをらぬか。——ほ、こりや俺としたことが、行くさきも買手も分らぬに、どの方角へむかつたらよいことか、これ牛よ、何處へなと、マンのよい方へ曳いていておくりやれ。——情けなや、不景氣の年の瀬とて牛一頭まるごと買つてくれる者もおじやらぬ、かやうなことならコマギレ少々でも盗んだ方が身のためでござ

れから十年も十五年もたつた後の顔と、そんなに違はなかつたやうに思へた。眼は青かつたが、その眼ほ高すぎる鼻の方へ引つぱれて、猿猴にも似てゐたが、見やうでは高僧にでもありさうな相もあつた。稍下卑てゐたこともたしかだつた。福わ内の晩に——年越しの豆撒の衣——火鉢の炭火のカッカッと燦つてゐるのにあたつてゐる時、あたしは祖父さんの遺品の、霰小紋の、三ところ家紋のついてゐる肩衣をもつてきて藤木さんの肩にかけて見た。すると藤木さんは言つた。

「チョン髷に結つておくれ。」

あたしは前かけをとつて、彼の頭にチョン髷を結びつけた。小僧さんのする盲目縞の眞黒な前かけでもあることか、紫地に櫻の花がらんまんと咲いて、裏には紅絹のついてゐるちりめんのチョン髷、しかも額に緋ぢりめんの紐の結び目が瘤のやうに乗つかつてゐる。それで平氣で煙草を吹かしてゐる。その背中が眞ん丸いので、あたしは拳骨でコッコッ叩いた。

「痛いよ。痛いよ。」

「でも猫のやうだから。」

「ニヤアン、鍋島の猫だよ、化猫だよ。ゴロニヤーン。」

彼はフーッと云つて、背中を見る〳〵盛上げた。

それは全く奇怪な存在だつた。アンポシタンはおしつこが出るほど吃驚りして、火鉢の緣を握つたまま、首をすくめて中腰になつた彼を見詰めた。

その頃藤木さんは災難つゞきで極度な落目だつた。下谷青石横町の露路裏のドンヅマリの、塵埃すて場の前にゐたが、隣家の女髪結さんから夜中火事を出して、髪結さんは荷物を運び出してしまつてから騒ぎだした。一ッ棟だ、かへつて火元よりは火廻りの早かつた

つた。牛にも食はさねばならぬしこの身もほとく〳〵餓えはてた、かなしや〳〵、牛の曳いてゆくのはどの方面ぢや、ひもじうて目が廻る――あ、こりや大變警察ぢやつたわ。許しませ、ゆるしませ。――やアるまいぞ、やるまいぞ。

○

原告、芝區在住某「いゝえ、償ひ廿錢の印紙代がかかつて、差引けば三十錢の爭ひになるつたつて、どうしてもこの立替金五十錢は法廷でとつて頂きたい。勝訴になれば八十錢はとれますから。」裁判所から支拂命令をうけた被告、府下天沼の某の其命令に對する異議の申立「全體この五十錢也は最初電車賃の立替です。人を馬鹿にしてゐる。第一そんな少額のものに、電車賃まで使つて拂ひに行けるものか考へても見るがよい。」

○

田舎の新聞記事に大きな活字で「凍豆腐泣く」といふ見出しでの名文。寒中味噌有の暖氣つづき、舊冬來今日まで生産ゼロにもひとしき豆腐餓饉である。

○

金をかせ、かさぬで「雨合羽」といふ異名の男が淺草公園で他の浮浪人を殺した。居あはせた仲間「のみかつ」「ペンキ屋」「薪屋」「おぢさん」の四人が證人として出頭した手當一人頭壹圓五十錢也。よろこんだ四人「働かねえで一兩二分！　毎日證人に來てもいい」

○

お草履代金二拾圓也――京都の西本願寺の

藤木の方が何もかも丸燒けで、垣根を破つて隣裏へ逃出し一家命だけは無事だつた。で、紳田白銀町の煙草問屋へチンコッキリに通ふやうになつた。あたしたちが牢屋の原とよぶ、以前の傳馬町大牢のあつた後の町から、夕方になると、蝙蝠におくられて、日和下駄をならして辨當箱をさげて、宿り番に通つて來てくれたのだつた。

藤木さんはよくいろんな話をしてくれた。御上落（將軍慶喜）のお供をしたことや、京女のこと――京女の體つきまでにせて、ヘンな京言葉をつかつた。

「うつるか。」

つてやがるから、

「かさか、」

つて聞いたらね、

なにいふてやな。」

つて怒りやがつた。といつた時、母がちらと聞いて、

「子供の前でそんなばかな事をいつて。」

と立腹した。藤木さんは龜の子のやうに首をすくめて、

「なにね、女郎のはなしをしてゐたのですよ。女郎人形なんていふと美しいが、ブヨブヨで汚ねえつてね。」

アンポンタンは藤木さんの黄色い歯を見て、どうしても京の女郎と、ふものが美しくないとは信じられなかつた。

「ねえお瀧さん、女郎がかういつたんでさあ、旦那さんうつるかつて。だから、梅毒かつてたら、なにいふてやの、ばからし、つたんでね、なんのことかとおもつたら、それ、やつぱり京女は優しいところがあるのさ、情がうつるかと聞いたんだつてえのよ、返事がと

法㕝さんが、年末に本堂の掃除の型をやる——型だけで代理の時もあるが——その時履いてゐる草履を信徒たちが奪はうと押しかける。それをとられないやうにする役目がある。が、魚心あれば水心、一足であるべき草履が何足になるのか知らないが、ともかくそのお草履は金二十圓で手に入れる事が出來、お役目御苦勞さんとその同僚の坊主たちの忘年會費用となる。

臺北より

生田花世——長谷川樣、お丈夫ですか、どうかお大切になすつて下さいまし。

林さん、百合子さん、いづれも中止とのみ存じましたが、おもひがけずテイ六さんがつれてきて臺灣へゆかせたいからとて又パパさんもくれぐと仰有つて百合子さんをおつれ下すつて、私も思ひ掛けずこのお二人に元氣づけられまして案じてゐた大和丸も一等室におさまり、三人ともたつしやでもう今日のひるはキールンへ上陸します、山田やす子さんは女人藝術社で何か御二人におたのみもありましたらうによく長谷川氏がして下すつたと大辱び……大變感謝されてゐます、フミちやんはデッキゴルフやらピアノやら大變カッパッです。百合子さんと私とはライティング・ルームであみものお話、はるかに東京をしのんでます、私はお二人をパパさんとテイ六さんとからあづかつてますせいか氣がはつて、少しも船によひません、何か大きい力にたすけられたやうなうれしさです、女人行進曲の

んちんかんだから、厭な奴だと思はれやうつてもんさ。だけれど、その時いつてたね、東男は金ばなれがいゝつてさ。さういつたつてお前さん、貧乏旗本に金なんぞあるわけはないんだが——男振りでもてたのかもしれないねえ。——なにしと、それこそ、なにいふてやの、あほらしいだ。」

「藤木さん。藤木さんも小さい時分、前髪を結つてたの？」

あたしにはそんな駄じやれはわからなかつたから、自分の質問を出した。

「オ、イエース。」

藤木さんは胸を反して膝の上に兩手をおいた。

「秀才だつたのだよ。なんて、管秀才はお芝居の寺小屋へ出る。他の秀才は他人のことで榎本の釜さんなんかがさうだつたのだね。僕なんぞはおんなじやうに子のたまはくなんてやつて、なんの事だかチンプンカンプンだつたのだ。だからだめさ、勉強しなくつちやなんでもいけないさ、君のお父さんなんか、劍が利いたからたいしたものだ、劍の方ぢやどうして立派な手腕だつたな。さう、今だつて、なみたいていなものは前へ廻れまいさ。」

「釜さんて誰のこと。」

「榎本武揚つて人があるだらう。」

「ああ、知つてる。」

「あの人のちいさい時分には、家が貧乏で——はて、彼家は何人扶持だつたつけかな？根岸の奥でね、藪のある、門に大きな樹のあつた家さ。釜さん、遊ばないかつたつて返事もしやしない。子のたまはくだ。なにしてやがるかと思つて、破けた窓の障子から覗くとねポンポチ米を德久利で舂きながら勉強してやがるんだ。使ひにゆく時だつて破れ袴をはいてね、こちとら惡太郎の仲間になんかはひらねえで、いやに賢人ぶつた子供だつたよ。

繪葉書當地有力者にたのんで三人にてハンプするつもり又社へのおみやげも三人でソーダンどうか待つてゝ下さいまし、では又。

林芙美子――藝術家と云ふものは、何と云つても心ゆたかなものだと思ひました、風景は大變よろしいです、五六月の氣候でミモザの花がさき部落の風俗は南洋へでも行つたやうです、優子さんにはぜひとも見せたい風景です、南國のあかるい緑は何と云つても蠻かきさんの領地です。みどりさんには食べたいだけ果物を食はせたい木瓜ボンカンほうふです、でも芙美子さんは風景をだけむさぼつてます、今は疲れてヘトヘトです、始めての人達ばかりです、勝手がわからず私は小さくだまつてゐます。歸つてからね、お土産を樂んでらつしやいね、東京は戀ひしや、歸へつたら當分はちまき て寢なければなりません、人の氣持ちに疲れるとヘトヘトに體がさきに參つてしまいます、澤山詩が出來ました、喜んで下さい想思樹のみどりがたわゝで貧民窟を見に行くと 豚と一つ部屋でゴロツキがコキユーを彈いてます。早く東京に歸つて貴女達に會ひたい、風景だけはたしかにいゝです、皆樣によろしく、又かきます、體を大切に祈る

望月百合子――船でゆられてやつとキイルンにつきましたこゝまでまゐりますと、すつかり南國的で繪になる風景がたくさんあります一度は寫生にいらつしやればいゝと思ひます「いかだかつら」といふ花が迚も美しいんですよいまは春頃の氣候で山の色が迚も柔かな緑です、臺灣の自然にはすつかり魅せられ

ヤイ釜公、どうして遊ばないんだと怒鳴つてもだめ。みんなで石つころを投りこんで逃出すんだ、そりやね、時には、外でいぢめたこともあるさ。だけれど、その時敗けて泣いた奴の方があんなに偉くなつて、わしやチンコツキリだ、わしやかなしい。」

悲しさうにわざといつて唄のやうに唄つた。

そこでアンポンタンは武家は精げた白米をもらうのでないといふ事を知つた。どんな風にしてお米を精げるのかきくと、藥研で藥を刻むやうにするのだといつた。本町邊は藥種問屋の多いところなのであたしは安座をかいて藥草を刻んでゐるのを見て知つてゐたからよくわかつた。祖母の持藥を買ひにゆくと、種々な藥を集めて藥研でくだいて袋に入れてくれた事も見てゐる。徳久利でどうして舂くのかといつたら、藥研では玄米が破けてしまうから、貧乏徳久利で舂くのだといつた。

「藤木さんもお米をついたの？」

「私の家は、祿高だけ賣つてお金にして、入用だけ白いお米で屆けてもらつたから――ていふと人聞きがいいが、來年の分もさらい年の分も金にし貸りてしまうのでよこす米がないつてわけさ。淺草のお藏前に幕府の米藏をあづかつてゐる商人があつてね、旗本の咽喉を押へつけたのさ。そこから金にしてもらつたり白米で渡してもらつたりしたものでね。清元の唄にある――首尾の松が枝、竹町のつて――百本杭の向ふ河岸の、お船藏の首尾の松さ、あすこにわれわれのもらう幕府の米がうんとうなつてゐても、そりやもう我々ののぢやないつて譯でね。」

「どうしてお金にしてしまうの？」

「そこがね、どうも、ちつとお話にならない譯でね。」

藤木さんは頭をクルクル撫でた。すると祖母が赤い胴の着物をもつて來て、

てしまひました、北臺灣は今雨季で、春雨のやうな雨が降つて居ります、野には茶の花が咲いて居ります。今夜私は臺灣の芝居をのぞいてみました、迚ものんきで、迚も騒々しいのに呆れてしまひました、貧民街の近くのマーケツトで立ちぐいもしました、勿論臺灣人の友達に案内して貰つたのですけれど迚も面白い處です。出來るだけ臺灣に接して歸へるつもりです。花は赤くて山は綠です、想思樹といふ美しい木が到る處にその柔かな葉をそよがせて居ります、ポンカンが迚も美味しいので美里子さんのことを思ひます、旅は憂欝です、でも臺灣の自然はこゝに住みつきたくなる程私を喜ばせてくれます、御機嫌およろしく。

一尺一寸のお鏡開き

社のおそなへ餅は大きいぞ、徑一尺一寸だ。女人藝術の人たちがいくら食慾娘ぞろひでもさすがにお餅が紅屋からとどいた時は驚いた。オサンボウの上にはのらないので小机の上にのせてかざつた。一月十一日お鏡開き、新年〻をかねた闇汁〻。店子一同先づ大家さんの三上氏を正座に御招待据え申上る。

優子さんとあたしがおそなへの割り役、ござをしいて、新聞紙を廣げてこちんこちんのおかゞみをたゝくが、一向知らん顔をしてゐる。鉋丁を入れても入りもしない。かなづちでたゝいてもだめ、すごいわねえとあきれてゐると今年七十三歳の社長さんの母堂「若い

「寐間着の丈が短かくて、足がつめたいとお言ひださうだが、長いのが間にあはないから私の下着を着て寐たらよい。」

「へえ?」

流石の藤木さんも鹿の子模樣の赤い絹の胴をつまんで、呆れた顏をして言つた。

「結構でございます。だが――いやに思はせぶりつていふわけで、有難いやうな嬉しいやうな――百貫〆の借錢負ふて、紙衣着た伊左衞門ぢやないが、昔をいやに思ひださせるね。尤も、伊左衞門つていふ柄ぢやなかつたつてね、さう〲あかい胴の方が似合ふ、お輕つていふ役どころさ。――え? なんだつて、猿芝居だつて? 戯談ぢやないよ、廻りの八丈の方が本役だつて? さうですよ、さうだよ。ヘイ、三角銀杏老お見舞いたす、おみやくはいかゞかな?」

あたしの手をとつて脈を見る眞似をする。その晩子供たちは何時までも眠なかつた。藤木さんがおひきすその、赤い胴ぬきの着物を着るのを見るまで――(此項つゞく)

――前號、及前々號に、深川の石川屋を廻米問屋としましたが、あれは三陸米の廻米と、いい廻船問屋であつて、現今の三菱の前身であるさうです。

猶前號挿人の寫眞は、我國に寫眞の廣まつたごく最初のもので、柳橋の船宿(石川氏の第一妾宅)へ寫眞技術を學んだ人が歸つてきてすぐに撮してくれたものだといふことです。

ものは駄目ね、それはこうしてたゝかなくちやーどれどれかしてごらんなさい一先の尖つたかなづちで、ひびのはいつた所をめざしてヨイショとうちこむ。不思議やお餅はころりとはがれる。そこでくやしがつて負けずにヨイショ、山程出來たおもちを素川さんと八木さんが社の大火鉢で燒いてゐると正面の大家さん。今から燒餅の稽古はしなくてもいゝでせう」

女性出席者は、今井邦子、小寺菊子、中島幸子、辻山春子、戸田豊子、尾上菊子、社長さん母堂の諸氏に社の連中、男性は大家さん及び、そのお客様二人と社長さんの令弟、そこでおやきもちの稽古ぢやない實習は切上げてみんなで女人藝術のために乾杯する。お酒がまはつて、おなかゞはつて、やがて餘興が出はじめた。大家さん側の木曾節伊那節及びそれに附隨したおどりがお客連から出る。それから佐世保の燃女房の歌。社長さん「今井さんほらこの間唄つた松の太夫を歌つて」「いやだわ唄へやしなくてよこの間は特別」「だめよ唄はなくちや」ホラ松の太夫の襟は葛の模樣に藤色の、いとし可愛いは、みんなみんな男のいつはりぢやもの」「困るは長谷川さんひつぱり出すのがうまいんですもの」「小さな聲で社長さんに和して「すねてみせてもそのままよそへ、ある夜ひそかに相生の雲のまがきのかけことば、ええにくらしい」と唄ひ出す。そこでみんな大歡び、せつかくうたふんならも少し大きな聲で歌つてくだされぱいゝのにと少々にくまれた。それよりずるいのは小寺



兄さん！

——「員章を打つ」をよんで——

山本美智子

畝傍、葛城、香久山の連峰にとりかこまれた、あのさゝやかな、大和の小房の町で靜かな父に育てられた私の兄さんの幼い時は幸福だつた。子煩惱な父の愛に健やかに伸びて小學校時分はとても腕白だつた。近所の人や家へ來る人は皆んな「ボンボン」と呼んでゐた。私まで中學へ入つた兄さんをボン／＼と云つてゐた事を覺えてゐる。

そのボン／＼がだん／＼大きくなつて、色んな本を讀み出し頻りに何か書く樣になつたその動機は小さな私には分らなかつたが、十七の時父が亡くなつて、京都の同志社から呼返へされ、大和の天理中學に變つてからであつた。腕白な兄が悪戯をしても、少しも叱らなかつた父と、やかましくは云つても矢張り甘い母親の間に、すく／＼と思ふまゝ我儘に成長した兄さんが、なぜ癇癪持ちになつたのか解らなかつたが、父がなくなつてから妙に神經質になつて行つた姿が、まざ／＼印象に殘つてゐる。其頃から上京したいと云つてゐたが後見してゐた叔父は中々許るさなかつた。讀書ばかりしてゐるかと思ふと、一人ぼつねんと火鉢の前に坐つて考へ込んでゐたり、夜明頃まで原稿を書いてゐる事も度々あつた。

さん、社長さんの「小唄を唄はなけりやだめよ」と云はれても「わたしは唄へません」とすましてゐる。

まだ正式に出來てゐない試驗板の全女性行進曲のレコードを日蓄からかりてきてかける。デデン、デデン、デデンデン、大鼓がなりだすと、きゆつと身がしまる。チクオン器につれてみんなで唄つて御來場の男性諸氏に先づ女性の歌を紹介する。「なかなかいゝよ」大家さんにほめられてどうですとばかりにやりとする。社長さん愛用の三味線（此頃は一年に一遍程闇汁會の時位ゐひつぱり出される）をひつぱり出してきて折つてしまうとまでいつてるのを「ひいて下さい」とせびる。やつとせびりおとして、社長さんの彈手で菊子さんが松の綠をおどつて下さる事になつた。「いやだわ、どこから踊らうかしら」首をひねりながら、狹い疊一疊位の所でちやんとおどつて下さる。うまいなあ！ 社長さんの三味線たるや、彈いてらしたのをみた事もないのによくまああんなにと思はせられる程うまい。さつきお餅をやきもしないのにちよつとやきもちをやいてしまふ位。時計をみたら十一時すぎてゐた。（みどり）

編輯がけふで締切り、つゞいて三月新人小說號の準備にとりかゝらなければならない。三月の中旬には第二回の女人藝術大講演會が東京で開かれるので、全くいきをつくひまもない。戸田豐子さんが遊びに來られて、机の向ふににこ〳〵してわたしお金がないからバット二つ買占めておいたのよ」

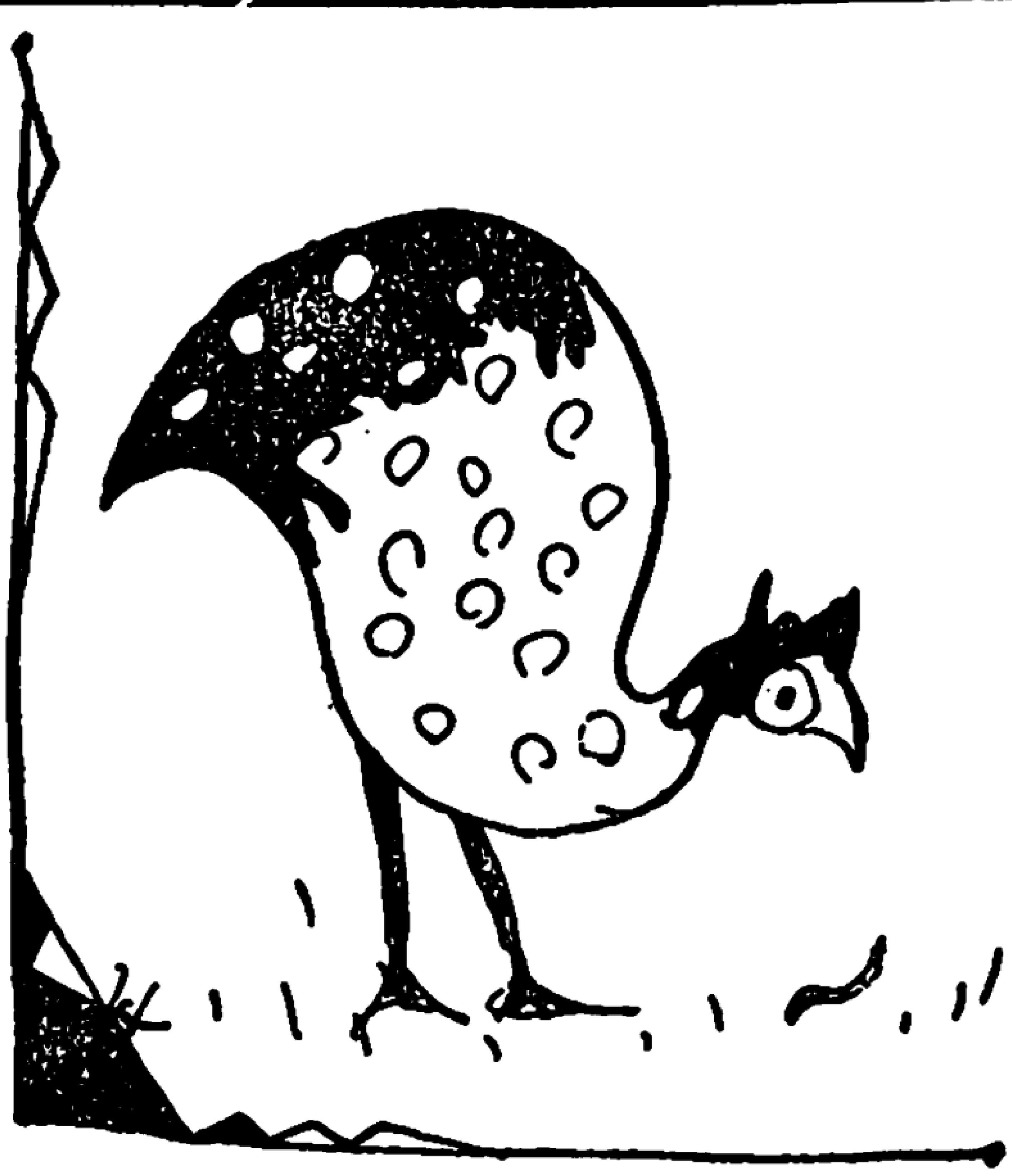
「そんなにうつむいて書いてばかりゐるとからだを悪くするよ」と母の言葉にも止められないと見えて知らぬまにペンを持つてゐた。

十九の時肋膜を病んだ。其時ひどく衰弱して大阪の醫大へ入院してゐたが、健康を取り戻すと苦學するからと云つて上京し飜譯の大庭事務所へ書記となり、其の頃「蘇生」を書いた。偶然震災前に郷里へ歸つてきたのは、母の亡くなる幾ヶ月か前だつた。そんなこんなで大和の丹波市小學校に勤めることになつたが、子供好きな兄さんは、當時の經驗を好く得意氣に話したものだつた。新しい本ばかりを讀んで癇癪を起してゐた兄さんも、教員生活に於てどんなに母を喜ばした事だつたらう。母と兄と三人で暮した喜びも束の間で、母は病死し、私は姉の許へ行き、兄さんは小學校へ宿直する事となつて別れたのが、一生別れるはじめになつたのだつた。一ヶ月とは經たない中に又上京してしまつた。一年に一度は國に歸へつて來ても、心から憩ふ家もなく、姉の家へ行つたり親類へ行つたりして、東京で苦しんで たまに歸へつて來ても、兄に故郷は素氣なかつた。どんなに淋しかつた事かと今更思ひ返へされる。でも兄さんは樂觀的だつた。私が病氣して身の振り方も定まらなかつた當時歸へつて來てからいつた。

「世の中は捨てる鬼あれば助ける佛ありで人間一人位はどうにでもなつて行く……」と。

一昨年の五月十三日だつた、「また來るよ」と行つたまゝで、其後少しも便りがなかつた。そして去年三月十七日に突然急死したといふ電報が來た。

私にはいま、兄さんがやつとわかりかけた。癇癪もちだとばかりおもつてゐた兄さん！あの遺作集「員章を打つ」に兄さんは總てを語つてゐて下さいます。それがやつと今わかりました。兄さん！



朱い訪問着

大田洋子

街の底には、十一月の風がしんめりと、亡霊のやうに吹いてゐたそして家と云ふ家は皆、月乃にとつて何のかゝわりもなく、冷然と竝んでゐた。たゞその中に點在してゐる質屋の軒燈だけが、奇妙に心易く彼女の眼に垂れ下つて來た。

彼女の良人は、彼女を置き去る前、偶然にも彼女を二軒ばかりの知り合ひの質屋へ誘つて行つた。

『これは僕の女房です。僕が忙しくて出て來られない時は、こいつが來るそうですから。どうかよろしく――』

彼は笑ひもしないで、調子だけは冗談らしく月乃を番頭にそう紹介した。

彼女は今、その質屋ののれんにじつと眼をやり、傍らに良人の幻影を感じた。幻影は、彼女の下腹へすうつと這ひ込んでしまつた。

彼女はもう二ケ月も一人で暮してゐた。そして質屋へ持つて來る何物も殘つてはゐなかつた。

彼女は毛皮のショールや、長いコートを着て、明るい街の方へ流れてゆく女の群を、影繪のやうに空しい思ひで眺めた。彼女は自分に勇壯な心が湧き立ち、深夜を待つてこの質屋へ入つてゆく、覆面の姿を描いた。そして、ぐさりと疊に刄物を突き立てて當然奪ふものを奪つて來るだけのことだ。彼女は夢想的な計畫に陷り、それはその時代に行はれる正當な奪掠の過程でなくて何であろうと思つた。水は高いところから低いところへ流れるものだ。無いものは有るものより奪ふ形式を亂舞するより外にあるものか。

だが彼女はすぐ夢想に破れ、笑ひ捨てるやうな氣持ちでそこを去つた。彼女は頭を下げて風の中を流れた。派手な女の着物の裾が、

舗道へ向つてひら〳〵とたはむれてゐた。

　月乃は女達の顔を見あげた。三四人の女たちは五月雨明に腐つた花のやうだつた。どの女も頬のくぼみに眞青い陰をもつて、薄い脊をひよろりと突つ立てゝゐた。

　こゝは婦人科の醫者だな―彼女は醫院のやうに青ペンキを塗つた家を見上げた。すると、藤いろの電氣の發光を眼の玉にはらんだふくろが彼女の眼を見た。そこはカフエーふくろの門口なのだ。それからその横手には、ゴシックで、

　女給募集　二十歳前後の教養ある方　月收百圓以上確實。

　わく張りの寒冷紗に麗々と書き出してある。それは金と云ふもののまつたく欠乏した、しかも若い肉體を持つた女には間違のない魅力だつた。

　カフエーの應接室は、から〳〵と乾いてゐた。赤いソーダ水の前に月乃はきつちり腰掛けてゐた。

『え、そりやあ、百圓以上請合だす。自分の働きに依つて、何ぼうでも儲かりますよつてに、こない面白い商賣滅多におまへん。うちはブルジョア許りだすさかいに、パトロンが欲しい思ふたら何ぼでもおます。それからあんたはん、訪問着持つてゝだつか？』

　彼女は他人ごとのやうにその饒舌を聞いた。何と云ふ向ふ先きの分らない質問だらう。だが彼女はにや〳〵と笑ひ乍ら答へて見た。

『えゝえゝ、ありますわ。派手なんですけど』

『そりやあよろしおました。こう云ふ商賣には少々派手でないといかん。今着てはるのは不斷着だつしやろけど。髪もずつとふくらかして、白粉もなるべく濃うつけてくれはつたらよろしおます。明日の晩からでも、うちは來て貰うてよろしおますさかい』

　彼女は階段でエナメルの靴をはいた紳士にぶつかつて外へ出た。いつたい、どつかに訪問着と云ふのが待てゞもゐるのだらうか。そりやあ、有る所にはどこにだつて有るだらう。百貨店の五階には新品織立のほや〳〵が燦として輝き、ブルジョアの桐の簞笥の中に同じやうに層をなしてゐるのではないか。併し彼女に於ては、今着てゐる一枚の袷をぬけば、訪問着どころではない、裸形を晒さねばならないのだ。

　螢火ほどの火位はプロレタリアの火鉢にもありさうなものだが、彼女の二階の火鉢にはそれもなかつた。火鉢の中には二ヶ月前入獄した良人が突き刺して行つたバットの吸殻だけが、失意の兵隊のやうに並んでゐた。月乃の感傷は兵隊のやうに並んだ煙草の吸殻へからみついた。彼女は火のない火鉢の前へにじり寄つて、はしご段から拾つて來た葉書をむさぼるやうに讀んだ。それはまぎれもない良人の書いた字であつたが、共產黨事件に連座して入獄した彼の便りにしては餘りにも白々しい無抵抗が口惜しかつた。

彼女達の結婚は戀愛に基いてゐながら、二人の接吻は餘りにも數少く、甘い言葉は、他に燃ゆるもの丶ために防げられた。

彼女は今、獨りをはつきりと意識した。白紙に近い簡單な端書が、汗ばむやうな愛慾の胸にかき抱かれた。端書の表面に頰をなでた。彼のサインは、彼女の唇の爲にインクを滲ませた。彼が二人の家の中に、最後に吸つて行つた煙草の殼は、そのまゝそこに竝んでゐる。この煙草を持つた指が不當にも、鎖の中に喰ひ込んでしまつたのだ。したがつて彼の仕事はぴつたりと運轉を止めてしまつた。運轉のない留守の間、自分は何をして待てばいゝのか。彼女は寒かつた。彼女はいつかの夜もしたやうに、一本の吸殼を拾つて、吸口を噛んで見た。吸口は良人の匂ひがし、良人の主義の匂ひがほのめいた。彼女は安心してゐていゝのだと思つた。

半年振りで彼女は郊外に住んでゐる伯父の家へ出かけて行つた。どこへ行つても雇ひ手のない、主義者の妻の自分を、肉親はどうにかして呉れるかも知れないと思つたからだつた。伯父は××製鋼所の支配人である。だから彼の住居は、モダーンな洋室の屋根に太陽の光をいつぱいに浴びてピアノの音を吸ひあげてゐた。

『まあ、月乃さまでいらしたの』

彼女と同じ學校を二年許り前に出た伯母は、落ちついた美しい聲で彼女を迎へた。子供と勞働のない退屈な生活の中へ、一人でも違ふ訪問者がある事は、あとから直ぐに嫌になるにしても、最初は飛び上るやうに珍らしがる癖を、その階級の伯母は持つてゐた。

『伯父さまは？』

『もうさつきお出かけになつたわ。まるで、一日に一ぺんは、定期券を使はなきや責任がすまないつて云ふ風ですの』

大臣を姻籍に持つ事が最大の誇りである彼女は、常に自分以外のものを、自分以下のものに見なければすまない眼つきを持つてゐた

彼女は月乃を自分の部屋へ連れて入つて、月乃にとつてまるで無關係な景氣のいゝ話し許りをした。

それは書架さへも無智に見える部屋だつた。三面鏡は馬鹿げた調度と向ひ合ひ、一人よがりの舶來電氣スタンドは冗漫な飾りに脅えて淫樂的なソファの腹を照し初めた。日がとつぷりと藍いろに染つてから、伯父は、太つた腹を突き出して歸つて來た。

彼女の希望は伯父を不機嫌にした。

『だつて俺の會社ぢや一寸困るよ。すぐ俺の姪だつてことあ分るこつたし、お前が河井の女房つてことも、かくしたつて分るからな』

『姓が違ふのですもの。大丈夫ですわ。私、どこまでも秘密にしますから。事務員がだめなら女工にだつてよござんすわ』

『女工なんて尙更らいけないぢやないか。お前がいくら秘密にしたつて、世間の眼や耳はとても早いからな。無論女工の推せんなんか

俺に出來るものかい』

『ですけど私、どこへも使つてくれないんですもの、使つてくれないのはいゝけど、喰べて行けないんですもの』

云ふまいとしたことを、彼女は忘れ果てたやうに口に出した。

『それは心掛けがわるいからだ。力もないのに横車を押すからだよ。下らない教育を受けたおかげと云ふものさあね』

『當分困るわね。社會主義者の妻だつてことになると。お氣の毒には思ふんですけど』

なるほど二人の云ふ通りだつた。それにしても二人はたゞそう云つて濟ましてゐればいゝのだらうか。

『もつと苦しんで御覧。どうすればいゝのか落ちついて考へて見なきや困る。その結果、考へがまとまつたら、いつでも俺が親たちへ口を利いてやらうぢやないか』

伯父が考へをまとめろと云ふことは、社會主義者の河井に內容的にも外形的にも別れると云ふことを意味してゐるのか？飛んでもないことだ。まるきり反對だ。

彼女は一切の感情を殺して思ひ切り明るく云つた。

『ぢやあ、その方は考へて見ますわ。そのかはり、もうしにくいんですけど、伯母さんの着物を一枚貸して下さいませんかしら』

『着物ですつて？どんな着物でせう』

伯母は明らかに當惑した。自分の名前が公になる場合以外に芒、人にものを與れることの大きらひな彼女だつた。

『訪問着なんですけど。悪い分でいゝんですの。直ぐ返しますから』

『訪問着をですつて、どうなさるの』

少くとも不良少年に居座られてゐるやうな怖れが彼女の眉を寄せた。

『實家へ歸るのなら。何も訪問着なんか着て行くことあないぜ。それとも留守の間に、嫁入りでもするの？』

伯父はからかつて腹をかゝへた。

『えゝ私、お嫁入りでもして見やうかと思ひますの。貧乏も頂點までゆくと結婚詐欺なんてことまで頭に浮んで來ますわ』

月乃も心から笑つた。

『すぐにそう云ふことを云つて見せるからいかん。とにかく訪問着を着てどこへ行く積りだ？』

『クラス會があるんですが、私、一寸そこへ顔を出せば、或る先生に仕事をお願ひして見る的がありますの』

『そうかい。おい、貸してやつたらどう？』

正直な伯父の顔に月乃はやはらかく笑ひかけた。伯母は少しかすれた低い聲で答へた。

『クラス會なんかに訪問着を着てゆくことないでせう？そして今學校へゆくこともよした方がいゝと思ひますけど。やつぱりあのことは問題にしてるに決つてるし、學校だつて、不名譽——つてこともないでせうけど、行けばどうせ、火をつゝきに行くやうなものぢや

ないかしら。そりやあ、着物は貸してあげなかありませんけど』

そうも云へるだらう。誰だつてそう云ふ云ひ方が一番云ひ安いんだ。彼女は別に驚きもしなかつた。落語をしまひまで聞いて居たやうな馬鹿々々しさ乍ら、淡い安易があつた。

『たくさん持つてらした着物どうしたんですの。内のよしやよりも粗末ななりをして』そう云つて伯母は、上品な笑ひ方をした。

ラヂオが演藝放送を初めた。彼等は風呂へ入れとか、麻雀をしようとか、この階級の持つ退屈さは、侮辱の快味を知つてゐるやうに月乃を引きとめた。だが彼女はすばしこく外へ出た。月光の道つてゐる外へ出て、初めて彼女は涙を落した。それは生優しい自分一人の感傷では無論なかつた。張り切つた憤激が自分たちの階級を通して、もう一つの階級へ飛んで行つた。

幾十日、良人からの通信がなくても、自分は生々しい良人を感じ牢獄にゐる彼の意志を感じることが出來た。彼はもう歸つて來ないかも知れない。現在の治安維持法案の制定が約束されたもの丶力に依つて破壊されない限り、それは希望なき希望なのだ。

だが彼女はそれでもい丶と思つた。たゞ、飢えてはならないのだ。自分自身が大地の上に潑溂と生きて行くことより外に、同志の妻の子供を育てる任務にも加はらなければならないのだ。

彼女は新しい發見をした。それは訪問着を貸してくれるカフエーが、若い女を待つてゐることである。

彼女は、火ばしを燒いて髪にウエーヴを掛けて見た。友人のところから白粉と紅とを紙に包んでわけて貰つた。若い彼女はそれだけで、明るく美しくなつた。大きな眼は、濡れたやうに黒々と輝いた。水氣をふきとつた指の爪を二三度こすり合せて、紅をさすと、遠く青春を捨てたやうな蒼白い手は、夜明けのやうに匂ひ初めた。

そのカフエーへ行くと、彼女は仕立下しの金波の袷を着せられた。帯は黒繻子に紫陽花を油で描いてあつた。

袷は裾の方にゆくにつれて、ぼうつと朱色に染め分けられて、腰や肩に小鳥が飛んでゐた。それは朱い朱い訪問着であつた。それはふんわりと輕く帯はすべ〳〵した。

『あ丶奇麗だんなあ。見ちがへてしまひました』

女給達の更衣室で、マネージヤアがそう云つた。

『そうやつて、いつぺんどつかへ、一緒に行きまほか』

マネージヤアは大きな聲で笑ひ乍ら出て行つた。

『あんた、着物借りはつたの？』

一人の女給が時いろのパフで鼻の頭をたたきながら云つた。

『柄はい丶けど、人絹だすよつてに、すぐ、しはくちやになりますやろ。そいで又、いろいろ云ふやろけど、早う金ためて自分で作らんと損だつせ』その女は、何かを注意したそうにしたが、思ひ返したらしく扉の外へ消えた。

十日間立つた。彼女たちは、其の日、其の日の收入を毎日店主にあづけて、十日目毎に、まとめて貰ふことになつてゐた。そしてその時、遲刻した時、早引きした時、休んだ時の、それ〲の罰金を差引かれるのだつた。月乃はその十日目に三十圓は貰へる筈だつた。彼女は一日休み、二日遲刻してゐた。そして食費を十日に三圓づゝ、それは食べても食べなくても取られるのだつた。一切合切引かれても彼女は二十三圓は貰へると思つてゐた。

だが店主は大きな帳簿を前にして、彼女の手に十圓渡した。それは着物の金を何分の一か引いたものであると云ふのであつた。

深夜の二時まで、十時間以上も、身につかないびら〲した着物と、紅と白粉とに化けて作り聲を出さなければならない。その上、不當な搾取されることが、月乃には氣に喰はなかつた。

『氣に入らんとでも、思ふてだつたか？』

店主はにや〲笑つて月乃を見た。

『いゝえ、いゝんですの』彼女は部屋を出かけてゐた。

『ちよつと、ちよつと待つておくんなさい』

若い下卑た顔をした店主は少し顔を反けて云ひ出した。

『初め、もつと多いゝやうに云ひましたさかい、ちと少いと思ふてゐやはりますやろ。そりやあ、何ぼにでもなるにはなるが、そこには、いろ〲からくりがおますわ』彼は彼女の方へ寄つて來た。

『どうだす？僕は君のやうなタイプの女が好きなんです。これからどつかへ、遊びに行かうぢやおまへんか。な？僕と交渉さへ持つとつたら、どないなことでも出來ますやろ？行かうぢやおまへんか、これからすぐ』

月乃は、かつとなつた。

『何がおまへんかです？下らない!!この着物あんたんとこへたゝきつけておけば、文句ないぢやないか』彼女は更衣室に飛び込んだ。するといつの間にか、彼女の毎日着て來る着物が失くなつてゐるのだ。たしかに袖だゝみにして、棚の上に乘せて置いたのである。その上に小さく丸めておいた風呂敷包みもなかつた。どこをさがしてもなく、たしかにこの室から持ち出したことは明らかだつた。

彼女は身を躍らせて、階段をかけ降りた。女給達は皆歸つた後だつた。彼女はドアを突き破るやうに街路へ出た。彼女が電車道を横切つて向ふ側へ渡つた頃に、初めて、店主は窓から顔を突き出し何か、わめき乍ら、通行人に彼女を差し示した。

『何だ？着逃げやて？』

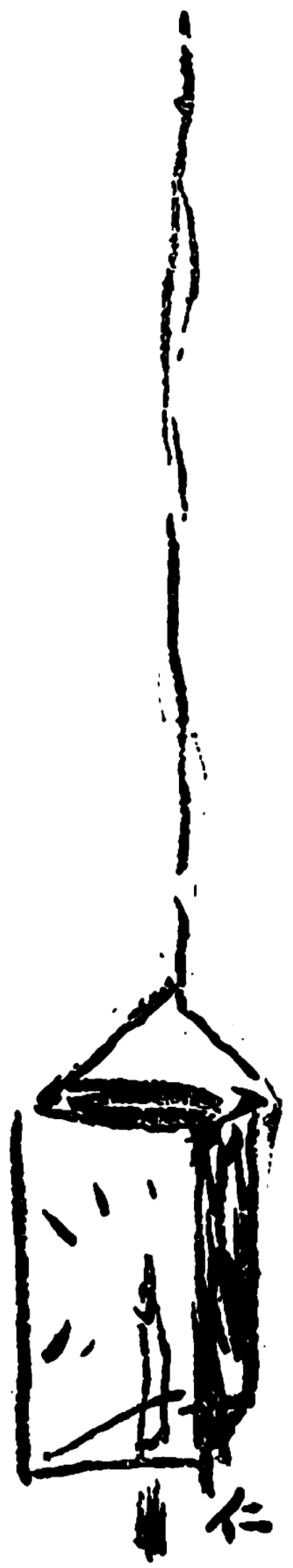
『おい、おい、追つかけろ』

『喰ひ逃げや、喰ひ逃げや、あの派手な着物を着た女をつかまへてくれ！』

『喰ひ逃げか。しやうもない。金がないのやろ、逃がしたつたらえゝが』

群集は靜かにわめき乍ら、走りに走る彼女を追つかけた。

未來をもつもの



小泉せい

一

欣子は、平常の癖で、五時になると深い眠りから覺めた。遉がに不安な平和のない心持ちで昨日工場で自分の仕でかしたことを思ひ出して元氣がなかつた。

「今日から工場にゆけないんだ」と思ふと欣子は、ガッカリして一時に全身の筋肉が崩れたかと思ふ程、ペッタリ、そのまゝ寐床の中に突ッ伏した。

さうして忘れてゐた涙が急に、胸から肩に押し上げられて湧き流れ、顔を押しつけてゐる腕が冷や〳〵と涙で濡れた。はじめて、後悔らしい寂しさを感じたのであつた。

「工場は止めたんだもの、こんなに早く起きなくてもいいのだ」さう思ふと解放されたような身輕な氣分になれて、いくらか悲しみが輕くなつた。それで、欣子は、母親が目覺めないように、そうつと、靜かに崩れた姿勢を變へて、再びそのまゝ寢たのであつた。

夜はおそく、一時近くまで客の腰や足を揉み疲れ歩るき疲れて歸つて來る母親は、今、眞夜中のときをつくつて、眠りこんでゐた。それは、彼女等の大方の習慣で、この時刻、欣子は起きてご飯を炊き、辨當を詰めて、靜かに戸を立てて工場に出てゆく――その間、母親には休息の時なのだ。

欣子が終日工場で働いて、さまざまな出來事、――それも子供らし

い話しを、母親にして聴せようと樂しく歸つて來る六時半といふ時間は、母親は、自分の仕事の仕度のため、不自由な盲目の身體を器用に持ち運びながら、欣子の歸つて來るのを待つてそくさと、按摩に出てゆくのであつた。

それが、彼女等親娘の生活であつた。別々に、はなればなれに暮してゆく二人は、唯、眠つた「時」だけ一ッ所に相寄つて生きてゐるのであつた。

こうした生活に馴れるまではお互にいとしかつた。心細かつた。そして、なれて行つたのである。

急に、二人の息子と夫を、病魔に奪われた母親は、身も世もなく歎いた。長い間病身で、夫や子供に頼り切つてゐた彼女だけに、彼女は、その時縊死をするつもりでゐた。こんな不自由な身で、一人で生きてゆくと云ふことは到底出來ないことなのだ。

さうした不幸な歎きのうちに泣きつくした母親は、やうやく自決しようとした時、それまで長い間持ちつづけてゐた眼病が、全く失明してしまつたのであつた。

ただもう、うろ〳〵母親は迷ふばかりであつた。狂ふたかと思ふ程彼女は、凡てを見失ひ、取り失ひ、失心同然、屍の樣に長屋の一隅に身をころがしてゐたのであつた。死は人生最後の恐怖であり又生くるものの受ける慘酷なる結末である。だが彼女等はその最極悲劇の内に於てすら、今日早速、いかにして喰ふてゆくかと云ふ眼前の切迫を悲しまなければならなかつたのであつた。死別よりも、稼ぎ手を失くしたと云ふことが、悲しみをもつと大ほきくした。死人は刻々冷へて地を離るる時彼女等は、反對に刻々生活事實におびやかされて地上にたたきつけられるのであつた。

だがその時、欣子は全く勇敢であつた。英雄の如く、あるひは選ばれた鬪士の如く、失望なく、計畫的に進んだ。世なれた成人の樣に子供として奇蹟的に立ち働いた。

ひとりの身寄りもない憐れな親娘は、世間の情に縋らぬ、人の言葉に輔けられない、自分達の生活と云ふものを新しく建てたのである。それは又とない淋しいあわれなものであつたが、勇しいものでもあつた。

どんな困難な時でも欣子は、栗鼠の樣に立ち働いたのであつた。

欣子の元氣と機智とに力付けられて母親は、欣子の伸びてゆくまゝに自分の心を任せた。

夫への信頼、子供への愛情希望を、一時に自分一人投げ出してゐる母親の樣子を、欣子は、子供心にも哀れに思ふた。安心をさせなければならない。喜ばせたい。急に偉くなつたような、そして云ひ知れない責任を感じて、今迄末子で可愛がられ甘やかされて來た自分の立場が變つて、五ッも十も一遍に年を寄つたような氣がした。

長屋の暮しと戰ひ乍ら、母親を劬り劬りしてゆく彼女の有樣は、眞に天才の如く英傑の如く、世の中の驚嘆を買ひ尊敬をかちえたの

であつた。

一年と有何ヶ月、生活の安定を保持してくれる工場で、欣子は、給仕として可愛がられながら、あるひは疲勞しながら働いて來たのであつた。

それを、昨日、退場間際になつて一人の男給仕を、それも欣子より三ッも年上の給仕を毆りつけて負傷をさせたのだ—あいつが惡いのだ。あいつが惡いのだと言ひ譯はしながらも、强者の立場からそれを失敗として後悔しないわけにはゆかなかつた。みんなは痛快がつて彼女の肩をもつてくれたが、欣子は、却つて叱られるよりも辛かつた。

「なんだい。年下の女に負けて、意氣地なしやい！」と面白がつてゐる者さへあつた。それ等を叱り飛ばした職工長も

「意氣地のねえくせに、色氣ばかり出しやがる」と云つてゐた。誰も、其處に立つてゐる欣子を撲ぐる者はなかつた。若い一人の男工が、欣子の肩を摑んで引き摺らうとした時

「こんな小さい女の子を‥‥放つとけよ。」

誰れやらさう云つて止めてくれた。

欣子は、思ひがけなく給仕の弱いのに輕蔑を感じて、一層腹が立つた。

コンクリートの上に撲り倒されたまま給仕は、脫臼したらしい肩甲部を抑へて、—いた—い、—いた—い、と力ない夢の樣な聲で泣いてゐた。顏の擦過傷からは、血が浸んで、頰を傳つて耳の下へ流れてゐた。退け時の女工や老ひた男工が、その創口を藥液で洗つてやつたり拭いてやつたりする間、欣子はそこを動かないで、それを見てゐた。自分のしたことが善いことか惡いことか彼女には分らなかつた。昂奮が冷めて來るに從つて、太腿の邊がガタ〳〵震へてゐた。

その內、醫者が來ると云ふので欣子は、「こつちに、こい」と工場巡査に袖を摑まれて連れ去られた。

「懲役に行くのだ」と思つて、欣子は巡査に從いて行つた。

交番所では、いつも優しい冗談を云ふ巡査が、默つて職工長と二人で、六ヶ敷しい顏をしてゐるのが恐ろしくなつた。

「どうして、お前は彼奴を撲つたんだい。」と巡査がきいた。

別に叱る程の言葉ではなかつたのだが、欣子は、大變叱られてゐる氣持だつた。

「彼奴は、」欣子は、腕拱いで立つてゐる職工長を上目で、ちらりと見て云つた。

「あれは、いつもいつもあたいの處に來て、厭やらしいことばかり云ふんだもの。今日も、課長さんが歸つた後で、片付けてゐるところに來て、いやつて云ふのに抱きつきやがるから、跳ねとばしてやると彼奴が、あたいのことを課長さんの妾や！と吐すから、あたい、癪に障つて、お前みたいな腰拔け野郎に惚れる女があるもの

かと云つてやると、あいつ、だし拔けに、あたいの頭を撲つたんだもの。あたいだつて飛び付いて、あいつの頭を撲り返したから、それから喧嘩をしたの。あたい、脊が小さいから椅子で撲ぐりつけたら、あんな、あんな弱虫のくせに！。」

「お前、撲ぐられたつて嘘だらう！　一ッも傷がないぢやないか。」

「彼奴拳こつだもの、　こんなに瘤ばかり出來てゐるのに」彼女は不貞腐れた××の樣に、不平らしく、自分の頭や額を抑へて、巡査の顏を見た。職工長は、つゝと寄つて彼女の頭に觸れた。

「こんな子供の喧嘩を、全く、どうしやうもない。かと云つてこのまゝでは濟むまいし！　川本さん、どうしたものでせうなあ！。」

職工長は困り拔いた樣子で、川本巡査に相談ともなく云つた。

「こんな小さい女の子に撲ぐられるなんて、全くどうも呆れたことだ。子供の喧嘩には違いないが、撲ぐられた奴は撲ぐられ損ではちと、可哀さうだから―被害者に云ひ分もあらうから、それでこの子に治療代でも代償させてやれば、何麽ものだらうか。」

　これで、圓滿な解決がついたと云ふ顏で、川本巡査が云つた。

「この子は、ここで働いた金で親娘喰つてゐるので、そんな餘分な金はありませんよ。それに、都合では、首にしなければなるまいかと思ふのです。そんなことだと、一文だつて敲き出さうたつて出ませんや。」

　職工長は苦が笑ひをして、足元を見つめて立つてゐる欣子をじろ〱見てゐた。

「ぢや、これを首などにしないことにして被害者が全治するまで働かせて、その金を治療費に渡すようにやつたら、何うでせう」川本巡査は若いだけ判斷がいゝ。

「そんなことをすれば、この子達は喰つてゆくことも出來なくなります。一層、無理な話しです。」

　それつきり、二人は默つて仕舞つた。

　しばらくして職工長は思ひ出したように、何やら小さい聲で川本巡査に囁くと、欣子を殘して出て行つた。

　外はもうすつかり暮れ切つて、いつの間にやら工場内の機械もたいてい止つてゐた。靜まり返つた周圍を憚るかのように、夜業の窯炊くスコップの音が時に忙しさうに聽へて來るのだつた。

―お母さんが心配してゐるだらう！　眤つと立つてゐると欣子は終日の疲れを覺えて眠氣がしてならなかつた。―早く歸へり度い、歸して呉れればいゝがと思つた。歸してくれないのだらうか、默りこつくり川本巡査が、薄暗い電燈の明りと一所に、氣味惡くなつて來た。そこへ、職工長が再び入つて來た。

「傷は、十日すれば元通りになるだらうと醫者は云つてゐます。痕になる樣なけがでなくてよかつた。この子も一先づ、今夜は歸して、明日課長とも相談してみませう。仕事場にゐる奴ですと私の一存で何うでもなりますが事務所にゐる者ですから」と職工長は自分

の權力範內を言葉で濁して、欣子に向ひ

「今夜はこれで歸れ。明日はいつもの通りに來るのだぞ。課長さんにもよく話して置くから」と力を入れて云つた。

欣子は、默つてお叩頭して其處を出た。そしてそのまゝ、暗い工場裏の道を海に添ふて逃げる樣に歸つて行つた。

「あいつが惡いのだ。あいつが惡いのだ。」

家に歸つて來ると張りつめてゐた心が弛んで、頭がぐわん／＼混亂してきて泣きじやくつた。慰め手のない家の內でご飯も喰べず、いつまでもいつまでも泣いて泣き疲れ、泣き寢いりに眠つてしまつたのであつた。

「もう工場は止める」夢現の中で欣子はさう決心した。

二

「欣子！」

上身を擡げて母親は、吃驚した聲を出して、欣子の肩を搖つた。

「起きないかえ！」何にも知らないから母親は、二度寢でぐつすりなつてゐる娘を詰じるやうに、その肩を搖つた。

欣子は、目覺めてはゐたがしかし、それに返事をする氣にはなれなかつた。—外は大分明るくなつてゐる、起きなくては、と思ふ端から、今日から工場に行かないことをお母さんに、何んと云つたらいいだらうか—と思ふと起きる氣になれない。返事をするのも大儀になつて來る。

「欣子！　これ、どうしたのぢや。身體の工合でも惡いのかえ。」盲目の銳敏さで、欣子が目覺めてゐることは分るが、いつもの氣輕な娘が、どうしてこう不氣嫌なのか、返事もしないのか。ある暗い豫感がさつと母親の腦裡を掠めた。—何事かあつたのだと云ふ直感で母親は調子を變へて、怖いものに觸れるやうに

「もう外も明るくなつてゐるよ。お日樣に笑われる。さあ／＼、起きて戶を開けてくれ」と云ひ捨てて、自分は床を離れて、帶や前掛を以つて身を繕ひ始めた。欣子もそれと同時に起きて裏戶を開けた。

家と云つても一間限りの貧民長屋である。前と裏とに名ばかりの立戶を持つて、左右は赫土の荒塗りそのまゝの壁で、兩隣りに連りごんぞう（舟の荷上げ人足の方言）や工場人夫の寄り合ひ長屋である。戶を開けば、裏は路地を挾んで鐵道線路が、幾筋も／＼のレールを海岸線まで押擴げ、直ぐ眞向ふの關門海峽は朝をたゆ／＼かがやいて、帆舟や水蒸船がその波上を靜に往來してゐた。

春は、欣子の頭に鬱積してゐるくさくさした感情をたちまち拂ひ除けて、彼女は笑ひかけた。空も海も山も、のび／＼してその麗らかな朝の中にあつて欣子は、晴々と心が浮き立つた。工場を止めれば、時間の束縛をされないでよかつた。

對岸の下ノ關彥島からは、幾本となく煙筒が煙りを吐いてゐて、聽えない雜音を感じた。

―今頃―工場では、もう課長さんは出勤されたであらうか。まだか知ら、―お茶を出して、帽子を掛けて、仕事場の靴と履き代へられた赤い通勤靴を電話室の隅に置いて來ると、忙がしくない時は、「きん太郎どうぢや。」と氣嫌の良い課長さんの顔が思ひ出される。―急に、昨日の事が氣になる。今日工場に出て居たら、何んと云つて叱られるだらうか、電話の聞きちがいの時の樣に、―子供ぢやの う―と許して貰えるか知ら？　あたしがゐないから課長さんはいつもの樣に、

「きん公ッ！　きん公ッ！　きん太郎何處へ行きよつた」と呼んでゐられるであらうか。でもあたしは、あんなことをしたのだから、怒つて物言つて下さらないかも知れない。いいわ、あんな人！　助ッ平だ。あんな人に怒られても平氣だ。あたしはもう、工場の者でないんだから、どうなつたつて構はない。勝手に怒るがいい。

欣子は、ぼんやりそんな事を考へてゐると、工場の誰れ彼れに反抗心がむらくと起きて來るのだつた。

「欣子水を汲んで來てくれないかえ。」

入口の戸を開けた母親は、欣子を呼んだ。

欣子は、長屋の横手にある共同水道の水を汲むでゐると、二軒先きの娘が、赤坊を脊中に縛りつけて産後の靑白い顔で、バケッに襁褓を一つぱい入れて抱へて來た。

「オヤ、今日はお休みかね？」と欣子を見て訊ねた。

この娘は、欣子と同じ工場の女工で欣子とは、一ッ年上の、朝夕の連れ友だちであつた。姙娠中もずつと一所に工場に通ふてゐたのであつたが、十日程前に出產して今は休んでゐるのであつた。あと十日も經てば彼女は、この赤坊の托り手を見つけて工場通ひを始めるのだ。

此處等一體は、近くにあるセメント工場で暮しを立ててゆく者が多く、日中家に居るものは、病人か中風でよれよれしてゐる老人位で小さい子供等は大ていは托兒所に置いたり、人に托づけたりして、夫も妻も、息子も娘も十歲前後の年頃になると總出稼ぎに出るので、日中は、どの長屋もガラ空き同然になつてゐる。人間がガラ空きである樣に家の中も又ガラ空きで、盗人が來ても言葉通り全く持ち去るものがなかつた。貧しさもあらうが、これ等の人達の稼ぐこと、消費することを知つてゐても、蓄へると云ふことは、割合に知らない。これは一種の貧民長屋の共通習慣性であると云つてもいい。世の中は太う短う―渡らうと云ふのが彼等である。屑屋が干物を掻つぱらつたとか、お櫃泥棒があつた、親父の厚司を盗られたとか云ふ事が留守中の大椿事となつて、夕刻から歸つて來る男や女に立罩められた長屋の路地で大騷ぎとなるのである。

其他の變事、例へば出產にしろ死亡にしろ、そんなことは長屋の娘が錦紗の着物を買つた程にも驚ろかない。夫婦喧嘩立ち廻りは茶飯常事だ。そんな風だから十四五歲の娘の子が私生兒を孕むことな

どは別に珍らしいことではないのだ。娘たちも又、おほきい腹を抱へてゐる內こそ、いくらか羞かんでゐるが、難なく生み落して、白い小さい乳房を赤坊の口に呑ませる樣になると、今まで好奇心の的になつて嬲られてゐたのが一躍、長屋の花形になる。そのいぢらしい可れんなさまは、芝居にでもしてみたいと冷かされる。早や一人前の女になつた。可愛らしいお母さんだと喜ばれる。こんな事が彼女等の嫁入の痕になることは少い。

欣子は、彼女に口を利かれたのがいまいましかつた。島田兒（私生兒）を生む樣なだらしない者とは口利き度くない、と云ふ誇りを持つてゐた。

產月になるまでその娘が姙娠してゐることを氣付かなかつた欣子は、それも口惜しかつたのだ。何故となく馬鹿にされたようで不愉快であつた。

「あれは莫迦だよ。あたいの友だちではない」と欣子に罵られても振り拂われても人の好い娘は平氣だつた。何の屈たくなくのんびりした顏をしてゐた。

「恥知らず！」欣子は、その娘の顏を見ると齒痒ゆくなつて、唾吐つ掛けてやり度いようにむか〳〵するのだつた。

だがその娘には、欣子がどうして自分に他そ他そしくなつたのか、どうして不氣嫌なのか、却つて不思議な位だつた。自分の腹にできて自分で生んだ赤坊のことを、どうして欣子が惡く云ふのだらうかと思うてゐた。欣子の腹の中にあつたのを橫取りして私が產んだわけでもないのに――とその娘は、欣子の罵倒を受けると、さう思ふのだつた。その內一所に工場に行ける樣になれば仲良しになるのだ。

欣子は、默つて、―今日はお休みかね―と訊いた娘に、返事の代りに一べつを與へて、ふいと反對の方を向いた。

「欣さん、止めさせられたのかね？」

娘はまだ不審さうにきく。欣子が自分に惡感持つてゐようがゐまいが頓着なく、自分のきこうとすることに詳い。

「止めさせられたのではないよ。」嚙み出す樣に云ひ捨てて欣子は、水を提げてずけ〳〵と去つて仕舞つた。娘は呆れて、腫ぼつたい目で欣子の後姿を見送つてゐたが、思ひ出したようにバケツの水を地面に移すと水道から少し離れた處に水を汲み出して來て、ぶつ〳〵つぶやきながら洗濯をはじめた。背中で赤坊が、小さい頸をぐんやり垂してゐた。直ぐ引つ返へしに、欣子が、小さい釜に米を入れて洗ひに來た。娘は鈍い顏を一寸だけ上げて、こんどは默つておしめを洗つてゐた。―おそい朝めしの仕度だねえ―と云はうとしたのだが……。

欣子は、米を洗ふて仕舞ふと逃げる樣に去んだ。

彼女としては職を失つたと云ふことが非常な不名譽なのである。長屋の風評もおそれた。自分の爲たことは長屋の者から反感持たれはしないかと思ふと、今まで折角きづき上げた努力が水泡に歸する

―と云ふ歎きがあつた。母親の失望も心配せずにはゐられなかつた。その娘に訊かれたばかりに欣子は、何にも彼もが後悔になつて黒波の様に押し寄せて來た。―どうせう―どうせう―。欣子は今にも泣けさうな切なさで家の前まで來て「アッ」と立ち竦んだ。工場の小使が來て入口の閾に腰掛けて母親と話してゐた。

「あたいを引つ張りに來たのだ!」心臓の鼓動が顳まで響いた。だがしばらくする内に、其處にはそれ程の險惡な空氣は感じられなかつた。

「夜はおそく歸へるので、何にも聽く間がないのでありますよ。いろ〳〵心配をかけて、何んとも濟まないことゝあります。何か―それでは欣子が間違ひでもしたのでありますか?」

母親は心配さうに兩手を膝の上に置いて、何遍となくお叩頭ばかりしてゐた。

「まるつきり知つておられないのかな! 欣子は昨日、給仕に大負傷させたのぢやよ。」

母親が驚ろいた顏を上げるのと一所だつた。欣子は、持つてゐた釜を其處に放り出して小使の兩腕を掴んだ。

「お母さんにそれ云つては可厭! それ云つちやいけない!」

欣子は、むきに小使の口を噤ませようとした。

「きん子ッ。他人の話しを邪魔をするのではない。あつちへ行きなさいッ。」母親は氣色ばんで叱つて、小使に向ひ

「どうぞ話してきかせて下さい―かまいませんから。」

「いやッ。云つたらいけない。あんた歸つておくれ。みんな惡い奴ばかりだ。あたいたちをいぢめる奴ばかりだ。歸つておくれ! 歸つておくれ!」欣子は涙をボロ〳〵流して小使を戸口の方へ引つ張つた。

「誰がお前をいぢめてゐる、お前の爲を思へばこそ、こうやつて來たんぢやないか。工場を止めるとお前達は喰ふに困るだらうから皆が相談して、課長さんも大目に見てくれて、止めないでいい樣に話しが付いたのだ。お前が撲つた給仕は評判の惡い奴だし、小綺麗な女兒を見るといたづらばかりする奴だから、治療だけさせて快くなつたらあいつを止めさせることになつたんだ。お前はそれを知らんから出て來ないのぢやらう。職工長さんが、ちやんと出て來いと云つたんだと云ふぢやないか。それ 迎ひに來てやつたんだ。みんなお前の爲ぢやないか。親切ぢやないか。いぢめるなんど口幅なことを云ふと罰が當るぞ。」

小使は欣子を突きのけて、勿體振つて口をつぐむだ。それを聽くと欣子は、ぐつと癪に障つた。

「何が親切だい! 助ッ平ッ。みんな助ッ平だ。誰があんな工場なんかに行つてやるものか。もう、あたいは止めたんだもの。課長さんでも職工長さんでも少つとも恐かないよ。お前さんだつて何だいあたい知らない。道で會つたつて物言つてやるものか。歸つておく

れ。」
　小使に突きのけられた欣子は、壁に身體を支へてずら〳〵口惜しさうに顔をゆがめて喋舌り立てた。
「きん子ッ。」
　母親が止めようとすると一層いきり立つた。
「いいよ。お母さんは默つといて頂戴。あたいはどんな事があつても工場には行かないから!。いいよ。工場の人なんか皆んな助ッ平だ。給仕だつて助ッ平だからあたい撲つてやつたんだもの。あんな奴に誰が負けるものか。課長さんだつて誰もゐない時はあたいを捕へて頸や顔を舌めるんだもの。そして、良い着物が欲しくはないかつて云ふんだもの。あたいを子供やと思ふて馬鹿にしてゐる。ちあんとあたいは分るんだ‥‥。お前さんだつて何だい。暗い處で會ふと直ぐあたいのお臀を突つつくぢやないか。助ッ平野郎! 何んだい。親切も糞もないよ。歸れ。歸れ。助ッ平!」
　小使がどんな顔をしようと何んな眼色をしようとお構ひなしにまくし立てる。
「これ—きん子! だまらんかい。」
「お母さんは默つて頂戴。お母さんに工場の事なんか分らないんぢやないか。」
　そして彼女は、益々亢奮して小使の方へにじり依つた。
「歸れ。歸れ。今直ぐ歸れ。お前さんに用なんか有りやせんよ。」
　小使が青い顔をして怒つた様に立ち上つた。
「氣違ひめ。後で後悔するなよ。生意氣な女郎だ。馬鹿つたれ。」
　小使が出て行くと欣子は、疊の上にがつぱり倒れて、ばか—ばか—ばかと連呼して泣き狂ふた。
「お前はどうしてその事をわたしに話さなかつたのかえ!」
　母親は、欣子の有様に途方にくれておろ〳〵云ふのだつた。
「話したつてお母さんは心配するだけだし、お母さんより課長さんの方が偉いんだもの。」
　欣子は、さう云ひ云ひ泣き續けた。訴へても訴へ處のない自分達の頼りなさを感じて、彼女は泣いた。
　—お母さんに話したところで、それが何にならう。徒に盲の母を心配させるよりも自分一人で我慢した方がいいと諦め切つてゐる欣子は、今迄大ていの物事は自分一人で片付ける癖になつて、今度の事でも上手に母親を安心させるつもりでゐたのであつた。
「どんな失策をしても許してやると工場から、わざ〳〵迎ひにまで來てくれたのに、あんな事を云つて怒らせて、後では何うなると思ふかえ。どうしてお金儲けをするつもりかえ。莫迦な、なんて考へのないことを云ふのだよ。」
　欣子の泣き方が少し靜かになつた時、母親は、愚痴まじりに云ふのであつた。
「あんな工場にゆくより女郎になつた方がええッて、谷川の小母さ

んが云つてたよ。」
一ヶ月程前、欣子と同じ年の女工が四十男の手籠に會つた時、そしてそれ以來誰れ彼れの嬲りものになつてゆくその女工を、髪結ひの小母さんが「女工になるより女郎になつた方が餘つぽどいい」と云つてゐたのを何とはなしに思ひ出したのであつた。
いかに落ちぶれても大道で、右や左の旦那さまの方の情を求めるなんて、そんないぢきたねえ眞似はしたない。それよりお女郎になつた方がましだ。と欣子はそんな意地も持つてゐた。

三

文明は東京に銀座を作つた。そして淺草も作つた—と同時に日暮里の貧民窟を持つてゐる。淺草は賣春婦の巣窟であり日暮里は悲劇の舞臺である人生は斯の如くに區劃されてゐるのだ。其處には現代文化の花が咲けば、此處には封建時代のかすが殘されてゐる。
忠義の爲、切腹するのは最高道德であつた日本。親のためなら身を賣つて世界に沈むを孝行者と賞讚された時代はさう遠いことではない。
—立派な奥様でありながら、心ではあの男やこの男を思ふてゐる女よりも、身は誰れ彼れに任せてはゐるが心は一人の男に思ひ込んでゐる私達の方が却つて貞淑だ、神聖だ、と云つた女郎があつた。
—一夜二百圓の關取を買つた時は、今迄の内で一番面白くて忘れられないと、錦紗の羽織を着流した某未亡人が、その白い胸をはだけて、アホホホ…と豪傑の樣に大笑した世の中だ。
貧困はただちつとばかりの悲劇を生むだけだ。
欣子は海岸に出て來た。空が、午后であつた。
今岸に着いたばかりの傳馬船が、岸へ踏み板を渡して二人の男が上つて來た。そして、其處に積まれてある小石の山を二人の男は畚に掬ひ込むと、若い方の男はそれを荷ひ上げて舟の中へ運び始めた。二回三回。二人の男達は默つて各〻の仕事を分擔して働いてゐた。—卽、老いた男はスコップを持つてその小石を空の畚に掬ひ込み、若い男はそれを舟の中に移して來る。
沖の方には樣樣の形體をした舟が、あたたかく、無數に浮んでゐた。時々、蒸汽船の音が波を驚ろかせた。
小石の山が三分の一程に減つた頃には、老ひた男はもう大分疲れて着てゐた絆天を脫いでシャツだけになつて、若い男に急かれまいと焦り出してゐたが、やはり一掬ひ二掬ひは若者に待つて貰ふ樣になつた。
欣子は、それ迄其處に眤つと立つてそれを眺めてゐたが、見てゐる内にその老人が可哀さうになつた。
「小父さん！ 手傳つてあげようか。」
だがその老人は「フフン」と苦笑しただけで見むきもしなかつ

た。欣子は

ココハ、オクニヲ、ナンビヤクリー、

と力を入れて歌ひ乍ら其處の小石を手玉の樣にして畚に投げ込んでやつた。若者もいつか、欣子の歌に合せて歌ひ乍ら舟と陸を往復してゐた。

「ねえちやんのおかげで、息子より勝てるよ。」

老人が欣子に、禮ともつかぬことを云ふ時に、欣子は、その小石を兩手で自分の前垂れに掬ひ込むでは畚に移し、汗ばんで本仕事を始めてゐた。歌も、歌ひ止めてゐた。こんどは却つて若者が、欣子等に待たれる樣になつた。

「小父さん、あの人は小父さんの子供なの?」

欣子は、畚一つ杯に石が溜ると、その老人に話しかけた。

「さうだよ。」

「いいねえ—。あんな子供があつて。いくつなの?」

老成た口を利くので、老人は微笑した。

「ねえちやんは親はゐるかね?」

「お母さんはゐるけれど、お父さんも兄さんもみーんな死んだよ。大きい兄さんとお父さんは鐵道に出てゐたの。小さい兄さんは本屋の小僧に行つてゐたんだけど、皆んな死んで仕舞つたの。」

そこへ、若者が來て空の畚を置いて行つたので、二人は又石を掬ひ始めた。

「小父さんは—何處から來たの?」

「若松だ。」

「そんならこれを若松に持つて歸るの?」

「いいや、博多へ持つて行くのだよ」と老人が答へると、欣子は、目を丸るくした。

「博多へ— まあ—遠いいこと。博多つていい處?」

「うん。いい處だ。博多小女郎がゐるよ。ハハ、、、。」

老人は、面當臭さうに笑つた。

「博多小女郎つて、—なあに?」

「博多小女郎と云へば、美しい着物を着て、お酒をたんと呑ませる女だよ。」

「では、お女郎と同じだね。あたいはお女郎になるのよ。」

こんどはその老人が目を丸るくした。

「お前! お女郎だつて? お前。お女郎なんぞになるぢやねえよそんな小さい身體して、子守りにでもなつたがいいんだよ。」

そこへ若者が、空になつた畚を持つて來たので欣子は石を掬ひ込みながら

「だつて小父さん。子守はおしつこばかりされてお金がないんだもの—ねえ—。」と云つた。老人はもう答へなかつた。小石は殆んど舟の中に積み込まれた。

仕事が終つた頃は太陽も山頂近くになつてゐた。親子の船頭は、

小石の置かれてあつた跡に蹲んで煙草を吸ふて休んだ。
「あした、朝までに着けばいいんだが。ねえちやんのおかげで早く濟んだよ。」
　老人は手掌に煙管を打ち乍ら、さう云つた。若者は、默つて微笑してゐた。
「小父さんたちは、今夜海の中をゆくの？」
「うん。今頃は月がいいでなあ、漕いでゆくのだ。」
「小父さん、舟はお金が儲るでせうねえ。」
　欣子は、女郎になることを考へながら訊いた。
「そりや儲かるよ。百圓でも二百圓でも儲かるよ。」
　目の小尻に皺をいつぱい作つて老人は、顔で笑つた。
「だつたらあたい、舟に乘らうか知ら！　そして大ほきくなつたら船長さんになりたい。そして……そしたらお金持ちになつて……。」
　彼女は、少女小說の繪でみた水兵服を着た英國の快少女の船長を思ひ出したのであつた。
「ウワハハハハア――。いま、お女郎になると云つたではないか。お女郎の船長さんか。ウワハハハ、、、、。船長さん、船長さん、お女郎船長、ウハハハハ、、、、、。」
　二人の男は抱腹して笑ひこけた。欣子には、二人の笑ふわけが分らなかつた。――女の船頭はいくらもゐるのに、私が船に乘るそれがなぜ、この人達におかしいのだと思ふた。それで欣子が眞面目な顔をしてゐるので二人の男は、彼女が怒つたのだと思つた。
「どれ、出かけようか。」二人は立ち上つた。
「ねえちやん―有難う。これで菓子でも買ひな。」
　老人は、二十錢銀貨を欣子の手に握らせた。欣子は、それを貰ふと夢が覺めたやうに、急に、母親のことを思ひ出した。どうして金儲けをするかえ。と泣いた親を思ひ出したのだ。
　夜になると欣子は、母親が按摩にゆくのに從いて行つた。暗い小路を通つたり明るい大通りに出たりして母親と娘は夜中になつてゆく街を笛を鳴らしながら步るくのだつた。風呂歸りの駄菓子屋の爺さん一人が客だつた。
「ほんとうに、こんなことでどうならう。」と母親は客のないのに歎息した。
「ほんとうに、こんなことでどうなるんだ。」欣子も、さう思つた。
　哀れつぽく客を探す笛の音が、欣子を悲しませた。道の眞中をおぼつかない恰好で步るいてゆく母親の姿を欣子が、それと少し遲れて家の軒下を歩みながら見て思つた。
「こんな事をして金儲けて、ご飯をたべて、そしてそれが何になるのだらうか。」



裏面にあへぐ者

竹内ユキエ

—第一場—

林田一郎　××工場の職工
河原俊三　新聞配達夫（林田の友人）
木村正太郎　失業中の林田の友人
高野　清　××工場職工（林田の友人）
美津枝　林田の妹

十二月の或日。　下宿の一室

正面壁　二三ヶ所壁土がはげてゐる、無産者新聞が一枚少し斜にはつてある。下手階段　上手窓、下に机、窓と机との間の壁にレーニンの寫眞一枚机の上は本や新聞が亂雜に置いてある。

林田一人机に向つて本を讀んで居る、時々窓を開けて外を見る。

河原　おい林田居るか、
林田　やあ河原か、一人だ、座れ、
河原　寒いな、火鉢ないのか、
林田　七輪ならあるよ、僕等には寒くつても暖たまる火が無いんだ、

河原　どこも同じだね、我々プロレタリヤは、寒い〳〵言つて寒さを忘れようとするからみじめだよ、
林田　君の兄さんは今日夜業だね、こんな寒い日の夜業は實際に身にこたへるからね、
河原　そうだ。僕も經驗があるからね、早く夜業廢止の運動を起さにやいかんね、
林田　二三の工場では廢止したと言ふが、表面だけだろうと思ふね××工場はとても自發的にはやらないよ、當局からちやんと定めりや廢止するけど、それに廢止したらきつと賃銀の値下だ、あの社長はけちだ、いやけちを通り過して金の奴隷なんだ、
河原　爭議はやらないのか、
林田　深夜業廢止にともなつて賃銀値下や解雇するやうな事があれば爭議を初めるよ、昨日も組合でそんな事を話し合つたんだ、皆やれ〳〵と進めてくれるし、又進めなくとも僕は外の職工達とやる覺悟なんだ、その時は君も應援してくれるだろうな、
河原　するとも、應援しなくてどうする、ときに美津枝さんは、
林田　美津枝は工場だ、休みが僕とかわりばんこになるんだ、六時頃は歸るよ、
木村　（やあと言ひながら木村入つて來る）人を馬鹿にしてら――、
林田　どうした、
木村　何處へ行つても駄目だ、今日も三ヶ所廻つたが同じ事を言つてら、
河原　へイ、もうちやんときまりました、お氣の毒ですが又此の次に、とでも言ふのだろう、
木村　うん、大同小異だね、
林田　世の中が悪いのだ、眞面目に働こうと思つても仕事がないからね、新聞案内欄を氣を付けて居たらいゝだろう、
木村　それも駄目だ、小店員には年が多過ぎる、社員には履歴書が役に立たない、外交員にまさかナッパ服でも行けないしな、
河原　ナッパ服の外交員か、ふるつてら、澤山の加入者があつまるだらうよ、
木村　ひやかすな、

林田笑ふ、樂隊が窓の下を通る、林田のぞく

河原　何んだ、
林田　年の市の大賣出し、金をまきたい方は御遠慮なくおいで下さい（口上人の言語をまねて）とお知らせ下さるのだ。
河原　まきたい奴はまくさ、
木村　まく金があれば僕等に分けてくれないかな、
林田　馬鹿、そんな事するのは乞食じやないか、そうしてまで生きて行くより死んだがましだ、
木村　林田そんなに怒らんでもいゝじやないか、僕はそんなつもりで言つたのじやない、取り消すよ、

林田　そうか、そしたら僕も取り消し、
河原　もうすぐ正月だね、
木村　下宿代も拂へないのに、正月の事なんか考へても見ない、
林田　そこの大通りの印刷屋に昨日だつたか、植字工を募集して居たね、木村行つて見ないか、君なら經驗もあるのだから、遊んで居るよりいゝと思ふがね、
木村　そうか、大きな所かい、
林田　いゝやそんなに大きくはないね、普通の家を使用して居るのだからね、
木村　とに角これから行つて見よう、大通りへ出たら直ぐわかる？
松田　うん、直ぐわかるよ、大通りを眞直ぐ電車道の方へ行くと、最初の四ツ角のこちらから左側だ、
木村　そうか、有難う、これから行つて來よう、じやさよなら、
林田　おい木村、歸へりに寄れよ、
　木村うなづきながら退場
河原　うまく行けばいゝがな、
林田　（本ののページをめくりながら）もう何時頃だらう、
河原　もう五時頃じやないか、
　電燈つく
河原　もう電氣がついたね、僕失禮する、
　立ちかける、その時高野上つて來る。

林田　やあ、座れ、
高野　（高野座りながら）僕これから、國へ歸るから、林田、工場には手紙を出して置いたけど、君明日行つたら職工長に一寸言つて置いてくれないか、
林田　急になぜ歸るのだい、
高野　親爺が死んだのだ、三十分程前電報が來てびつくりしたよ、病氣の事もなにも知らなかつたからね、
河原　急死なんだね、
高野　まあ、そんなんだらう、
林田　氣の毒だな、成可く早い方がいゝね、これから直ぐ歸るのか、
高野　うん直ぐだ、（高野立ちかける、）
美津枝　（美津枝歸る）唯今、あらいらつしやい、
林田　お歸り、
　美津枝高野の様子を見て
美津枝　高野さんもうお歸へりになるの、まだいゝでせう、
高野　いや僕ね、急用があるのです、ではさようなら、林田頼むよ、
林田　引受けた、なるべく早くこちらへ來るようにね、
高野　うん、（かすかにうなづく、退場）
美津枝　兄さん、高野さんどうしたの、
林田　親爺が死んださうだ、
美津枝　まあ、可愛想に、お送りしなくともいゝの、

河原　送つてやりたいが、あまり急ぐからつい言ひ出せなかつた、
美津枝　仕様のない人達だね、御飯にしませうか、河原さん食べていらつしやいね、
河原　僕歸ろう、飯まで食ふなんてあんまりあつかましいね、いつもだから、
美津枝　いゝじやないの、私達もよばれるから、ね兄さんかまわないわね、
林田　それやさうさ、もうこんな時間だから、河原食つて行けよ、
美津枝　ねえいゝでせう河原さん、兄さんがお待かねかしら、
河原　いや今日は兄貴は夜業ですからね、
美津枝　それじやなほいゝわ、
林田　おい〳〵美津ちやん、そんなに進めて御馳走あるのかい、
美津枝　えゝ、今日はとてもすばらしいのよ、
河原　すばらしい御馳走なら食ふかな、
美津枝　現金な河原さん、
林田　さうときまると早いがいゝね美津ちやん、
美津枝　これからお茶を沸すまで待つてなさいな、兄さんの食辛抱、
林田　お前こそ、
美津枝　兄さんがよ、この間も三越でおすしたべた時、あたしの分まで食べてしまつて、あたしに二切しか食べさせないじやないの、
林田　お前がぐず〳〵してるからだ、
美津枝　うそよ、
河原　もう喧嘩は止め〳〵、
林田　こいつが歸るとすぐ喧嘩だ、それも皆こいつが始めるからね
美津枝　うそよ河原さん、
河原　半分づゝ聞きませうと言ふ所だね、

美津枝其の間に食事の用意をすます

美津枝　さゝどうぞ、お茶もわきましたわ、
林田　美津ちやんもう少し待つてゐやう、木村が來るだらうから、
美津枝　さう、では待つてませうね。今日ね、第一工場の庄さんがね機械に巻かれたのよ、
林田　庄さん？　さう〳〵庄初江さんだね、
美津枝　えゝさうよ、油が多過ぎたからでせう、絲の方へ流れたので拭かうとしたの、そしたら巻かれてね、外の者が知らせたのに機械を止めないで職長がどなりちらすのよ、おかげで庄さん右手メチヤ〳〵になつたわ、
林田　お前見たのかい、
美津枝　えゝ、私歸ろうとして居たの、そしたら第一の入口で騷いでるのでのぞいて見たわ、
河原　申わけだけの見舞金で馘だね、
林田　さうにきまつてる、こちらが何か言ふとグズ〳〵言つて誤魔化すからね、

美津枝　そうだわ、それにね庄さんのお家、とても困つて居られるのよ、お父さんがないでせう、その上子供が小さい者ばかりで、働けるのはお母さんの內職、だけなの、一番下の子がまだ三ッで一人でほつて置くとあぶないでせう、庄さんの日給で暮してる樣なものよ、

河原　よく知つてるね、

美津枝　私二三度遊びに行つた事あるのよ、

林田　職工一同として少しでも見舞金を出さねば、じつと見て居られないな、

美津枝　私もそう思ふわ、それで明日皆と相談しようと思ふの、

林田　そうだ困る時はお互だからね、

河原　氣の毒だね、君の組合の方ではなんとか出來ないか、

林田　出來ない事も無いが……木村はおそいねもう飯にしようか、

三人食事を初める

美津ちやんの御馳走は味淋漬か、

飯があついといゝがな、

美津枝　兄さんたいてくれたらいゝのに、一日遊んでたのに、

林田　ハア……一本やられた、

食事すみ、七輪に手をかざす、木村登場

木村　河原まだ居たのか、林田有難う、うまくいつたよ、さつそく名刺百枚刷つて來た、

林田　それやよかつた、飯は、

木村　あそこで食つた、給料はこちらにまかしてくれと言ふから僕何も言はなかつたよ、

河原　それでもいゝさ、遊んで居るよりわね、あゝそう／＼高野がね、親爺が死んだから、國へ歸ると云つて五時半頃こゝへ來たがすぐ歸つたよ、

木村　親爺が死んだつて、可愛相に、あいつはあんな奴だがそれや親孝行だからね、きつと泣いてるだろ、

河原　もう僕達も歸ろ木村、

美津枝　まだいゝじやないの、

木村　君等は朝が早いから、早く寢たがいゝね、

林田　なーに工場のプーが鳴ると飛び起きるよ、

河原　どうだかわかりやしない、ファーペルの樣にはいくまいぜ、

美津枝　ファーペルて何、

林田　ゴリキーの母の中の人物だよ、母の一人息子で、運動の若き鬪士だ、

美津枝　そう、讀みたいわ、

木村　高野が持つてるよ、

美津枝　でも駄目ね、高野さんいつこちらへ來るかわからないもの

河原　何大丈夫、誰からか貸りて來てあげよう、

美津枝　そう、お願ひしますわ、

木村　じや歸ろう、林田さよなら、

美津枝　さよなら、

河原、木村退場

—幕—

—第二場—

林田一郎
林田美津枝
職工數十名
女工十數名
職工長

時　翌日、午后の休憩時間、第二工場の裏の空地
正面第二工場建物、少し下手による、上手トロッコの線路
幕開く、林田工場を背にして立つて居る、職工數十名其の前でワイ〳〵騒いで居る

林田　オイ、少し靜にしてくれ、話が出來んじやないか、

職一　靜にしろ、

職二　早く話せ、

職三　ぐづ〳〵するな、早くせんともうすぐ鐘が鳴るぞ、

職四　そうだ、

林田　皆な昨日第一工場の庄初江が怪我をしたの知つてるか、

職三　知つてる、

職六　それがどうしたと言ふのだ、

林田　庄が機械の油を拭こうとした時卷かれたのだ、すぐそばに居た者が知らせたが機械を止めなかつた、勿論其の場には職長も居たのだぞ、それに右手が血まみれになつて、氣を失しなふまで平氣で廻轉させるのだ、目糞位の見舞金で一家の働手が馘首だ、我々はこれをじつと見てゐていゝのか、

職四　どうしろと云ふのだ、

職一　解つてるじやないか會社の出方一つでこつちにも覺悟がある

職三　そうだ、ストライキだ、

職七　今すぐやれ、

職八　俺の兄貴も殺されたぞ、

職九　俺の親爺もだ、

職二　家じや餓鬼が泣いてら、

職五　アーンアーンおつかあオマンマおくれ、

職十　ふざけるな、

職七　靜かにしろ、

林田　靜かにしろ、僕はさつき支配人に會つて幾ら見舞金を出したか、馘首になるだらうが退職金は幾らか、家族にはどうしたか聞いたのだ、そしたら支配人はそんな事を言つてもお前達の爲に一文にもなる事じやねえから、だまつて居ろと言ふんだ、それで僕は一文にならんでいゝから知らせてくれと云つたら、ぶつ〳〵言ひながら昨日までの日給と、見舞金百圓、退職金日給の三十日分、治療費なし、家族の慰勞金なしだ、これでいゝのか、

職九　俺の親爺の時もそれ位だつた、
林田　こんな風じや僕達は安心して働く事け出來ない、でこんどこそ斷然やろうぢやないか。實は僕は此の前の時も、其の前の時もやろうと思つて居たが今日まで我慢してゐたのだ、
林田　（咳）僕は決議文をこしらへて見た、今讀むから外に氣が付いたら言つてくれ（ポケットから紙を出して）

一、就業時間の短縮
二、最底賃銀の確立
三、退職手當は日給三ケ月以上
四、公傷に對する治療費の支給
五、遺族に對する見舞金の確立
六、深夜業即時撤廢
七、解雇絶體反對
八、組合加入の自由
九、賃金値下反對

これだ、他に有つたらどしどし言つてくれ、
職十　公休日增加、
職四　贊成、
職十一　工場設立紀念日の慰勞會、
職八　女工寄宿舍の改善、
林田　もうないのか、
職六　それ位でよからう、

上手より女工十四五名走つて來る

美津枝　ちようどよかつたわ、私達ね庄さんに見舞金を出す事にしたの、不贊成の者は一人もなかつたけど、職長がいけないと云ふのよ、それで出さない事にして皆と相談したら事務所には知らせずに出そうと決つたの、あんた達も少しづゝでも出して下さいね、
職二　よし出そう（ポケットから金を出す）
職一　俺もだ、
職三　俺もだ、
職七　俺もだ、
田林　僕も出す、

居合せた者ほとんど全部金を出す

女工一　こんどの事について事務所は冷淡過るわ、私達もいつあんな事にならないとも限らないから、もつと安全な方法、つまり安心して働く事が出來る樣にしなければいけないと思ふわ、
林田　それは女工全體の要求だらうね、
美津枝　勿論、
林田　やらう、職工と女工と結束したら大變な力になるぞ、それに工場は今が一番大切な時なから、會社の方も早くおれるだらう、僕等にとつても好都合だ、
職五　異議なし、

職九　贊成、
職十一　即時斷行、
林田　だがまて、この決議文が拒絶された時だから、先づ交渉委員を選ぶ事だ、
職一　僕が行く、
林田　僕も行くぞ、
職十一　俺も行く、
職八　俺も行かしてくれ、
職二　僕も行くぞ、
林田　よし五人で行かう、外の者は仕事をするのだ、いつでも集合出來る樣にして置ねばいかん、
女工二　何に？
女工三　何を交渉するの、
職十　鈍感だな、ストライキよ、
林田　もう一度要求文を讀むから聞いておれ、（要求文を讀む）
女工三　舍監排斥を加へたらもつといゝけど、
職五　そうだ、あの婆を追出せ、
職十二　鬼婆追放、
女工四　贊成、
女工五　通勤工と寄宿工の差別撤廢、
美津枝　贊成、
女工六　寄宿工の外出時間の自由、
女工七　强制的金錢の募集反對
美津枝　ではあんた、庄さんの見舞金反對と言ふの、私は强制的に言つたつもりじやないわ、
女工七　見舞金などは別よ、この場合は會社側の强制的募集よ、あんたは通勤だからわからないだらうけど、寄宿では、やれ障子代とかやれ疊代とか、襖が破れたから金を出せ、南京虫を退治するから金を出せと、それやうるさいのよ、そんな物は皆會社でするのが當り前よ、それに何かと言へばすぐ金を集めるの、これでは寄宿工はたまつたものじやないわ、
林田　よしそれも入れるぞ、
職一　早い方がいゝ、行こう、
職八　待て、拒絶された場合どこに集合するか決めて置くがいゝぜ、
職三　そうだ、そうして外の者にも知らせないと思ふ樣に結束が出來ないのだぞ、
林田　何處かいゝ所はないか、
職十一　公園はどうだ、
職一　公園は都合が惡いぞ、組合はどうだ、
林田　組合はよくても全部の職工と女工を入れる事は出來ない、一且公園に引き上げて、組合へ相談しよう、僕等が交渉に行くから二三人組合へ行つてくれないか、

職七　よし引受たぞ、

美津枝　私も行くわ、

林田　そうか行つてくれ、こんな時高野が居るといゝがな、

美津枝　いゝわ、吉田さんにお願ひするわ、きつといゝ所をさがして下さるわ、

林田　そうだ、吉田は世話してくれるだろう。では行つてくれ、

就業の鐘鳴る

職十二　鐘が鳴つたぞ、

職九　もうか、

職四　職長が來たぞ早く行こう、俺達は交渉に行くから、皆に氣をつけろ、

職十　大丈夫だ、

職長　（職工長來る）こら、鐘が鳴つたぞ、何をぐづ〳〵してるのだなまけると解雇だぞ、

職二　何を言つてるんだい、

職長　何に！

職一　何でもないさ、こつちの事よ、

職長　早よう行かんか、

林田　行こう、（事務所の方へ走る）

職長　オイ、オーイ、工場へ行かんか、工場へ行かんか、今頃事務所へ行つちやいかん、

職十　だまつて居ろ、

職長　何に、

職五　だまつてろ、事務所へ行つてもいゝんだ、

職二　工場へ行こうぜ、

職七　美津枝さんいゝか、

美津枝　えゝ、

職長　早くせんか、

皆工場へ走りさる

―幕―

―第三場―

林田一郎
妹美津枝
高野清
職工數名
河野俊二
木村正太郎
女工二三名

時　第二場より一週間程後　夜。下宿の一室

机が眞中に出してある、電燈がひくゝさがつてゐる、本が室の隅に無造作に積んである紙が室一パイに散つてゐる、外第一場と同じ、幕開く。林田一人机に向つて、ビラの原稿を書て居る、時々力弱い咳をする

美津枝毛絲のショールを取りながら寒むそうに入つて來る

美津枝　只今、兄さん吉田さんが行つて下さつたわ、

林田　そうか、それでいゝ、だが決して安心は出來ないぞ、K町から應援に來ても一人か二人だから、爭議費の事はどうだつた、

美津枝　それもね吉田さんが、K町から貸りて來るつて、

林田　よし、美津枝へこたれるな、（林田咳）

美津枝　大丈夫よ兄さん、私達は大丈夫だけどね、今日又一人職工から裏切者が出たの、

林田　仕様の無い奴等だな、これで五人か、スパイに用心しろよ、

原稿を書く

美津枝　兄さん誰か上つて來るわ、早くかくしてよ、

林田　よし、（原稿をふところへ入れ新聞を讀む眞似）

林田　（高野入つてくる）あゝ高野か、有難う、よくこられたね、

高野　うん手紙を見て直ぐと思つたが、汽車の都合が惡くておそくなつた、

美津枝　でもよかつたわ、きつと皆もよろこぶわ、寒かつたでせうさつきから雪が降り出したから、

高野　寒さも忘れましたよ、よくやつてくれた、君が居なかつたら出來ない事だ、

林田　いやそうじやない、僕一人の力ではない皆の力だ、爭議員全部の力だ、（ふところから原稿を出して）これと、これと、どうだ、これは町へ撒うと思ふ、これは工場へ持込むのだ、何しろまだ三分の一はのこつてるからな、それにどうも結束がうまく行かんのだ、もう五人も裏切者が出たんだ、

高野　會社では暴力團など使つてるだらうな、

林田　うん、それで仲々工場内へ持込めないのだ、それに盛に切くずしをやるのだ、

美津枝　兄さん、原稿これから持つて行きますわ、

林田　そうしてくれ、早くすつてくれる樣にな、

美津枝原稿を持つて退場。

高野　美津枝さんも大分活動して居ますね、

林田　あいつの爲に大分仕事が樂だ、いつもはうるさいと思ふが、こんどは有難いと思つた、

高野　爭議團本部は何處にしたのだ、

林田　組合の近くに空家があつたから、それを借りたのだ、廣いしそれに思つたより安かつたからね、なければ組合を本部にしようと思つて居たが都合がよかつたよ、

高野　あの原稿は大丈夫か、もれる心配は無いか、

林田　大丈夫だ、木村が引受けてくれたからね、君が國へ歸つた日に印刷屋に口が有つて、ビラを受持つてくれたのだ、

高野　そりやなによりだ、僕これから本部へ行つて見よう、

林田　そうか、僕もビラが出來たら行くからね、

高野　うん、たのむぜ、

林田　大丈夫だ、

高野退場。林田窓を明けて外を見る、すぐしめる

林田　大分降るな、早く出來たらよいが、

原稿紙や新聞などを片づける、其の間も咳續く、職工數名來る

職一　おい林田、ビラは未だか、

林田　もうすぐ出來る、美津枝が頼みに行つたが、もうすぐ歸るよ、

職二　林田、本部へたしかに一人スパイが居るぞ、

林田　何スパイ、

職三　そうだ、わかつてるだらうな、

林田　誰だ、僕は初耳だ、

職二　ふざけるな、貴樣も同意の上じやないか、

林田　馬鹿、冗談もやすみ〳〵言へ（續く）

職四　知らんと言ふのか、本部では皆知つてるぞ、いや本部だけじやねえ、罷業員も皆知つてるのだ、ぼや〳〵するない、

林田　たいがい見當は付く。だが君達が僕までスパイと信じて居るのか、誰がそんな事を言つたのだ、

職一　誰でもいゝ、貴樣の胸におぼへがあるだらう、

林田　馬鹿だなー、貴樣達こそスパイだらう、

職三　何に、もう一度言つて見ろ、

林田　君達こそスパイだらうと言ふのだ、それがどうした、

職四　馬鹿にするな（林田の頬をうつ）

林田　何をする、

立上る、咳　皆殺氣立つ、美津枝、木村ビラを持つて來る

木村　何をしてるのだ、林田、

美津枝　兄さんどうしたの、あんた達どうしたの、

職一　林田がスパイなんだ、俺達を裏切つたから制裁を加へるのだ

美津枝　スパイだつて、兄さん、あんたは？

林田　美津枝お前までうたがふのか、

美津枝　いゝえ、信じないわ、スパイだなんてそんな事、眞とうのスパイのつくり言なんだ、

木村　そうだ、君達はそんな事を信じて勝てると思ふか、

職三　事實が何よりだ、

美津枝　どんな證據があるの、言つてごらん、

職三　林田は昨日職長と會見した、その上昨日の晝は支配人から金をもらつてる、

林田　君それは誰から聞いたのだ、それは全然無根だ、

職三　無根じやない、確だ、俺は友永から聞いた、

林田　そうか、それでわかつた、友永が言つただらうとは思つてたが、もういゝ、君達は友永に用心したらいゝのだ、

職四　友永に用心しろつてあいつに用心する必要がどこにあるのだ

職一　言つて見ろ、

林田　友永は支配人から前後三回にわたつて金を受取つて居る、昨

日も一昨日も職長とカフエーパリーで會つたのも知つて居るぞ、本部の苦しい內情も友永は會社に內通した事が僕の方にはちやんと分つて居るのだ、

職四　事實だな、

林田　事實だ、

職三　知つて居たらなぜ早く本部へ報告しないのだ、スパイと思はれても仕方がないぢやないか。

林田　僕もそう思つた、だが言ひ出す機會がなかつたのだ、

河原來る、何か言おふとして職工達を見廻す

林田　どうだつた河原、いゝんだ言へ、

河原　さうか大丈夫だな、

林田うなづく、咳く

河原　さつき新聞社へ行つたのを見たから、出るのを外で待ち受けて聞いたのだ、いよ〳〵たしかになつたぞ、今朝支配人の家へ行つて運動費をもらつた事を自白した、運動とはどんな運動かいくら聞いても言はないのだ、

林田　言はない、困つたな、

河原　何に、言はないから僕もあまり聞かずに別れて友永が面會した社員に會つて聞いたのだ、そうしたらね、新聞を利用して、爭議團をおとし入れようとした事がわかつたのだ、それで僕は取消す事を說明させた、

林田　有難う、君のおかげで僕のうたがいもはれるのだ、君達もわかつたらうね、僕の潔白が、

職一　わかつた、怒らないでくれ、あやまる、

林田　わかればそれでいゝのだ、

職二　林田、こいつと（河原をさして）友永とはどんな關係だ、

林田　從兄弟、これは僕の友達で河原と言つて、朝日新聞の配達をやつてる、社員にも大分友達があるんだ、

職三　林田氣を惡くしないでくれ、皆の事を思へばこそこんな事にもなつたんだから、

職二　そうだつたのか、俺達が惡かつた、

林田　僕は何とも思やしないさ、

職四　堪忍してくれ、

美津枝　仲直りが出來てうれしいわ、ビラが出來たからこれから本部へ行きませう、

林田　幾枚程出來た木村、

木村　五千枚づゝ刷つたのだ、美津枝さんが手傳つてくれたから思ふより早く出來た、

女工一　（女工來る）林田さん、早く來て下さい、本部が大變です、

女工二　本部に暴力團が來て、とてもひどいのよ、二三人怪我したの私達裏口から逃げて來たの、

林田　よし、行かう、

美津枝　さあ、ビラを忘れないやうに、（美津枝電燈消す）

——幕——

——第四場——

林田一郎
吉田英二
美津枝
巡査部長
巡査
外数人

時　第三場の三日後、警察の待合室

正面窓、其の下に古ぼけた長椅子、動かぬ時計、上手ドア下手ドア、開幕と同時に吉田、美津枝登場

美津枝　吉田さん、きつと亂暴したにきまつてるわ、私さう思ふわ

吉田　さうですとも、何もしないのに突然咯血するなんて、そんな事はない、

美津枝　私思ひ切り言つてやるわ、

吉田　さうだ場合によつては、たゞではすまさないつもりです、

美津枝　やつて下さいね、

吉田　美津枝さん、かけなさい、

美津枝　えゝ、

吉田、美津枝椅子にかける、美津枝落付かぬ様子、二人の青年上手より來る

青年一　いやになるな、罰金位ですめばいゝが、

青年二　大した怪我でもなかつたから、罰金ですむさ、悲觀しなくてもいゝさ、

青年一　困るな、（二人うろ〳〵歩く）カーブの時は氣を付けてるがな、

青年二　兎に角ハイ〳〵言つてたらいゝさ、あいつ等はなれてるからね、思ふ程でもないさ、

青年一　さうかな、

青年二　（外を見ながら）やあ、降りだしたぞ、

青年一　雪か、寒いな、

美津枝　（ふり返つて見る）おそいわね、

吉田　えゝ、

巡査　（ドアより半身出して）おい運轉手こつちへこい、

巡査、二青年退場

吉田　今の運轉手割にうぶらしい、ずう〳〵しいのになると平氣ですからね、

美津枝　誰かひいたのでせうか。

吉田　寒かない、

美津枝　寒いわ、（歩き廻る）吉田さん、外の人は駄目でせうか、

吉田　高野達ですか、駄目でせうね、

美津枝　こちらが悪いのじやないのに、暴力團は檢束しないで片手落ですわね、
吉田　さうですとも、
美津枝　吉田さん、心配でしようがないわ、
吉田　何が、
美津枝　何がと言つて、言はれやしないわ、爭議も勝つやらどうやらわからないし、それに兄さんの健康も心配だわ、
吉田　爭議は大丈夫です、林田はね……、

巡査部長上手より來る

美津枝　部長、林田はまだですか、
部長　もうすぐです、も少し待つて下さい、
吉田　十時に出頭しろと言ふから、忙しいのに十時に來るとまだまだと、一體どれだけ待たすのです、もうすぐ十一時じやないか、
部長　靜かにしてくれ給へ、
吉田　騷ぐまいと思つても、君達が騷ぐようにするじやないか、
部長　待したのは悪い、だがもう直きだ、
美津枝　兄さんはどうして咯血したのです、
部長　それが突然ではつきりしないのです、
美津枝　うそ、何の爲に見はりを付けて置くのです、
部長　一人一人見はりが付いて居るのではないからね、
吉田　無責任だ、
部長　無責任じやない、
吉田　無責任でないならわかるはずだ、××に……、
部長　いや、君絶體にそんな事はない、
吉田　わかつてゐる、突然咯血するなんて事はないはずだ、
部長　警察醫の言ふには大變病氣がわるくなつて居た所に、急に暴力團との……、
吉田　警察醫？　暴力團の事を知つて居ながら、君達は暴力團は一人も檢束して居ないじやないか、
部長　現場には居なかつたし、今捜査中だ、
吉田　現場に居た居ないが問題じやない、現場に居た者が惡者なら殺された者が加害者で、ぬすまれた者が泥棒だと言ふのか、
美津枝　その上捜査中なんて、捜査もなにもありやしないわ、あの日から今日は三日目だし、あの日本部に押かけた團員は、ちやんと工場に居るのを見て知つて居ますわ、
部長　團員にも大勢居るからはたして當人かを捜査中なんだ、
吉田　そんなに捜査に幾日もかゝるのか、僕達は彼奴等の名を知つてる、顔も覺えて居るのだ、
美津枝　××は會社のひいきをするから……、
部長　馬鹿、そんな事は絶體にない、そんな事を言ふと……、
吉田　僕等をどうするといふのだ、
美津枝　吉田さん、私達喧嘩しても仕様がないわ、かへつてこちら

が不利になるわ、

吉田　美津枝さんいゝのです、僕等は正々堂々と戰ふのです、

部長　おい穩當でないじやないか、

吉田　戰ふと言ふ言葉が穩當でない、平氣で用ひる暴力は穩當で――いゝさ、いゝさ、本人に聞けばすべて明白になるからね、なにより林田をつれて來てくれ、

部長　もうすぐだ、

美津枝　もうすぐ〳〵と言つて、咯血患者を取り調べるのですか、

部長　いや今警察醫が診察して居たのだ、

吉田　御町嚀に有難う、どうか生きとるうち歸して下さい、

部長　君等と話す必要はない、（退場）

吉田　待つてくれ、（追はふとする、美津枝止める）

美津枝　吉田さん、待ちませう、場合によつては法廷で爭つたらいいのです、

吉田　うん、（いら〳〵しながら歩き廻る、沈默）

上手ドアより巡査、林田來る

美津枝　兄さん、（走りよる）

吉田　林田、

林田　吉田有難う、美津ちやん有難う、よく來てくれたね、

美津枝　兄さん大丈夫、話してもいゝの、

林田　いゝよ、話すのまで心配してゐると運動なんか出來ないからね、

吉田　驚いたね、君が咯血するなんて、

巡査　たしかにわたしたぞ、

林田　紛失物と思つてる、（林田淋しく笑ふ）

美津枝　大變やせたのね、寒いでせう、

林田　寒い、大分待つたろうな、

吉田　一時間以上待たした、

美津枝　ひどい目に合つたでせう、

林田　うん、まあそれは歸つてから話そう、

美津枝　歸りませう吉田さん、

吉田　歸ろう、

美津枝　兄さんこれ首に卷いたらいゝわ、外は寒いから、

林田　いゝよ〳〵、

美津枝　私はいゝのよ、兄さんこそ大事にしないといけないわ、

吉田、美津枝、林田を中にして歩き出す

吉田　林田、電車でいゝか、タクシー呼ぶか、

林田　いゝや、電車でいゝ、今の僕等には一錢でも大切だからね、

下手より職工三人來る

職一　あゝよかつたね、林田、思つたより元氣だね、

林田　來てくれたか、有難う、

職二　歩いても大丈夫かね、

林田　いゝさ、贅澤言つてる時じやないぞ、

駿三　美津枝さん肩掛ないのですか、

美津枝　兄さんに貸したの、

駿三　ほう、感心だな、さゝこれを着なさい、

美津枝　いゝのよ、私寒くわないのよ、

駿三　口だけわね、がた／＼ふるへてるじやないか、

美津枝　（マントを着せてもらつて）有難う。

――幕――

――第五場――

林田一郎
美津枝
河原俊三
木村正太郎
高野清
吉田英二

時　第四場より一週間後、下宿の一室
窓の方を頭にして林田寢て居る外　第一場に變りなし、

吉田　（來る）どうだ林田、少しはいゝか、

林田　吉田か、どうもいかん、

吉田　美津枝さんは、

林田　藥買ひに行つた、いらないと言ふのに買に行くのだ、

吉田　藥を呑んで早く元氣になつてくれ、

林田　駄目だ、藥なんか利くものか醫者に金を寄付するのと同じだ

吉田　一がいにそう言へないぜ、

林田　いや皆そうだ、貧乏人を苦しめるだけだ、

吉田　貧乏人なんかよせ、

林田　ではプロレタリヤか、どつちでも同じだ（咳）

吉田　苦しいかい、

林田　うん、昨日の晝から又咯血したのだ、今一寸止つてるが、僕もう駄目だと思つてる、

吉田　氣の弱い奴だな、

林田　爭議はどうだ、少しは有利になつたか、

吉田　今ね高野と外に四五人、交渉に行つてる今日は大丈夫と思ふ

林田　そうか、（咳）

美津枝、藥を包んだハンカチと、フロシキ包を持つて來る

美津枝　あら吉田さん、來て下さつたの有難う、

林田　買つて來たか、

吉田　心配ですね、

美津枝　えゝ、（座りながらフロシキをとき）林檎と密柑を買つたら、藥は二日分しか買へなかつたわ、私五日分位買へると思つてたら、
（密柑をむいて林田に渡す）吉田さんもおあがんなさいね、

吉田　僕はいゝです、

林田　いゝじやないか、吉田食へ、

吉田　一つもらはう、

林田　高野達が早く出られてよかつたね、

吉田　そうだ、こちらで默つてたら、まだ〳〵出さないだろうが、毎日押かけて行つたからね、それに暴力團も殆んど檢束したぞ、

林田　胸がスーッとするな、

美津枝　會社の方では、見當違ひで、まご〳〵してゐるわきつと、

林田　會社は困る程いゝ、

美津枝　友永さんどうしたの、

吉田　あの日から一度も本部にも、組合にも來ないのだ、合せる顏がないのだ、

林田　あいつの爲にひどい目に會つた、

吉田　どうした、

美津枝　兄さんね、友永が兄さんがスパイだなんて皆に言つて、たゝかれたのよ、

吉田　それやいつだい、

林田　本部の騷ぎのあつた日だ、

吉田　少しも知らなかつた、

美津枝　（咳くのを氣にして）兄さん、澤山食べたらいけないわ、咳が出たら苦しいでせう、

林田　苦しいことは苦しいが、

吉田　僕一寸本部へ行つて見るから、

林田　そうか、又來てくれ、

吉田　うるさい程來るぜ、

吉田退場、林田急に咳く、美津枝脊中をさする

美津枝　苦しい？

林田　苦しい、水をくれ、

美津枝コップに水を入れて渡す。林田少し呑む

美津枝　兄さん藥呑まない、

林田　いやだ、水がいゝ、

美津枝　折角買つて來たのに、

林田　お前が勝手に買つたのだ、

美津枝　兄さんが早く治る樣にと思へばこそじやないの、

林田　よくなる時は藥を呑まなくてもよくなるのだ、（咳く）

美津枝　呑んだら早いわ、

林田　うるさい、

美津枝　怒つたの、

林田　うるさいと言つたら、

枕元の藥瓶を投げ付ける、壁にあたつて破れる

美津枝　兄さん、怒らないでね、（泣く）

河原　（來かゝつて）どうした、えつ美津枝さんどうしたのです、

林田　此奴が餘りうるさいから、藥瓶を投げたら泣き出したのだ、

河原　美津枝さん、病人を怒らせたらいけませんね、

美津枝　私薬を勸めただけだわ、
河原　林田、君が悪いぞ、美津枝さんがこんなに心配して居るのがわからないのか、あんまり短氣を起さないで、氣永にしてくれ、そうでないと體に悪いからね、
林田　有難う、僕も氣を付けてるが、つい腹が立つのだ、前はこんなじやなかつたがな、
河原　病氣がさうさせるのだ、
林田　美津枝、
　美津枝返事をしない
林田　美津枝ちやん堪忍しくれね、美津ちやん、
河原　美津枝さん堪忍して、仲直りしてくれ、
美津枝　えゝ、もう兄さん怒らない、私も薬は勸めないわ、
林田　怒らないよ、薬も呑まう、
美津枝　そう、嬉しいわ、
林田　ハ……嬉しいか、僕は困るな、（咯血）
河原　やつ咯血だ、
美津枝　苦しい！（背中をさす）
美津枝　まあひどいわ、どうしよう、
林田　落付け、（咯血）
美津枝　河原さん、あんたこゝに居て下さいね、私お醫者を呼んで來ますわ、（美津枝退場）
林田　美津ちやん、行つてしまつたね、苦しい、河原水をくれ、
河原　（水を呑ます）林田、しつかりしてくれ、林田、
林田　僕はたしかだ、河原心配しなくともいゝのだ、（咳く）
河原　林田話しちやいかん、咳が出ると苦しいから、默つて居ろ、
林田　話さしてくれ、河原僕は死ぬのだ、殺されるのだ。
河原　えゝ、どうした。言へるか？　林田、苦しいのか、
林田　苦しいから尙言はずに居られない、檢束されてから——、
河原　林田、林田、どうした、林田苦しいか、
林田　おれは毆られた、
河原　おい確かりしろ。君だけか、
林田　僕は高野に逢ひたい。高野は工場からまだ歸らないのか、
河原　工場？
林田　高野は工場へ交渉に行つたのぢやないのか、
河原　——、
林田　うそだな、君はうそだと言ふのか、
河原　誰かしらぬが氣休めを言つたのだ、外の者は交渉に行つたが、高野は警察から歸されないのだ、
林田　そうか、高野は——、（起きようとする）
河原　林田、靜にして居ろ、起きちやいかん、林田、寢るのだ、寢ろと言ふのに、困つたな、
林田　高野、君だけじやないぞ、もう少し辛捧しろ、高野、

林田立上る、二三歩歩るいて倒れる、（咯血、

河原　林田しつかりしてくれ、困つたな、美津枝さんはおそいな、（林田をかゝへて床にねせ、窓から一寸のぞく）林田藥でも呑んでくれ、さあ、（藥をコップに入れて呑ませる）

美津枝　（美津枝急いで來る）兄さん、駄目だわ、三軒行つたけど誰も來てくれないの兄さん、

河原　美津枝さん、靜かにして……、

美津枝　兄さん、

河原　しつかりしてくれ、林田、

美津枝　河原さんどうしよう、

河原　落付いて、

木村　（木村來る）林田、どうだ、

河原　もう駄目だ、

林田　木村か、美津ちやんも歸つたか、もう僕は駄目だ、

美津枝　兄さん、そんな事言つちやいや、

木村　林田、元氣を出してくれ、氣の弱い事じやいかん、

林田　有難う、いくら元氣を出しても駄目だ、僕はもう一度、健康になつて戰ひたい、

河原　そうだ林田、戰はう、我々の前には永遠の闘爭があるのだ、

林田　死んでも戰ふのだ、プロレタリヤの爲に

美津枝　兄さん興奮しては駄目よ、靜かにしてよ兄さん、

林田　美津ちやん、美津ちやん、美津ちやんどこに居るのだ、

美津枝　兄さん、こゝよ、わかつて？　兄さん、兄さん、私よ、わからない兄さん、

林田　苦しい、美津ちやん、（咳はげし、段々顔色變る吉田來る。）

吉田　林田、嬉べ、勝つたぞ林田、

河原　戰ひに勝つた、林田、勝つたぞ、

美津枝　兄さん、わかる、私達は勝つたのよ、今吉田さんがいらつしやつたわ、兄さん、兄さん、兄さん、（林田淋しく笑ふ。息絶ゆ）あら、兄さん、兄さん、（泣伏す）

河原　林田、

木村　林田、

吉田　林田、嬉べ、

しばらく沈默。風の音と、美津枝のむせびなく聲のみ。

高野　（あはてゝ來る）林田、やつと今出られた、

木村　おそかつたぞ、

高野　どうしたのだ、

美津枝　死んじやつたわ、高野さん、あんたの事を心配しながら、

高野　さうか！、すまなかつた。林田安心してくれ、僕は――みんなは、君の爲に戰ふぞ、

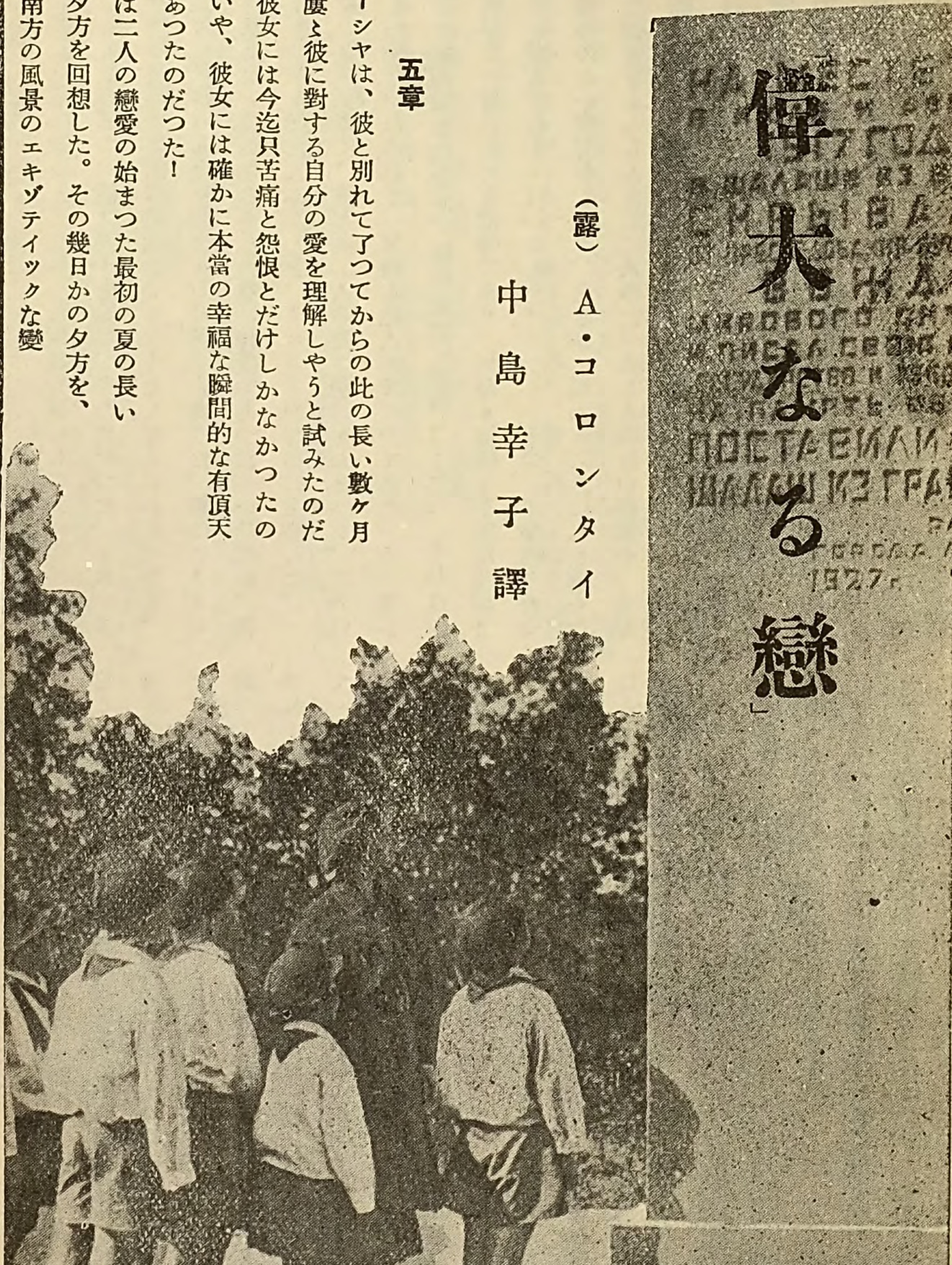
皆兩手を上げて贊成する。遠くでせはしい警笛の音

――幕――

偉大なる戀

(露) A・コロンタイ

中島幸子譯



五章

ナターシャは、彼と別れて了つてからの此の長い數ケ月の間、屢〻彼に對する自分の愛を理解しやうと試みたのだつた。彼女には今迄只苦痛と怨恨とだけしかなかつたのか？ いや、彼女には確かに本當の幸福な瞬間的な有頂天の時もあつたのだつた！

彼女は二人の戀愛の始まつた最初の夏の長い蒸暑い夕方を回想した。その幾日かの夕方を、彼女は南方の風景のエキゾティックな變

化のなかで彼の家族のものと過ごしたのだつた。彼女がまだ學校へ行つてる弟と一緒にやつとこしらへた休暇を暮らしてゐた小さい山村の近くにある海濱に、彼は妻子を連れてきたのだつた。それはまだ彼が自分の家庭の外面の體裁をつくらうとしてゐたからである。そして彼女も亦彼の家庭を訪づれその妻にも會つた。彼はナターシヤが彼の家庭の一員になることが尊い特權であつた古い時代が、再び歸つてきたやうだと云ふことを、アニュタのために主張した。

此の長い夏の夕方に、彼女は二人の愛の萠芽(キザシ)をおぼへた。二人はしばく\一緒だつたけれど、何時も他人がまじつてゐた。心を蕩かすやうな一種特別な氣分が、此の會合に充溢してゐた。それはお互ひの欲望を一層たかめる情味であり、何時も何時も不安な希望と期待の甘い責苦で心を一ぱいにした。……そつと手を握り合つたり、意味のない瞥見をしたり、さうかと思ふと二人にしか解らないやうな微笑をもらしたり又二人のたへることのない接近や、充足の不可能のために、騰(タカ)められた形容し難い戀慕があつた。

二人は、仕事や種々の時事問題に就いてたのしさうに語り合ひ、時にはまるで二人は他人の樣に假借なく議論を飛ばし合つた。

然し夕邊——玄關での夕邊——遠くにある町の神秘な燈火(アカリ)、月の光りをあびてゐる波の音…

二人の傍に坐つてゐる彼の妻と友達はどうなのか？　ナターシヤとセニヤは、殆んど彼等の存在など意識することなく、南方の夏の夜の魔力の中に一緒にゐるだけであつた。

ナターシヤは、只枝編細工(エダアミザイク)の椅子に深く腰をかけて、彼が傍にゐることを感ずるためには靜かに兩眼を閉ぢねばならなかつた。只彼女が必要だつたことは、彼の體に觸れるために手をのばすだけだつた。…けれど彼女は、さうしやうとはしなかつた。だのに欲望に、興つてきた——彼女の體は、情熱で燃え上つた、彼も亦彼女に誘引されて彼女と一緒になりたがつてゐるに違ひないと云ふことを知つて一層燃え上つた。…彼女はすばやく男をチラッと見るために月光の中で兩眼を開いた——微笑……

彼女は笑つた——彼女は幸福だつたし、言葉では云ひつくし得ないほどの甘い滿足で一ぱいであつた。

こんな風に　二人はいつも夜半迄、きまぐれに語り合ひながら腰かけてゐた。長い沈默、活潑な議論。彼女の魂は震へそうして悦びにみちた未來を憧憬れたり、信じたりしながら歌つた。

『歸へらなければなりませんね！』

ナターシヤは、歸へらうとして立ち上つたときには、幸福で飽滿してゐたので溜息をついた。

『吾々は貴女をお宿にお送りしませう』

そう云つて皆んな一緒に彼女と銀色の月光に照らされてほの白くなつてゐる道路に沿ふて歩き出した。彼はナターシヤにぴつたり寄り添つてゐた——彼の肩との瞬間的な接觸には、ナターシヤと彼と二

人だけゐる時の最も情熱的な抱擁よりも、彼女の鼓動を一層迅速に一層狂奔させた。門口のところで、彼は最後の握手をした。別れる時のその敏速なその意味ありげな微笑！

彼等が皆んな道路を下りて、暗闇の中に姿を消してから、ナターシアはまだ人と顔を合すことが堪へられないので薄暗い庭にぢつとたゝずんでゐた。――彼女の心は一ぱいで、その夜は餘りに不思議な餘りに抵抗しがたい恍惚さにひたされてゐた。…あゝ、翼をひろげて、暗い手招きに飛んで行くにはいゝ星明りであつた！ 迅速に迅速に小山をかけ下りて、彼の家に走り、彼の首のまはりに倒れやうか…それとも…

愚かな甘い狂はしげな激しい途切れた考へと慾望。

南方の覇王樹(サボテン)の甘い抑へつけるやうな馥郁たる芳香…

六章

趣きのある短い夏、ほんとに短くつて、全で夢のやうにぼつとしてゐる。

此れ以外に彼女の戀愛には別に幸福といふものがなかつたのか？

最早二度とはなかつたのか？

彼女は懸命になつて幾度も想ひ出さうとつとめた。彼女はその後の幾日かを回想したとき、記憶は只苦痛な、汚れた時間、心痛の時間、苦惱の時間を想ひ出したがために、その顏に暗い皺をよせた。

しばらくして、彼女の兩眼は再び明るくなつた。あゝ、そうだつた、彼女はやつと想ひ出した、彼女は想ひ出したのだつた。忘れて了つてゐたあの事を！

次の春…彼女は殆んど周圍のことなどは構はず、熱心に殘りの書きものゝ整理に從事してゐた。

さうしてゐる時…彼から電報が屆いた。彼女は彼の訪問してくる間の長い退屈な時を仕事で埋めるために、彼と會合する郊外にあるさゝやかな一室に書籍を携へて行つた、さもない時は、彼女はもどかしい怠惰の時を過したのだつた。彼がアカシアの花にかこまれた小さいその部屋に入つたとき、頰を赧らめ、而も眼をかすませながら仕事に夢中になつてゐる彼女を見出したのだつた。

その一ケ月といふものは、ほんとに此上ない悦ばしいものであつた。何がそうしたのか？ 彼女の戀愛？ 彼女の仕事？ その頃の彼女は別に考へもしなかつたし、又尋ねもしなかつた…ただ美しかつたこと、彼女の精神が奔騰したこと、彼女の身體の纖維組織には子供の頃や若い頃にのみ感ずるやうな生命があつたことを知るだけで充分だつた。

夜半の彼女はベットから拔け出て窓をあけ、アカシヤの花の馥する様な馨香(カホリ)を入れたり、木の葉越しに草の上を照してゐる月光や、食事をしてから片付けなかつた茶器ののつてゐるテーブルの上を照してゐる月光を、氣紛れな狂想的な容子で眺めたりしたのだつた。

眠るにはまことに惜しい夜であつた。

彼女は二人の別れる少し前の或る夜の事を想ひ出した――暑いむせぼつたい夜、深緑の蔭と香ばしい花にかこまれて居たので、ナターシャには今までに生命とは何んであるかさへ知らなかつたやうに思はれた。彼女は窓外に腕をさし曲げて、アカシアの枝を引つぱり、その香り良い白い一房をつまみとつた。

『まあ、何んと綺麗なのでせう、ほんとに何んて綺麗なのでせう』

彼女はセイーシュカの目を醒まさせて、どんなに自分は彼を愛してゐるか、又どんなに自分は幸福にひたつてゐるかを告げて、心から笑ひたかつた……

『ナターシュカ、貴女は何處にゐるのですか』

『セニヤ、なんて不思議な夜でせう……此の花を御覧なさいナ、セニヤ、香ひを嗅いでごらんなさいな』彼女は香ひの強い花を彼の鼻先にやさしく差しのべながら身を屈めた。

『愛しいナターシュカ此の香ひは、あんたの甘い魂の芳香のやうです――柔かい狂ほしいやうな……』彼の唇はアカシヤの花を握つてゐる指に觸れた。

ナターシャにとつては、それが彼女の震へてゐる心を思ひもよらぬ所にまで高揚させたやうに思はれた。いや彼女の愛は苦痛以上のものをもたらしたのであつた。彼女には貴重な瞬間、最早二度とない無上の瞬間であつた――儚かない毀れやすい幸福。

それは決して二度とは歸へつてこなかつたのだらうか？

七章

此の數週間ばかりナターシャとその同志達は、烈しい入念な努力をしなければならない意外な仕事でもつて壓倒されてゐた。そして何時もの様に必要が起ると、目的に忠實な、熾んな活氣ある人々はそれを遂行するために凡ゆる方面に進出したのであつた。

ナターシャは、彼女を取りかこんでゐる此の烈しい努力の雰圍氣に新鮮な滿足を發見した。初めて彼女自身は抵抗できぬ完成のために回轉してゐる强力な機械に於ける小さな一つの嵌め齒であることに滿足を感じた。同僚の卒直な專心はナターシャに對して昔の快活を復活させ、そして彼女の笑ひは彼等の働いてゐる陰氣なアパートメントの長い暗い廊下を通つて愉快に響いた。彼女の同志達も、何時も遠慮なく笑つたのだつた。

『吾等のナタリヤ、アレキサンドロウナは、なんと幸福になつたのだらう！』

『きつと彼女は戀をしてゐるのだ』と彼女の傍に働いてゐた一人の同志が眞面目くさつて話した。そして尙彼は別段自分の仕事から眼を離さうともせずに尋ねたのだつた。『ナタリヤ、アレキサンドロウナ、そりや本當なんですか？　貴女は戀をしてるのですか？』

『その對手は一體誰なんです？　貴女となら多分？　あのワニェーシュカより外には居りませんね』

『何んて、女の人達は惡戲が上手なんだらう！　こんなことをセク

スピアは言ひましたつけね…君等は女と云ふものがどんなものかといふ事を知るだらう。ナターシュカは今僕を欺さうとしてゐますよ。いや僕の親しいナターシユカさん、貴女は僕を愚弄なさりやしないだらうね。僕はかう見へたつて何んでも知つてゐますからね、そんなに容易に盲従はしませんよ。』

濃い髪の毛を後にかきなでながら、彼は眞面目に嘲けるやうな目付きで彼女を眺めたが、ナターシャは彼をまだじらしてゐた。

眞實、彼女はワニェーシュカが好きなのだつた。無縁眼鏡をかけたワニェーシュカのあの鷹揚な思慮深い話しつぷりには、何處となく彼女にセニャを彷彿せしめるやうなところがあつた。

その夕方のこと、ナターシャは遲くなつてから急いで家にかへつた。背は痛んでゐたし、兩眼は充血し咽喉は乾燥し切つてゐたのだつたけれど、然し魂だけは妙に滿足して、安らかに肉體の疲勞を忘れてゐた。彼等が開始した仕事の最初の段取りは完了したし、運動は喜ばしい程の迅速さで手筈よく進捗したのであつた。

彼女は疲れ切つた身體を階段に運んで行くとき、悦ばしげに茶を喫することや、彼女の稱讃してゐた同志の書いた論説の載つてゐる雜誌のことなどを思ひ出した。そして彼女は反省した『結局、獨身で暮らすのは良いことだ、若し骨の折れる仕事があつてもそれが濟んでからきまつて夜を過ごしても誰も何んとも云やしない。若し今頃セニャでも玆にゐたなら、それこそ、彼に氣を配るために、あれやこれやといろ／＼しなくちやならないだらうし、又彼れと會ふためには町のほかの所に出かけるか、さもなきや家で夕餉の支度に空つ騷ぎをしたりしなきやならないだらう』

だが今の彼の女には、事實さうでないのだから、僅か一杯の茶を飲むだけでも亦一時間の讀書をするだけでも、その骨の折れる勞働日を申分ない程落着かせるのだつた。

『誰れか來ましたか』彼女は何時もの通り宿の主婦に尋ねた。

『今朝程何か本が參りました？　あの―それに電報も…』

『電報ですつて？』彼女の心臓は、騷がしく打つた。彼女の…なにか職務上の或るつまらないことだらう、勿論……

電報は、書籍の包みの傍の机の上に置かれてあつた。又電報と並んで身に沁みる様な決して忘れたことのない彼の筆蹟の灰色の封筒があつた。ナターシャの手足は急に激しく震へ出したので、彼女は強いて落着くために腰掛けなければならなかつた。

どつちを先きに開封しやうかしら？　電報？　手紙？電文は次の樣だつた。『二八ヒ、エニックテイシャバデオイデヲマツ、セニヤ』

一年以前にも丁度こんな樣な音信が、その時氣狂ひじみて室内をぐる／＼廻つてゐた彼女に屆いたのだつた。彼女は來るべき日の時間などを指折り數へて見た……

電報を握つてゐた手は、たよりなく膝の間に落した。

此の長い七ケ月の間彼の動靜に就いての一行も音信もなかつたの

だが今此のたよりがあつたのだ――抑も彼は彼女が現在何をしてゐるかを知つてゐるのか？　いや彼は彼女の生活、彼女の仕事又彼女がなしてきた猛烈な勞働に就いては全く何も知らなかつたのだ。彼女は逮捕されたかもしれないし、或ひは死亡したかもしれない――彼れは事實何も知らなかつたのだらう。

まるで二人の間には何も起つてなかつたやうに、そして彼れの手で彼女の愛に致命傷を加へなかつたものゝやうに、恰も彼は二人が昨日別れたかの如く『直ぐ來い！』と云つてきたのだつた。

彼女の內部の聲には、全く聾である男の傍で數時間を過ごしたり、彼女の横顏(プロフィール)だけを眺めて、全體のナターシャを眺めない様な男の傍に坐るために、その男のところへ行くべきだらうか？　その男が自分の欲したものだけしか彼女から選ばないために、彼女はその男の腕にしつかり抱かれながらも、遠い所に離れてゐるやうに再び感ずべきだらうか？

いや、いや、彼女は行きたくはなかつた！　彼女は決して二度とはつかまりたくはなかつた！　もう懲り懲りだ。

ナターシャは同志達が何時もからかつたあの特徴ある身振りで頭を後にそらした、そして直ぐに斷乎たる拒絕の手紙をしたゝめるためにペンを取つた。然し宛名は？　若し彼の家に宛てゝ手紙を出したら、彼の妻は屹度彼を困惑させるから、それは別問題であつた、Ｈへ？　だが彼は廿八日前そこには行かないだらう。果して彼は彼女に逢ふために態々そこに行かふとしてゐるのだらうか？　若しそうだとしたなら彼女の拒絕の手紙を見た彼は、どんなに失望するだらうかなど考へると、彼女は殆んど堪へられなくなつた。彼の手紙はそこで何をするかを彼女に告げてゐるのであつた。

彼女がその手紙を讀むにつれて、彼への憤慨は消へると共に、今迄の輕視と傷ついてゐた彼女の感情は、自分に對して申譯ないと詫びた自己卑下の手紙を書くやうな、こんな柔かい魂を持つ思想家に對し、溢れるやうな暖か味ある親切にと變つて行つた。

彼女、彼女の運命に對し、無頓着であることは出來なかつたので、彼女の活動に關して聞くことの出來る彼女の消息の一片すらも貪るやうに集めて、遠くの方から彼女の活動に習つてゐたのだつた。その後彼女が一層困難な責任ある仕事に從事してゐることもまた彼に對する種々なる苦痛の考へを紛らはすために、選んだ快適な仕事に從事することを悅んでゐるのも、彼にはよく分つてゐた。……けれども彼は、感情といふものが理性よりも遙かに強いものであることが見出せたので強いてそれらに對して鬪爭するのは無用であると思つた。實際彼は彼女を慕はない日は一日とてもなかつたのだつた。

一方彼と妻との間柄は相變らずで、どちらかと云へばむしろ惡化してゐた。彼は物事を細かに穿鑿するやうになり尙一層怒りつぽくなつた。そうして家庭生活は本當に地獄のやうであつた。此んな狀態では仕事をしても少しも能率はあがらなかつた。けれど最近のこ

と、努力して研究する價値ある問題にぶつかつたのだ。それ故その材料を蒐集にするに當つて、Hに於ける或る教授と知己になつた、そしてその教授は自分の圖書を、セニャの心任せにさしてくれた。そんな理由と、もう一つは彼の仕事を充分に手傳つてくれるナターシャにそれを語りたかつたために、彼はHで一ヶ月半か二ヶ月を過ごさうと決心したのだつた。

彼等は、此の不思議な機會をお互ひに會はずに逸すべきか？　ナターシャは屹度來るに相違ない！　勿論何時ものやうに内密に彼女が何のために、又何處へ行くかを誰れにもしらせてはいけないのだ。（アニュタのために）彼女は、何んとかしてやつてくるだらう。添書には彼の財政が逼迫してゐるために、必要資金の調達方を彼女に依頼してあつた。こんなことは彼女にとつて珍しいことではなかつた。彼女は彼れに比較すると財政的には、彼よりも都合がよく、そして二人の會合は常に彼女がその入費を支拂ふと云ふ條件で取極めてゐたのだつた。彼にとつては、特に財政の問題が何時も苦しいものであつたが故に、明らかに、此んな目的のために家庭にのこつてゐる家族のものから、金員を剝奪する氣にはなれなかつた。彼の家庭生活は、その頃ロシアの亡命者の典型的なものだつた――不規則な收入と不斷の負債。一方ナターシャには、確實な職業があり又規則的な收入があつた。

『私はまるで妙な女と逢引きして、その費用を全部支拂ふ時の男の樣だわ』よくこんなことを考へながら、彼女は微かに悔しさうな笑ひをもらした。

けれど此度はセニャの要求を納れる氣にはなれなかつた。

『私にはこれ丈け書くだけでも勢一ぱいです――御入用の資金は自分で御融通なさいまし！　私がそんな御金を何處で入手できるのでせう？　私一人の旅行費だけでも今私の手許にある以上かゝるのでせう？』

一體彼女はどうしたら良いのか？　黨にさしせまつて資金が入用だつたから、彼女は質素な只必要だけの金を殘して全部を提供して了つたのだつた。

ナターシャは、自分の意向に關して最早や疑念をさし挾まなかつた。彼女が彼の手紙の内容を幾度も心に繰りかへしてゐる内に、その問題はもう變改されることなしに決定して了つた。然し彼女の前途に横はつてゐる凡ての困難や障害から脱する方法を講じなくてはならぬ。就中此の現金調達の問題は一時も早く決められなければならないだらう。

彼女は計算をしはじめた。Hに行くだけなら今彼女の手もとにある分で漸く足りるが、さて殘金は何處で手に入れやうか？――第一それが問題だつた。時計を質入れしやうか？　だとてそんなものは、僅かの現金にしきやならないのだから、この大困難には何の役にも立ちはしない。親戚に電報打つのも、考へれば餘りに氣まづ過

ぎるし――彼等はきつとあてこすりや、いや味たつぷりの手紙をよこすに相違ないだらう。

特別な人、セニヤの彼女は百萬長者でもあつたのか？　一寸の通知で、此んな大金を彼女が算段し得ないなんて、彼には思ひも寄らなかつたのだらうか？　その瞬間、無念の情が彼女を襲つた。これまでだつて、彼は彼女のかうした困難には何ら注意を拂はふとしなかつたのだつた――まるで子供の樣に……

だが此の比較は直ちに彼女の心を和げた。彼は本當に子供だ、偉大な成長し切つた子供だ。偉大な精神は、そんな風なんだ――實際的な事柄には子供のやうだ。それは自然なのであつた。

こうして彼女があれこれと考へてゐる中に早や夜になつてしまつた。然し熱心に思索すればする程、一層困難が拂ひのけられない樣に思はれてきた。彼女は僅かな金のために、彼のところの訪問を見合せなくてはならないのだらうか？　ナターシヤは絶望のあまりベツドの上に坐つて煩悶にたへられず兩手を打ちあはせた。

かう云つても勿論、金が唯一の條件ではなかつた。そこには彼女の責任を負つてなすべき仕事があつたのだつた。眞實、彼女はそれを良く計劃したので終に圓滑に自分の動力の上を進んで行くことが出來たのだつた。多分彼女には三四週間位ゐの代りを務めてくれる人もあつたらう。しかしこんなことは云ひ易くして、實行し難いことだつた。同志達は彼女のことをどんな風に思ふだらう？　彼等の非難するやうは眼付きを思ひ浮べるだけでも決して快よいことではなかつた。之までに彼等が非難する顔貌、或ひは不親切な邪惡な批評は幾回となくうけたのでその度に彼女は終日氣をめ入らした。

彼女を非難したり、蔭で彼女を『純良な婦人』と呼んだりする、あのドンツエフに話しをしなければならないだらう。必然彼は此の突發的な出立を憎み、彼女は結局信頼できないといふ何時もの新しい證明として考へるであらう。『僕が云つた通り、ナタリヤ、アフキサンドロウナアは、運動外の事柄に餘りに多く關係し過ぎると』

彼が室の一方の隅から他の隅へ、幾らか跛な足つきで歩るいて行く時に、ナターシヤは彼の不快な癪に障るやうな聲を一寸きくことが出來た。けれど彼女は思ひ切つて、彼のそんな言葉なんて考へないやうにしたし、そして彼女が旅行から歸つた時にどんなことが起らうと、も早そんなことは頓着しなかつた。今の彼女は只何とか此の場合切り抜けなければならないのだ。セイシユカに失望させてはならないし、又自分自身……他の何事をさし置いても、ナターシヤは彼にもう一度逢はねばならない。若し彼女が此度の呼出しに返答してやらなかつたら、それこそ取り返へしのつかない程、彼はがつかりするだらう。その傷ましい終末を考へると、もう迚も我慢しきれなくなつた。

あたしは寧ろ死んだ方がいゝ！

次の朝、何時もより早く事務所についた時、彼女の疲れ切つた兩

眼は、煙草の煙の濛々と立ちのぼつてゐる室に、唯一人で高い椅子に腰かけてゐるワニエーシュカに微かな希望をもつてそゝがれた。彼は前にある新聞のあつちこつちの段や文章にアンダーラインを引いてゐた。

『私の親愛なるナタリヤーアレキサンドロウナー妃殿下に謹んでお話しいたしますと同時に、貴女の健康を祈るものです』と彼れは愚弄の言葉を放つたが、別に仕事の手をやすめて頭をあげやうともしなかつた。

『お早やう、ワニエーシュカ』

ワニエーシュカは彼女の聲の中に、何だか一種の悲しみのあることをさとつて眼鏡越しにす早くちらと彼女を見やつた。

『何うして妃殿下は悶へてゐらつしやるのですか？　そんなに？』

『ね、ワニエーシュカ後生だから聞かないで下さい』

そう云つてナターシヤは、絶望的な身振りをした。

彼の同情のこもつた笑ひさへも、彼女を怒らした程、彼女は生活から不公平に取扱はれてゐるのだと感じた。

『左樣、左樣』、彼は今まじめになつて叫んだ。『此れは一たいどうなさつた？……何か起つたんですか？　だがどうして貴女一人だけで泣いてゐらつしやるのですか？　こうなつたら皆んな僕にそれを話して御覽なさいよ。』

彼は新聞をおし退けたものの、餘り好奇心を示し過ぎてナターシヤを怒らせてもと思つたので、對手の告白を聞かうとしてゐる場合に友人のよくする、からかひ口調の態度をとつて續けてゐた。

同情的な聽手を欲しがつてゐたナターシヤは、彼女が直ちに此の町を去らねばならないが、仕事があるのでそんなことは不可能だし、それかと云つて金の持合せがないために、若し彼女がそこへ行かなかつたら不幸が、恐ろしい不幸が起るかも知れないといふことなどを半分眞實らしく前後くどくどと物語つたのだつた。……

『要するに、生死の事件なんですの』そう云つた、彼女は恥づかしげもなく涙を流した。

ワニエーシュカは、全く有爲な仕事家としてのナターシヤを知つてゐたし、又彼女が怒つたり、落膽した氣分の場合には、無茶な子供の樣に泣く事なども知つてゐたが、そうした彼女の性格には思ひも寄らぬ或る光明のあるのを見ぬいてゐた。

『さア、さア、若し僕が貴女だつてもこんな風に頭を下げませんよ、ね、泣いたつて金なんか湧いてきやしませんからね、一寸の間でいいから氣をしつかりして下さい、そしてその金がどの位ゐ入用なんだか、僕に話されたらどうです、ね、どれだけなんです？』

そこでナターシヤは金額を話した。

『成る程、夫れは纏つた大金ですね。それだけは今僕等のポケットには一寸ありません、だが何うしてもお金が要るとしても、何故貴女はそんな自分の資本を無思慮に浪費なさるのですか？　貴女が後

になつて乞食をするとしても、黨の資金が要るつて場合に、此んな大金を一體今何に使用するつて云ふのですか？』

『でもね、ワニエーシユカ、私は自分のためにこれを使ふのじやありませんの……此れがどんなに重大なことであるか貴下にはお解りにならうとは思はれませんの。若しね、私が其處へ行かなかつたら――どうにかしてそれだけのお金をつくらなかつたら……つまり、云はゞ二人の生命がそれに依存してゐるのです』

『そんなら、貴女が話さうとしてゐらつしやるのは、逃亡のことなんですか？　貴女は、官憲の手から誰れかを助けやうとして居られるのですか？』終にワニエーシユカは自分の推定通りのことを信じてそんなことを語つた。

『さうおつしやりたいなら、さうとしておきなさいな……』

『ナターシユカ、貴女は自分の分別で藪蛇みたいなことを云はないで、何故卒直にさう仰有らないのですか？　婦人はね、一週間であらうと又永久であらうと、吾々の處から去らねばならないのです。若し貴女が直ちにそれが陰謀であると仰有つたとても、僕はその問題に對し、貴女に迷惑を掛けたでせうか？　僕は好奇心なんて少しもありません。第三者といふものは、こんな事件に不必要な質問をするものでないことを僕はよく知つて居ります。又貴女が僕に打明けないことを、强ひて知らふとは思はないのです、然し救助ですか……？　勿論僕に出來ることならお助けもしませう。』

ナターシヤは、それに對して一言も返事をしなかつたが、ワニエーシユが彼女の苦窮を察してゐて與れるのみならず、特に彼はナターシヤの望んでゐる資金調達方に就いて、あれこれと熟考してゐてくれるのを見てとつて、內心彼女はすつかり滿足してゐた。

だが結局、その金の行使が何の目的にあるのかについて、今彼を欺くのは全く罪惡ではなかつただか？　彼女は單に良い保證で借り入れやうとしてゐるのだ、そしてその返却には最近の著述の印稅を質入れする用意は十分出來てあつたのだ。その著述はも早既に活版に附されてゐたのだつた。

『ナターシヤ、貴女はその目的以上の計畫などして餘計な心配をなさるな、第一吾々は金を持つてゐる人を探さうじやありませんか？……一人の老紳士がゐるのです、……だがね、彼はいままでに同志達から隨分と捥ぎとられてゐるので、僕としても近づきにくいのです。屹度彼は拒絕するでせう』

『ワニエーシユカ、その方なら私は知つてますの、何卒私のために、一度當つて見て下さいまんか？　そこへは貴下が行つて下さる方が都合がいゝと思ひますの、借りたお金は私の手から他に渡つて了ふけれど、支拂ひの責任は全部私にあるつてことを話して下さい……若し貴下が贊成なら直ぐに約束手形を與へてもよろしう御座いますが……』

『彼女の手許には一錢の金もないのに、彼女は收入を手渡す……あ

なたは財政家です。然し僕が電話をかけても無駄なのをきいてゐます……あゝナタルヤ、アレキサンドロウナー、貴女は、仕事に忠實な、仕事家を氣狂ひにしたり、正しい義務の道から誘惑しやうとする美しい人です。』

二日ばかりして、ワニエーシユカはナターシヤに勿體ぶつて封袋を渡した。

『お出でしたか、僕は彼奴(キヤツ)に會つて完全に征服してきましたよ』

『ワニエーシユカ、貴下は可愛い方ね！』

そう云つて、彼女は、彼に接吻しやうとした。此んなことが何んですか？　可愛いゝとか、接吻しやうとか！　大したことでもないのに、こんな空つ騒ぎをするなんて、だがね、失禮ですが借用證を。あの紳士はなか〳〵喧しい相手なんですからね。彼はどなりましたよ……つまり機會が惡かつたんですね、それに自分にもない程澤山出してゐたのですから。そこで僕は、貴女が擔保を與へやうとしてゐることを告げそれから又あなたの借用證を與へたり、希望などを話しますとね、直ぐに和らぎましたよ。さあ、ナタールヤ、金を數へてからポケツトに納めて下さい。僕が決して詐僞しないなんてことがどうしておわかりですか？

僕がその半分を拔きとつてゐるかも知れませんよ……』

『ワニエーシユカ、貴下なら、御隨意にお使ひになつてもよろしう御座いますわ』

『此れは〳〵結構な事です。半分の金額で充分だと仰有るなら、貴女は何うしてその必要の二倍もの金を乞はれたのですか？　よもや貴女は殘りの金で御自分の黒貂のコートでも買はれるのじやないでせうね？　あゝ妃殿下、此の用向きには何か大きな秘密がありさうですね……生命が救はれるつてのは、その誰れなんですか……結婚の時にかつて附添人になつて呉れだの、萬事が片づいてから洗禮して呉れなんか云つて頼みに來られても、そりや駄目ですぜ』

ナターシヤは幸福さうに笑つて、彼の手をかたく握り締めた。

『ワニエーシユカ、私はあなたに感謝します。ほんとに心から』

戸口の所で、ワニエーシユカは、も一度振りかへつた。

『そんな場合は、あなたが行かうとしてゐらつしやる所から端書を下さい、僕はそれを見るのは興味がありますからね』

彼は彼女の顔に明かな當惑の色のほの見へたのに笑つた。

『僕は他人に一言でも話さないことを約束します。僕は最後まで秘密にしたいのです。……然し僕だけには——僕は興味を持つてゐるのです。貴女が僕を信じて呉れるのでしたら、葉書を下さい。若し貴女から一枚の葉書も受け取らなかつたなら、吾々の友情はそれこそおしまひだと思つて下さい。』

ワニエーシユカはこうした嚴しい誇張した表情をもつて毛皮の帽子を額に引つ張り、そうして戸口から姿を消して了つた。

婦人彙報

▼朝鮮學生の盟休事件

日頃から反目してゐた朝鮮全羅南道光州中學と、公立高等普通學校の生徒は、たま〳〵通學汽車中で口論を初めたのに端を發し、中學生四百五十名、高普生三百五十名相對して大闘爭を開始した。

この時は双方二十名程の輕傷者を出したばかり、警官の出動によつて一時解散したが、この事件をきつかけに、機をねらつてゐた全朝鮮の學生は一齊に起つて、同盟休校を行つた。商業學校、農學校生などに交つて、女學生の結束は一層固く、金華女學校、中東、横花兩女學校、京城女子商業學校、道德女學校、京城實踐女子商業、師範、及び女子高等普通學校の生徒等相ついで盟休に參加し、次第に學校騷動から、思想的、政治的の色彩を現はして、勇敢に闘爭せんとする樣子である。當局は例によつて續々指導者と見なされる學生の彈壓檢擧を始め、一時は五百名の學生が檢束された、學校は冬季休校の時期を繰り上げて、一時的の對策を行つたが、この一齊結束の事實は若き朝鮮に深く浸透した新らしい力を示すものである。

▼筧電氣局長のお冠むり

昨冬十二月六日の東京市電總罷業は丸山警視總監の調停で一先づ終了し、勞働者の結束の力を數へ、各方面に異常な衝動を與へたが、電氣局長筧正太郎、理事山下又三郎の兩氏は爭議の解決條項の一つたる解雇者の無條件復職に對して、局長としての威令及び統制が行はれないと無粹にも後からお冠りを曲げ出して辭表を提出するやら、止すの止さぬのと散々駄々をこねた。結局は慰撫されて納まつたが、今時、勞働者をお殿樣の家來だと思つてゐるもしないし、そんなわからずやでは威令も統制も行き屆かない方が御尤も？

▼罷業に備へ交通規則の改正

警視廳保安部交通課では市電總罷業に刺戟されて交通規則の改正及び、非常時に於ける交通對策計畫を規定する事になつた。

一、全線罷業の際に、電車並びに自動車の代用として使用し得る車體總數の調査、
一、運轉手、車掌の補充として東京内外の電氣關係學校在學生、並びに卒業生の總數調査、
一、發電所、變電所の警戒配備の方法、
一、送電線警戒方法等に亘り第一の際は電機關係學生の總動員　青年團、在鄕軍人の非常召集、

などで、相變らず一時的糊塗といゝ對策上手な當局の御仕事である。

▼千葉醫大の職業病研究

千葉醫科大學では今度「社會衞生學科」といふ、官立大學最初の新講座が設けられ、同校教授古屋芳雄博士が主任となつて研究及び講座を擔任することになつた。この講座は從來下水、水道、換氣法などの改善を主としてゐた單なる衞生學と異ひ、社會生活の複雜になるに伴つて起る種々な職業病、工場中毒、又は勞働者の保健問題、種族全體の「質」の變化など、現在社會生活に適應した一歩進んだ研究講座で、これがうまくゆけば非常に有益なものであらう。

▼「おいらん船」？

小林多喜二氏の蟹工船によつてカムチヤツカ、及び北氷洋海上の出稼ぎ勞働者の生活が如何に慘澹雜漠としたものであるかは有名な事實である。所で北海道函館の上田二三雄といふ人が、彼等出稼ぎ中の雜役夫等を慰問するために、多くの婦人を乘せた所謂「おいらん船」を仕立てゝ派遣仕度いと道廳長官に許可願ひを差出したといふ。本當とすればひどい馬鹿か氣狂ひか。又は誰かの利益のお手先きかだが、おいらん船に慰問される勞働者は、のめ〳〵化ぶらかされないやうに御用心。併し、此處まで露骨な話しになるとおかしくもない、婦人矯風會では池田長官宛に、おいらん船非許可の電報を打つた。

▼統計が語る深刻な不景氣

扇橋警察署の調査によると、健康な身體を持ち、働き度くても職がないといふ浮浪者、しかもすでに三年以上失業してゐる人間が、三十人中に八人もあるといふ。伊與橋下の寒風の中に住む二十二名、附近の通路にゐる二名、工事小屋一名、富川町道路一名、林町石材置場で四名の都合三十人について調べた所、住所不定二十六人、當日職に有りつけたもの八名、殘り二十二人は失職、一日中米粒を食べてゐないのが二人、三度食べたのはたつた二人限りだつた。流浪の期間については一日が三人、五日が四人、十日が七人、一ケ月が一人、三ケ月が一人、六ケ月が三人、二年が一人、三年が二人、三年以上が前記八人といふ怖ろしい狀態であつた。彼等はいさゝかの誇張もなく絕叫する。吾

等に職と食物を與へよ、と。

▼刑務所の大暴動

米國ニューヨーク州オーバン刑務所の囚人は待遇改善を叫んで大暴動を惹起し、同刑務所の監理人一人殺され、教誨師一人、看守八名が人質にとられた。警察、及び兵士が鎭壓に向つたが、囚人等は刑務所内の一方に防さいを築いて頑强に戰つた。同刑務所の暴動はすでに今度が五回目で、昨年の七月にもやはり待遇改善を叫んで反抗してゐる。

▼モスコウの教會が穀物倉

ソビエット政府では穀類の大買上げを行つたところが、それを貯藏する適當な場所がない。そこで頑丈な教會、寺院などの建物が徵發されて貯藏庫になつた。宗教の倉庫が忽ち穀物の倉庫になるなど如何にもソビエット式である。

▼實科高女を高等女學校に

入學難緩和と、從來の女學校の缺點であつた「嫁入り資格のための教育」即ち非實際的な點を改めて、實際的な教育を施すために、中等女子教育調査委員會が新設され、前文部次官赤司鷹一郎氏が委員長になつて案を練つた結果、從來の科目の他に、簿記、タイプライター、其他農業知識、家庭的課目を取り入れる事になり、同時に不完全な實務教員を施してゐる全國三百の實科高女を、新課目による高等女學校とすることになつた。實施は昭和六年四月からである。

▼ラヂオの强盜速報

每年歲末からかけて不景氣と寒氣とに人々の心は益々荒み、說教强盜、赤靴强盜、何々强盜と强盜の横行はます〳〵甚だしい、これまでの强盜の例を見ても單なる惡といふ氣持より大方生活難、又は失業等の緊密な生活基調からなつた强盜が多いために、なほ一般に科學的な要素が多いために警視廳の搜索は一層困難になり都會はしば〳〵不安に襲はれる。そこで案出したのがラヂオ速報である。强盜に被はれた被害者は直ちに警視廳を經て放送局に通じる。放送局では講演、演藝の如何に關はらず直ちに放送を中斷して「何處其處に强盜が現れた警戒せよ」と通じ警告すると同時に、附近の聽取者は非常動員の形で飛出し協力して逮捕仕樣といふのである。

▼文藝家協會放送お斷り

文藝家協會では出版物及び演劇の檢閱制度の改正について內務省警保局に再三陳情してゐたが、これに關連してラヂオの檢閱を內務省に統一の議が持ち上つてゐた。併しいづれも一向捗え切らないので、近來放送局の極端な官僚化にむかつて先づ第一矢を報ゆることになり、協會員一同結束して、作品の放送、並びに文藝講演其他一切の放送をしない事を決議した。

▼疑獄事件の取調べ打切り

前鐵道大臣オガ平を刑務所で年越しさせた疑獄、また疑獄、市電のストライキより赤靴强盜より一層深刻な人心不安を起させるのは當然な事である。現政府はかつて憲政會內閣當時の鐵道次官佐竹三吾氏の收容となり、次いで小橋文相の引責辭職、降旗代議士の留置となるや、突如天降り的に疑獄事件の取調べ一切の打切りを命じて司法部內に憤激の聲を漲らしてゐる。ある方面の報道によれば三木控訴院檢事長は讀賣新聞社長正力松太郎氏を呼んで、事件の報導を今少し手心するやうに懇談的注意を與へたといふ話さへする。一ブルヂョア新聞の報道にさへ、恟々としてゐる暗面の多い諸政黨の態度は全く笑止ではないか。

▼チリーの死刑廢止

南米チリーでは今度死刑と終身懲役が廢止され、極刑としては懲役二十年といふことになつた。また罰金納付の出來ないものも決して拘禁せず、唯刑務所附屬の工場で働けばよいといふのだ。治推法で死刑を宣告されてゐる日本などとは大違ひだ。

▼近眼は女の方が多い

昔から近眼は文明病で、トラホームは野蠻病といはれてゐるが、最近十年間全國の小學校、中、女學校師範學校、實業學校、高等專門學校などの生徒について調べたところによると、近眼は加速度的に增加し、トラホームは減少する傾向を示してゐる。なほ興味のあるのは男子に比べて女子の近視眼の增加率が遙かに急激なことで、女に近視眼の多いのは生理的な原因も有るといふから一概に近視眼を以つて文化の程度を計るわけにはゆかないが、少なくとも最近の女性が、文化的な自覺と認識とを急激に呼びさまされてゐることは事實である。

▼支那の教育視察に行く女教師

冬期休暇を利用して、京府女子師範同窓會主催の海外視察團では十名の小學校女教師が上海、南京、蘇州を一巡して彼地の教育、社會事業、風俗の視察に出發した。

編輯後記

正月三日に田中純氏が新らしい畫帖をもつてきて書けといはれる。去年までの私だと後の方へ書くのを禮儀としてゐたが、女性進出の年のトップに氣を强くして、僭越ながら卷頭に書くといつた。座中の男子みな、そりやあいいと頷く。で、何を書かうかと考へるうちに筆の方が走つた。「一九三〇年の元旦に、女うたへり進出の歌」元旦は黎明とすべきであつたと書いてしまつてから思つた。

山本勝治氏の遺作集「員章を打つ」が文藝戰線社から出た。今更に彼の毅然とした性格をその底に讀むことが出來る。自身を啄くに一圖であんまり峻嚴だつた彼が彷彿としてゐる。明日の作家として待たれたのに――美智子の兄さんです。大方の愛讀を祈る。(時雨)

各地の聯盟員の方達から、一九三〇年は我等の女人行進曲であける、とよろこびのたよりが社を目指して飛んでくる。私達はどんなに嬉しいだらう。女にも歌がある。女も歌を持つてゐる。かぎりなく湧き出てくるよろこびだ。身内をかけめぐる力の强さだ。元氣のあふれてゐる時にうたふ。疲れた時にうたふ。社長さんだつてあたしたちに負けないで大聲で歌つてゐる。近所ではきつと驚いてゐるだらう。去年の十二月二十八日に日蓄で河原さんの獨唱と、專門家及び女人藝術の人達の合唱とでレコードに吹き込んだ。きつと三月新譜で賣出されるだらう。買つて下さいそれから葉書を五枚一組十錢で賣つてゐます。どしどし申込んで下さい。お友達に分けてあげて下さい、「私達女性の歌を。(みどり)

凛々しい寒さの中に、そこはかとない早春の氣がながれてゐる。雪の深い北ぐにの生活にも、柑橘の豐ににほふ南の國にも、春待つ喜びが、何と根づよく胸を張つてゐることか。氷を破つて、水をぬるませて、明るい春は來るのだ。編輯室の廊下で見る夕の空の、すきとほつた美しさ。大火鉢の炭火が眞赤におこつて、鐵瓶の小鈴のやうな音をこもらせつゝ、夜は更けてゆく。聯盟員の皆様よ、各地のいろんなレポを送つてニュース欄を賑かにいたしませう。ことしの聯盟は大地のやうに、大きく根を張りませう。(秋子)

二十九日の晩、みんなで夢中になつて年賀狀を書いた。二千何百枚と云ふ數だ。そしてその大部分が聯盟員である。日本中に散らばつて居るこんなに澤山の女性が聯盟員と云ふ名のもとに一脈の通じた親しみを感じられる事が何とも云へず嬉しく力强く心を打つ。(優子)

お正月をどうお過しですか。編輯室は二月號で戰爭のやうな忙しさですが、但し忙中閑で明日のおかゞみ開きはみなさんが大勢集まつて新年會を催す意氣込みです。へこたれ相になると誰かしらが女性行進曲を唄ひ出し、みんながそれに合唱して室の空氣は忽ち意氣乾昂。レコードの試驗ばんが出來て來た日、社長さんはあまり歌つてすつかり參つてしまつた程です

今度から、月極めの方の定價を改正しました。そして六ケ月以上の月極めの方は特別號で定價の高くなつた場合お金を頂かない事にします。その方が手數が省けますから。なほ一月號から雜誌が書店の店先きへ出るのがおそくなつて、お正月で怠けてゐるのだらうと心配して下すつた方があるかも知れませんがこれは雜誌協會の規定で、いはゆる婦人雜誌でなく、文藝雜誌の扱ひを受けて大賣捌きが十九日でなくては扱はなくなつたのですから御承知下さい。(素子)

隅つこから出て來て始めて編輯後記を書いてゐます女人藝術と共に可愛がつて下さい、次から次へと本が出來て來るので嬉しくつて忙しいのなんぞ忘れて無中です。行進曲のレコードが出來て來た日は有頂天になつて騷ぎました。私達の大事な歌を大事に〳〵して持つてかへつて八木さんに天使だなんて云はれたのですもの。(美智子)

大阪毎日新聞名古屋支局主催の講演會は一月下旬、おそくも二月上旬には名古屋市で開催されることになりました。女人聯盟員諸氏の熱烈なる支持を切望いたします

昭和五年一月十五日印刷
昭和五年二月一日發行(毎月一回一日發行)

定價	1部……40錢	送料一部壹錢五厘
	6部……2.40錢	
	12部……4.80錢	

「誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ」
「郵便切手代用は一割增の事。」

發行兼印刷人――長谷川時雨
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂 東海堂 北隆館 大東館

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地
女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五


あなたのお化粧に對するお考へは？
「たゞ色が白い」と言ふことが美しいとは申せません、お肌はいつも生々と健康さから出る艶やかな色を保ちキメは滑らかに細やかにそれはお化粧によつて作られた美くしさのみではない。これこそ眞の美しいお方と申すことが出來ませう。
若しもあなたがこの美しさをお望みになるなら是非御化粧下には純國産のヘチマ化粧料を御使ひ遊ばせ。
ヘチマコロンは素肌をすこやかに美しくととのへキメを細かく滑らかにし白粉のトキ水によく、ヘチマクリームは肌あれを防ぎお肌をいつも若々しく保ち粉白粉の下に使つて、お化粧遊ばしたとは思はれぬ美しさになります。
純國産美粧料
ヘチマクリーム
姉妹品
ヘチマコロン
定價
ヘチマクリーム 大瓶 .75 中瓶 .50 小瓶 .30
ヘチマコロン 大瓶 .50 小瓶 .30
本舗
天野源七
東京日本橋横山町

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和五年一月十五日印刷納本
昭和五年二月一日發行（毎月一回一日發行）

第三巻第二號

定價金四十錢（[illegible]）

